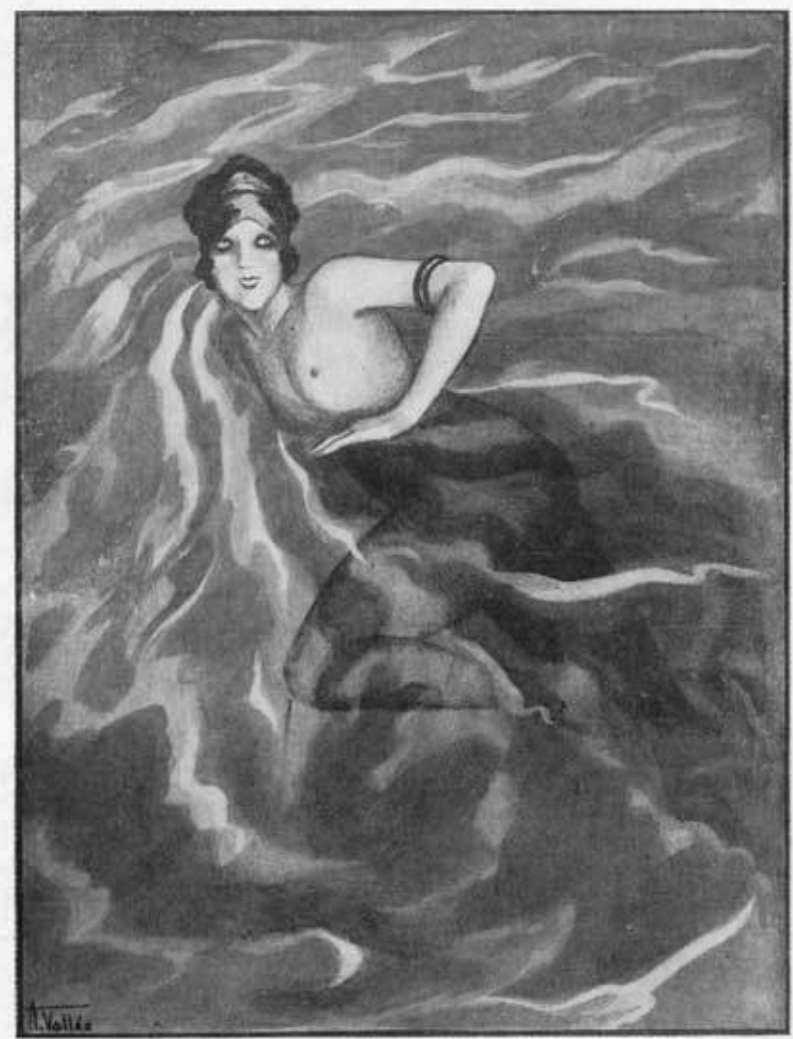


奇譚クラブ

1958年 10月号

懸賞入選作品 「女水兵哀史」 市田健次郎
 創作 「翳り（かけり）」 久留木 栄



10月号

昭和三十三年九月三十日印刷 (第百十三号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年十月号

10

奇譚クラブ

昭和三十三年九月三十日印刷 (第百十三号) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB
 Published Monthly By Tenseisya
 Osaka Japan



IBM. 2805

緊縛写真の集大成とその詳細解説

臨時増刊号

集号 限定版



限定版SADO特集号

売切れぬ中、直ぐお申込下さい！

秘蔵豪華口絵 (二十七点)

○四馬孝・画名場面集

- 別れる女 (八尾幸道作)
- 夜汽車で逢った美人 (木堂 一作)
- 危 遇 (富士宮喬作)
- 玩 具 (東風二助作)
- 屠殺者 (宇関一夫作)
- 変な奴 (宇丸一平作)
- 或るスクリーン (浜道太郎作)
- あの時の事 (土井敦子作)
- 地蜘蛛 (善左木男作)
- 滝 れい子・画名場面集
- 移り香 (藤川力行作)
- 若妻と黒牛 (西東三郎作)
- 口説責 (正木真龍作)
- 華やかなる制裁 (辻村 隆作)
- 蒼白き抵抗 (辻村 隆作)
- 非情の部屋 (辻村 隆作)
- 夜の舗道 (南俊二解説)

▽皆様待望の責画責写真集△
マニア垂涎の傑作満載
遂に完成す。異色特集号

表紙	四馬孝・画	オフ色刷
口絵	写真版印刷	二十四頁
	グラビヤ印刷	二十四頁
本文	口絵説明解説	百十数頁

長らく要望されていたが果さなかつた「サディズム特集号」が愈々完成皆様の前に姿を現しました。斯界唯一の奇く編集陣が自信を持って皆様にお贈り出来る限定版特集号の第一弾であります。何卒一度手に取って、この愛すべき特集号をごらん下さい。必ずやお気に召すと確信いたします。

発売以来、圧倒的な絶賛を博しておりますが、限定版のため、数に制限がありますので、売切れにならない中、今すぐお申込み下さるようお勧めいたします。なにしろ印刷部数が僅少です故、その意味からも貴重品としての稀少価値を近き将来に於て生ずることが

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします。故、何卒奮って御応募下さるようお待ちいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

- 賞金 (優作) 壹万円 若干篇 (秀作) 五千元 若干篇 (佳作) 三千元 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等
枚数 本誌に適合した題材を扱ったもの
但し多少の増減は差支えありません。
締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。
投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。
発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以て報告します。誌上では入選作の掲載を以て発表にかえます。
用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用いて第五種開封便(百瓦につき八円)にて御送付願います。

読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。
〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。
〔映画、雑誌〕通信〕映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。
〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。
〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。
〔レポート〕新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。
〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思出、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

○本誌月極購読料○

一月分	一冊 (送料共)	二百円
三月分	三冊 (送料共)	六百円
半年分	六冊 (送料共)	千二百円
一年分	十二冊 (送料共)	二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方は景品としてヤビ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十二巻第十二号
毎月一回一日発行
定価二百円

十月号

昭和三十三年九月三十日印刷
昭和三十三年十月一日発行
編集印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号
発行所 天星社
電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座 大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手にて一割増)等どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

○ 絶対に、他では入手できない貴絵と



奇譚グラス

SADO 特

【 内 容 】

○ 杉原虹児・画名場面集

○ 宿命の鞭

(住谷猪一郎作)

○ 女賊捕縛

(南 俊二解説)

○ 南村俊平・画戯画傑作集

○ 大王様への貢物 水 槽

○ 戦友救出

いけにえ

○ うさぎの波乗りごっこ

鞭を提げる女 四馬 孝・画(表紙裏)

洋髪と日本髪 杉原虹児・画(目次裏)

秘作グラビア写真(八十一葉)

○ 緊縛艶姿十四態

田中 芳代嬢

(うつくしきいましめのかずかず)

○ 拷問・囚衣・懸崖

大塚 啓子嬢

○ 床間の花

花坂 道子嬢

○ 蠟 滴

愛川 悦子嬢

○ 白蝶の舞踊(連続写真)大塚 啓子嬢

○ 長襦袢

花坂 道子嬢

○ 野外ヌード・スケッチ帖

撮影・塚本 鉄三

必至であります。

一度入手された方は殆ど手離さないでしようから一旦売切になりますと其の後の入手が非常に困難なことになります。

限定版「サド特集号」では、華麗な縛り絵集だけでも、十分に楽しませてくれます。それに加えて八十数葉に亘る緊縛写真の素晴らしさ、ヌードフォトの美しさ、全くマニア諸氏にとっては得難い贈物だといっても過言ではありません。本文中の口絵の解説文にしても、これだけ独立して読んでも十分読みごたえのある詳細な描写であります。

只今、発売中を機会にお逃しなく是非一冊お求め願います。

御注文次第、厳重包装の上急送申し上げます。

限定版特集号

定価 三百五十円(送共)

お申込は……

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番



奇譚クラブ

復刊第三十三号
十月

目次

四馬孝傑作集(6) 汚物漬け	四馬 孝・画
南村俊平戯画選	南村俊平・画
縛り絵 岩 礫	滝れい子・画
縛り写真特報「縄 目」	大塚啓子嬢
特写真 脚 線 美	益田房子嬢
洋画スチール二題	編 集 部
米映画 「指紋なき男」	テンソニー・クイン
伊映画 「荒野の抱擁」	カルラ・デル・ボツジョ
磯縛り七態の内 磯の女 (目次裏)	浜 毅・画

「告白」私の青春遍歴	川西 繁子	18
通信 私の傑作写真報告	長瀬 昭子	26
創作 翳 り(かけり)	久留木 栄	28
浣 腸 室	池田喜代子	38
マゾヒズムへのいない	黒田 史明	40
話の屑籠	辻村 隆	44
「相対性原理」(下着ショウ・時代考察の巻)	牧 高志	48
創作 最良の仲人 (第一回)	若松 宏	54
アブ目八目	佐渡 完	66
麻生保氏の生活と意見(八)	麻生 保	69
バー「ナナ」の人々 (第四回)	南 時夫	72

「ヌード春泥尼」から	佐渡 完	80
愛好者の記録(コプロのメニュー)	とま・かつひと	82
「映画通信」今月の縛られ女優達	大河原珠樹	83
残虐なる女性達	森本 愛造	90
創作 紅山彦(第一部完結篇)	三条 卓史	92
本誌「緊縛絵画」論	千草 忠夫	100
切腹風土記(五)一切腹の研究	壬生 三郎	102
創作 偽 縛	植村 奏	104
殉国女性に捧げる	中康 弘通	117
レインコート姿の女腹切	藤山 秀緒	119
輝 雄 記	百田 章二	116
女水兵哀史(ある女奴隷愛好者の遍歴)	市田健次郎	118
浣腸と妊娠(続)	羽村 京子	130
マゾヒズム百景	馬場 好男	136
「告白」血潮の疼き―幼き頃の想いから―	菅 良太	144
魔教圈No.8(その八)	土路 草一	146
文部大臣の専属室「マリアンヌの手記」	鴉 嘔吐夫	158
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正	162
緊縛映画スナッフシリーズ「紅楓の巻」	牧 高志	165
沼 正三だより(九月号読後)	沼 正三	171
読者通信		174

磔 縛り七態の内 <奈加多氏のアイデア>より

磔の女

(本誌昭和33年4月号及び5月号参照)



浜
毅
・
画

汚物漬け

四馬 孝集作集 (6)

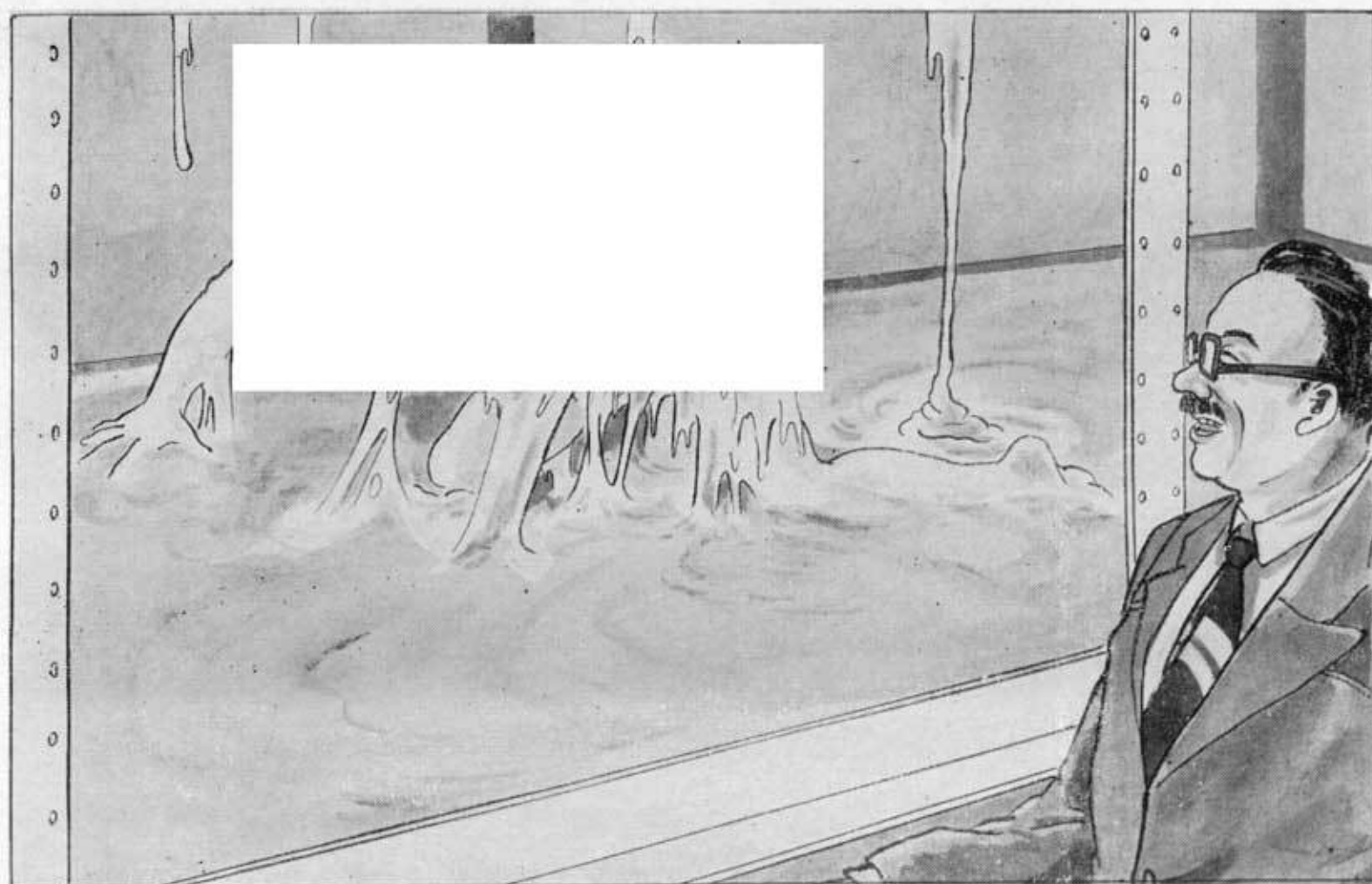
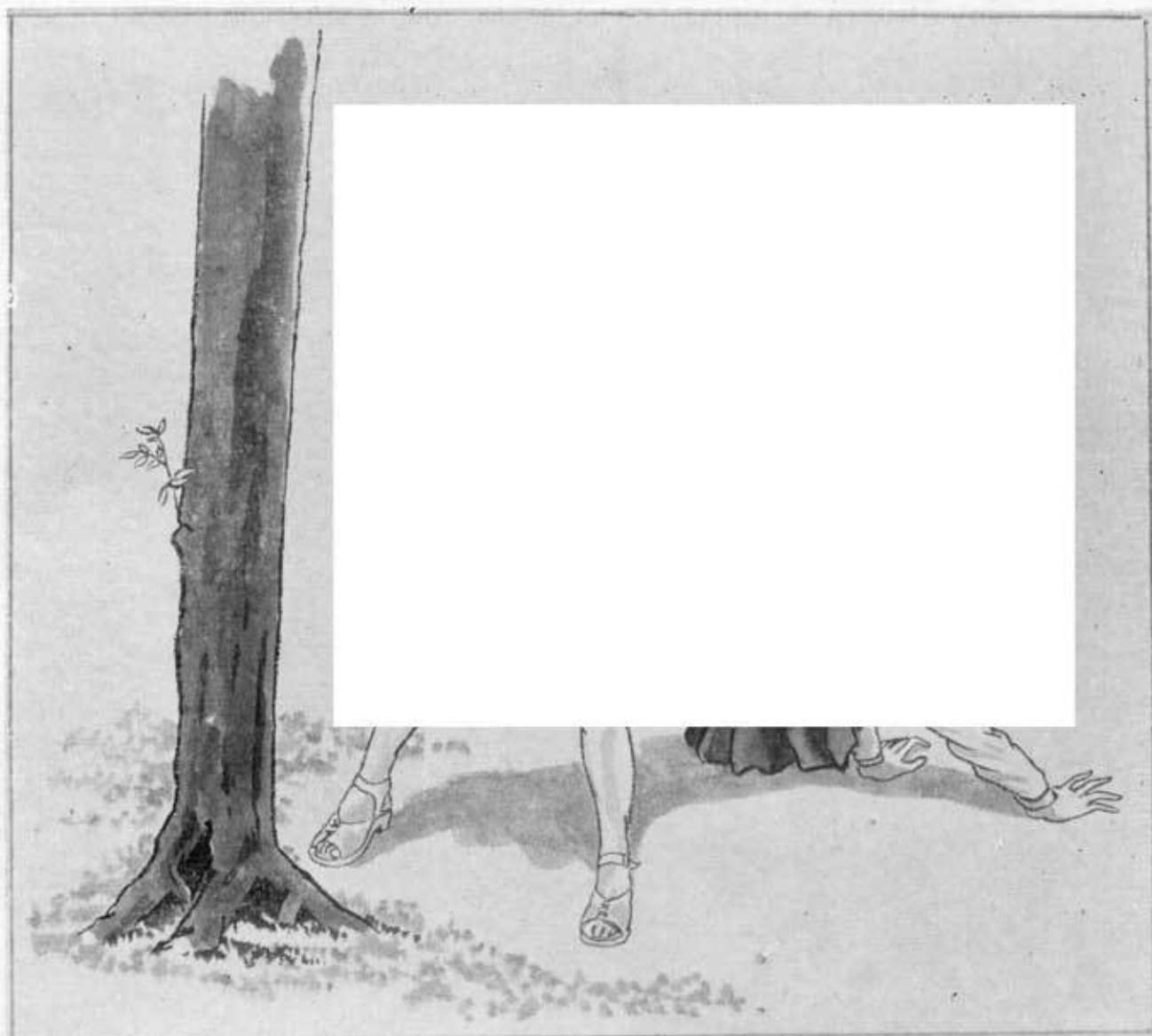
全身に革の責衣を着せられた美女が汚物を満たした樽の中に浸されている。
今一人の女も、まさに汚物の中へ……



四馬 孝・画

縛りごっこ

南村俊平戯画選



水飴のプール

岩 礁

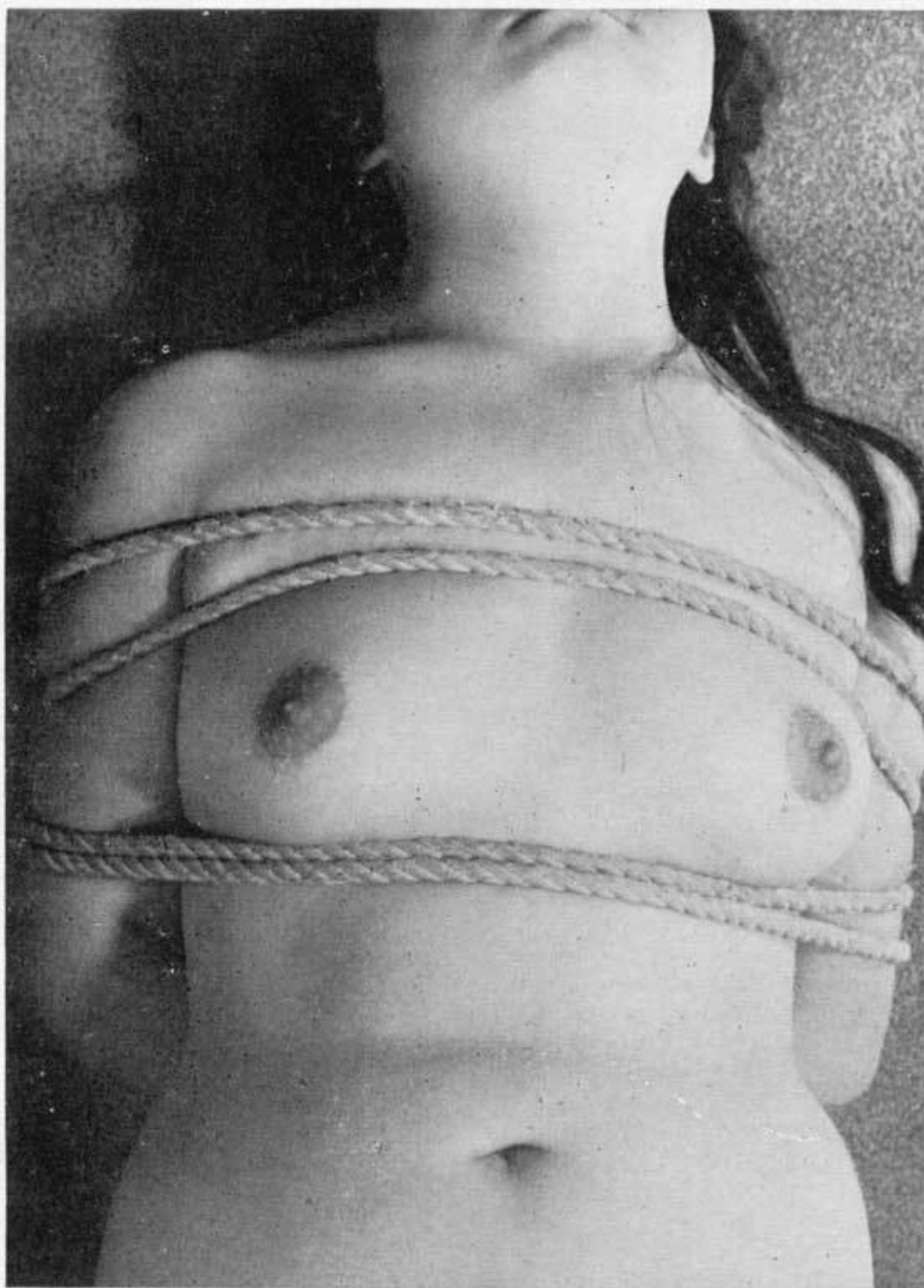
橙色をした月がぼっかりと水平線の彼方から浮かんできた。岩礁に取り残された美女の足下には次第に満汐がひたひたと迫ってくる。

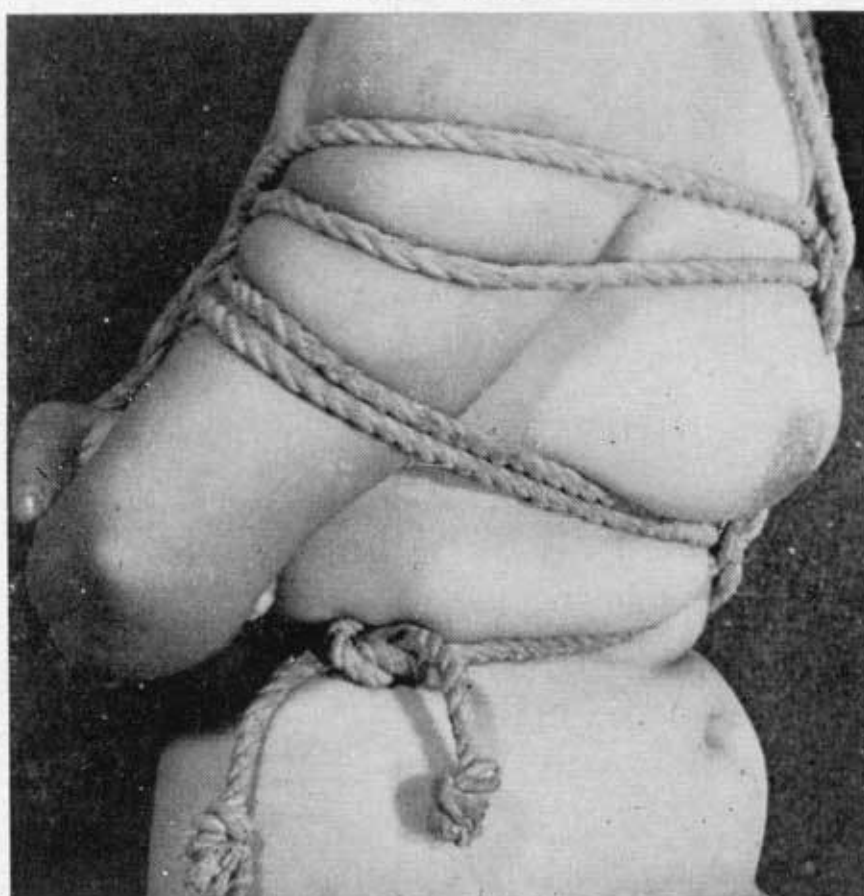
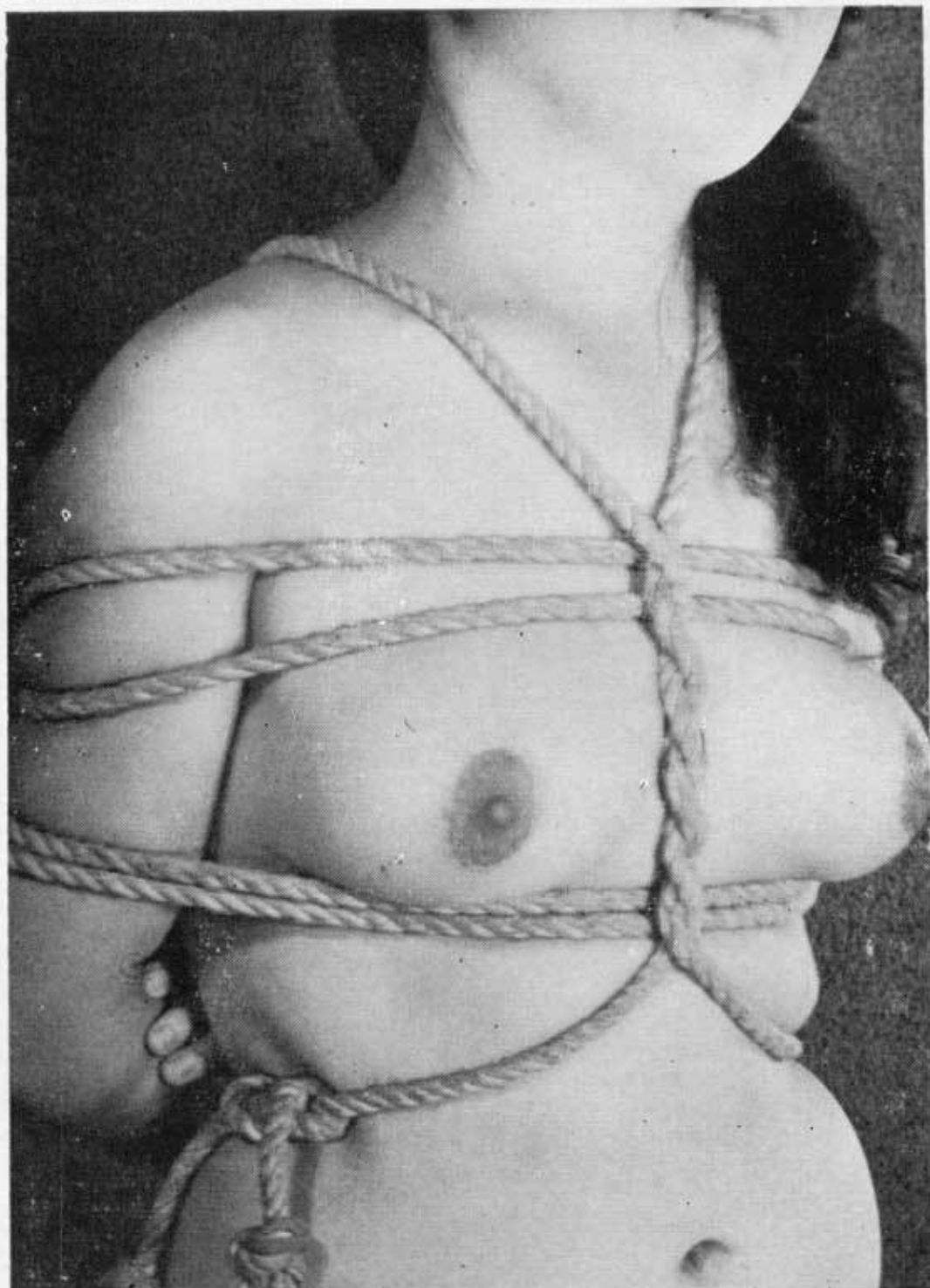
滝 れい子・画



〔縛り写真〕特報

縄目





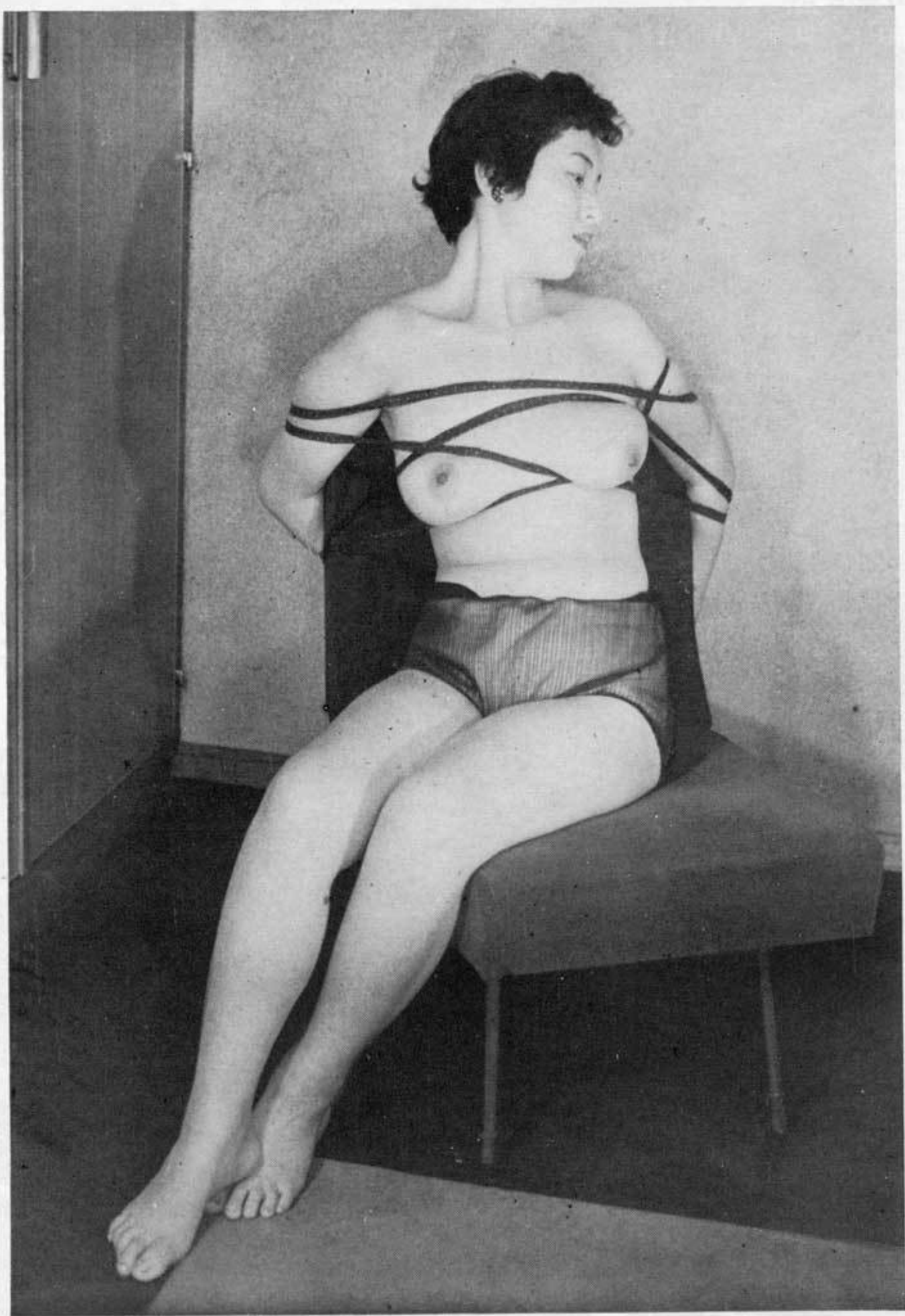
モデル……(大塚啓子嬢)

脚

線

美





益田房子嬢



米映画 「指紋なき男」 アンソニー・クイン主演
捕われの美女を助けようとして、自らも同じ浮目に……。



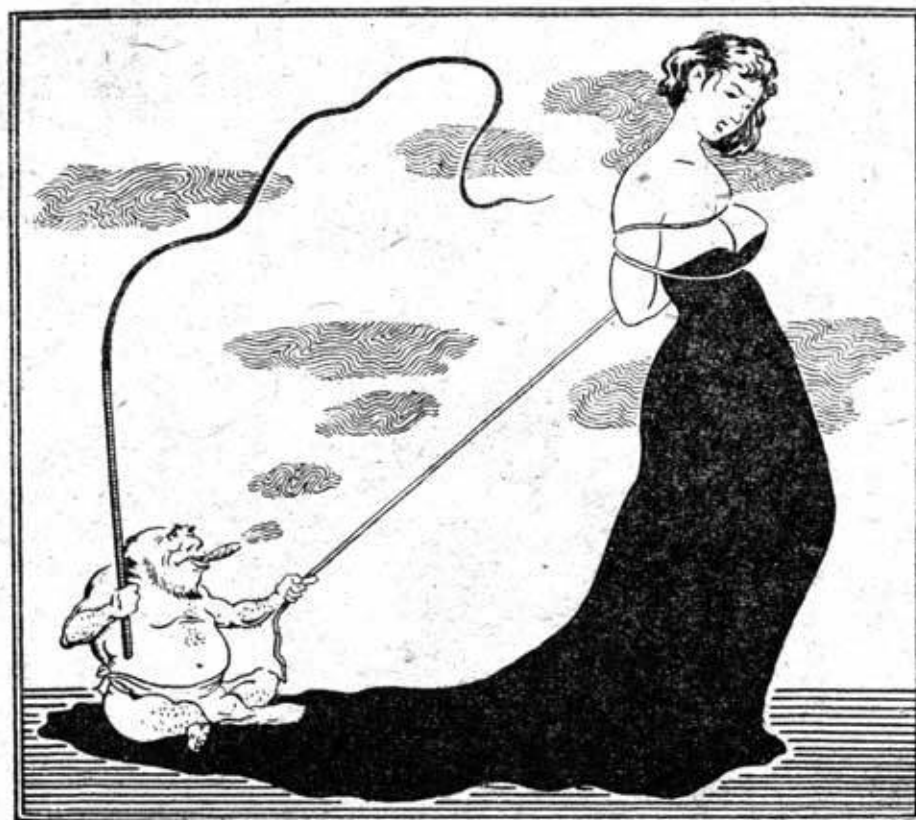
伊映画 「荒野の抱擁」 カルラ・デル・ポッジョ主演
新婚の妻がギャング団に襲撃され無惨にもその毒牙に犯される。

新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1958年 10月号

(第十二巻 第十二号 通刊第百十三号)



告

白

私の青春遍歴

川西繁子

これは私が初めて書いた文章です。今迄一

回、工場で私達のグループが出している機関雑誌に春の運動会で奈良へ行ったときのことを書いたのが載ったことがあります。それはトウシヤパン刷りの薄っぺらなもので、それに、私の書いた文章が載ったので、みんなから冷やかされたり嫌味を云われたりしてさんざん虐められました。

私は只、中学校へ通っていたところと同じ気持ちで、書いて出したのですが、他の人は殆ど書かなかったようで、自然私のが載ってしまったそうです。

それからは、もう筆を持つのかなんか、こりこりで、「貴女は文章がうまいのだから、こ

の手紙代筆して——」などと、同じ職場の人から頼まれても、なんだか馬鹿にされているみたいで皆断ってまいりました。

でも、奇クを読みはじめてから、その魅力にとりつかれ、愛読者の諸兄姉のお便りを拝見していると、自分もひとつ書いてみたいという思いにかられてきました。陰ながら、同好のお友達の沢山おられるのを心強く思いながら、今まで尻込みしていた自分が恥しく、ついに意を決して初めてののお便りを書いてしまいました。

それと言いますのは、私自身のことを、何一つかくさず書きまして、今後共奇クの諸先生方や愛読者の皆様から、色々と御指導を

頂きたいと思うからであります。

さて、このように筆をとってはみましたが、何分にも義務教育を了えたばかりで工場勤めをしております学問のない世間知らずの女です。自分の体験を書くなどと、口はばったいことを申しながら、型通りの文章を書くすべも存じませず、便箋に手紙のようにべったりと書いてしまいました。お読みづらいところは何卒御勘弁下さいますよう最初に御願ひしておきます。

私は今年二十三才になる、或る町工場で働いている女工です。

町工場と申しましても、中小企業というの

でしょうか、男女合せて八九十人ぐらいの工員が勤めています。

工場や仕事のことを書いても興味はないと思いますので、私自身のことを書いてみようと思います。私は自分で考えますのに、性質としては非常に内気な方です。学校でも、学芸会に出たり運動会で一等をとったりするというようなことはなく、一番好きなのは読書ぐらいのものです。読書では、手当り次第に大人の読むような本まで、中学生の頃から読み耽っていました。夜おそくまでスタンドの灯をつけているので、よく父や母に叱られたことを覚えております。

流行歌を唄ったりダンスに行ったり、お友達と騒いだりするのは不得手な私は、殆ど読書から知識を得ていました。それで表面は大人しそうな顔付きをしています。肉体的にいつても、そう言えますが精神的には一層マセていたようです。読書とか、或は時折休日に見る映画とかから、大人の世界を想像していた私は、或る面では現実家であったり、又、恐ろしくロマンチックな空想家であったりしました。

これは私、年頃の娘であつたら皆一様に一度は、こんな考えを抱くものか、若しくは、私のような貧しい家庭の娘だけが抱いた夢であつて、立派な家庭の方はそんなことがない

のか、それは存じませんが、私はその頃時折自分を可憐なお姫様になぞらえ、そのお姫様が悪者達のために捕えられ、さんざんヒドイ目に合わされるのです。小説とか映画の主人公は、最後には助け出されるのですが、私の空想の中では、私の女主人公は最後まで虐げられて、むごたらしい目にあわされるのです。そして結局は私の肉体は頭の毛から足の爪先まで切りさいなまれて、弄りものにされてしまふのです。

岩見重太郎の狒々退治では、人身御供の娘さんは勇者に助けられるのですが、私の空想にあらわれる人身御供は、さんざん玩具にされた末、骨の髄までしやぶられてしまふのです。そんなとき、虐げられ、苛められ、玩具にされ、凌辱され、果ては惨殺されてしまふ場面に立ち至ったとき、私は自分でも驚くほど興奮してしまふのです。その折の甘美な思ひ出は、今の年になつても忘れることの出来ないものです。

しかし、その当時（十四、五才ぐらいの頃と思います）に比較して、現在では、常識も発達したためか、あの頃の痺れるような興奮は得られません。やはり年が影響するのでしょうか。他愛もないことなのですが、昔物語などの中にそういう筋があつたときは殊に私の空想が、それからそれへと発展していったようです。

一つ例を挙げてみますと、皆さまもすでにお読みになられたかと思いますが、丹羽文雄先生作の『お吟さん』という主人公に非常な共感を持つのです。ある意味では、あの小説のお吟さんと同じ運命にあるといつても過言ではないのです。

次に小説『お吟さん』の中の一節をお借りしてここに書き写してみます。

○
どちらが先に求めたというのでもなく結ばれた。

伊東は大してむつかしいこと求めるといふでなくもとめた。お吟はすこしびっくりしたが、いつかはそんなことになるかもしれないと漠然と考えていたことが生じたとも思つたように従つた。「男の人って、みんなこんなことをするのですか」その時もお吟はこう言つた。

あつさり身を許したが、どんな意味を持つているか、よく判らなかつたようである。

（気紛れにたがいにいたづらをやつたというほどの行為で済んだ）

醜い顔も毎日眺めてみると、見慣れてしまふものである。伊東は自分にそう説明した。お吟は病気をしなかつた。よくよく使いべりのしない肉体である。いつもさらりとして、たくましくて白かつた。自然と伊東は、お吟の肉体の上でいろいろなことを覚えるように

なった。誰に教えられたというのでもなかった。時には残酷と思えるような行為まで要求した。お吟は応えてくれた。平凡に飽いて時には嗜虐的にふるまいたくなるのは、どうしてだろう。お吟はにが笑いするのでもなく、唯々諾々とどんな姿勢にもなった。

○

小説の中の一節を殊更抜き書きしましたのは、この小説の主人公お吟さんと同様に、私も女ではありながら大変醜い大女なのです。ここに私の緊縛写真数枚同封しておきましたから、御覧下さればお解りになって頂けると存じますが、私は決して小説や映画の女主人公のように美しくありません。それに生れつき大柄なので、今迄にも男友達が一人もありませんでした。

それはもう、私も世間並の女性と同じように男性からチャホヤされたい。愛されたいという気持も強かったのですが、実際には、そういう機会に恵まれることもなく、徒らに年を過してきました。それが、ふとしたことから、あの小説のお吟さんと同じような境遇になってしまったのです。そっくりといってもいいかもしれません。

しかし、私の経験と申ししましても、奇クの記事によく載っている告白のように、失神する程の悦楽といったものではないのです。私の心の中では、いや空想といっていにかしれ

ませんが、その範囲では、それ以上のことを望んでおりますが、現実には夢のように甘いものではありませんでした。でも、それにしても、私にとっては初めての恋愛とでも名づけることの出来る思い出だったのです。

もう現在では、私を可愛がって下さる人もなく寂しい日々を送っておりますから、誰に気がねすることもなく、初恋の人のことを思い出しながら、二人で楽しく過した日々を皆様に告白いたしますよう。

○

○
今年の秋、

早いもので、あれからもう半年は過ぎ去りましたが、まるで昨日の様に生々しく思いうかべることが出来るのです。

九月の末、その日は勘定日だったので、残業もやめて早じまいにし、帰りにはヤキソバでも食べて映画を一人で見ようと足どりも軽く夕宵の道を歩いていました。

貰った給料を大切に内ポケットへしまつて口からは歌謡曲のメロデーでも出そうな浮々した気持でした。給料って、何度貰ってもいものだなあと思いました。なんとなく心の暖まる思いで、あれとあれとを買って、と胸算用するのも楽しいものでした。実際は、そんなにいるの物を買ったり、飲み食いに使うような余裕はなかったのですが。

その帰り途、同じ工場で働いている新井義

雄という人に、ばったりと逢ってしまったのです。いや、私には突然だったかもしれませんが、彼にしては前もって私を待っていたのかもしれない。自分の自惚れからか、私は今でもそう思うのです。然し、彼と親しくなつてから何度もその事を聞いたのですが、彼はいつも否定しました。

彼は工場では、どちらかといえば無口な方でした。二十六才とかで、十九や二十の若い工員と一緒に騒ぐのも大人気ないといった風でした。工員の人たちは、私たち女工員の前では、殊更何か注目されるような悪ふざけをしたりしながら、意識してヘンなことを言ったりするのが普通でしたから。

私は自分の生れつきもありますし、家庭もそうでしたから、淋しがり屋でありながら、そういううわついた騒ぎには馴染めないものがありましたので、そういう彼には好意以上のものを持っていました。守衛室の窓口に佇んで、彼の名札を盗み見して、新井義雄という彼の名前を覚えたのも、なにかしら私らしい心づかいでした。でも、前にも申しましたように容貌に自信のない私は、とりたてて彼に近づいてみようなどという気も起らなかったのです。こんな私でも、いつかは誰か手を差しのべて呉れる人もあるかもしれない、という淡い期待は持っていました。

その彼が、突然、私の前に立ち止って、

「お茶でも飲みに行きませんか？」

と誘ったのです。丁度、給料日で私の心も明るかったのですが、若し、これが、平常騒ぎ回っている人であつたら、私は、こそそと逃げ出していたかもしれせん。然し、平常真面目一方で通っている彼が、真面目な顔で誘ったのですから、この時の私の気持にびったりしていたのです。彼も、給料日で懷が暖まっていたのでしょう。いつとはなしに、二人は、すでに薄暗くなった秋の夕暮の舗道を歩いていました。

玉造の真田山公園まで来て、公園のベンチに二人並んで腰かけました。私の差し出す白いハンカチを彼は「有難う」といって腰の下へ敷きました。ここは高台になっているので、東大阪の街々の屋根が黒々と目の下に連り、城東線の電車が豆電球のような輝きを見せてオモチヤのように高架を走っています。

今迄、何回も見慣れた風景が、彼と一緒に眺めているというだけで、こんなにもロマンチックに見えるのだろうか、私は初めての経験に何にかしら涙ぐむような感傷を覚えてくるのでした。貧しい家に生れ、両親の貧しい生活を見ている私にとって、この世は苦勞の種のように思えたのですが、今日、はじめて目の前がパッと明るくなったような気がしました。

「繁ちゃん、少し寒くない」

その時、彼の優しい言葉に私は、現実にはひき戻されました。もうすっかり陽の落ちた公園のベンチで、私は彼に肩を抱かれながら、生れて初めて、異性の愛の告白を聞いたのでした。彼は真剣な目つきで、私の顔をじっと見つめていました。男性の逞ましい熱情の言葉、私はその求愛の言葉に、頬が真赤になり胸は早鐘のようにドキドキ響いて、身体中がぼうとほてって、それから彼の言葉を音楽のように聞くだけでした。

それから私は全く夢心地でした。只、今でも、その時の夜空の星のきれいだったことは、はっきりと覚えております。

映画や小説の上での恋愛は知っていますが私のような貧しくて醜い女が、実際に出来るとは思っていませんでした。何よりも私は、世間並の女性と同じように、男性から求愛を受けたのが嬉しかったのです。

○

彼とそんな関係になってから、私には又一つの悩みが湧いてきました。それは若し妊娠したらということでした。正式に結婚しているものでしたら、それは喜ばしいことでしたがこのように親や会社の人たちにも内緒で逢っていて、お腹が大きくなってしまったとしたら、私は一体どうしたらよいのでしょうか。

彼はきつと私のような魅力のない女と結婚しよう等と言ひ出さないでしょう。でも、私

も女です。オモチヤのように弄んで捨てられるのは嫌です。そういう世界を知らない中ならまだしも、今では、彼のことがばかりが頭に浮んでくるのでした。

「今晚一寸話があるから、一緒に帰ろう」

お昼前、手洗場で耳元にそう彼に囁やかれてからは、私はもう何も手がつかねて、仕事をすることも浮の空でした。早く五時になればいいがなアと時計ばかり眺めて、こんなに待ち遠しいことはありませんでした。

五時になると、そこそこに顔を直して待合せの鶴橋へ急ぎました。ごたごたとして騒々しい、このガード下が貧しい私達にとっては本当にふさわしい待合せ場所だったので。二人で雑踏の中を並んで歩きながら、私は何にか彼に話したい、という思いで胸が一杯でありながら、こうして黙って歩いているだけで結構楽しいのでした。

電車通から入り込んだ露地を歩いている時でした。彼は何か思いつめたように、

「繁ちゃん、今日は少し落着いて話をしたいのだが、都合が合わない」

と言うのです。私は、「ええ」と軽く答えて立ち停った彼の顔を仰ぎました。彼は、怒ったような不機嫌な顔つきで、どんどんと先に立って歩き出したかと思うと、温泉マークの印のついた看板の出ている旅館の入口へ来て、「ここへ入ろう」と私の袖を引っ張るの

です。外はまだ明るいのです。それに人通りもあります。私は、そんなところに立っているのが恥しいので、彼について水を打って濡れている石畳の中へ入りました。

案内されたのは、西向か北向か、薄暗くてひっそりとした四帖半の二階でした。

私は、この旅館へ入ってから、彼にあの事をなんとしても話そうと心にきめました。それはもう数日も前から、私の頭の中を占領していて放れなかった事柄です。

女中さんがお茶を置いて出ていって二人きりになると、私は意を決して言いました。

「ねえ、新井さん、ちょっと待って。その前に御相談したいことがあるの！」

出鼻をくじかれた彼は、「なんやね」と言いながら真面目顔の私に照れていきます。

「その前に、是非お話したいことがあるの、ゆっくり聞いてほしいんやワ」

私は彼に正式に結婚してほしいことを。彼は彼にいろいろと回りくどく頼みました。彼は苦虫をかみつぶしたような顔つきで横に寝そべって聞いていました。が、やおら上半身を起すと、自分はただの遊びで君とつきあっているのと違う。それは君もよく知っている筈じゃないか。君の言っている結婚とは世間では認めんかかもしれ

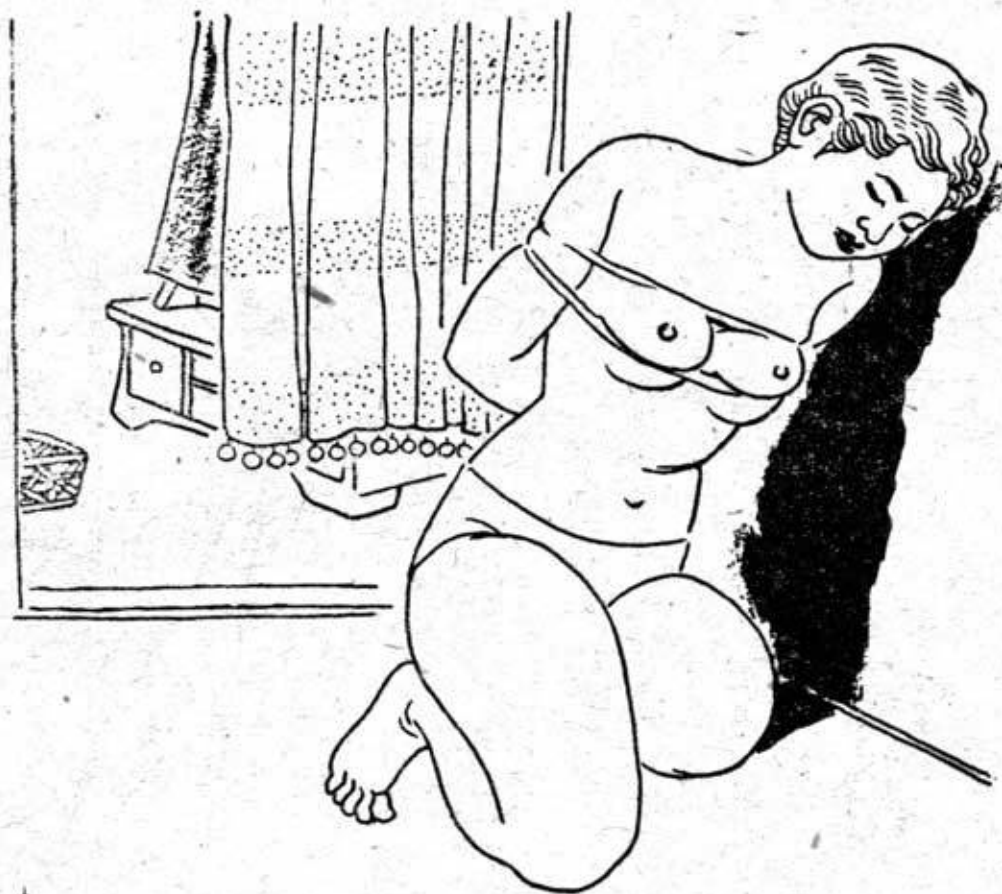
んが、現在、君とは事実上の夫婦と同じやないか。それとも、君は僕が嫌になったので、そんなことを言うのと違うか。そりや正式に結婚できれば、それに越したことはないが、それには、いろいろ準備もいることだし、今急には無理だということです。

やはり私の思っている通りの反対側の裏を言われてみると、自然私も考え深げになってゆくのでした。そんな私の様子を見ると、

「君が嫌なら、すぐ此処から帰ってもいいんだよ。帰りたけりや」

と彼は言うのでした。私はいくら自分の気持ちを説明しても、口下手な私は十分彼を納得させることは出来ないだろう。そのうち、いづれ解って下さるだろう、と何にも言わず、ハンドバッグを引き寄せて立ち上りますと、「矢張り帰るのか、じゃ、君は僕をなぶり者にして遊んでいたのか」

と言うなり、彼は私の前に立ちはだかって私の頬をなぐりつけました。パチンという音が静かな部屋に響きました。痛いというのではなく、私は口惜しさに思わず畳の上うつ伏して声を殺して鳴咽しました。暫くは、そんな私を見下すように突っ立っていた彼は、「すまなかった。悪かった、許してくれ、僕が悪いのだ、君が好きなればこそ、君に対して、こんな乱暴をしてしまったのだ。許してくれ。もう何も言わ



ずに帰ってくれ」

と言うなり、がぼと畳の上に倒れて男泣きに泣くのでした。彼は私を好いていてくれるのだ、愛していてくれるのだ、という気持が私の胸に湧き上ってききました。彼にぶたれた頬のあとの熱さが、むしろいいように私には感じられるのでした。自分が悪いことをして申し訳ないというような気持でした。

「義男さん、かんにんしてね、私が悪かったの、許してね」

彼の頭の髪を手で撫ぜながら、やさしくいたわる気持で一杯でした。

○

それから暫くして彼は、
「繁ちゃん情熱家だな、君は可愛いよ。君の望む通り誓約書を書いて、一生二人で仲良く一緒に暮そうよ。それ、ここへ拇印を押してごらん」

と言って差し出した便箋二枚には、いつの間にか書いたのやら、同じ文章が別々に書いてあるのです。それは次のような文章です。

誓約書

私儀は新井義男様に御願ひして左記の誓約を致し今後共その命に服し確実に実行することを御誓ひ致します。

一、私儀川西繁子は新井義男様所有の奴隷として仕え心身の一切を捧げます。



一、私儀は新井義男様の御命令には事の如何を問はず従います。

一、私儀は新井義男様のお下しになる如何なる責折檻拷問にも耐え、生殺与奪の権を握られても一切不服は申しません。

昭和三十三年十一月六日

新井義男様

川西繁子

彼は、結婚、結婚というが世帯を持てば女は一生家庭の奴隷や、生活的にも精神的にもそれはそれは苦しいことがあるのだよ、それにひきかえ、僕達は結婚生活の楽しさだけを味わうことが出来るのだよ、とやさしく私をいたわるのでした。

私は彼の言うことも少しは判りました。でも、判らないところも大分ありました。しかし、只、うっとりと彼の言葉を聞いていました。

「もうこれからは、僕の奴隷なんだから、僕の氣にいるよう教育しななければいけないね」と言うのでした。

「私は義務教育を終えただけの女よ。私に一体どんな教育をして下さるの？」

と訊ねますと、これから二人で一緒に暮してゆくのに、こまらないうちに仕込むから、なんでも僕のいうとおりにしておればよい、となにげなく言うのでした。そして、

「可愛い奴隷さん、サービスよくなるんだよ」

と両手で私の頬を挟むのでした。

○
このようにして拇印を押した誓約書が、後になって、どのような結果となって私の運命を変えていったでしょうか。

十一月二十四日の昼前、私は新井との約束で梅田へ急ぎました。外はすでに少し肌寒い感じで私は七分袖のワンピースを着て出かけました。阪急の出札口の前で待っていると、彼はカメラを肩に掛けてやってきました。

そこから紅葉の山を訪ねて箕面へ行きました。清澄な空気、都塵を離れた山のハイキングコースは木々から洩れる秋の陽を受けて楽しい一日でした。箕面の滝の下は、水しぶきが霧となってぞくぞくと寒く、思わず彼の厚い胸にすがりついて笑われました。

そこから、道をそれて山あいの細い藪道に入り、二人きりの世界を求めました。谷川を越えて崖のふちで私の持参したサンドイッチを食べながら、いろいろと未来のことについて話し合いました。彼は今里で二階を借りて一人で住んでいるとのこと、結婚して子供が出来たら、どこか環境のよい郊外へ行って住みたいものだ、と私が言うと、彼は、自分らのような働きどには夢のようなとき、と空ろに笑うのでした。

然し、今の私には、そんなことを空想するだけで楽しいのでした。何故、彼は私の夢に合槌をうつてくれないのだろうかと思ふと悲しくさへなるのでした。けれども今の彼は、もっともっと現実的なことを考えていたのでした。

自然の空気につつまれて、私は子供のよう嬉々としてはしゃいでいました。彼に小石を投げたりしてふざけながら、色々なポーズで写真をとって貰いました。私が代りに貴方をとってあげようと言っても、僕はいいからと言ってカメラから手を放さなかった彼が、急にあらたまつて、

「繁ちゃん、お願いがあるんや、他の人にこんなこと頼めないが、君と僕とのこの幸福な時に、この若さを一生残すような写真を撮っておきたいんだ。君のヌードを写さしてくれないか、頼むよ」

と言うのでした。このような太陽の照っている自然の下で、人がいないといつても、何の垣もない山の中で私に裸になれというのです。私は羞しいから嫌だと、さんざん断ったのですが、彼は執拗に一寸でいいからと口説くのです。余りにも彼が熱心に言うものから、彼に一町四方に人がいないか見て貰ってから渋々樹のかげで裸になりました。

こうした楽しいハイキングの後で、梅田まで帰って二人で映画を見に入りました。今迄彼との交際は、何もかも生れて初めての体験

ばかりで、他のお友達や女の人も同じようなことをしているのでしょうか。

私のお友達の話では、映画館の暗がりでお尻を握られたとか、お尻を抓られたとか言っていました。私には一回も経験がありませんでした。それが私は彼と一緒に映画館へ入って、生れて初めての経験をしたのでした。

○
このようにくどくどと、私達二人のことを書いてみて、きつと読まれる方は退屈されたことだろうと思います。それらの出来事は、私にとっては甘酸っぱい懐かしい思い出であつたとしても第三者の方には余り興味のないことだろうと考えます。

彼との逢瀬は極く短い間ではありましたがその短い間でも彼はあせらずに一步一步と私を教育（彼の言葉によれば）し仕込んでいったのです。勿論すぐには縄を使うというようなことはしませんでした。生れながらに、そういう素質があつたものか、私はすぐ縄に愛着を覚えるようになり、縄で縛られる楽しさというものを知るようになりました。

私が初めて彼に縛られた日、それは箕面へハイキングへ行つた日から幾日も経たない、たしか、まだ十一月だったと思いますが、晩秋の一日、私は彼と連れ立って鶴橋で近鉄に乗りしました。私は長瀬から通っていますので

よく帰りは一緒になりました。彼は私を送りがてら今里で下車するのです。

その日は、どちらが誘うというのでもなく離れ難い気持で、今里駅で下りてしまいました。駅前の大衆食堂で簡単な食事をすました上、ゆっくり話をしようと駅裏の川端に人目に立たず一軒ぼつんと建っている温泉マークの宿へ入りました。

入口の硝子戸を開ける彼のあとから、おずおずとついてゆく私の胸はドキドキと高鳴り暑くもないのに身体がほてって、首筋が汗ばんでくるのでした。

「いらっしやいませ」という女中さんの声もうわの空で顔をうつむけたまま一室に案内されたのです。四帖半の座敷に落着くと、女中さんは、「丁度よいお湯ですからお風呂にも入って、御ゆっくりなさいますか」とすすめるのでした。彼はすぐ立ち上って、「一汗流さして貰おう、繁、お前も一緒に来て背中を流してくれ」と女中さんの前で、妻のように私を呼ぶのです。私は何とも返事をすることも出来ず、実際は彼と一緒に風呂へ入るなんて初めてなので恥しくて嫌だったのですが、女中さんの手前、彼のうしろに従って風呂場へ案内されたのです。

彼が浴室へ入ってから、脱衣室でぐずぐずしている私に、

「君も一緒に入れよ、恥しがる仲でもないじ

やないか、新婚で温泉に来たのと同じだろうからナ」

やがて脂肪ぶとりのした身体を洗い終えた私は脱衣室の姿見の前で、せめてもの身づくろいをするのでした。鏡にうつる自分の身体を眺めて、大柄なばかりで女としての美しさや魅力に乏しい自分に、つくづくなさけなくなってくるのでした。それにしても、義男さんに、もっと優しく親切にしなければ、こんな私を愛してくれるのは、広い日本に彼だけしかないのだもの、と思い返えしてみるのでした。

室へ戻ると彼は卓の前に坐ってお茶をのんでいました。煙草をのまない彼は、こんなとき、ひどく手持無沙汰のようでした。

私はすぐ窓際に置いてある鏡台の前に坐って湯上りの化粧をはじめました。

「繁ちゃん、前の日曜日にうつした君のヌードは駄目だったんだ。もう一度今日とり直したいんだがね」

という声に願ってみると、いつの間にか彼は写真機に三脚をつけているのです。

一瞬、私の胸を嫌な感情が走りまわった。あの時、今度一回だけというので浚々裸になったのです。しかし、失敗したと言われてみるとムゲに断ることも出来なかったのです。

「繁ちゃんのおッパイが小さいので、よい写真が出来ないから縄を巻きつけるよ。胸が引

き締って立派な乳房に見えるんだから、少しは我慢してくれよ」

と、両手を後にして縄で括られると、その余りを胸の方へ回して二重に縛りました。

「でも、人に見せたりしたら嫌よ」

「大丈夫、絶対に人になんか見せやせんよ。二人きりの青春の記念写真じゃないか」

彼は私をせかしてカメラの前に立たすのでした。こうして私は生れて初めて縛られた姿を写されたのです。今、ここにその時の写真が三十枚ばかりあります。同封したのは、その一部です。

その後、彼は度々私を縛りましたが、カメラで写したのは、この時だけでした。あとで私が、何故もう写真をうつさないの、と訊ねたことがあります。彼はフィルムが高いので、と返事しておりました。ごらんのようにこの写真も余り上手ではありません。きつと誰か友達からでもカメラを借りてきたのかもしれない。

しかし、その頃から、私はいつとはなしに縛られるという事に馴らされていたのでしよう。彼に縛られているときは嫌だ、嫌だと思っているのに、だんだん時間が経つにつれて、何んだか、もっときつく縛られてみたいという気持が起ってくるのでした。

仕事をしている時など、ふっと、その気持がきざしてくると、いらだつような焦燥に胸

を焼くようになります。何か物忘れしたような空虚さ、穴のあいたような空しさ。それが彼に縛られたりいじめられたりしていると、自然とおさまってくるのが不思議でした。

○
十二月一ぱいは、こうして二人のプレイが序の口といった程度ですすめられてゆきました。年の瀬が迫ってくると流石に仕事の方も

〔通信〕 私の傑作写真報告

〔通

長瀬 昭子

私は最近、素晴らしい写真を撮りましたので、余程お送りしようかしら、と思いがら何かと差し触りがあるものですから、お目に掛けることが出来ずに居ります。

極く親しい従弟（といっても未だ中学生ですが）に頼んで撮ってもらったのですが全部フラッシュを用いましたので、殆ど失敗もなく意外な程綺麗に撮れていました。現像その他を人に頼むことも出来ず、友人から機械を借りて勉強し乍ら、自分で行ったのですが、案外成功しました。

全部で三十枚余りありますが、私は独りになるとこれを並べて、人知れず眺めては

喜んでいます。どんな写真かお判りでしょうか、一枚残らず、私が洋子を捻じ伏せ組敷いている場面ばかりなのです。

俯伏に転った洋子の背中の上に跨って首筋を押えつけているもの、腕を逆に捻じ上げているもの、片膝を立てて手首をふんづけたもの、逆馬乗りのにしかかったもの、髪を掴んで引張ったもの、等々随分色々なポーズがあります。いづれも唯単に、お芝居でそれらしいポーズをつけたものではなく、実際に格闘した上のものでばかりです。で、組敷かれた洋子が、何とか跳ね反そうと跳んでいる様子が巧く写真にも出ていま

忙しく、それに正月の休みのことも考えて稼いでおかねければならないので、一週間ばかりは、残業、残業の日が続きました。疲れているから勘忍して、という私を無理に連れ出したこともありました。

正月は五日迄休みということになっていきます。彼は、この休日の中、二日と三日の両日を、誓約書に書いてある奴隷宣言の実行をする日として、つきあうよう私に命じました。私は家へは、会社の友達とスキーに行くつもりで、二日の夜、外泊する口実をつくりました。その日は朝の十時頃、いつもの待合せ場所である鶴橋のガード下で落ち合いました。

郊外電車で三十分ばかりして、とある田舎の駅に着きました。駅前にゴタゴタと乱雑に家が建ち並んでいるだけで、そのあとは稲を刈り取ったあとの田圃が続く、果てには青い山が見えていました。

お正月だというのに、日の丸の旗がチラホラするだけで至極静かな処でした。丁度昼前だったので、駅の真前の大衆食堂で食事をすることになりました。都会では珍しい畳敷の座席にお膳を据えて、彼と向いあいました。何か、ひどく場違いのところへ来たというような気持が二人を落ち着かせませんでした。他にお客は三人ばかり、正月の休みで村から出てきたという人達が、ここの主人と田舎言葉まる出しで大きな声で話していました。

すので、殊の他気に入って何時迄も大切に保存して置くつもりです。

私ばかりでなく、メトミマニヤの方ならきつと喜ばれる貴重な写真だと思えますので、あまり顔が正面を向いていないのを、十枚ばかりお送りしたい、と洋子に相談しましたら、「そればかりは勘忍して……」とどうしても承知しませんので、其のままになっています。

洋子は、やや小柄ながら、スタイルの良き美人ですし、私の方は彼女より一周り大きい、十人並以上（とうぬぼれています）の女性ですから、写真はどれもすごく美しく組み敷かれて腕や足に、ぐっと力のこもった洋子も、起すものと全身に力を入れた私自身の姿も、全く素晴らしいと思っています。殊によつたら御社の分譲写真よりもすぐれているかも知れませんわ。

若し将来洋子が承諾する機会でもありましたら早速お送り申し上げますが、何時になりますことやら……。

それにしても、御社の分譲写真は、縛りばかりが多くて、女性同志が烈しく格闘している写真や、寝技で争っている美しい写真が、殆んど無いのが不思議でなりません。私は昨年、アメリカから来たとい

う、8ミリフィルムを或る人に見せて戴きました。何と二人の金髪女性が、ルールも何もなしに、まるで喧嘩同様、打つ、蹴る、投げる、押え込む、絞め上げるの大乱闘、上になり下になり、豊かな肉体に闘志をみなぎらせて、どったんばったん取組み合っているのを観ていますと、思わず身を乗り出し、身体中の血が湧き立つのが自分で判る程の感興を受けたのを、今でも憶えています。此れ程美しいものは他には無い様な気がいたしますわ。

此の度の写真は画面の人物の一人が私自身です。一入その実感も深うございですが、私、欲が深いのかも知れませんが、人様の同じ様な場面と自分のとを較べてみたくて仕方なくなりました。

御社でも此んなフィルムや写真を製作なさって、メトミマニヤの、ひそやかなこの要望に應えて戴きます様、御願いたしとう存じます。

勝手なことばかり申し上げ申訳ありません、ではその日の一日も早く来ることを切に望み、祈りながら失礼いたします。暑さの折、御機嫌よろしゅう。

KK写真部の皆様へ

その話によると、この店の女の人も今日は午後から休んで映画を見に行くのだと言っていました。私達は追われるように早々に食事を済ませました。

彼は暖簾をくぐって代金を払いに行って帰ってきたかと思うと、さあ行こう、と私の手をとって、その暖簾の向うへ連れてゆくのです。私は呆氣にとられて、彼の背中のおとを黙ってついてゆきました。渡廊下のような処を通って、裏には料理屋風の二階家があります。女中さんに案内されて、どうぞと導かれた処は、そこだけが離れになっていて、六帖に控えの間が二帖、手洗場と御不浄がついていて、窓を開けると、目の前に山が軒に迫っています。いつも屋根瓦ばかり見ている私は思わず、

「わあッ、凄い！」

と声を出してしまいました。彼も上機嫌らしく「気に入ったかい」

と窓口に立っている私の肩へ手を回すのでした。あたりはひっそりとしていて、女中さんの置いていったお茶が白い湯気をほのぼのと立てています。

私は、何にしろ、身体の奥底から湧き上ってくる戦慄のようなものを全身に感じていました。

—— 創 作 ——

翳

り

(かげり)

久 留 木 栄

誰に相談しようかと思ったとき、美也子はすぐ綾子姉さんの顔を思い出した。すると急に会いたくなかった。姉さんといっても、本当の姉ではない。女学校の時の三年先輩で、美也子の優しい方、いわゆる姉さんである。美也子は夫を会社に送り出したら、さっそく訪ねてみようと思った。

美也子は結婚して二年半になる。女学校を卒業して、半年目に式をあげた。これにたいし綾子姉さんは三年早く結婚した。しかし、二人の関係は美也子が結婚するまでつづいた。というのは綾子は俗にいうM過剰、美也子はW過剰で、いわばSとMの関係であった。そういうところから美也子は夫より綾子から、よい女の喜びを教えてもらったといつてよい。美也子は綾子姉さんの艶^{つや}っぽい顔を思い出すたびに色が黒く、よく肥えた大柄な四肢を連想して^{ちう}熱っぽくなった。綾子姉さんは美也子をよく裸にしてしばった。そして

遅い両腕で抱いて喜んだ。……美也子はいつしかそんなことを連想していたのだ。その綾子姉さんにくらべると、夫はずっと純真で優しくかった。愛し方も、ひどく繊細で、まるで薄いベールを一枚一枚剥ぐような洗練されたところがあった。が……暴^{あち}々しさがなかった。そのことが、いつしか美也子の心に物足りなさを感じさせ、いっしょに彼女をノイローゼにおとし入れた。私は不感症かしら……もしそうなら、責任は綾子姉さんにも半分ある。……美也子はそう思った。

美也子の夫はバス会社の整備部の整理係長である。美也子は、父のすすめで平凡な結婚をした。美也子の父は銀行の監査役をしているので、それになりたいする遠慮が愛情にまで現われたのだろうか。それにくらべると綾子の家は医者で、夫もやはり医者である。だから解放的、発展家なんだ……だから、と美也子は考えてみた。だから

一番親しい綾子姉さんに胸の中を打明けて相談してみたら、ノイロ―ゼも解消するのではなからうか。……美也子は夫の洗二を会社に送り出すと、綾子の好きだといった黄八丈の着物に朱の地に褐色の鎌倉紋様の帯をしめ、外出の用意をし、そそくさと綾子を訪ねた。

綾子姉さんは、丸い目と黒くて大きく半円型を描いた美しい眉毛を持った丸顔の持主だった。美しい顔というわけではないが、鼻筋がとおって笑うと糸切歯がみえ、右側に小さなエクボが出来た。美也子は綾子姉さんとは結婚いらい余り会っていない。それでも二カ月に一度ぐらい顔をあわせるが、たいてい買物の途中とか夫と一緒にとか実家からの帰りとかで、綾子姉さんの家を訪ねるのは全く半年ぶりといってよかった。美也子は街で会ったとき、よくコーヒー飲みに連れていってもらったが……そのたびごとに、ひところ怖いほど粗野にみえた姉さんが、日一日と美しく、しとやかになって行くのを見て、なかば羨望とも、なかば嫉妬ともつかない感情と、少なからぬ落胆を感じていた。それでも美也子は、こんどの訪問はうまくいくという不思議な期待があった。美也子は病院につくと、診察室のある玄関の方に行かず、勝手を知った裏門から入って、裏木戸をあけ中庭に回った。すると八手の葉かげから綾子姉さんの姿が見えた。綾子姉さんは陽あたりの良い中庭に面した縁側にすわって、ふとももをあらわに出して足の爪を切っていた。

「誰？ おや美也子じやないの。いまごろ、どうしたの」

綾子姉さんは顔をあげて、ちよつと不審な顔をしたが、すぐにニコニコ笑顔を見せた。いちようの葉をあしらったワンピースが涼しそうに感ぜられた。

「なんでもないの。ちよつと甘えによったのよ」

「そうお。私、美也子が青い顔をして立っているの、なにか心配事でもあるのかなと思ったのよ。私の直感よ。当たったかしら」

「さあ、わからないわ、当たったようで、当たらないようで……そうい

われるとよけい困っちゃう」

「そうかしら、何か訴えたくて、……そのくせ、胸をときめかしているんじゃない。まあいいわ。さあ、おかけなさい」

そういって、部屋の片隅の押入れから白いカバーのかかっている座布団を出すと、美也子にすすめた。それから奥に入って、程なくコーヒー茶碗にリプトンの紅茶を入れ、朱漆りの菓子盆にカステラを五切ればかり入れて持ってきた。

「どお、患者さんにもらったのよ。長崎の真物ですって」

綾子姉さんは美也子にすすめ、自分でも一つはおぼった。美也子は綾子姉さんの、そんなしぐさをじつと見つめていた。綾子姉さんの立居振舞は自然で落着いていて、いかにも幸福そうに見えた。すると急に自分の住んでいる世界が、つまらないように思えた。その中で一番つまらないものが自分自身——美也子自身ではないか！美也子はそう考えた。

「お姉さん、私は相談があつてきたのよ。相談ってほどのことでもないかもしれないけど、お姉さんに聞いてもらったら、少しは胸の中がすうっとするかもしれないと思って」

「やっぱりね。私の感が当たったんだわ。美也子の顔をみてたら、ふとそんな気がしたのよ。で、何なのそれ……家庭に関すること？」

「ええ」

「じゃ、洗二さんのことじやない」

「ええ、関係あるわ」

「浮気？」

「ううん」

「お金」

「ううん」

「じゃ、何なの……」

「……」

「いえないの？」
 「いいずらいのよ」
 「わかった。……フッ
 フ……」
 「私、恥かしいわ」
 「何いってんのよ、今更。お互に長い間の友達じゃあないの。水くさいわよ。貴女も、もう奥さんになって三年目でしょ。そろそろ倦怠期になったのよ。……じゃなくなってる？きつとそうなんでしょ」
 「そうよ。多分、そうかしら」
 「おかしいいい方ね。それじゃ、くわしくお話ししてごらん。きつと良いお薬があるかもしれないわ」
 「そうね。それに私、お姉さんだって半分ぐらい責任はあると思うんだけど」
 「おどかさないでよ。でも随分とあんたをいじめたからね。」



「そうよ、そのことよ。お姉さん、私ね。また、このごろ、いじめられたくなったの。ところが夫ったら、それはそれは非常にやさしく愛してくれるのよ。ね、まるで貴金属の指輪を可愛いがるみたいなの。それで結婚当時は非常に幸福だった。ところがお姉さん。わたし、お姉さんからすっかりマゾヒストにされていたでしょう。そんな愛情ではもう我慢できなくなったのよ。かといって私から、いきなり夫に縛って下さい、叩いて下さいなんてことはいえやしないじゃないの。だから、なにか名案ないだろうかと思ってお姉さんに相談してきたのよ」
 「なるほど、困った相談だね。……いい知恵といっても……私が縛ってやるくらいのもなんだが、それならいとも簡単だけど……それじゃハズに悪かろうし、ほんとに困った人ね。ね、美也子ちゃん。やっぱり、ハズにそう告白したら、いいんじゃないの。」
 「だって」
 「だってじゃなくて勇気を出すのよ」
 「でも……」
 「じゃ、やっぱりいえない？」
 「ええ……とても」
 「仕方がない人ね。……じゃ、どうしよう。うん、いい名案がある。いい名案を思いついたわ。これなら大丈夫という案があるわ。その代り美也子、肉体が少しぐらい疼いたって我慢するでしょ」
 「ええ、我慢するわ……縛るの？叩くの？お姉さん」
 「ええ、縛ってあげるわ。しかし、その方法や時期は秘密よ。その代り、あなたの不満足は必ずなおして

あげる。なるだけ、あなたの夫のいない時がいいでしょ」

「ええ。夫に見られたら私、死ぬかもしれないってよ」

「おおこわい。私が女だからいいけど、ちよっとした冒険じゃない」

「仕方ないわ。これも因果とあきらめるよりほかに、どうしようもないことじゃない」

「私。そんなことは、ないと思うわ。……だけど……まあいい。このことはこのくらいにしておこうね。少し聞きたいことがあるけど、貴女のハズって、少し神経質な人じゃない？」

「そうよ。よくわかるのね」

「そりや、お医者様の子供で、奥さんだもの。それでも看護婦としての免許もとったのよ。で、彼氏、夜はいつごろ帰るの」

「普通五時よ。夜勤はなくて、遅番が夜の十時までなの」

「夜の十時!!……じゃ、こんどの遅番の時がいいね。こんどの遅番の日いつ」

「今日よ」

「今日! じゃ、今日にしか」

「何？」

「美也子を縛るのよ、十時までに終えて、引きあげればいいでしょ。それで我慢するのよ」

「なるほど。仕方ないわ」

「じゃ、今日の午後七時にお邪魔するわ。それまでに貴女は食事をすまし、お風呂に入ってお化粧をしておくのよ。それからハズが帰ってからの、すべて用意を済ましておくのよ。私。貴女をハズが帰るぎりぎりまでいじめるのだから、準備がわるいとバレるわ。とにかく、私からいじめられた余勢でハズに甘えるのね。そうしたら巧くいくかもしれないね。さしずめ私はサシミのツマね。じゃ、いい。それで、もし、それでも貴女が甘えきらなかったら、またいじめてやる。いいね」

「ええ」

美也子は嬉しそうにうなずいた。

それから美也子はしばらく雑談し、お姉様から昼食をよばれて帰宅した。帰宅すると早速準備にかかった。まず夫に電話し、残業をたしかめて「私、映画に行ってきますから」と予防線を張った。それから近所の酒屋にたのんで、ビール三本とウイスキー一本を持ってきてもらった。さらにお姉さんの好きそうな菓子も買った。そして、そんな準備が終ると直ちに風呂をたきつけ、夫にはスシを作って蠅入らずに入れ、綾子にいわれたとおりに入浴して入念に化粧した。

綾子姉さんは約束のとおり、夜、七時にやってきた。濃い深緑の格子縞のツウピイスをエレガントに着こなし、くすり指にサファイヤの宝石をはめていた。

「今晚は、お待ちどうさま」

といって綾子姉さんは玄関に入ってきた。美也子は、自分の家という気安さから、せい一ぱい甘えたくなった。

「私、待ちくたびれて足が棒になったくらいよ」

「そうお、ほんとに、おバカさんね。美也子ったら」

「なによ。」

「オ、ホ、ホ、ホ。そんなに嬉しいの?。縛られるのが。」

「仕方がないわ」

「なにいつてんのよ。さ、手を後ろに回すのよ。今夜は私が、女王様だから。覚悟するのよ。……さ。美也っぺ、そこになおれ!」

綾子姉さんは、そういうと、芝居もどきの素振りて美也子をつかまえ、急に、ニヤリと笑った。

そして多分、来る道々、用意してきたのだろう。美也子の手を後ろに回すと、柔かい絹のスカーフで軽く手首を縛った。

東の間の幸福が、美也子の胸をふるんとふるわせた。すると綾子姉さんは

「さあ、案内いたせ。女王様に、新しい家の間取りを説明申し上げるのじや」

といった。そして美也子の肩を軽くこずいた。美也子は素直に従った。

美也子の家は、一人娘の新婚を祝って父が夫の父と相談して作ってくれた、こじんまりした家だった。四畳半の居間、六畳の座敷、ベッドのある二坪の寝室、それに台所、便所、風呂場がついており、和洋折衷式だ。美也子は居間、台所、風呂場、便所、座敷、寝室の順で案内した。綾子姉さんは一部屋、一部屋、たんねんに見ながら「ほう、冷蔵庫にビールが三本と、ウイスキーが一本ある。ビール一本ぐらいはつまみ食いができる」

だの、

『ほう、棚の上に、主婦と生活』が乗っている。エロ雑誌がないとはお堅い夫婦ですね』

だの、聞こえよがしに批評した。その声を聞きながら美也子は次第に心の殻を一枚一枚脱がされていくのを感じた。昔、女学生時代、綾子姉さんから着物を一枚一枚ぬがされたことがある。そんな感じを言葉で受けたのだ。そして最後に寝室に連れて行ったとき、綾子姉さんは、しばらく調度の立派さにみとれていたが

「これじや、やっぱり美也子さんには向かないね」

といった。その言葉を聞くと美也子は、夫との生活が一ぺんに綾子の目の前にさらけ出されたような恥しさを覚えた。

「白いレースのカーテンに、白いカバーのついた布団類。大輪の牡丹の模様はいいが、これじや、まるで初夜の感じだわ。清潔すぎる。スタンドの赤いシェードはいいとして、パジャマが白いというのは感心しない。ね。もっと乱さなくっちゃ」

そういいながら、綾子姉さんは勝手に簞笥や洋服簞笥をあけると、美也子の長襦袢だの腰まきだのをひきだし、あたりにまき散らした。それを見ると美也子は

「イヤーッ」

と思わず声をあげて綾子にとびついた。しかし、いくらとびついても、後手の美也子はどうすることもできず、逆に綾子姉さんから足払いをくらって、したたか床に這いつくばった。綾子はそんな美也子をシロリと一瞥し、それから、おもむろに持ってきた手提げを開け、中からあきらかに人を縛るために作った特製の絹の丈夫な細引きを取り出した。

「さあ、美也っぺ、観念せよ。手向った罰だ。これを受けるんだ。さあ、これでお前の手を縛る前に、その貴重な宝物をくわえて女王様に敬意をあらわせ」

そういつて綾子は、その細引きをころがつている美也子の目の前に無造作に投げつけた。美也子は、ちよつとうらめしそうな顔をしたが、すぐそれを口にくわえ、中腰になっていそいそと綾子の前にもっていった。縄を綾子姉さんに渡すと、美也子は

「女王様、どうぞお手やわらかく」と哀願した。

「ならぬ」

綾子はそういうと、美也子をうしろ向きにし、手早く絹のスカーフを解くと、その絹の細引きで嚴重に縛り直した。しかし、ちよつと考えていたが、すぐそれをほどいた。そして黙って美也子の着物の帯に手をかけると、するすると帯をほどいた。それから器用に黄八丈の着物を脱がした。美也子の肩から、真紅の裏地をちらつかして着物がすべりおちると、ナイロンの美しいシユミーズ（スリッパのこと）が現われた。真白いブラジャーとパンティがすけて見え、肉付きの良い体の線が成熟した美しさを見せていた。綾子は着物をぬ

がして見て驚いた。昔、美也子を裸にしたときは、まだ乳房の固い胸の隆起も、腰のふくらみも乏しい女だった。それが、いまは完全に熟れきっている。綾子はそこに美也子の夫のにおいを嗅ぎ、艶かしさと、嫉妬との混じったまぶしさを感じた。美也子は、綾子姉さんの手が着物の襟首にかかったとき、裸にされると思いうるさきに抵抗しようと思ったが、不思議に体がこわばって動かず、まるで処女のように緊張してふるえていた。

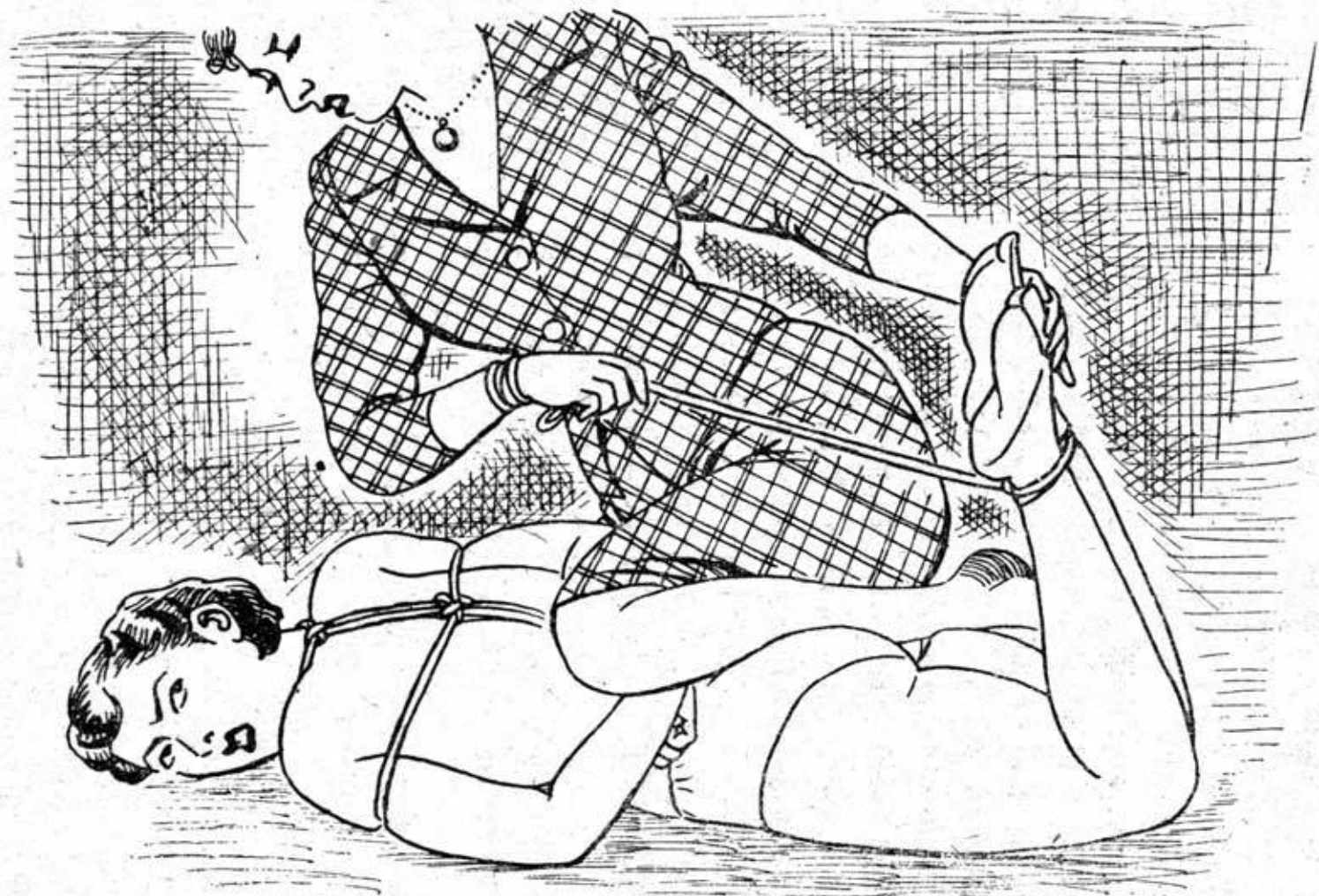
と突然、綾子の手が美也子の肩のスリップの紐にかかった。

「これもとってやる。貴女はもう、私のものじゃなくなったのね」

低いが押殺すようなつぶやきが綾子姉さんの口からもれた。その途端ギョツとした美也子は、思わずとびのいた。そして身構えた。綾子姉さんは当然、目を光らせて美也子に迫った。綾子は寢室の片隅に美也子を追いつめながら、無気味に唇をひきつらせていた。

「いくら逃げてダメ、ダメ。貴女は今日は私の奴隷なの。今日だけは誰にもわたさない」

美也子は、綾子姉さんの唇がそんな風に囁くように見えた。その時、綾子姉さんの体が大きく跳ねて、美也子にとびかかった。美也子は暴れた。二人は組みあつたまま転がったが、やがて力の限界が現われて美也子が組敷かれ、綾子姉さんの手が美也子のスリップのすそにかかり、力いっぱい引きあげられた。その時、美也子はすっかり抵抗力を失った。ぐったりとなり、肩で息をつきながら美也子は簡単にスリップを脱がされ



ブラジャーもとられた。そしてパンティだけの姿で、両腕を背中に組まれ絹紐でしっかりと括られた。綾子姉さんは縛り終ると、これまた肩で息をついていたが、大きく溜息を一つついた。そしていままでの格闘の後をふりかえり、照れくささをかくすように、

「おバカさんね。美也子は」

と小声でつぶやいた。美也子は、その声をきくと、軀中を熱い血がかけめぐるのが覚えた。綾子姉さんのような女を天性のサジストというのである。彼女はいじめ方は、同じ縛り方、同じいじめ方を毎日繰返しても、相手の軀の感覚を枯らせないような不思議な手法であった。時たま相手をからかい、時た

ま相手をじらし、時たま相手を引きつけて、巧みに思うつぼにはめてしまう。

綾子姉さんは一息つくと、ゆっくりとした口調でしゃべりだした。「美也子。どう、感想は。……思い出したかね、昔を。美也子は擦ぐられるのが好きだったわね。これから擦ぐってあげよう。女学生の際は、よく足をばたつかせたけど、こんどは大人だから手も足もばたつかせないよ。体も動かさないよ。いいかい。くすぐられた擦ったさを全部、体の中へ包みこむのさ」

そういうと綾子は、まるで美也子の体を荷物のように首、胸、二の腕、脚、腰とくくっていった。そして最後の両手首を結んだ縄を手にとると、美也子の両肩を左右の足でふまえ、足くびを背中の方に力一ぱい引っぱり、手首と一緒にして固定した。このため美也子の体は弓なりにそり、胸、手、足、腰にかけられた縄は更に緊張して一度に皮膚に食いこんだ。

「痛、痛あっ！」

美也子は思わず叫んだ。

「やかましい」

綾子姉さんが叱咤した。綾子姉さんはそれから、美也子の体を仰向けと、ハンケチをとり出して美也子の口に押し込み、その上を紅いしごきで幾重にも縛った。そしてその上、弓なりになった体の上にどっかと尻をおろし、両腕をわきばらに入れ、筋肉をつかみとるようにして擦った。美也子は、仰向けにされただけでも耐え難い苦痛なのに、ポリウムのある綾子姉さんの体をのせられ、さらに完全なサルグツワをされているので、苦痛は想像に絶した。動こうにも体は寸分も動かない。にもかかわらず脇腹からは、しっように快感ともつかぬ擦ぐったさが、痛みを伴って押しかける。ただ一つ自由になる首を左右にふって少しばかり苦痛をやわらげようとしたが、そんな努力も全く水の泡。またたく間に美也子の体は紅潮し、脂汗が

全身からしたたりおちた。美也子はこれまで綾子から随分擦ぐられたことはあるが、こんなに苦しいことは始めてだった。美也子は、はかない争いに、いつしか意識がぼーっとかすんで行くのを感じた。と綾子姉さんの手が、はたと止んだ。綾子はいつしか擦ぐる手を止め、足の縄もほどいていてくれたのだ。美也子の思考の中に不思議な喜びが湧きおこった。その途端、綾子姉さんの勝ち誇った声がした。

「どう、美也子、苦しかった？うれしかった？想像以上に嬉しそうね。……この方法、うちのハズから教わったのよ。うれしいだろうね」

美也子は、その意味をさるといきなり、ガンと大きなハンマーで脳天を一撃されたような気がした。

「いや、といて。もう、といて」

と思わず叫んだが、その声は用意周到な綾子の猿ぐつわで完全にかき消されて声にならない。

「ウ、ウッ、ウーッ」

という呻き声が、聞こえるだけである。

「あら、嬉しいの美也子さん。そう、それなら、もっと可愛いする方法があるわ。貴女も、もう立派な旦那様を持っているので……これだけは、やめようと思ったが……毒食わば皿までね」

綾子はそういいながら、美也子を曳き起こし、美也子の体をひきずって行き、縄をといて手を前に縛り直し、座敷と寢室の間の鴨居に縄の端を通して万才の型に吊るし、足先が床につく程度に止めた。そして台所から鉤型の針金二個と、小さな布の袋を二個もってきて、夫々その小袋の中に庭からひろってきた小石を入れた。

「どう、これすばらしいでしょ。ね、これがどんな効果を示すかいまにわかってよ。」

綾子はそういうと、美也子の顔の前にその針金をつきつけた。

「これをね。貴女の、ほら、やわらかなお尻にまもっているでしょう、そのパンティにぶらさげるの。そしてわたしは、ここから、ほら、この高箒で貴女の脇の下を擦るの。すると貴女が暴れる。暴れるとパンティがずりさがるという趣向なの。どう、すばらしいでしょ」

綾子姉さんはそういつて、再び例の金具を美也子の顔の前でちらつかせた。美也子は、その用途を聞かされ、また大きく叫んだが勿論声にはならなかった。綾子の手が次第に降るされるのを見て、自由な足をとばして暴れたが、いたずらに吊られた縄で二の腕を締め付けるだけで、一撃も相手に当らなかった。

「フ、フ、フ」

綾子姉さんの薄笑いが聞こえたようだ。綾子姉さんのしなやかな手がパンティのふちにかかった。そして例の重しがぶらさげられるのがわかった。

「この悪魔！ 鬼！」

と美也子は心で叫んだ。しかし綾子は委細かまわず重しをさげ終ると、ミシン用の腰掛をもってきて、美也子の半間ぐらい前に坐り、約束どおり高箒をとりあげた。

「ウ、ウツ、ウア、ウア、ウア……」

突然、猿ぐつわの下で美也子が叫んだ。高箒のささらになった葉の先きが、美也子の脇の下を擦ったのだ。綾子は容赦しなかった、ここで安易な妥協をするくらいなら、はじめから美也子をいじめない方がいいと思っていた。しかし美也子には、綾子の胸の中を考え余裕はなかった。たった今迄は心理的な恥かしさで、美也子のこらえられる限界まで追込められたが、こんどはそれが肉体的な苦痛にかわった。そしてパンティが一寸さがり、二寸さがって行きたびに、美也子の体は五色の夢の中でダンスをした。やがて美也子は、自分の体が次第に虹の中に消えて行くような錯覚を受け、だらりと

鴨居にぶら下った。綾子は高箒の手を止めた。

「案外だらしのないのね、この子は」

そういいながら美也子の体を下すと、寝台の上にひきずっていった。美也子は極度の緊張と興奮から軽い目まいを覚えたのだった。綾子はそれをよいことに、美也子の体と真白な胸と頬をじっと見ていたが……やがて綾子姉さんの目からホロリと一しずく涙がこころがった。

「バカね、ほんとにバカね。早く夫のもとにもどるのよ……」

綾子は心の中でそう叫んだ。綾子姉さんもやはり女だったのだ。綾子は医師の夫との結婚五年間の生活で、すっかり女として受身の幸福を身につけていた。昔はサジスト一辺倒だった彼女も、今や縄目にさえ生甲斐を感じる女に生長していた。だから美也子の苦しみ、自分の苦しみのようにわかるのだった。そして美也子を本当の妹のように愛しているだけに、余計その苦しみは深く強かった。彼女は時計を見た。時計は九時を過ぎていた。もう余り時間がないと彼女は思った。彼女はこれから、美也子を夫の手にかえそうと、その手段を考えていた。それには一つの方法がある。それは美也子がいじめられて喜ぶ女であるということ、美也子の夫に教えることである。彼女はそう考えた。そして、そのようにして美也子を夫に帰すと、恐らくもう永遠に自分のものにならないことを知っていた。しかし、それは仕方がない。女と女、人妻としての運命だと綾子は考えた。現在、もう躊躇している時ではない。綾子は気をとり直すと、さっそくその準備にとりかかった。まず一時的に気を失ってぐったりとのびている美也子に真紅な長襦袢をきせた。そして、さきほどの絹の細引で注意深く両手首を背中につかした。それからその余りを首に回し、その前で交叉し、さらに二の腕にまいてから再び背中の細引きに通し、乳の下で左右の紐をしめてから結んだ。そのため美也子の手がぐっとつりあがった。綾子は手首、首、肩、二の腕、



胸の各要所に細引きが食込み過ぎていないか片寄っていないか、もがいてゆるむようなたるみはないか、またかなり長時間にわたって放っておいても、血行が止まる心配はないか、などを調べ、安心したように縄の余りを再び背中の手首にまきつけて止めた。そしてこんどは別の腰紐で両足首を縛り、はじめて美也子に活を入れた。
美也子はぼんやりして綾子をみていたが、しばらくして口をきいた。

「お姉さん。私どうしたの……まだしばられているの。……どうしてといてくれないの」
「いい夢をみていたからよ。いい夢をみていた罰に、まだ縛っておくよ。美也子、まだ時間があるわ。美也子！ 幸福？」

「ええ、とっても」

「そうお、じやキッスさせてね。」

「ええ、いいわ」

綾子は、はじめて美也子を抱いて口を合わせた。幸福が大きく羽ばたいて行くようだった。二人は一つの塊になって、はじめて別れられない絆があるように思えた。

しかし、今は別れなければならぬ瀬戸際だ。綾子は勇気を出した。

「あのね、美也子。もう少し、そのまま我慢していてくれる？ 私は今一度猿ぐつわしたいのよ。今キッスした幸福ね。あれが逃げないように、美也子の口につめておきたいと思うの」

「ええ、それじゃどうぞ。うんときつくしてもかまわないわ」
「そう、じや、とくにいい贈りものをしましょうね」

そういうと、綾子はポケットから真新しい絹のハンケチを出して美也子の鼻の上にかけた。するとシヤスミンの香りが美也子の顔一ぱいに拡がった。
「ほら、これ、貴女が、女学生時代から大好きだった私の香よ。わかって」

美也子は優しくうなずいた。そして自分で大きく口をあけると綾子のしなやかな手がそれを口に押込むのを待った。ハンケチはきれいに口の中に消えた。

綾子はそれから再び紅い錦紗のしごきを取りあげると、美也子の口にくわえさせて、たんねんに縛った。綾子は、こんどは別れにあたって美也子の泣きごとを聞かされるのを恐れて、さきほどよりさらに幾重にも嚴重に括った。美也子の顔はそうされても幸福そうにみえた。綾子姉さんは胸がつまった。その気を引立てるように美也子の鼻をちよつとつまんで、猿ぐつわの効果を確かめて見た。鼻をつままれて美也子は、思わず顔をふって呻いた。しかし、声にはほとんどならなかった。「これでいい」と綾子は思った。それから足もとに落ちてゐる余分の縄の後片付けをしたり、散らばっている道具、衣類をあるていどまとめていたが、やがてみだれた自分の着物をなおした。それから最後に残った一本の縄で、美也子の体をベッドに括りつけた。それから、そんな動作を不安そうに見詰める美也子に云った。

「美也子！ お約束どおり十時前に私は帰るわ。しかし、お約束をやぶって私はこのまま帰るわ。貴女に恨まれるかもしれないけど、その代り、この縄は貴女のハズにいてもらうのよ。いまから私が貴女のハズを電話で呼び出して話すから、貴女はうまい具合につじつまを合せるのよ。いいね、美也子。貴女もつらいでしょうけれども、私もつらいの。貴女はそうするときと貴女のハズからいじめられるようになるわ。するともう私のもとに甘えに帰ってこなくなる。私はそれでいいと思つてゐる。そうなる運命だと諦めるわ。しかし、つらいことは同じよ。きつとそう思う。じや最後のキス」綾子は、うらめしそうに見つめる美也子の視線を避けて、そつと額にキスした。口紅が額に薄紅くついた。綾子はそれを左手でぬぐいながら、電話の受話器をとりあげた。

やがて綾子姉さんの話し声が、美也子の耳にきこえてきた。

「あ、もしもし、山田さんですか。私、美也子の友達の宇野綾子です。ええ、ミッシヨンからの友達の。そうです宇野病院の看護婦兼

奥さんですわ。ええ。今日、美也子さんがお昼頃お見えになって、御相談したいことがあるつておっしゃるので、いろいろお聞きしたんです。なんでも身体が悪いのかな。もしかしてお子さんでもできたのかしらと思つていましたけど、病氣は、そのどちらでもなかったようですわ。美也子さんは死にたい、死にたいといつていらつしやいました。そこであれこれ問いつめてみましたの。そしたら、あんまり旦那様がお優しいためにおこったノイローゼということがわかりました。美也子さんは旦那様に縛られたい、叩かれたいとおっしゃっていましたわ。そこで、そのように告白しなさいとおすすめるすると、あの優しい旦那様にそういうことがいえるくらいなら、何も相談にこないと大變叱られました。ええ本当ですとも。そこで、とにかく早まったことをしてはダメだとお昼はなだめてお帰えししたんですけど、心配なものですから、夕方お訪ねしたところ、また死にたいと甘えられるのです。その挙句、カミソリをとりだして乱暴をするものですから、仕方なく寢台に縛りつけておきました。それでも、死ぬ死ぬとわめくものですから、嚴重に猿ぐつわをおかけして、一刻も早く貴方様にお知らせしようとお電話したところです。ええ、そうです。多分大丈夫と思いますが。ええ、それから学生時代、私、美也子さんと随分親しくしていたんですけど、その時分から美也子さんは縛られたがる癖があったようですわ。私はもうこれで大丈夫と思ひますから失礼しますけど、あとの介抱の方は存分にお願ひしますわ。ええ、愛妻がこんなことをした時には、存分に叩きのめしてやるものですわ。私の主人なら、とてもひどくて！そんな……とても口ではいえませんわ……でも美也子さんのことは御心配いりません。女は結構縛られても叩かれても喜ぶ動物なのですから……じや、さようなら……なんですつて、まっいて下さい？それは困りますわ。あとで私がお目玉くったり、二人がかりで復讐だつて縛られたら、それこそ主人から殺されます。じや、失礼しま

す。」

綾子姉さんは受話器を置いた。美也子は綾子姉さんの話しを一言一句聞き洩らすまいと耳をたてていた。美也子は約束を破った綾子姉さんを、はじめ非常にうらんだが、途中からその心に気付いてうらみは消え、涙が出てきて仕方がなかった。綾子姉さんはやはり本当に私を愛していたんだ。それは嘘じゃない。しかも本当の肉親の愛情で……と美也子は声をあげて慟哭したが……声は出ず、涙がしきりに顔を濡した。綾子姉さんはそんな美也子の顔を眺めていたが「おバカさん」というと、まるで秋風のように玄関から、消えて行った。

日は流れた。あの日以後二カ月も経ってひよっこりと綾子の前に気恥しげな笑みを漂えながら美也子が尋ねて来た。

浣 腸 室

池 田 喜 代 子

私が今の中学生（昔は女学生と云っていましたが）の頃、島根県に住んでいました。その町にある大きな私立病院には浣腸室という特別の病室が一時ありました。患者からの希望で間もなくなくなったのですが、勿論かんたんな検便程度の浣腸は診察室で

もやるのですが、時間がかかるので、浣腸される患者はこの病室で浣腸してもらい、その結果をもって又診察室へ帰るのです。私も二回程この部屋で浣腸されました。部屋には三つのベッドがあり、各ベッドの間にはカーテンが下がっています。そして控え室

「……？」

探る様な綾子の目の前に、美也子がオズオズと小さな函を差し出した。

「私、とっても幸福よ、お姉さんのお蔭だわ。これ御礼の表現なの……気を悪くなさらないでネ」

その手首には、まぎれなく縄の跡がついていた。「またゆっくり来ます」

美也子は、そういうなり身を翻した。慌てて綾子が後を追って外へ出たが、その足はヒタと停った。向うの辻に美也子が夫洸二と並んで手を振っていた。二人は驚く綾子に深く頭を下げた。綾子はホッと安緒の吐息をつくのだった。

（終）

に坐っていると次々に名前を呼ばれて指示されたベッドに上るのです。控え室は少ない時でも大抵二、三人、多い時には七、八人も待っていました。女性と子供が大部分で特に妊婦の姿が目につきました。

私は末だ当時は子供でしたが、それでも女学校の二年生で、小児科に連れられるのをいやがって、母にこの病院に行くように頼んだのです。私はその時何処が悪かったのかおぼえていませんが、何しろ便秘症のため何かの話のついでに医者が

「お通じは？」

と聞いた時、母が

「二日程ありませんが……」

と云ったのです。すると

「じゃ、ともかく浣腸してみて……」

と、いとも簡単にカルテに何か書き込むと「これを持って浣腸室へ行って下さい。」

と差し出します。恥かしさときまり悪さでいっぱいでしたが、しようがありません。母にうながされて、浣腸室の扉をあけました。中には八つ位の元気な男の子が母親に連れられて待っていました。それからお腹の大きい妊婦。おそらくがん固な便秘になやまされていたのでしよう。それからもう一人恥かしそうに隅で雑誌に眼を通してゐるのは二十前後の若い女の人でした。

私が中へ入ると、まもなく大きなお腹の中年の婦人が一つのベッドから降りて来ました。ヒタイには汗がにじんでいました。そして入れ替りに男の子が呼ばれました。一寸いやいやをしていましたが、母親にたしなめられてしぶしぶベッドの方へいきました。看護婦の「坊や本当にいい子ね。」という声が聞えて来ました。いやがっているのでしょうか。「すぐ終わりますよ、ちよっと我慢するのよ。」

ね、いい子でしょう」

等という言葉が、ベッドの上での情景を十分連想させます。それから十分もするとその男の子は母親の後からかくれるようにして出てきました。が他の二つのベッドでは確かに

誰か浣腸されているのはわかるのですが、中々降りてきません。男の子と入れ違いにさっきの若い二十位の女の人が看護婦に云われて腰をあげました。男の子が無遠慮に女の人をじろじろ見ています。その女性は恥かしそうにスカートを上から押えるようにして中へ入りましたが、スカートを押えたところで、中へ入ったら脱がされるのに、と思うと少しおかしくなりました。

その女の人が中へ消えると控え室は妊婦と私達丈になりました。子供を生むとなると浣腸の恥かしさ等、何ともなくなるのでしょうか。私の母に、

「お宅は娘さんですか、浣腸なさるのは」

「ええ一寸、便秘してますもん」

「私もひどい便秘なんです。一日おきここに來て浣腸されるんです。」

等とケロリとして云うのです。事実、子供は浣腸をいやがり、若い女性は恥かしがるのですが、妊婦ともなると大抵の場合、平気で浣腸のことを口にしていました。

十五、六分程も待っていますと、さっきの若い女性と、もうひとつのベッドから、中年の婦人がほとんど同時に出てきました。若い女の方は右手をスカートの上からおしりのあたりをなでていました。私と眼が合うと、あわてて手をはなしました。私がその後でベッ

ドに入る為にカーテンをあけました。

とそこにはグリセリン浣腸器が、七、八本ずらりとなんでおり、巾のせまいベッドには油紙がしかれ、後はもう患者を待つばかりです。片隅のテーブルにはイルガリートやその先につけるカテテル、ベッドの下には便器、と全く完全な浣腸室です。二人の看護婦に命じられて、ズロースを脱ぎ右を下にして横になり、口をあけました。カルテをみて一人の看護婦が

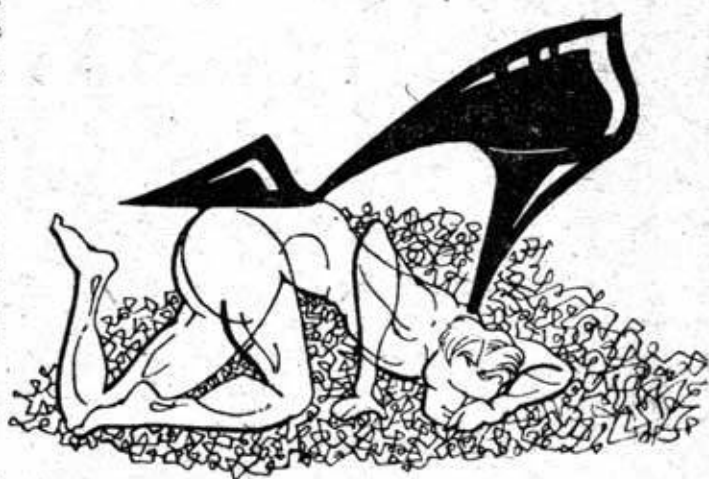
「グリセリン五〇CC」

と、もう一人にいいつけました。三〇CC入りの浣腸器にいっぱい吸い上げられました。母はだまって横でみています。

手なれた手つきで、看護婦はそれを私のおしりに差し込み、注入しはじめました。

なまぬるい気持の悪いものですが、私はともかく十分近くがまんしていました。

ベッドから出てみると、そこに年の頃十七八の中学生がいて、じろりと私をみた時、本当に恥かしくて、思わず真赤になりました。浣腸が嫌なのは、結局こういうところにあるわけで、男の人と違う私達にしてみればそれはとても耐えられないことでした。



マゾヒズムへのいざない

(第十三回)

黒田史朗

心待ちにしていた奇譚クラブ八月号が手許に届いた。いつもそうであるように、そくさと自室にひきこもり、それだけで充分に刺戟を心に感じながらサテ目次を繰る。私は正直のところ、ここですこしばかりの失望を感じねばならない。何故ならば私はマゾヒストであって、サジストではないからだ。目次に並んだ読物の殆んどは、サド物であって、マゾ向きの物は、やっと二、三数えるくらい。さびしい限りである。

そこで今度は、巻末の方の「読者通信」の欄を開いてみる。目次の読物の多くのサド物が、無為に創り出されたものでないことをはつきりと知らされる。そこには沢山の読者の切実な欲求が溢れている。サド物はこの多く

の読者のこのような欲求と支持とによって生み出されたもののなのだ。私はこの事実をまず納得せねばならぬのだろう。私は、これらあまたのサドファンの中に、細々ながらも確固としてその純な火を守り続けるマゾ派の人達に、それ故に殊更無上のなつかしみを感じるのである。

原忠正氏よ、氏が森本愛造の名のもとに営々と書き続けられる「残虐なる女性達」は、地味ではあるが、決してゆるがせに出来ぬ労作なのである。沼氏の「手帖」と共に、これは後世にのこるべき貴重な文献としての価値を十二分に備えたものだ。

とやま・かずひこ氏よ。氏がどのように弁明なされようと、私は氏を同志の一人として

遇せずにはおれない。愛好者の記録は、けだしイッピンである。なんでもないありふれた巷の小現象の中に、一ツ一ツピクアップされてゆくそのマゾヒストとしての感応度の確かさは、決して尋常なものではない。

馬場好男氏よ。ここにもう一人の馬場好男氏があつて、あなたの「マゾヒズム百景」に拍手を送っていることを忘れないでいて欲しい。何のためらうところがあるう、どしどしそのままを、もっと即物的に、大胆に書いていただきたいのです。

それから黒田史朗氏よ。あなたの「いざない」は、とにかく独善的に過ぎるのだ。そして「黒い霧の中で」という創作は中途半端で失望した。でも私はあなたを信頼する。あな

たは真面目だ。あなたは正直な人なんだ。

みんなそれぞれがなつかしい人達だ。私は数少ないこれらの人々の一人一人に、どれだけの愛着を感じていることだろう。

ところで、マゾヒストは、サジストよりもそんなに果して数少ない存在であるのだろうか。私はこの点を実のところ納得しているわけではない。

雑誌の大部分はサド派の文章によって埋められ、読者の支持と声援は通信欄に満ちている。この事実は決して偶然なものではなく、この現象事態を私は云々するものではない。一切をそのまま容認しなければならぬのだろう。何故ならば、雑誌はあくまで読者自身のものであるからだ。読者の欲求のおもむくところ、奇クのおもむくところなりと判ずるからだ。我々さきやかなマゾ派の同志は、この事実を否定することが出来ないのだ。

それでいて私は、サド派に比して、それほどマゾ派が少いとは決して思っていない。我田引水のおまり、少しばかり強引にすぎる論法かもしれないが……。

奇クに限らず、一般の雑誌・新聞に目を通してみよう。映画でも芝居でもよろしい。あらゆるところに殺しや縛りの場面が出てくる。一流の大新聞の社会面においてすら、以上の記事に事かない。政治の貧困、道徳の低下、理由はどうにでもつけられる。そして

その理由は理由として間違ではないが、それよりも、そのこと以上に人間一般に通ずる心理としての、サジズムを無視することは出来ないだろう。子が親をしめ殺した事件をもその悲惨を悲惨としてでなく、一種のサジズムの立場から楽しんでるのである。

社会の底流をなすこのようなサジズムは、私にとっても充分に理解し得るところであって、この域を出ぬサジストは、人間である限り誰でもがそうではないのか。それをしもあえてサジストと呼ばれ得る人はその数において頗る範囲が縮小される。問題がサジズムの場において極限され、ギリギリの線上で己のサジズムと対決し、日夜そのことの苦悶にのたうっているのは、果して何人いるだろうか。サジズムを、真正面から罪として受取り、この矛盾の克服に己の生命をすりへらしている人が一体何人いるのだろうか。

私の判断はあるいは独断かもしれない。しかし、それでも思ったことを腹にしまいこむ必要はない。奇クの読者にサジストと呼べるべき者の数は少い。私はこう判断を下さずにはいられない。縛ったり殺したりの記事を読むに、何も恥ずる必要はないのだ。

誰もが電車の中で新聞を拡げ、雑誌に読み耽るのだ。日本人程、活字好きの国民はいないという話ではないか。コソコソと奇クを読む必要はないのだ。見つかって訊かれたとき

には、——仲々いいじやあないか、お前も読んでみる。こんな美人なら、さしずめ、ずい分と縛り甲斐があるだろうに——くらいの逆襲をやっても、果してそれほど異常な神経として、深刻な疑惑を招くこともないだろう。

中学を卒業した春、私は私の同窓の一部である不良グループの四、五人が共謀し、日頃もっとも厳格であった教師の帰宅を待伏せしその教師をみんなして立木に縛りつけ、あまつさえ小便をひっかけたという事件があった。太平洋戦争中期頃のことである。事件はおおっぴらにはならなかったが、私はその事件に参与した当の本人たちからその時の状況をきいた。今でも、酔余の一興にと、この時の話が手柄話として彼等の間では持出されるそうだが、青春期にありがちな一種の冒険譚、もしくはレジスタンスの一証拠として聞き側にも受取られるのだ。

私の父は戦争中、海綿採取加工の事業をしていて、屋久島とか沖縄本島とか石垣島を転々とした。特に屋久島における体験だが、毎に豚を飼っており、それが便壺にあたるところと申し訳ばかりの仕切を接して小舎があり、用を足しに便所に入ると巨大なヤツが下から顔を出し、糞も尿も綺麗に処理してしまふそう。直接に何度も豚に小便をのましたと父はカイギヤクまじりの話をするが、この程度の話も一つの珍談として、それ以上の意

味に辟易する必要もなからう。(ただし、この話をマゾの立場から考えると興味津々だが)

私はその外に、直接参加した大陸帰りの元日本軍の人たちから、婦女暴行、スパイを生きたがらに焼き殺す話をきいた。でなくとも「真空地帯」という小説に見る如く、軍隊内部の日常に、どれほど多くのサジステイックな雰囲気がありこまれていたことか。

以上のような事象は、あまりにも周囲に多い。相手を殴り倒すことの喜び、血みれの闘争。映画「チャンピオン」に待つ迄もなく、社会的嗜好の一端がここに見られる。奇クの読者だけでなく、社会の人々総ての傾向がここにある。深刻な疑惑など招くおそれはないのだ。彼等は堂々と己の好みを主張することが出来、又主張することによって或る程度はそれで充足し得る。「処刑の部屋」でリンチを受ける川口浩のクロースアップされた苦悶の表情に満足すれば、その満足を声高に語ることを誰によっても阻まれはしないのだ。

読者通信欄の多くのサド派を自認する人達の声は、それだけにおおびらであり、健康ですらあり得る。彼等の声は大きく健康(？)なので目立ち易い。それに反し、マゾ派の声はなんと小さく不健康であることよ。したがってマゾ派の声は目立たない。既にしてマゾ派の立場は敗者のそれであり、劣等者の地位にダクダクとして甘んぜねばならぬ。

妻を殴る夫の話は、たとえ洩れても、それほど深刻でない。妻の足を舐め、妻から殴られる夫の秘事は、これは重大だ。男は能動、女は受動、これが社会の常識だ。問題があるとするれば、ただ程度の問題だけだ。これがひとたびマゾの立場に立つとき、様相は一変する。問題は程度ではなく質にと一変する。かくしてマゾヒストは異端者としての宿命に苦吟せねばならない。真の「破戒」的テーマがここから生まれる。

マゾヒストはあまり声を立てない。馬や犬や便器を一人で胸の中にしまいこむ。私はマゾヒストのこのような宿命を充分に理解するのだ。例え我々の仲間が少く、通信欄にその声カボソクとも、私はその現象をそのまま鵜呑みにすることは出来ない。この意味でマゾヒストはサジストより以上の偽善者であるのかも知れない。そして猶且つ、見栄っぱりである。これらはしかし、まさに追いつめられた者の、切羽つまった自衛上の偽善であり見栄である。したがって、表面上の現象を抜きにしての潜在的なそれらの存在を考慮に入れるとき、マゾフアン数はぐっと多くなる。

如上のことに大いなる確信をいだきながら私はすこし自分自身の体験についていささかの記述をこころみてみよう。

私は自分が童貞であるということを、それがどんなに仲の良い友であるにしろ、語った

ことはない。童貞というものの、それは男にとって将来に屈辱の代名詞とさえ思えるのだ。変質者といえども人間ということにおいてかわりはない。私にも人並な慾望はあったし、人並な形式においての満足を得たかったのだ。はかない試みであるにしろ、今度こそは、今度こそは、の期待で何度機会ある毎に繰返してみたことか。だんだん期待はあきらめと移り変わり、遂には断念せざるを得なくなったとき私はホット溜息まじりに呟いた。

△俺は特別な人間なんだ▽
幾分の誇りをこめ、しかも猶正常なる営みへのやるせない程の郷愁をこめながら……

願わくば光栄と讃歌、御身の上に
あれかし、悪魔よ！

わが魂をいつの日にか、知慧の
木の下蔭、

御身の傍らに憩わしめ給え

御身の額の上に、

新らしき神殿のごとくその諸枝の

拡がらんときに！

ボードレールの悪魔への祈りが私にとってはいみじくもマゾへの傾倒となって私を捕える。

当時、二十二才の私はまるで物の怪に憑かれていたのだ。風にそよぐ女のスカートの裾を恋い、ふくよかに流れるあの足の線を慕いながら私は郊外のとある辻に立つのである。

ゆるやかな傾斜をなして幅広い道が赤土まじりの丘を上っていた。両側には緑の街路樹、遠く丘の頂きのあたり、浄水場の白いコンクリートの建物を望むことが出来た。私はこの附近が殊に気に入っていた。このあたり、こうした環境の良さを選んでか、私立系の学校が三つ、それに県立の女学校が一つあった。三つの私立学校のうち、二つまでが女の学校であった。この附近、たしかに空気の色までが違ふように思えたのだ。私は彼女達が吐いたり吸ったりする同じ空気を吸収することに無上の満足を感じていた。

その辻の左角にA美容院があった。和洋折衷の低い石垣をめぐるした家で、美容院というよりも近所のお嬢さんや、マダム達のたまり場所とでも言った方が早いかもしれない。私はその門前の低い申し訳につけられたかに見える石段に腰を下した。玄関の開き戸になつてゐる扇の内側から、はっきりは聞きとれぬながらも、若い女達のしやべり合う声が腰を下した私の背後に聞きとれた。私はこんなときの彼女等の声に対する羞らいや、行動に際してのためらいなどの気分を愛する。羞らい、ためらうという意識の中で、既に私は犬のようになれるので、……犬の意識から窺いみると、彼女達の声は私の頭の上で聞こえに響くのである。私はその声に敬虔にかしずきひざまずくだけだ。

さてそのとき、三人の女学生が門前を通りかかった。私はひたすら彼女等に注意した。三人は立止まり、何やらお互同志の肩を叩きあつたりして笑つていたが、やがてその中の二人は一人を残して歩き始めた。後に残った一人、彼女は美容院とは垣根一つの隣家の娘であるらしかった。彼女は私を認めた。うさぐさげな表情も瞬間のこと、直きに優しい元の表情に戻った。私はつられるように腰をうかしながら、そして言った。

「学校、すんだの」

「そう」

幾らかの警戒もあるらしかったが、殆んど無邪気に、はればれとした様子で彼女は答えた。

「おねえちゃん、つよいんでしよう」

とっさの私のこの奇妙な言葉を彼女は扱いかねでもしたのか、私の方をまじまじと見る計り、だまつていた。

「ぼく、よわ虫なの、いつもいじめられてばかりいるの」

如何にも、おどおどした様子で私はつづけた。

「おねえちゃん、ぼくね、おねえちゃんのケライにして！」

舌足らずな言いまわしで、ケライという発音がともすればケダイというふうにききとれもした。

「エッ？」

彼女は真顔で問いかえした。

「ケ・ラ・イにして」

今度は、ハッキリと判つたらしく、直ぐに笑いを含んだ顔で

「ダメ！家来なんておかしいわよ」

私の正体を見破つたかのように彼女は、余裕ある態度でニッコリした。

私はがっかりして顔を伏せ、しかし重ねて少女の同情を促がそうと

「ケライにして頂戴」

と重ねて言った。しかし私のこの奇妙にして悲痛な願いは、どのようにしても通じずべはなかつたのだ。

「神様の家来にしてもらいなさい」

このミッシェン・スクール（女子生徒の、けがれなくも至純な魂に幸あれ！）しかし彼女はあまりにも知らなさすぎる！

（未完）

三条春彦・画

未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円（送共）

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元、八、小紫と悪旗本、以上八場面。



話 の 屑 籠

辻 村 隆

時代劇映画を万遍なく見てみると、大半は縛りのシーンが、多かれ少なかれ現われる。

云い換えれば、縛りシーンの時代劇に占める

ウェイトは相当重要視されている証拠とも云

える。しかも、あわや美女の運命やいかに

——と云った、劇のクライマックスに使われ

る場合が多いから、縛りなるもの、決して仇

や、疎そかには出来ない筈である。

にも拘わらず、形式的なぐるぐる巻きの縛

りや、類型的な後手縛りの、しかもその後手

に縛られたのすら判つきりとせぬもの許り多

いのは、どう云う訳であろうか——。

縛られた美女が、危機一髪の瞬間、救いに

現われる連中が、余りにも簡単に、パラリと

縄をとくのも空々しい。あつさりあの様にと

ける縄なら、救いに来る前に、当然縛られた本人自身、少しの努力で縄を解き得ぬ筈はな

いからである。

もう少し、リアルに緊縛して、縄を解くの

にも真実感を盛り上げて欲しい。

縛りや、こうしたシーンが客受けする事に

遅時き乍ら気付いたのか、過去、縛りシーン

となると神経を使つてカットしていた大映さ

んが、永田社長直々のお声掛けで、精々、こ

の種のシーンを採り入れる様にも鼓舞したと

云うゴシップは、近頃のビッグニュースであ

る。新東宝の映画が、内容の良否は兎角とし

て安上りで案外、地方客を稼いでいるのに刺

激されたわけでもあるまいが、現在の行詰り

の一打破方針として、こうした点に着眼した事は大きいによろしい。

天野信監督の「消えた小判屋敷」(仮題)

でも吊りのシーンがあると云うので今から期

待しているが、同監督も、今度は上役直々の

お声掛けだから、相当凝った吊り責めを撮っ

てくれる事だろう。梅若正二主演、ダイマ

ル、ラケット応援の娯楽作品であるが、クラ

ンクアップも近く、この文が誌上に出る頃

は、恐らく封切されているかも知れない。

それと云うのも、梅若正二、毛利郁子で撮

った「白蛇小町」が案外評判のよかったせい

もあって、こうしたゲテ物が、興行的に強力

なことに気付いたからに外ならない。所詮

は、新東宝のものと大同小異であつても、要は興行成績如何であつて、大映では引続き、弘津三男監督が蛇のグラマー、毛利郁子を使って「執念の蛇」(仮題)を撮っている。柳の下に二匹の泥鰌がいるかどうか——。

グロテスクな蛇女優、毛利郁子も、素性をたせば高知県の山家育ち、獺師の娘とあれば、さこそとうなずかせられる。子供の頃から蛇に狙われた娘であれば、体に巻きつけ素肌を這わせる、あの程度の事も出来得なくもないが、あの映画の蛇が冬眠中の蛇であつたと知れば、些か興ざめの感がないでもなかつた。彼女自身、冬眠中の蛇でなくてもよかつたにしろ、スタッフ一同、あの無気味な蛇の蠢動には、多分に怖気づいていたのだから無理もなからう。

蛇女優、毛利郁子はスタジオ内の評判では仲々に小股の切上った女優であると云うことだが、その小股の切上った女とは一体どんな女を云うのであろうか——。

ズントウ腰や、出ッ尻の女と違ふ事は事実であるが、小股のありか自身、扱どの辺りかと云われても、すぐその個所を指摘出来る人は仲々にあるまいと思われるが、要するに、きりつと引き締った弾力のある腰、何とはなく鋭角線のシャッキリとした伸び具合のいい股の女を、そう呼ぶのではないかと思う。と

なると、グラマーや、近代的センスの娘は、何れも小股の切上った女といえそうである。

気つぷがよくて、お侠で、男まさりの代名詞の如き、小股の切上ったと云う名称は、近頃の女性にとつて必須条件ではなからうか——小股の切上った男と云う言葉がないのは造型上もつとも事であるが、偶には小股の全然切上っていない女と云うものにも実地に一度お目にかかつて見たい気がする。

近頃の変つたニュースに、大阪市生野区猪飼野の狂言強盗がある。

五月二十七日午前五時頃、大工伊藤辰之助方で、二階で就寝中の長女春子(二〇)が猿轡をはめられ、後手に縛られた上、睡眠薬を呑まされて失神状態となつており、春子を除く家族六人がねていた階下の、四帖半横の台所のガス管が鋭い刃物で断ち切られて、一家皆殺しを計った上、タンス中の現金四万八千円が奪われていたと云う強盗事件である。

猪飼野東四丁目辺りと云うと、チンピラやくざや愚連隊の多い、ゴミゴミした処なのでこの記事を読んだ時、当然、春子はこの様な状態のもとだから、強盗に暴行をうけていたであらうと、あらぬ想像迄働かせていたのであつたが、一週間後の七月三日附の夕刊で、その一家皆殺し強盗事件が何んと、長女春子自身の仕組んだ狂言であつたと知れて、啞然としたのであつた。

したのであつた。

原因は、父のしつけの厳しさへの反抗と云つた単純なもので、家出を決心して、父親の辰之助が近所の家の新築完成で現金四万八千円ある事を知り、あの金をとつて家出しようと計画したのである。

当日の夕刊が手許にあるので右にその一部を紹介するが、私はこの数行に激しい興味をそゝられたのである。

『二十六日午後麻縄、睡眠薬を買い、自分で猿轡を嵌め、後手に縛る練習をするなどすっかり狂言強盗のお膳立をととのえて夜を待った。二十七日午前三時ごろ、階下に降り、整理ダンスから四万八千円を抜き出した。その瞬間、春子の心理が変つた。家出をするのが急におそろしくなつた。いっそのこと一家を皆殺しにし自分も死ねばすべてが終る、こう思うやガス管をあけてカミソリで切断、自分は計画通り、二階に上り、現金と睡眠薬の空箱を天井裏にかくした上、睡眠薬をのみ、サルグツワ、後手に縛られた恰好で昏倒したものの』

この記事及び、新聞での報道から、私はさまざまの空想と、推理が浮んでくるのである。

先ず最初に思ふのは、階下の狭い四帖半に春子を除く親子六人が就寝し、春子一人何故

二階一間を独占していたのであろうか——。家出を決心した娘が、心理の変化とは云え始めから睡眠薬をどうして買っておいれたか——。

狭い四帖半程の台所で、カミソリ如きものでガスを切断するのに、誰一人として気付かなかつたのか——。これは一瞬で出来る仕事では絶対ない。

数え上げると妙な事許りで、真実ははっきり判らないが、最も興味ある重要なポイント、練達の刑事や巡査が、春子の凝装後手縛りの不自然さに気付かなかつた一事である。

新聞の記事を読んでも、春子の凝装後手縛りを不審に思つての発覚の件には一行も触れていなかった。発覚のいとぐちは、

『春子の供述が、二十六日午後、戸外であつた男にピストルをつきつけられ、家を強制的に教えさせられたが、強盗はこの男だつた』などと、供述が芝居じみてゐるのを不審に思い追及した結果、狂言強盗の自供となつたもの』とある。

とすれば、春子の後手縛りの練習は一朝一夕の単純なものではなかつたと考えられるのである。

× × ×
三十一年十月北海道から来阪して以来、女工、洋服店員等をして働き、最近手内職をしてゐたと云う春子自身、生野区猪飼野と云

う悪巢の環境から、可成りのズベ公ではなかつたろうか——。父親のしつけの厳格さも、要約すれば、彼女自身の或る程度のおふしだからくる叱言であつたかも知れない。

二階に一室を与えられてゐるのをいゝ幸いに、春子はかなり以前から家出の決心をし、その時に備えて、夜半独り縛りの練習——、或いは強盗に襲われた場合を想定しての被虐の緊縛の味を秘かに愉しんでいたのではあるまいか。二十六日に麻縄を買つて、僅かの練習で翌二十七日、刑事や警察を瞞著出来得る程、巧みな後手縛りは自分一人では殆んど不可能と考えてもよい程に、出来得ないからである。

さまざまの被虐のシーンを想定しては、彼女は独り縛り、我れと我が手で猿轡を嵌め、転々としたのであろう。——因みに彼女は大の映画ファンであつた——。

誰が見ても不自然でない、後手縛りを完全に遂行するのは、相当の熟練を要する技である。それを彼女は、兎も角見事にやってのけた。強盗に侵入され暴行をうけ、一家皆殺しにされる——。そんな夜毎の妄想と逞ましい想像が遂に爆発して、試して見る氣になつたのではなからうか。

代理部分讓品総目録 (第四号) 完成

本間に長らく御待たせいたしましたして申訳ありませんでした。代理部分讓品総目録やつと出来上りました。今迄御申込み或は予約を頂きました方々へは完成と同時に早速御送り申し上げます。新しく目録御入用の方は八円切手同封の上御請求願います。先にお申込下さつて未着の方は葉書で御一報次第急送申し上げます。

こんなになうまく縛れる様になつたんだもの警察だつて親だつて欺し通せる自信があるわ——。

深夜、我が身を緊縛して、うっとり彼女はこう思い、いつかはと考へて緊縛に精出すうち、幸か不幸か四万八千円とダブつて、浅はかにも欺し通せると思い決行したに違いない。果して、緊縛は成功したが女工上りの浅い知恵は、その緊縛への過程の事件そのものを単純に考へた結果、いまわしい殺人未遂の疑いで獄舎につながれた。自縄自縛——。これ程ピッタリした例はあるまい。他人にはめてもらつた冷たい手錠の味を伊藤春子はどんな氣持で噛みしめてゐる事であらう。奇巧の小説よりも事実は正に奇と云わねばならない。

× × ×
海に山に、ハイティーンのウロチヨロ族は我が世の夏と許り謳歌してゐる——。
白目下の美女の緊縛をまのあたりに私は見た——。と云つても、それは些か度を過ぎ

た、彼等の悪ふざけに過ぎないが……。

ところは、神戸市須磨の浜——。

六、七人の若い男女がキヤアキヤアと汀で戯れている。今にも乳房の覗けそうな、真赤な極どい水着で、高校生らしい娘が若者の戯れの手を逃れて浜辺を走り出す。三、四人の若者が、ホウホウと後を追う。しぶきをまきちらして娘は走る。若者の一人が、貸し浮袋屋のロープを掴むと、カウボーイよろしく輪をつくって娘に投げる。二度三度仕損じて、娘の足取りの乱れたところで、輪縄がスッポリと娘の乳の辺りにうまく引掛る。バラバラと近附いて、彼等は娘を手取り足取りしてかなり太い、ゴワゴワした水気を吸ったロープでぐるぐる巻きにした上、両手を後ろに縛る。娘の連れが二、三人追いついて、若者達と一緒に、面白そうに娘をつまいてふざける。羞恥と冗談気に娘は、若者達にとりかこまれて小突かれ乍ら、浜辺をヨタヨタと歩く——。子供が物珍らしげに多勢廻りを取り囲む——。大人は困惑と好奇と、何とも云い様の無い眼で、この傍若無人な一群を黙って眺めている——。

数百の眼に囲まれて、縛られた娘は流石に駄々をこね、身をくねらせ、何かを哀願している——。ガヤガヤと彼等は、縛った娘を中心に浜辺に歩むと、バラバラとボートにその儘分乗する。娘達許り一つのボートに

ると、始めて彼女達は、同性への度の過ぎた悪戯に、不安を感じ始める。

救人の男と、縛られた娘を乗せたボートは、沈みそうになり乍ら、沖へ沖へと出て行く。ヨタヨタと不安に娘達のボートが後を追う。

悪戯には違いない。とは知りつつも、大人達は、余りにも大胆な若者達に、手を拱ねて行方を見送っている。

如何なる大劇場も及ばぬ白昼の大海原を舞台に、何百、何千の大観衆を前にして、この無邪気(?)な俳優達は、一体どんな気持で縛り、どんな気持で、肌を巻きつくロープの感触を受けとつているのであるか?。

不安と危惧に、もがく少女の姿が、沖へ沖へと段々小さくなる。

ドボンドボンと男達の飛び込む姿が遙かに

見えて——。その結果、悪戯からどんな結末を生んだのか……。

私も呆然と、又、好奇心に燃えて、じっと見つめていた大人の一人であった。

子供達を家内は叱る様に視野の遮る個所へ連れて行ったが、小学四年生の長女だけは、奇妙な顔をして、私の困惑した表情をじっと覗いていた。

二度とお目にかゝれるかどうか分らない、白昼夢の様な数分であった。

勇敢に堂々と行動するハイティーン族が羨ましい様な、そのくせ何とも腹立たしい様な、情ない様な、人並みの道德感に燃え乍ら、私はいつ迄も、凝然と浜辺に立ちつくしていたのである。

(了)

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

について

本誌通刊第百号突破記念の懸賞募集原稿は、その後引続いて続々と到着しております。すでに七月号誌上で「お町の最期」を発表以来、八月号では「身悶える妖精」更に九月号では沖龍彦氏の「草双紙に於ける責場の研究」を掲載いたしました。

本月号では「女水兵哀史」(女奴隷愛好者の遍歴より)八市田健次郎V一篇を掲載いたしました。

何卒御高覧下さいませ。

優秀作品は今後次々と誌上を飾ってゆくつもりであります。入選該当作品多数の節は、懸賞入選作品ばかりの特別号を臨時に増刊いたします。何卒奮って御応募下さるよう御待ちいたします。尚、只今入選候補として数篇検討中でありまして、誌上紹介発表を御期待下さい。

編集部V



明治篇——

(い図)

『車屋の勝、今しがた
洗い面して出て行っ
たぜ。戦争(明治二十七
八年)景気で稼ぎが荒
いて云う噂だが……』

『それがそうじゃねえ
んでがすよ。かみさん
の松っさんも近頃はど
うも云うことを聴かね
えらしい——いえ何に
ね、ゆうんべも隣近所
に鳴り渡るような、エ
れいでかい音で取組み
合いがおっ始まつちや
って……へへへッ。

その挙句の果てが、い
や早やどうも旦那の前
ですが、ありやどう見
ても気違い沙汰でさ
あ——』

『ぶん殴ったとでも云
うのかい?』

『殴ぐる、殴ぐられる
処の騒ぎはとつに通
り越してさ、松っさん

は腰巻一枚、おまけにこれでさあ——ねえ?
いや驚いた、驚かないのって、凄まじい演物
なんで、そこいらの芝居以上でしたぜ』

『手前、それを手放して見ていたんだな』

『御冗談仰云っちゃ困りますよ。峯公……』

……糊屋の婆々、知ってるでしよ。あん畜生が
八っさん、見る見る! って云うから、遂どん
尻まで見たって云う訳なんで……』

『道理で今日はシーンとしとる』

『まあ、あれを御覧なさい。どうです? 荒縄
いや荒縄まで干しやがって……、旦那、
夫婦の仲ってものは判んねえものですな。あ
とで何やったかは知らねえけど、手めいの物
に亭主の物までならべて乾すって手も無えも
んだ。吉原上りのかみさんにあっちや、へへ
ッ……堪ったもんじゃねえ』

『堪らねえ程感服させるのが夫婦の仲と云
うものさ』

『旦那までそう感心しちやったりしちや困り
ますぜ。それが、何んしろ、始めのうちは一
ぺい、ひっかけた勢いもあったんでがしよ、
二言三言の競り合い。そのうちへおいッ、こ
らッ、てめい帯を解けッと来た。いくら何ん
でも宵のうちから何よとかみさんが逃げよう
とする処を裾を押さえたから、どっこい、も
んどり打って倒れる。こいつ、俺に逆う気か
? って腰紐諸共襟を掴んでぐつと脱がせたか
ら玉の肌でさあ——、へへへッ、松っさんも

脂の乗った三十女の大年増。その滑べ滑べつとした肌の背をどーんと突いて勝の野郎がくるくるつと女の帯を解いたから赤腰巻がコロリツと転ったと思えば間違いない。で——松っさんも慣れたもんでさあ、勝の野郎が松っさんの手首を握って後に捻じ廻わすと別に反抗するでもない、素直にあの馬鹿でかい荒縄でぐるぐる巻に縛られて了ったんだが、旦那何も昨日今日の仕業にしちや、ちつとばかりうま過ぎるじや御座んせんか。」

『慣れた手際なら、そうともなるだろう』

『まあ、それは兎も角としやして、あつしも男だが柱に縛りつけられた女つてものは土台芯からいいもんですぜ。どっちかと云えば奴の癖の面はおかめに近い、そいつが弁天さまに見えるから不思議でさあ。兵庫結びの髷が半分こう崩れて、むっちり盛上った腹から下は真赤な湯文字一枚、子を産んだことのねえ真ッ白な身体をくねらせて、モヤモヤとする処を勝の野郎が脂汗を流しながら責めつけてけっかる。もうこうなりやなりや理窟も糞もあつたもんじやねえ。青竹の半切れ棒でブンブン殴るんだから縁日のたたき売りじやねえが堪ったもんじやなかうと思つたんだが当の松っさん、齒を喰いしばつてぐうの音も出さねえ。流石は吉原女だ。もつとも一つブンと殴ると、終い頃はヒヤーとかヒエーと

か泣き始めたらしいが何んせ殴る方の勝公が喚めき散らすんで聴き損こなつちやつたんで………で、まあ仲直りが夜明け方になつたんでがしよう。今朝になつて破れ障子に三品がならんだと云うお粗末。よろしかったら、旦那、今晚一つ如何がす？特別席がありますぜ。へへへ………』

『話だけで沢山だよ。むやみと他人さんの天国を覗くんじやねえ。明治のよき御代は夢喰う虫も好き好きで好きな物は腹一杯喰わせときな。それが人の世の情けと云うもんさ………』

—大正篇—

小石川と云つても片や崖上、片や崖下。その崖下長屋から見上げた噂話——井戸端会議の一篇である。

世界大戦の好景気が済んで、またぞろ米が騰りそうな頃でもあろうか『ホラ、あの小綺麗な借家に越して来た夫婦者さ。色の生白い若い男が旦那だつて？』

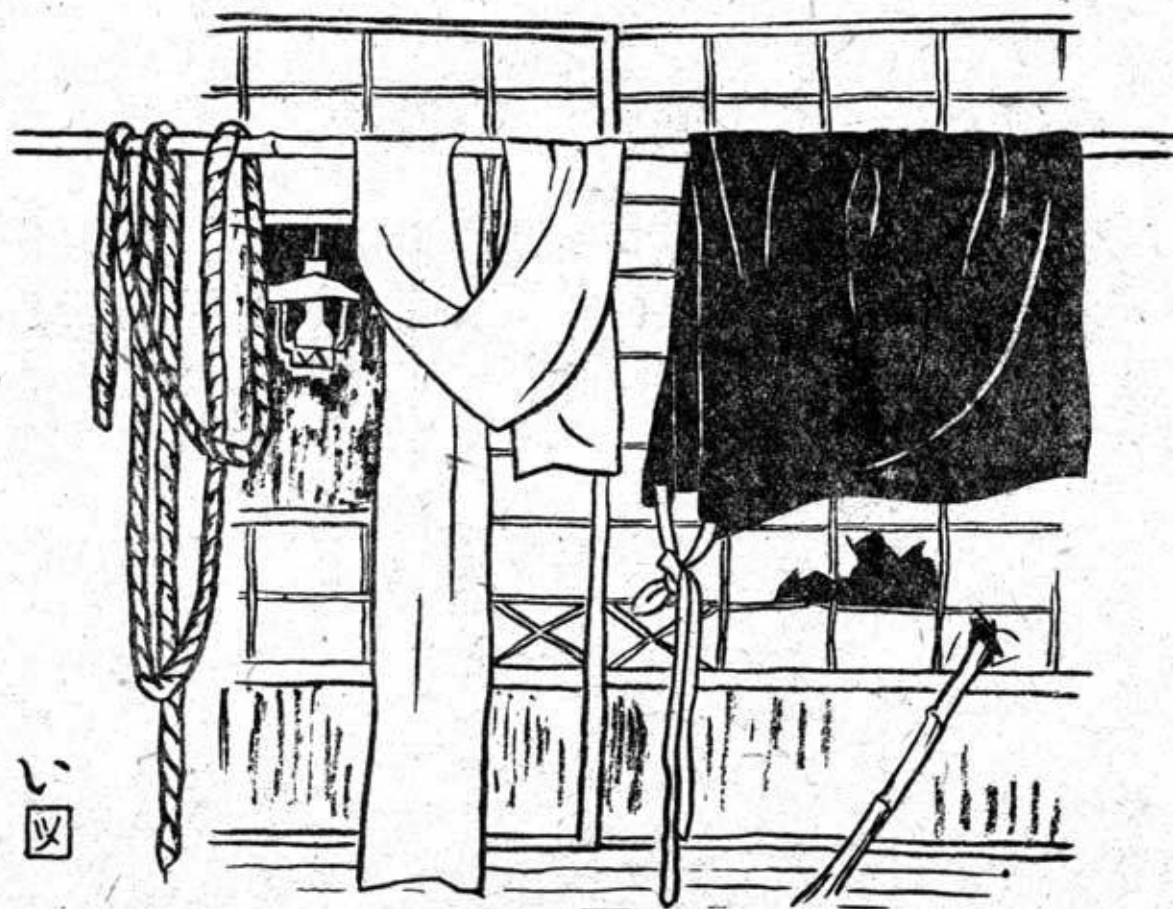
『駈落ち者だと云うが………何んでも蔵前か何処かの糸屋問屋の………』

『男の方がかい？』
『いいや、女の方ですよ。その娘と

か後家さんとか、そう云えば年の割りに若作りだが。小憎くらしい程小股の切れ上つたい女………』

『そのいい女がこの暑い昼の日なかに、戸を閉め放して何してるだねえ——』

『さあ、知んねえ。大かた追手の者に擲るの



が怖いんだべい。だけどつい今しがた、盥持^{たらい}ち出して何か洗濯しとったようだが……」

『じゃ、あれだ。何んてまあ憶面もなく真赤な腰巻を干してさ。男のふんどしまで、くっつけやがって仲のいいこと、どうです?』

『何やら紐見たいな物は何んの呪いだろう』

『細縄じゃないか。何んでまたあんな物をさ引越荷物とはとくに済んだ筈なのに……』

『うんだ、そんで判った。先んだったの話よ。』

三河屋の留公の奴がちよいとあの家に寄ったんだってさ。すると襖の蔭でよく判らなかつたそうだけど、例の生白い旦那が座敷のど真ん中に、つ立ってる。こいつは悪い処に御用聞きに來たなと思つたんだって。すると旦那が何か用かとジロリとこちちを見るのと一緒に、堪忍!許るして……って云う女の声がしたんだそうさ。で、留さん商売柄、

へちわーと頭を下げたものの、訳を知らなけや痴話喧嘩と思うのが当り前。処が本当は可愛さ余つてのいちやつきごっこ……それ

も血屋敷だったと云うんだよ。』

『かみさんに見て見りや、お味噌の一つも頼みそうじゃないか』

『頼みようにも長襦袢一枚じやどうにもなるまいって』

『あんだ、長襦袢一枚って、誰から聴いた話?』

『戸を閉めりや女は長襦袢にもなろうじやな

いか。第一暑くって……あたしなら皆んな脱いじまうもの』

『処が——くくられていたんだってさ。へへッ……何んの因果でくくられたか判

んないけどさ、大かた親元からの仕送りがなくなつて酒でも飲めなくなつたんだらうよ。』

留さんのつけがたまつてるって云う話なんだから……』

『で、そのとどのつまりはどうなつた?』

『さあ——留公の話だと六畳と四畳半の間の柱を抱くようにして手と脚を縛られていたんだそうだが、それが何んと緋の長襦袢に伊達巻一つと云うあて姿』

『衣裳持ちだから嫉妬たくなるね』

『あとで判つたんだけど、その生白い旦那は台下の三文絵描きだとき。ホラ、この間あんなに見せて貰つたような……』

『まさか——あんな物を商売にしたら察^{さう}からちよいと来いさ。嫌やだよ、フッフ……』

『でもさ。女をひくくくって、ひっぱたく位威勢のいい旦那でなくっちゃ、男じやないねえ。してみると案外見処があるじやないか。あの若僧さ』

『この調子だと今にオシメの絵を描くようになるわ』

『オシメを干す前に何んべん女がくくられるかが見ものだアーねえ。銭湯にも行かずにあんな小綺麗な腰巻嵌めやがってさ。ヤレヤレ

珍来者にはかないつこなし。今に古井戸へでも放り込まれるんだんべい。それから先きが本當の浮世絵師だあーね。へへへ……』

と云う訳。因にその下は地下鉄が轟然と走っている今は昔の話である。

—昭和篇(ろ図)—

『ねえ——、何処か引越さない?そりや二階住いも悪かあないけど隣は練兵場でしよ。毎日毎日満洲へ征く兵隊さんのラッパの音を聴くと追立られるようで、イライラしちゃうのよ。あたしはいいいけどあなたがゆっくりおやすみ出来なくて悪いの。それに第一、お洗濯の干し場が上でしよ。色んな物干せないのよ。この間もあたしの肌襦袢や足袋は通りがかりの人に拾つて貰つたんですけど、お腰やあなたの物なんか、嫌やだわ。練兵場のほこりだつてかぶるし……』

『驚天動地の非常時日本なんだから、そう一ち一ち苦にするなよ。何んだって今朝は細引なんぞ乾したんだい?成程、風通しのいい家だ。市内に入るところは行かない……』

『だから困るのよ。さつきもあたしが裾をは折つて洗濯物を干してると、外出をする兵隊さんが下から見上げて、

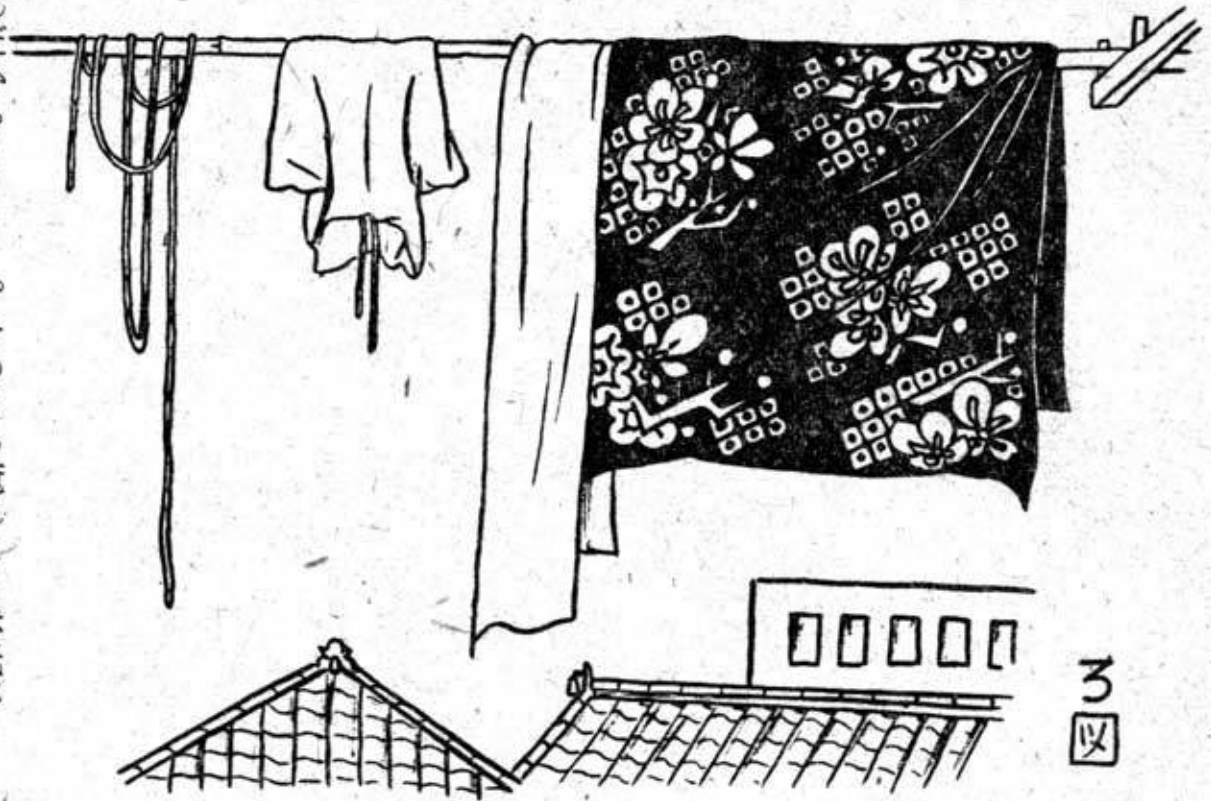
へ歩調取れッ、頭……右!だつて……

ひやかしたわ』

『いいじやないか。皇軍慰問を地でやつてる

んだから……。そのうち俺れにも赤紙が来るかな。その時にや、朝から晩まで頭……右！ばっかし演るぞ。チャコ（愛妻の呼称）とも暫しのお別れだ。」

『嫌だわ、そんなこと仰言って……。大丈夫、君、死に給うなかれてあたしがつい



てるんですもの。ねえ、それよか、ゆうべどうしてお苛めになったの？まだ痛いよ。」

『神様に聴いて御覧！結びの出雲の神様は存外こんなことがお好きらしいよ。白兎を素裸にして皮を剥いたのも出雲だ。』

『だってあたしを花模様のお腰一枚にして、追かけ廻わすんですもの。でも、とうとう捕まったわね。ずり落ちそうなお腰一枚の女を後手に縛り上げる時はいい気持ちでしょ。』

『それからあとは消灯ラッパになったけど……。』

『お蔭で汗びっしよりさ。階下の年寄り』

は未だ帰えないのかい？四、五日留守とは云ってたけどな……。』

『ねえ——、甘えていい？聴いて下さる？』

『また買い物かい？段々物が少なくなってきたぞ。純棉でも買い込むか』

『ううん、そうじゃないのよ。最愛の奥さんにそろそろオシメが要るようになったの……』

『何処かでもオシメの話があったね。昔の話かな』

『昭和の御代、只今のお話よ。つまり——、あなたがお縛りになったお姫様に赤ちやんが

お胎り遊ばしましたって云うお話。お判りになりました？』

『何んだい、そうかい？そりや目出度い。道理でゆうべの雪姫は勝手が違うと思ったよ。』

『締まりがなくなるとちやんと両手を後ろに廻わして大膽さまの云う通りになるんですもの。赤ちやんに因んで今度から緋縮緬のお腰しを嵌めて御覧に入れますわ。どうぞお楽しみに……。』

『あんなこと云ってやがる。アハハハッ……』

……』

— 現代篇 —

明治の始めから通算して八十有余年、世は正に急テンポを以て大きく変革した。

スカイビルディング即ち高層アパート時代を迎えたのである。

破れ障子にランプの影は総ガラスに螢光灯に、盥は電気洗濯機、そして必須の紐縄は化学製品のビニール製品へと移行する。ただ移行しないものは男女間の愛の閃めきばかり。

その閃めきたるや近代医学を俟たず、質的に変動しつつあるんだから正に驚き入った現世ではある。男が女に、女が男へと領域を侵すことを倒逆と云うは宜なるかな。

さればある処に、あるモダン夫婦ありき。ゆえあつて九階のスカイルームに世帯を営み

夫妻揃っての共稼ぎ。人呼んで十萬円の俸給取りと噂するはひがめか。

『オイッ、今日は会社でうんと冷やかされたよ。フラウ天下だだよ。考えてみるとお前の方が稼げが多いし、もともと養子みたいなんだからな』

『かまわないじゃないの。多かろうと少なからうと他人さまの要らぬセツカイよ。気にかけることないわよ。放つといったら……』

『放つところにも現場を押さえられちゃったんだよ。どうもあのボーイは眼付きがおかしいと思つたよ。』

『あたしが女優でバーの女だつてこと？』

『いや、それは一応無関係らしいんだが、問題はピンクのZ旗にレースのパンティ、それにもろもろの物件なんだ。まずいことやっちゃった。撮る奴も撮る奴で弱っちゃったよ』

『あゝあれ……この間の日曜日に干した下着のことなの？どうしたって云うの？あんなもの』

『つまりさ、キャビネ位に引伸した奴を持ち廻わって、流石は磯部のフラウは偉丈婦だ、亭主のパンティがそばで震えてるって云うんだ。ピンクの蹴出しの干し方が劃期的であつたことは是認してもいいがプラス・アルファに革鞭とビニールの紐があつたのが怪しいと騒ぐんだ』

『法廷で裁判されるんじやあるまいし、いい

じやありませんか。それ程会社で暇なのよ。その癖バーなんか来るとすぐ変なことする奴ばかりなんだから……。張本人のボーイは即刻臙首にしたら……。で一体誰が写真を撮つたのか知ら？』

『社の運転手らしい。ホラ課長を迎えに来た車が停つていたじゃないか』

『幾ら脇役の芸能人だつて裾除けや蹴出しの一つ二つは持つてゐるわよ。稽古場は何も舞台裏とは限つてないわ。芸事が高じると、ぶつつけ本番だつて演るわよ。』

ただあなたの女装が撮られたら大変だったのね。でも、脚本通り演ろうとすれば女が女を責める場面だから、どうしようにもないし……伊達や粹興でもないんだから』

『まさか部屋の中まで来てフラッシュをたく奴もなかるうが、まことしやかに推理をきかす奴が結構いるんだから始末が悪い。』

君に愛人が出来たから磯部が怒つたつて云うんだね。うちの女房に愛人が出来たつてかまわれないじゃないか。……と同時に主人にブラザーガールがあつたつて……』

『待つて頂戴、それは一寸困るわよ。ブラザーガールなら貴男は女でないとおかしい。』

ただこの間の脚本が女同志のリンチだったからあんなことになったんでしよう。昔の肉体の門つて云う劇とよく似てる……。でも、どう？あたしの演技、駆出しにしちや

上手いと思わない？女を縛つて折檻するって古めかしい言葉だけど、まだ幾らでも近代セックスで演る余地はあると思うの。女を縛つて泣かせるコツ位は今の内心得していらつしやいよ。』

『いや、あの時は俺れが洋装だろう。君が得態の知れない和服の女なんだから戸迷いしたんだ。音が洩れないからいいようなものの、ベッドのそばで革鞭ちは和服には似合わね。だけど夫婦の間は薄々感ずかれるねえ。兎に角カメラに撮られたのは失敗だった。』

『悪口云うんだつたら女房を大スターにするために鍛えてるんだと仰言い。芸術が行詰ると女はヒステリになるからひくくっておくんだ。お互いに六十年の不作を抱えて苦勞するねって澄ますのよ。それ位の度胸で以つてあたしを縛り上げるのよ。人間ですもの、徹底しなくっちゃ……。干し物位で腰を抜かす人間に世渡りは出来ません。へっちゃやへっちゃや……。今度は舞台衣裳あらうざらし皆んなバルコニーに干してやるわよ。元氣を出すのよ。そして女の下着や肌着で眼を廻わす徒輩は議員さんじやないが大馬鹿者だと思つてりや気がすつとするでしよ。昔、松竹の女優さんで女の尻を追掛け廻わすドウヤ（映画関係者）にこれでも冠りなさいって自分のお腰しを投げつけた勇敢なひ

とがいたわ。その意気！その意気！」
『まぜ返さないで呉れよ。頭が混んがらかつて来た。要するにこんな物を題材にする奴が馬鹿なんだね』

『いたら箒の先きで掃き出すわよ。とつと何処かへ行って呉れ、行かないと噛みついてやるから……』

桑原、桑原、とうとう追い出されて了った。これじゃショウ処に取りつく島もなくなつた。島がなければ帆を巻いて帰港するより

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに三十三号を数えました。現在既刊の中左記の通り在庫しておられます。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
復刊第3号 (昭和31年4月号) △切売▽

復刊第4号	(昭和31年5月号)	定価二百円
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年12月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和32年1月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	定価二百円
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年6月号)	定価二百円
復刊第16号	(昭和32年7月号)	定価二百円
復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円
復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	定価二百円
復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円

外に手はない。唄を忘れたカナリヤはあるかも知れないが手を失ってはペンを棄てざるを得ないだろう。

いやはや、もう何と申しましょうか、雌鳥鳴いて雄鳥これに従う、当世気風とは言いながら何とまあ逞しい女性のリード力よ、頼もしいやら、怖しいやら。なよなよとした花の風情はつい一昔前のこと、今昔の感一入身に強く感じるのは筆者のみか……。

ただ蛇足ながら筆者が敢えて紹介の労を取

ろうとして参考図を揚げた所以は日本女性のコシマキの変遷であり、これと相対的連関性を持つ男性のそれであって、時代を追うて、もろもろの女性を縛った、否折檻したであろう処の緊縛物件は情景の描写手段として展示したに過ぎない。「原理」が高等教学を以て解説する以上、筆者の担当は須らく静なる駒を動なるものとして披露する必要があるであらう。(終り)

復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	定価二百円
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	三百五十円
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円

(代理部だより)

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一箱にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一箱にお求めの方には、ヤビネ版写真三枚贈呈いたします。○休刊前の本誌は全部売切れてしまいましたが、今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。

最良の仲人

(第一回)

若松宏

一、嵐に散る

例年、一カ月余に亘って、南東の微風に吹かれて、からりと晴れ上る九州の秋空は、今年も、又、連日紺碧に澄み切っている。

此の好季節を狙って、毎年十月の七日から九日迄繰り広げられる、日本三大祭礼の一つと称せられる古い港街、此処長崎の「おくんち」と呼ばれている諏訪神社の大祭には、京阪神や東京方面からさへ参拝客が押し掛け、押すな押すなの人出の中で、オランダ交易の昔から伝わる異国情緒豊かな夥しい出し物が繰り出し、街中ひっきり返る程の賑わいを示す。

今日はその最終日の午後一時、気負い立った若者達に担がれた神社三体の御神霊は、鳥居で二分された七十三段の長坂の石段をワッ

シヨイワッシヨイト、頂上の神殿目指して駆け上って行く。神様の御還りだ。

旧制女学校時代からの親友、内田葉子と並んで、躍動する青年達の逞ましい姿態に見惚れていた中川美佐子は、彼等の中から自分の好みに適ったタイプの男性を無意識裡に探し求めている自分自身の微妙な心の動きにフト気附くと、人知れず頬を染め、側に立って熱心に見物している葉子の横顔をそうと偷み見た。

二人は浜野町、大波止方面の盛り場の人波に揉まれ、オランダ万才や二十尺に余る鯨の頭から空中高く水を噴く、鯨の潮吹き、黄金の珠を求めて躍進する支那渡来の「蛇踊り」等に打ち興じ、時の経つのも忘れていた時に「急いで家に帰るところよ」と言う同級だった友人に呼びとめられた。

此の一見、平凡極る邂逅がその結果に於て、美佐子のその後の生活を、更には生涯の動向までも決定づけた一大転機を醸し出そうなどとは、神ならぬ身の知る由もなく、その事件が此の物語の世に出る機縁にさえなつたのである。

美佐子と葉子は、その友達と同道して混み合ぬ裏道を選び、再び諏訪神社の近所まで引き返し、その友人の家に遊びに行った。

張りきつた三人の娘同志の楽しい、果てしないお喋りに時の経つのも忘れていた美佐子は、ふと、障子に映る庭木の月影に氣附くと今宵の自分の家の状況を想い起した。

由緒ある、目も綾な十字軍出征の模様を織り出した豪華な絨毯を敷き詰めた三十畳の大広間と、鼈甲色に拭き込んだ一抱え半もある柱のある台所との間を忙し気に往き来し、当番の女中達を指図し、例年通り御華客様や取巻連中と、ハイヤーや自家用車に分乗して賑々しく帰邸する童顔のニコヤかな父親、源一郎達をもてなす準備に大童の血色のよい母親の顔などが、半日の遊樂で疲れを覚える美佐子の臉に走馬燈のように浮び上った。

「余り遅くなつても不可ないから、私、もう御暇したいの」

と、立ち上るのを引き留めようと試みる兩人や家人達を体よく遇らうと表に出た美佐子は、一体、どの道を選んで帰宅しようかと戸惑った。

長崎駅から線路に沿つた電車道を稲佐町で右に折れ、山の手に向つて三丁計り行くと、長崎でも老舗の海産物輸出商、中川商店の城郭みたいな豪壯な本邸が聳えている。之が美佐子の住いだった。

父親の車は何処をウロツイているか見当さえつきかねる。電話を借りて駐車場を當つてみたが、何処も忙しくて車が出払つて急に間に合いそうもない。駅経由の道順だと、駅まで出る途中で人波に揉まれる。山の手の間道は怖いけれど今晚は御祭の為に、きつと、いつもよりも人通りが多いだろうという、希望的観測に従つて、『お

すわ様』背後の五社山々麓の近道を通つて帰ることに決めた。

しかし乍ら彼女の此の思惑は美事裏切られて了つた。

十二聖人殉教の跡を遙か左に見て、少し行き過ぎた辺りまで来た時、前方から手に手に一升壇やビール壇、それに折詰らしいものでブラ下げ、何やらヒソヒソ囁き合い乍ら此方に近づいて来る四、五名の男の影。

彼女は一瞬不安に駆られたが、先方は多勢だからということから却つて安堵した。しかし、彼女を認めた彼等は、腰の辺りから手拭を取り外して各自、顔の下半分に覆面を施し始めた。

「何故あんな事をするんだらう？」

と、訝る中にも、彼等は少し歩調を速めて近づいて来る。近づくに従つて、申し合せでもしたかのように黙りこくつて一団となり、彼女の真近まで来ると、その中の一番背の高い奴が群を離れて彼女に馳せ寄りざま、彼女の左腕を背中に捻じ上げ、足払いを掛けて路上に転がした。

美佐子は總身がシーンと痺れ、同時に何事かを叫ぼうとしたが、もうその時は手拭で猿轡を嚙まされていた。

彼等は文字通り、手とり足とりして、彼女を疎林の奥に担ぎ込んだ。

乙女の無我夢中の抵抗などは物の数ではなかった。

「おい、しばらく上げてしまえ」

と、一人の男が圧し殺した低い語調でいうのを合図に、彼女の両の手首に帯のようなものが結び付けられ、両腕を腰脛を経て脛の外側に引摺り出し、手首を踝の外側まで持つて来て、手首の帯の一端を足頸の前面から内側に向つて二捲き、三捲きすると、手首に残っている他の一端と結び合せてしまった。

稍漏れる清澄な仲秋の月光は、斯うして、蝦のような姿勢で上向きに転がされた美佐子を、無情にも真正面から照し出した。

生来、事物の処理に當つて果斷な彼女の習性は、多分に父親の性質を受け継いでいたものとみえて、父親がそうであつたように、彼女も又、斯んな土壇場に出つ会すと、一時の衝撃の後では、反動的に反つて平常よりも、より一層冷徹になるのだった。

今や、一切の抵抗が何ら効なきを覺つた彼女は、唯一つ自由の利く両眼を駆使して彼等人非人の相貌風態を見究めんものと努力したが、帽子を冠り覆面し而も反対側に月光を受けた姿勢は、そのプロフィールさえ判然しない事を知つた。

彼女は、彼等が、次ぎに、どんな措置に出るだらうかと觀察し始めた。明鏡止水、此の驚嘆に価する心境の急変には、当事者たる彼女自身さえ全然予期しなかつた事象だつたと後日述懐している。

最初に美佐子を捉えた此の一団のリーダー格と察せらるる大男の声らしいのが彼女の耳近くで、

「お前の秘密は同時に俺達の秘密だ。今晚の出来事は誰にも話さんから安心しろ。しかし、万が一、お前が他人に漏した時は、お前の命を貰つてやる。お前の家も焼いて了うぞ」

と力強いダミ声で囁くと、他の四人はその辺りをカサコソ何物かを搜索した上で、「もう、何にも無い」と、言つて悪賢い鼠みたいに、さつと引揚げてしまつた。

静寂は歸つて来た。逝く秋を唄う虫の音が身近に聞える。

彼女は、軀の所々に鈍痛を覺えて、暫くは身動きさえ出来ず、まして起き上る氣力も失せて身を横たえていたが、そよ吹く夜氣の冷さと、腐れた小竹の切株が、胸の隆起や柔肌に喰い入る痛みを感じ出すと、やつとの思いで物憂く躊躇き勝ちに立ち上り、初めて流す口惜し涙を嗚咽に封じ込み、華美な縮緬づくめの晴衣を附けたが、たった一時間ばかり前迄は、乙女の憧れだつたその晴衣さえ、意味ないものに感じられて来た。

足袋を穿き、小竹の切株に注意を払い乍ら、先刻彼等に襲われた

道路迄出て、下駄を探し出すと、当度も無く五社山に続く金比羅山麓方面を一晚中歩き続ける中に、時間の觀念さえなくなつた。やがて、傾いた月の光の弱まつたのにふと氣付き、明方間近いことを覺つたときは、何処を何う歩いたものか、外人墓地の近く迄彷徨い出た事を知つた。その境内に這入つた彼女は、クタクタに疲れ切つて、誰の奥津城とも知れぬ異つ国人の長方形の平べったい大きな墓石に身を投げ懸けたが、もう思考の能力も尽き果てた様子で、じいっとそのままの姿勢で半時間ばかり動こうとしなかつた。

此の憩いは、彼女の若い細胞に活力を与えたとみえ、やつと立上つた彼女は、何思つたかその墓石の側に跪くと見る間に、冷え切つた滑かな石の表面に花の唇を押し付け、よよと許りに泣き崩れた。やや暫し、すつくと立ち上つた彼女は、何事か決心したらしい。今迄とは違つた確固たる歩調で歩き出した。

その墓地から余り遠くもない自宅の近傍を態と避け、三菱造船所方面に向い、旭町の海岸通に出て渚に打ち寄せた古繩を拾い上げて襪に代用し、着衣の儘、静々と、海中に浸ると、未だ明けやらぬ闇の港内に向つて泳ぎ出した。

九州の東海岸の潮とは事かわり、西岸沿いの水温は低いが、今の美佐子は冷たいとも感ぜぬらしい。顔を打つ小波の向う側には、税関附近の人家の灯が明滅する。体力の消耗し切つた時刻が彼女の埋葬の時であり、同時にその場所が彼女の墓所となる予定であつた。

やがてハツと氣附くと、極く近距離に大きな黒い影が迫つて来るのが判り、焼玉発動機特有の爆音が陸上で聴くよりも却つて明瞭に聞え出し、腹に迄伝へる。ホンの数刻の後、自分の軀に何物かが絡み付き、同時に、水中に引き摺り込まれ、鼻口から、いやという程潮水を吸い込んで噎返つた迄は、はつきり想い出せるが、その後はどうなつた事やらさっぱり記憶がない。周囲が何となく騒々しい。眼を開けようにも、開ける事が出来ぬ。手足も動かせない。その中



に、やつとのことと、うつすらと眼が開いた。涙を湛えた母親の顔が覆いかぶさる入道雲のように、大写しになっている。

彼女を海から拾い上げたのは、幸にも中川家出入りの漁師の親方所有の漁船の中の一隻だったから、彼女入水の件に関して口止めさせることは容易だった。しかし彼女遭難の実相は、表沙汰にこそならなかったが尾鰭を付けたゴシップとなって流布された。

生来、人一倍快活で交際好きで、飛び歩きや会合好きだった美佐子は、この事件後は、孤独と静寂を好む性格に一変し、広大な邸内の築山や泉水や花園が彼女唯一の散策の場所となり、一步も外出しなくなり、家人を除いては事件の直前まで一緒だった、口堅い親友の内田葉子一人に限って邸内で会う始末となった。

やがて又、翌年、空高く晴れ渡る爽涼の秋は訪れ来り、美佐子にとって厭な厭な思出の「おくんち」の十月九日が近づいて来た。

大祭には市中銀行が休業するので六日の行内はきまって混雑するのが例になっている。

中川家では当座預金は父親が保管運用し、母親が普通預金を預っているが、その六日、銀行正面の大扉を閉め出したとたん、「遅くなって済みません」と、ポストン・バッグを携えた美佐子が飛び込んで来て、旧知の窓口婦人行員と久闊を述べ合い、当時としては大金の三万円を引き出し、その内、百円を小銭に換えて貰って、愛嬌を残して急ぎ足に出て行ったが、土地の知り合いで最後に彼女を見た人は、其の際の支払係の行員だけとなってしまった。

其後十日目、家出を詫びた文面と、母親宛の三万円の借用証文に預金通帳と印形を添えた東京室町三越本店前の青柳の海苔罐が中央郵便局の消印のある書留小包で中川家に届き、文面には美佐子は去年の十月九日に死んだものと思つて戴き度い旨が簡単に認められ、親友の内田葉子にもこれと大同小異の手紙が配達されたのみで、両親の提出した搜索願も効を奏せず、年月の経過に伴って美佐子の存

在は、前記の手紙や小包の受取人乃至は美佐子の只一人の兄以外の郷里の人々の記憶から次第に薄れ遠のいていった。

二、魅力の仇花

美佐子は家出後一年目、晩春の早暁、横浜市郊外杉田から出発、単身自転車の遠乗りを試みた際、鎌倉に向う海岸沿いの道路で、折からの引き汐で、ゆくりなくも砂浜に打ち揚げられた一女性の水死体のポケットから喰み出していた遺書らしい文句入りの手帳から身元搜索に乗り出した結果、死体の主は身元不詳の孤児として育ち、戸籍上一家を創立し、やっと獲得した相愛の内縁の夫に死別し、悲歎の余り投身自殺した実状が判り、年令も偶然一致していたのを何かの因縁と思う一方、自殺当時の当局の調査も身元不詳として仮埋葬に附した事を確認、更に一年経って、女の戸籍簿を閲読し何等の変更のないのを奇果とし、家出後二年間使い馴れた岩井絹子の仮名を捨てて、その氏名、今坂菊江を冒し、公民権を取得、美貌と財力と社交性を駆使し、堂々たる自信を以て宿願の世の悪性男子征服に登場したのだった。

美佐子は彼女の肉体の自由を奪い、苦痛と恥辱を与えた上、彼女の社会的地位迄も崩壊させた男性の暴力を身を以て体験しているの、斯かる種類の男性に対する湧き沸る憎悪は、彼女の全身を駆け巡り、之に対する復讐の妄執は彼女の心情を焼き焦した。

復讐、報復、仕返し、美佐子こと、菊江は、夢幻にも之の想念を忘れなかった。蒸し暑くて寝付きの悪い夏の夜、転々反側する彼女のエネルギーが此の想念に出会すと、彼女は枕を噛み、シーツを裂き、ベッドのクッションから転げ落ちたまま暁を迎えたことさえ度重なった。

しかし周倒な企画の元に、今坂菊江として、社会的に個人的に男性征服の野望に燃えて、社会人としてデビューした彼女は、その情

熱を豊かな胸の奥に秘めて、内心に蟠る狂乱怒濤の片鱗すら第三者からは伺い得ぬ、精練された身のこなし、日本女性としては稀に見る五尺五寸の長身、女性トップ・ダンサーにでも向きそうな軽妙、正確、敏捷な運動神経に恵まれ、限界を知るフランクリイな性格は、億万長者も裏店住いの工員も、行い澄ました坊さんも街のヨタモンも威勢のよい運チヤン迄も、来るを拒まず去るを追わず、じつくりと落付いた而も快活なもてなしに、何時ともなく各自の悩みまでも彼女に打ちあけてみたくなり、亦、人の苦しみや悩み迄も克明に聞いて呉れる、此の美わしい優雅な独身女性は、若しや自分に対して思し召があるんじゃないだろうかという錯覚に陥るから妙なものだ。

元来、彼女は、*「女は磁石、男は鉄片」*という両性結合の性心理プロセスの機微に徹し、此の意識を真綿に包んで、あらゆる男性吸引力を発揮した為に、金銭物品を散ずることもなく彼女に接する男性の九十%位は彼女に好意を持たせる事に成功した。同時に又、彼女の魅力に身を焦す男心がはつきり彼女には判っていても、決して厭な顔もせぬ代りに自分を投げ出すことも有り得なかった。

美佐子時代の彼女が家出の際持ち出した三万円の購買力は鶏卵の小売相場に換算してみると、当時一個二錢五厘位だったから百二十万個が買える金額だ。現在一個十五円とすれば一千八百万円に該当する。

美佐子の家出から三年目に大平洋戦争が始まり、総ての物資が戦事統制下に置かれた時代に、それ迄新宿で表向きの商売としてチャチなレストウラントを経営し、一方、兜町に足繁く出向いていた彼女が企業整備の声を聞くや新嘉坡、当時の昭南に飛び、上海、香港間を主に軍用飛行機に便乗し、昭和十九年、或種の貴重物資を携え為替管理の粗雑さを嘲笑し、以来、那須高原の片隅に引っ込んで敗戦後東京に立ち帰るまでの記録だけでも興味深い一篇の物語になる

だろうが、それは此処に大した関係は無いから除くことにしよう。

唯、一件付け加え度いのは、菊江が最後に故国に海軍々用飛行艇で敵の制空権下を経て帰国した年、昭和十九年の十月九日の未明、長崎市大波止近くにある中川商店の倉庫前に海軍々用大型トラックが停車し、呉海軍々需部の毛判を押した樽や木札を付けた立派な大箱等の山なす梱包を、倉庫の錠前を打ち壊して倉庫内に無断で運び込み、海軍帽と作業衣姿の二人の運転手と助手は、中川邸の二丁位も手前で車を止め、運転台でシャツ一枚となり帽子を脱いだ助手だけが中川邸を訪れて一通の封書を、未だ寝ていた女中を叩き起して手渡し、

「大急ぎで之を御主人に渡して下さい」

といい残して立ち去ったことがあった。

之を手渡された中川源二郎が披いてみると、明らかに美佐子の筆蹟で、

「お父様、お母様それに兄さん、貴方がたの美佐子は、今は、姓名も違つて居ります。昭和十三年十月六日家出後の翌年から今年迄、昨日も算入して、毎年十月八日には既に六回に亘つて長坂の中川家棧敷で御揃いの御三方の元気な御姿を他所乍ら拝んで来ました。

今朝、大波止の中川倉庫の錠前を勝手に壊しましたから代品御携行の上、至急御出張、一と先ず、再施錠御願ひ致します。

格納して置きました七十八個の梱包の私からの贈り物を何卒御利用下さい。

その中の第七十八号の箱の内部に、三十番の鋳力の角罎があります。すが、これはお母上様御直披の事に御約束致し度いと存じます。

私は、広く社会そのものを対手に幸福に暮して居りますから御安心の上、所在の御取調べ等は御断念下さるよう御願ひ申し上げます。

昭和十九年十月九日

貴方の美佐子

御三方様

追伸、或る機関を通じて、御一同様の御動静は、私にはよく判るような仕組になっていますから、兄さんの御結婚も、御長女、多美江ちゃんの御誕生も知つて居ります。

第七十号の箱の中味は全部、豊子嫂さんと、多美江ちゃんへの贈り物が入れてあります。

御二方に何卒宜敷く御伝言御願ひします。

之を読む中にも、源二郎の臉には自から涙が溢れて来たが決断は速い。冷水の洗面を済まし、自分で邸内の倉庫に這入り、錠前の予備品を懐中電燈の光をたよりに捜し出すと、それを持ってドテラのまま大波止に向つて飛び出した。

一応、格納された梱包の山を見渡しただけで、娘の指令に従つて施錠して帰邸した。

日を経て、娘からの贈物を見て流石の源二郎も肝を潰した。

当時、嚴重な統制下にあった特殊品ばかりで、漁業関係の所謂、第二次生産材が大半を占め、残りは、一般人に入手し難い外来物資で、第七十八号の鋳力罎を開いた母親は、三十万円の現金と、「お母様、三万円の拝借金が、とてもよく稼いでくれましたので、元利共で十倍になりましたから、一応、御返し致します」と、簡単に、メモに認められた娘の筆蹟を、ひしと胸に押し当てて、ハンカチを濡らしたのは無理もない。

三、社会的復讐の雛形

街路樹の柳の新緑が春風に揺けづられ、桜便りが日刊新聞の社会面を賑わす三月二十五日、西日本最大の商都、小倉市の各家庭に配達された朝刊の折込広告が二種、アメリカ中古衣料品即売会と、もう一つは、次のような風変りのものであった。

マゾ社員募集

仕事 高圧電用品、二号炭其他の販売。
報酬 固定給と、市価三十倍の出来高制。
資格 満二十歳より三十歳迄の男子。

マゾヒストたる自覚ある方。

過去一箇年間郵貯乃至銀行普通預金の毎月々末残高二
十万円以上ありしことを証明し得る保証人一名。

特典 採用者(十名以内)に対し非上場株たる当社株式総数
の二十%を均等割にて贈与、譲渡希望者には社規に従
い額面価格で買上げる。

面接 来る四月二日、自午前九時、至
午前十一時。

採用通知 四月十五日以内。

昭和二十五年三月二十五日

小倉市北方西鉄電停終点際

今坂商事株式会社創立事務所

面接試験は菊江が単独で当り、真にマゾヒ
ストと認めた者三名、セールスマン適格者五
名を採用、別に柔道四段のフエミニスト無能
不労用心棒専業二名を雇入れた。

会社の看板は創立事務所となっていたが、
創立事務は四月一日に完了し設立後であり、
菊江は、創立に際し自己名義とした総株式の
八十%の二十五%、即ち、総株数の二十%を
十等分し、その額面の合計金額に相当する金
額を表示した公正証書の各自の借用証書と引
替えに各自の名義を変更、譲渡希望者には御



都合宜しくデッチ上げた社規に依り、一箇月間の彼女への譲渡限度
を三千円に抑え、而も彼等の当該月の能率給が五万円を超過した場
合のみ此の特典を許可し、当該本人の獲得した新顧客の質を十等級
に分け、定款所定の臨時株主総会の議決によってその等級を決め、
世上一般のセールスマンのベースを第五級に据え置きその三十倍を
支給したが、最下級は零として支給しない制度にしたので、彼等八
名の男性社員共は、馬車馬のように狂奔馳駆してヘトヘトになった
上、柔道四段の高等守衛二名を左右に従え、創立時から二十%の株
数を均等割にした株数を所有する、菊江の御用団体である十人の婦
人社員の侮蔑揶揄に包囲されて、総会の席上、豊かな胸元に燦とし

て青白い妖光を放つ三カラットのダイヤ・ブローチをヒケラカした女王蜂、今坂社長の御賞詞にあずからんものと、平身低頭、卑屈な媚を呈し、各自の手柄を吹聴し、顧客獲得の苦心談を披歴し、尻尾を振る犬のように、菊江の御氣嫌に奉仕するのが常であつた。

之に反し、十人の婦人社員には軽度の事務管理と高給を支給し、そのアルバイト的顧客獲得には殆んど一級より四級迄の能率給を決議支給、三十年完了の月賦譲渡契約の完備した社宅、社名義の乗用車の使用、社費による男子禁制の贅沢な倶楽部の申訳的低額会費での使用等で優遇し、更に、日本最大の大和製鉄会社購買部と連絡、日用品の低価購入等をも幹旋、社長の親衛隊として絶対の支持を受けた。

マゾ的十名の男性社員は、生活の為に酷使され、婦人社員は、健康美にハチ切れ、智能も向上し、新業界羨望の的となつた。

四、性偏向の開眼

今坂菊江事、中川美佐子は、横暴な男性の存在を憎むにつけても、その復讐の先驅となるものは、女性の経済優位獲得が先決問題だと結論を過去に於て実践して来たが、特に第二次世界大戦日本敗戦後の経済界の混乱期に乗じて、横浜の第三国人と結託し、自己蓄積の稀有高価商品の取引で巨利を博し、一方銀行の渉外係を買収、預金の殆んど全部を新円に替え、之等資金を活用して、外地で現住民に暴虐の限りを尽し乍ら無事復員した三人の元職業軍人の盟友の一団を手に入れ、彼等の向う見ずの蛮勇と単純な頭脳とを利用。法外な報酬を与えて活用、名古屋、福井方面の機業家の不正、統制違反行為を種に脅迫、現金に物をいわせて買い敲き、名古屋、京浜方面を主にした二号石炭の売込みで巨億の暗利得をせしめた。

菊江の法的弱点の一部を握り、その財力と独身の美貌を我物にせんとする彼等三名の醜い仲間破れの兆候が露呈し始めたのを敏感に

覚り且つその実証を得たのを機会に、鹿児島県十島村宝島の沈船引揚を計画、その実態調査と、沈船に関する島民の利権買収運動の瀬踏みと彼等三名に託し、彼等の関係者、親戚、朋友等をも交えて盛大な壮行会を下関市の一料亭で開催し、その翌日午後一時、獲らぬ狸の皮算用、プラス、菊江への思慕を各自勝手に夢に見て、彼等三名のみで運航する二十一屯の鮮魚運搬船は、早鞆の瀬戸の碧波にクツキリと白い航跡を残し万才の声援に送られて次第に視界から消えていった。

此の船が出港後十三時間目の真夜中に船尾オイル・タンクの下部の小爆発とテルミットの誘爆で、棒立ちになつて一瞬にして玄海の底に鎮座することを予め知っていたのは菊江だけだった。

果して、翌日の、門司海上保安本部、警備救難部の無電は、出漁々船の確認した当該船の遭難をキャッチした。乗組員は行方不明、漂う救命帯で船名を判定したというのだった。

行方不明となつた三名の悪霊に繋がる罪無き遺家族に支給する弔慰金の基礎調査を名目として、三名の手に残っていた暗取引に関する一切の記録を、遺家族とその関係者から蒐集して焼き捨て、遺家族に過分の報賞金と弔慰金を与えた上、その後の生活設計までも準備してやり、彼等の支持を確保した後で一切の暗取引に終止符を打って今坂商事KKを設立したのだった。

菊江が、昭和二十六年三月期末の第一期決算を完了した五月中旬の或る麗かな昼下り、音もなく滑るように徐行して来た黒塗りの自家用車が、門司市棧橋通の三井ビルの辺りまで来るとピタリと停り、仕立下しのライト・グレーのツウ・ピースを着たアメリカ婦人が、三井ビルに這入ろうとして石段に片足を乗つけた途端、ふとビルの入口右側近い舗道の露店本屋に歩み寄り、一冊の雑誌を取り上げパラパラと頁を捲り、最終頁を点検した後で代価を支払ってビルの奥に消えて行つたが、彼女に続いてそのビルに這入った人が彼女の右

手のその雑誌を何気なく眺めたらそれには「K誌」と、印刷されて居り、その婦人は紛う方なき今坂菊江であった事を知っただろう。

変転波動常なき戦後の商戦界に心魂を打ち込んだ菊江も、大企業相互間の需給に介在する代理業的性格の今坂商事の基盤が確固たる存在にまで進展した証拠を示す第一期決算の好成績と以後の見透しに確信を得た今、彼女の財力と美貌と才能と、更には、爛熟した彼女の情欲のはけ口とが、彼女の過去の半生を支配した男性征服の野望にミックスして、男の肉体征服にまで発展したとしても不思議ではあるまい。然し、この新しい欲望に偉大なる貢献をしてくれたのが前記の、彼女が不図手にしたK誌であった事は特筆大書してよからう。

K誌に依って開眼された、菊江の性の本質は、甘美妖艶なレスボスの世界に没入することと、既に一箇年に亘って経験済みの男性の精神加虐を更に一歩進めた肉体加虐に依って得らるる法悦境を貪婪なまでに追求することに要約された。

五、レスボスの妖夢

菊江は、今坂商事の創立に際して、未亡人にして生活困窮者、真に女らしい精神と肢体の持主であり且つ健康に恵まれた人達十人を選んで、株式総数の二十％に当る金額を均等割に贈与し、出資の形式をとらしたことは前述の通りだが、この中の一人が、会社設立半年後に死亡したのを欠員のまま持越していた。その後任補充には、長日月をかけても彼女の理想に近い女性を求め度いと思っていた。

前任者死亡後早くも一年四ヶ月経過した昭和二十七年二月上旬の事だった。横なぐりの北西の風に吹き飛ばされる堅いサラサラした小粒の雪が、舗道の溝やビルの石段の片隅に吹き寄せられる酷寒の午後、用務を終えて小倉市役所を出て、その横手を流るる紫川河畔に設けられた駐車場にパークさせて置いた菊江自身操縦の車に乗る

うとしてドアの把手に手をかけたとき、此の寒空にオーバーもなく継接ぎだらけのモンペの腰の辺りに両手先きを突込み、三十万円もしそうなミンクのコートに包まれた菊江の姿をベンチに腰掛けてジョツと見詰めている中年女性の上品な面差と清澄な瞳に不図異様なシヨックを受けた菊江の右手は、一旦握った把手から自然に滑り落ち、彼女はベンチの女性を見詰めたまま、雪に覆われた石ころの多い凸凹のひどい小スロープにも気附かぬ様子でベンチに近づき、静かにそのベンチの片隅に腰を下し、

「まあ！ お風邪でも召すと不可せんわ。余り突然で失礼ですけど、私これを貴女に差上げ度いと存じます。どうぞ御遠慮なく御利用下さるよう御願ひ致します。」

と、咄嗟に内ポケットから取出した六、七千円は残っている筈の弗入を彼女の膝に載つけた。

中年にしては驚く程、長い睫毛の円らな瞳は呆氣にとられたように暫し菊江をまじまじと見守っていたが、小雪の降り懸った乱れた油っ気のない髪が俯向くと、駈に荒れた華奢な手先を抜き出し、弗入を両手の掌を重ねた上に捧げ、物に動じない而も穏なその視線は再びジョツと菊江の瞳に注がれ、蒼白い艶を失った小作り端正な顔の小じんまりした口は、

「何でしよう？」
と訊く。

素早く手袋を脱いだ菊江の血色のよい大型の手は彼女の凍えた指先を上下から挟み、労わり暖め、

「僅かですけど、お金が遣入ってんのよ。使って頂きたいの」
後で判った事実だが、この時のベンチの女性、鈴木フサ子の懐中には一文の金もなかった。昨夜、コッペパン一つしか喰べていなかった。

遠慮するフサ子の懐に強引に弗入を押し込み、其の上、引っ込め

ようと努めるフサ子の両手を片手ずつ交互に引っ張り出し、フアー・ラインドの革手袋を、これも強引に嵌め込み、自宅住所だけを追加印刷した名刺を手渡し、

「行きずりに会った方とは思えないのよ。御暇がおありの時、私の家に来て頂き度いわ。前日御電話下さると待ってますわ」

と、名刺に電話番号を書きそえて立上ると、敏捷に車に飛び込み運転台の窓を開けて手を振り乍ら去ってしまった。この間、五分間とはかからなかったろう。



に霞む。

先刻、ベンチにグッタリとなつて小雪の中の菊江を空ろうな瞳で眺めやつたフサ子には、キビキビした菊江の動作も、ミンクのコートも自動車も自分とは何の関係もない現実と夢の中の出来事のミックスしたものとして受取られたに過ぎなかった。

彼女は、手袋を脱いで改めて凍て付く大気の冷たさを一入感じ、未だ自由に動き兼ねる感覚の恢復し切らない指先でさっきの見知らぬ婦人から貰った弗入れを、そうっと開けて見ている中に自ずと泪

鈴木フサ子は、満洲安東県三番通に本店を構えた鴨緑江材の製材と土建業で同地では名の通った裕商会社の経営者、鈴木又蔵の次女、敗戦直後、北満通化の近郊で結婚三月目の夫を目前で殺され、土民の凌辱に虐げられ、安東県競馬場事件で両親を凍死させられ、一人きりの姉はその夫と共に行方不明という過去を持った天涯孤独の引揚者で、最近迄勤めていた、襤褸で作る二股指の作業手袋製造所の閉鎖に遇つて失職中だったのだ。

今日も、職安所に行つて仕事にあぶれ、ベンチでシヨンボリしていたのだった。

育ちが、育ちだけに、斯んな女性の斯んな境遇程悲惨なものはないとあるまい。

小倉駅前の闇に佇む肉体をはるレイデイの仲間入りまでして生き抜くには余りにも気が滅入り過ぎてゐる。歩くのさえ怠い。フサ子は自分が、なまじ正気であるのが恨めしかった。一日と迫る空腹は、健康までも蝕んで行くような気がする。五六間先を歩いている人々の顔が朧

が溢れて冷たく頬を流れ落ちるのを知った。その泪には、感涙と言ふには余りにも錯綜した感慨が秘められている筈だ。

其の後五日目に菊江に電話し、時刻を打合せ翌日の午後六時、広大な敷地に、コジスマリしたコンクリート建に菊江を初めて訪れたフサ子は、メリケン物と察せられるが、よく身に合ったスーツと外套を付けていた。

其の晩の会合の結果、フサ子は菊江の懇情を容れて同居に応じ、三ヶ月の休養の後、見違えるほど健康と美貌を取戻し、菊江に伴われ菊江の旧友という触込みで、今坂商事の女性社員倶楽部の臨時総会に出席中の九人の婦人会員に紹介されたとき、会員達は、その淑やかな物腰と、菊江と寸分違わぬミンクのコートを抱え、地も仕立も菊江と同じ、パリッとしたツウピイスとプラチナの腕時計、抜けるように白い滑かな指に燦として眼を射るダイヤの指環に一際引き立つ清らかな美しさを湛えた彼女の容姿に、軽い嫉妬を交えて互に眼を見交し、讃歎の社交辞令を呈上する傍、女性の敏感な心情は早くも、菊江とフサ子の間の眼に見えぬ何等かの奇しき縁の存在に氣附いたような雰囲気漂った。

実は、三ヶ月の同居で、トコトン迄、フサ子に傾倒した菊江は、会員達にこの雰囲気醸し出す可く意識的に演出したのだった。

乙女と人妻との相違こそあれ、菊江とフサ子が共に男性の暴力にその肉体を弄ばれた点は同じだが、過去三ヶ月、時に応じ機に臨み菊江がフサ子に聞かされた。フサ子の北満で受けた苦難の痛ましさは、十四年前の中川美佐子の受難に比べると想像を絶する悲惨、淫虐を極めたものだった。

然し乍ら、斯んな過去の事蹟に依って誘発された兩人の感情はその成育の要因と素質に大きな開きがあった許りでなく、その欲求様式にも差異があり、特に後述のレスボスの世界に関する限り菊江の積極性に対しフサ子は完全な受動型であった。

美佐子こと菊江は、男性の暴力に遭って殆んどその一生涯の生活様式までも決定づけられた程の衝撃を受けたが、フサ子は自分許りでなく同一程度の悲運乃至、自分よりも一層悲惨な境涯、或は無惨に殺戮された多数の同胞を見聞しているのと、人妻であった為と、又一方自分の遭難は止むを得ぬ敗戦の犠牲という理解と諦めがあった。

灰色の煉瓦建は左右二室に分れ、その中間の土間の表ドアの室内ドア側左右にあるオンドルの焚き口の下の底の浅い大釜の一つには煮立った大豆油に塩を投じ、九人の男に取囲まれて、生体解剖された夫の細断された手足などがゴツチャになって燂められ、水を加えて煮え滾り、梁に懸けた鉤には、縞目を見せた夫の桜色の肉の大塊がブラ下っている。

斯んな状景を見せ付けられたフサ子は、菊江が男性の精神加虐に、より深い興味を催す傾向が強いのに比べると、単純な男性の肉体に加えられる残虐を悦ぶ性情に自覚していた。切断された四肢や頸部から噴出したドス黒くさえ見える静脈血の海に、はつきりした鮮紅色の動脈血の紐の目覚めるような色と輝きはフサ子の情欲に油を注いだ。

形而上、形而下の比重の差こそあれ、二人の男性憎悪、男性加虐の慾望が一致していたことは、二人の友情を倍加した。尚、斯んな経歴と環境と性向の兩人が、互に引き付けられ愛着するまで発展したことは自然の成行きと見てよからう。

愛は盲、というけれども、菊江のフサ子に注ぐ愛情は、そんな浅薄なものではなかった。

独裁社長として、繁忙な一日の業務を終えてフサ子の同居する我家の表ドアをノックする菊江の弾む心は、新婚の夫が留守居の新妻の懷に帰る場合と寸分違わなかった。

婆やの御給仕で夕食を共にし、食後の一時間を語らい慰め、励ま

し、物心両面に細い配慮を加えるのは、菊江の最上の楽しみとなっていた。

フサ子と同居二日目に、居間のソファは物置に藏い込まれ、それが再び居間に持ち帰られるのに二カ月を要した。寝室は別にした。フサ子を女性社員会に紹介する迄の三カ月間は、朝食時の三十分間と夕食前後の一時間が二人が一日中で顔を合わせる時間割に計上され実行された。

女性社員倶楽部から帰郷した二人は、菊江のイニシヤチーブで、初めてお風呂に一緒にはいった。十五分前に這入ったフサ子が充分温まって浴槽を出て、菊江が這入って来ることに前以て打合せてあった。

菊江は、仰向で長々と浴槽に浸り、浴槽の頭部の縁に後頭部を寄せかけ、タイル張りの壁面に嵌込みになっている大型鏡に向って後れ毛を掻き上げている均齊のとれたフサ子の裸体の背後を舐め廻すような眼差しで見惚れている。

フサ子は、鏡面に映る、菊江の焼け付く執拗な視線に射竦められ、身内が何とはなしにムズ痒いような仄かな感覚、唇から足の裏まで、総身をそこはかとなく掻き立てられるような一種の圧迫感に捉えられ、その姿勢を崩すことさえ出来なくなり、後れ毛の仕末に過分の時間をかけた後、無意識に両手を顔に持つて行くと、心にもない顔面のマッサージを始めた。この時、フサ子は、バチャリと湯の跳ね返る音を聴き、浴槽の中で上半身を上げた菊江が、自分の身体の観察にとり掛った事に気附くと同時に、気恥かしさと慕わしさの入り混った情感が勃然と湧き出し、かつて経験したことのない得体の知れぬ情緒を呼び覚まれ、唆られ、揺ぶられ、遣る瀬ない錯雑した感情と感覚が一時に押寄せ、顔面の紅潮と動悸の亢進を覚えた時、今迄俯向いていた菊江の顔は上向いてニコヤかな笑を湛えて、鏡の中のフサ子を見て高らかに右手を上げて手招きする。

フサ子は、自分の秘め事でも見破られた想いで

「私が姉さんを見てたのを知ってたのね？」

菊江は朗かに笑って、

「でもその鏡は、そんな設計なのよ」

フサ子は、

「余り熱るから、身を冷してたんだわ」

と、半分は嘘をついて胡麻化した心算だったが、炯眼な菊江はこの可憐な羞かしがりやさんの心底に触れた思いで嬉しさが込み上げ「いい子だから、そのままじいっとしてるんですよ」と命令口調でサツと湯舟を抜け出し、フサ子をソウツと背後から両腕で抱いて、フサ子の上品な襟足のなだらかな曲線に唇を当てがった。

四つの眼がパツチリと、大きく開いて輝き光っていた。互の瞳をジーツと見交わした儘、二人はしばらく佇立して居た。菊江の瞳は慈しみと励ましの意味を籠め、フサ子のそれは、感謝と希望に生々としていた。二人の腕から四つの白い手が、二十本の白魚の指が絡み合い、しっかりと握り合された。無言の裡に二人は、不思議な絆が二人の身をがんじがらめに縛り合せていることを、改めて思い知らされたような気がするのだった。

菊江の指図で、二人はバスでサーツと汗を落し、パジャマを付け、ベルモットの杯を挙げ、フサ子とその寝室に帰らした後、菊江は明日の日曜日のスケジュールに一応目を通してから、深い平和な眠りに落ちていった。

一ワットのルーム・ランプは、満ち足ったいとも安らかな菊江の気高い彫りの深いプロファイルを仄かに照し、香わしく健やかな彼女の微かな寝息に夜は深々と更けていった。



アブ目八目

佐 渡 完

大阪の生野区で、二階で一人寝ていた二十才の娘さんを後手に縛り猿轡をはめ、剩さえ台所のガス管を切り階下の家族までガスで殺されんとして危うく難を免れるというショッキングな強盗事件が発生した。強盗など別段珍しくない歎かわしい当今だが、ガス管を切断した点が変わっていて、残忍な奴も有るものとその結末に興味を抱いていた処、一週間後意外にもこの娘さんの狂言であることが判明した。

厳格な父親に耐えかね家出を決意し、自分を後手に縛る(一部の新聞は前手となっていた)練習を何度も行った上、当夜計画通り金を隠したが、急に恐しくなり発覚するより、いつその事、家族を道連れにしようとガス管を軽便剃刀で切り、睡眠薬を飲み、猿轡を嵌め、手足を縛って転っているうちに、失神したものだ。

計画通り成功した時、新聞に出る自分の名を夢見て、誤ったヒロイズムに馳られたのだろうが、ともかく浅薄な思慮には呆れる。或はこの娘さん、KKの読者であったかも知れない、とすれば文献研究誌としてユニークな存在であるKKの真の目標を逸脱したものだ。何故ならば私達KKファンは、自己、又はそのグループのみによって健全なアブノーマルを愉しむ可きで、聊かも他人に迷惑を掛けるべきではないからである。況んや家族に

累を及ぼすが如きは邪道の最たるものである。本誌の読者には左様な方は居られないと信ずるが、敢えて老婆心から一言。

○ ○ ○

ある日曜日、回覧雑誌屋がやって来た。一カ月ナニガシかの料金を払えば、三、四冊の月刊誌が読める仕掛けのもの。差し出されたハガキ判の雑誌一覧表を見ると、Kクラブの名があった。さり気なく

「Kクラブというのは、知らん本やが、どんな本や」

と問うと、

「サア、どういふんですかね。ちよつと変った本ですナ」

この男、私の返事も聞かず、自転車の荷台に積んだ箱の中からKKの最近号を持って来た。俺はこの本の大ファンなんだといいたいのを、我慢して、さも珍しげにページを開いて見る。ユックリと仔細げに目を通してから「こんな、ケッタイな本を読む奴がおるんかいナ」

と返すと、男、ニヤリと笑って、

「それが多くて困る位なんです。持ってくるのが遅いと叱られる事なんか、ショッチュウですよ。特に奥さん方にね」

但し、三年前の話である。

○ ○ ○

昨年インドのネール首相が来日した際、ヒ

ンズ―教徒の健康法である「ヨガ」が話題を賑わせたが、最近仏文学で知られる矢野目源一氏の奥さんが、ヨガ方法による美容室を開設、美しくなる為には如何なる努力も惜しまぬ女性で眠っているそうである。この療法のいろいろな姿態はそのまま責めのポーズに通じる。逆海老責めは、背筋を匡正し、鉄砲責め（サド特集号「あの時の事」参照）は乳房の形を整え、海老責めはウエストを細め、胃腸を丈夫にするという。

マゾの女性にとって、この様に縛られることこそ、「趣味と実益」を兼ねた美容体操ではないか。

○ ○ ○

赤線の灯が消えて早や三カ月、これに伴う種々の問題が起っているが、売防発効以来、私は未だ旧赤線地帯に足を踏み入れた事が無い。何か世の中が味気なくなつた様に感じるので……といえども叱られるかも知れないが、私の場合はただセックス一途に遊んでいたのではない。想えば赤線こそ私の童貞を献納した処であるが、それよりも私の郷愁をかき立てる理由は、初めて女を縛つた処であるからだ。

酔いに任せて、強引に腰紐を抜き取って縛つて以来、「あんな、変態ね」と軽蔑の眼で睨んだ女、いやいやといいながら何時までも紐を解いて呉れといわず、終に朝までそのま

ま寝てしまった女、「アタシ興奮したワ」と後手のまま唇を寄せて来た女、「痛い痛い」と泣き出した女、「明日キット来てね。ロープを買っておくから」とソット耳許で囁いた女……など、様々な想い出が脳裏を点綴する。お世辞にも美人といえる女は一人もいなかったが、女性はマゾであるというこの道の原則を身を以て体験し得たことが大きな収穫だった。

ともあれ、赤線の消滅によって私の欲望は一時中断されている。しかし対処すべき秘策を、廻らしていることは勿論だ。古諺に曰く「古きを訊ね、新しきを求めよ」と。

○ ○ ○

大江健三郎氏の小説「死者の奢り」に解剖室の死体貯蔵槽が描かれている。不気味な死体が水槽の中を浮き沈みしている光景を、見事なタッチで描写している。大江氏が全くのフイクションでこの小説を書いた事を知った時、この人の才能に改めて感服したものだ。仁木悦子氏の「猫は知っていた」にも解剖室が現れる。映画では、ポツリ、ポツリと流れ落ちる水の音が、どんな音楽よりも優れた効果を出して、あのシーンをスリリングなものとしていた。私は解剖室―死体―責めを結びつけて見た。

奸計を以て捕えられた若く美しい女性が気付いた時、彼女は裸に剥かれて、解剖室に

監禁されていた。解剖室の一隅には、沢山の女性の死体がアルコールに漬けられている。しかも縛られたままで。この死体は何れもこの殺人鬼により責め殺されて、縛られた姿で貯蔵され、死後もなお、縛られているのである。この恐ろしい光景に彼女は再び失神し、冷たいタイル張りの解剖室に倒れる。そんな彼女を窓から眺め北叟笑む殺人鬼。おぞましい縛られた同性の死体と同居させられる彼女。次に来るものは、殺人鬼の奴隷となり、凡ゆる責め折監に遂に息絶えて水槽の死美人の仲間入りすることだろう。その時、又しても哀れな新しい犠牲がこの殺人室に拉致されて来る……。

小説なんて、とても私には書けそうにない。土路草一氏にこんなアイデアで書いて頂ければ幸甚である。

○ ○ ○

映画「暖簾」で「辰平が苺取りにいて（行つて）、ババしたとこやで（ウソコした所だよ）」という台詞が飛び出して驚かされた。きたないといわれる大阪弁の中でもこの「ババ」は、非常に卑猥なものとされており、私なども、幼時この語を口にしては母親にコッピドク叱られたものだ。それにしても、このかくわしい固型物の名が、こうもズバリと映画に現れたことは、恐らく最初ではないだろうか。

忙しい人間にとって、他人の目から解放され、静かに思索を廻らすことの出来る場所はトイレである。トイレに入っている時、良いアイデアが浮ぶという人もある。誠にオーストリア時代の現代と中世紀を問わず人々のオアシスである事に間違いないと考える。人の目に付かない処、又人には見せてはならない処を、人に見られる時に人間は嫌悪を感じ、或いは責めの要素となる。前者は病時であり、後者はいうまでもなく、先人が屢々KK誌上に発表されている排泄の強要である。病床で看護婦に便の処理をされる筆舌に尽し難い羞恥。衆人の環視の中で排泄を見物される屈辱。共産党の野坂参三だったか徳球だったか、戦時中の獄生活で、後手錠のまま用便させられたという手記を読んだことがある。

今朝、トイレでこんな事を考えながら、現在の私は限りなく幸福だと思った次第。

臭い話の後で恐縮だが、もう少しご猶予を願いたい。

夏の夕、仕事から解放されて飲むビールの味は正に醍醐味というもの。年々女性のビール党が増えて、ビヤホールに華やかな彩どりを添えている。「タバコは動くアクセサリー」と専売公社が盛んにPRしている処からみれば、今夏あたり大蔵省が婦人を対象としたキヤッチフレーズを生み出すかも知れない。

女性の喫煙、飲酒の当否は浅学の私の関与する処ではないが、飲める女性にとって最大の悩みは生理的現象ではないだろうか。男なら前を展げて、所構わず（デモないが）シャーツとやればよい。「ナアニ、ビール位小便すれば終いだよ」と嘯く野郎共の如何に多い事か。日本には公衆便所が少な過ぎる。ターミナルにあるのは悪臭が鼻につき、夏など前を通るのもイヤになる位。おまけにその便所の水がラーメン屋のダシに化するそうである。

清潔な公衆便所が増えれば、女性は心置きなく？ビールを愉しみ得る事になるだろう。又若い女性のアルコールの交った尿は精製されて、ある特殊の秘薬になるそうだ。大蔵省並びにビール会社に申上げる。公衆便所を増設せよと。さすればビールの売上げはグンと上昇することだろう。

風と桶屋の話のようで、失礼致しました。

サックドレスが流行している。サックドレスといえば体裁は良いが、何のことはない妊婦服だ。田舎から東京へ出て来た人が東京は何と孕み女の多い処だろうといった……という笑話さえある。サックといえばルー・デ・サックとコンドームを思います。今はあのゴム袋の様に透けて見えるサックドレスが街を闊歩するかも知れない。そうなれば私のサッ

クドレスに対する不満は一気に吹き飛ぶだろう。……冗談は抜きにして。

夏、それは女性にとり、天与の肉体ラインを誇示すべきシーズンである。男性は、これを眺めて満悦するシーズンであると私の辞書にある。然るに今夏は不粋なものが横行して、男性の目の保養は幾分減じられた。乗物の中で前に立った女性をシゲシゲと観察するのはヨキものだ。腕の大きな疱瘡の痕を眺めたり、豊満なバストを見れば、あのオッパイをくびれる程縛り上げた……と不逞な考えを起すこともある。逆に感心しないのは、腋毛、あれはどうもイケナイ。生れてこの方、一度も手入れをした事がないだろうと思う様なシロ物を見ると、暑いのと両方で頭が痛くなる。近頃のグラマー写真の女性は皆誇らし気に生やしている。私の趣味に合わないが、グラマ―たる一要素とあれば詮ない事と諦めている。ただ一般の善良なお嬢さん方はお止めになった方が宜敷しい。私の様な紳士ばかりなら良いが、夏向きは殊に痴漢が徘徊しているから、呉々もご注意遊ばされるのが無難。……なんて言ったら、防犯課がスポンサーか？と思われるかも知れないが、どう致しまして、私が紳士なればこそその御注意。繰返して申し上げる。善良なお嬢さん方よ、夏向きは殊にご注意遊ばされるのが無難。

麻生保氏の生活と意見

(八)

麻 生 保

マゾヒズム四つの楽しみというのがある。

一、奉仕する楽しみ（靴や着物の脱着を手伝うなど無論のこと、あらゆる奉仕が含まれる）

二、罰せられる楽しみ（鞭打をはじめ、その他あらゆる（主に）肉体的苦痛を与えられる事一切）

三、侮辱される楽しみ（ムズカシク言うなれば、成人権のハクダツ、人権の無視。易しく言うなれば馬や犬や、更に便器その他の道具にされたり、その他ドミナの気まぐれによるモロモロの辱め、エトセトラ。主に精神的

苦痛）

四、嫉妬させられる楽しみ（……「ヴァンダ！」私は両手の拳をにぎりしめた。が、涙がもう私の眼にたまってしまった。そして甘美な狂気に捕えられたように熱情の錯乱に落ちていった。「結構ですね。彼をあなたの御亭主に定めなさい。彼を主人にしなさい。しかし、私は生きる限りあなたの奴隷でいます」……）

さて今回は、この第四条について少し考察する事にしよう。

コキユという言葉がある。言うまでもなく

「ねとられた夫」の意であるが、これはいささか滑稽味のある言葉なので、少しも悲壮（？）な意味はない。大体、コキユ諸氏は、およそ堂々としていないものと相場が決まっている。妻が情夫や燕を持っていたりも文句一つ言えず決斗を申込むなど思いも寄らずメソメソ泣寝入りしているダラシのない（通常の意味で）男性の事である。さて、そこで論理が飛ぶし、我流な解釈になるかも知れないが、コキユ諸氏は、嫉妬に日夜モンモンとしながらも、心の奥底のどこかで、そういった哀れな自分を楽しんでいてのではないかと言う気がするのである。十人が十人そうだとも思われないが、少くとも半分はそういった気持を理解しないでも無いだろう。そうでなければ、コキユが、かくも世の中で嘲けられ、笑いものにされ、茶の間の話題や更に小説の材料になっているわけはあるまい。また、彼等の浮気な美しい奥さん達は、亭主のグウタラ性を見抜いているからこそ、コキユにしてしまうので、言いかえれば彼等には、コキユ的素質があり、又、例外もあるうが、それはビエロ的、幫間的なものに通じ、あらゆる意味でのマゾヒストの要素と通じる場合が多いように思われるからである。

「痴人の愛」「幫間」「毛皮を着たヴァイナス」皆、厳密な意味でコキユではないが、「嫉妬の楽しみ」を見逃す事は出来ないし、多くの

マゾヒズムを扱った文学作品は、ここに重点を置く場合が極めて多いように思われる。

さて、「週刊大衆」七月十四日号の「風流随想」の、松尾邦之助氏のエッセイは、これと関連して興味深いものだった。それは、その昔といっても大正末期の「改造」にのった武林無想庵の「コキユの歎き」と題する短編の事である。松尾氏の紹介によると、この恐るべき自己バクロ作品は、この種の文学(?)中最大の傑作なる由で、自分自身のぐうたら根性をよくこれだけメンメンと書けたものだと仰言る。

これは、若い情夫と公然同棲している妻を恋い慕い、いやがる妻に泣いて懇願する男の告白文なのである。「……妻はいやがった。治郎左衛門に対する八つ橋のようにしてまでいやがった。そうして、いやがられればいやがられる程、私は桜姫に憧れる清心のようにしてまでつきまとった」そのうち彼の妻は、ある日どうした魂胆なのか、湯殿で彼を待っている、ひともあるうに彼女の情夫からいわせる「湯殿! わたしの全身の血は一時にサツとよみがえった。妻の心の底には、まだ私と二人きりで、天真らんまんに相對してぐれるだけの無邪気さが失われずにいたのか。そう思うと私は、妻に面目ないような心持になった。何という私の渴慾の痴愚さであろう

! 私はドキドキ胸をとどろかしつつ湯殿の戸を叩いた。と、戸は内部からすなおに開いて、立ちのぼる湯気にふうわりと包まれたバラ色の水々しい妻の肉体が、たちまち燃える私の瞳孔を射た。私の体がブルブルとふるえた。体中の血がサツとみなぎって、われ知らず大タオルに包まれた彼女のしなやかな体をうしろからギョツとだきすくめた。すると彼女は静かに、私の手をはずしながら『わかつてるよ……わかつてるけど、あたしは意気地なし大きらい……』と、だっ子でも教えさとするように言葉やさしくなだめすかし乍ら、妻は手早く着物をきて、さっさと外へ出てしまった」こうして、この哀れなコキユ氏は、湯殿の中に一人淋しく残され、シャボンと妻のからだの垢の浮いた浴槽の中で、半年の間しかたなく抑制していたものを、もてあましてながら考えこんでいるのである……。

どうです。一寸イカスではありませんか。コキユ氏は、それから恋しい彼女の垢の浮いた浴槽の湯を飲んだかどうかは、麻生氏の関知せざるころではあるが、その様に想像する向もあるかも知れない。

ここで一寸思い出すのは、あの有名な、マゾホの幼少の折の話である。幼い彼がかくれん坊をして、彼の伯母にあたる伯爵夫人の部屋へかくれていたところ、夫人が情夫と共に入ってきて、よろしくやる。そこへ夫の伯

爵がやってくるや、夫人は怒って伯爵に平手打を喰わせる。それから先は御承知のとおりであるが、何はともあれ、自分の奥さんが、情夫と逢っているところへふみ込んだら、奥さんが怒って亭主がひっぱたかれたというのは、如何になんでもヒドイ話である。どんな嫌天下だったか知らないが、明らかに通常の意味でノーマルな夫婦関係だったとは一寸考えられない。伯爵夫人の印象が、幼いマゾホにとつてどんなものであったかは、よく知られているが、そればかりでなく、伯爵の日常、それから夫人と、伯爵との関係を見聞した事も、後年の大マゾホを形成するのに、多くあずかっている様に思われる。とに角この伯爵もまた、コキユであり、マゾヒストであったのではあるまいか。

さて、ここで麻生氏は、これ等の問題と関連して、最近に於ける氏個人の体験を語る事になった。

麻生氏は数カ月前に、素晴らしいドミナを見出した。美しく、発洩として、品がよく、しかも恐ろしく驕慢で、全く麻生氏の理想どおり。氏は有頂天になって、彼女を崇拜し、彼女に仕え、どんな犠牲をもちとわなかった。彼女のきまぐれな買物のおともをして両手に持ちきれない程の、荷物を持たされる事など序の口で、雨上りのぬかるみへ、麻生氏は自分のレインコートを敷いて彼女の通り道を作

った事もある。また、ワンダとセヴェリンの
ような仕方、即ち麻生氏が彼女の下男か、
書生という格で二、三日旅行を試みた事もある。
汽車でも彼女は特二、麻生氏は三等、ホ
テルでも同様であつて、同室するなど以ての
外である。無論、麻生氏の行動が少しでもお
気に召さなければ、彼女のしなやかな手は直
ちに麻生氏の頬にピシリと鳴った。そうして
そういった事が少しの無理もなく白々しい芝
居にもならず行われてきた。麻生氏は幸福だ
った。全く神話に生きている気持だった。と
ころが、最近彼女の態度が変化した。彼女は

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分
譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデ
アを広く皆さまから募集いたします。内容
はどんなものでも結構です。採用の分には、
原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを
贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の
上、編集用のフォトを贈呈いたします。出
来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の
添布をお願いします。

(編集部)

麻生氏を愛するようになってしまったのであ
る。これは氏にとっては、苦しい限りであ
る。それまでは、彼女は常に多くの男友達を
とりまきに持っていて、お互にけんせいし合
うようにさせ、麻生氏にはいろいろと嫉妬さ
せて面白がっていたが、最近麻生氏に「あ
なただけよ」といった言動をみせるようにな
り、あげくの果に「私、きつと貴方のいい奥
さんになるわ」などと言ひ出すのであつた。
以前には麻生氏が彼女の前に跪き次回の謁見
を懇願しているのに、冷い横顔を見せながら
ソッポを向いて受け流したり、焦らしたりし
ていた「女王」が、今や、熱っぽい瞳で麻生
氏をみつめ、氏のネクタイをまさぐり乍ら、
「ね、今度いつ会える」などと息をはづませ
乍ら言う「女」に変身した事は堪えられない
のだった。氏は全く途方に暮れた。どうして
いいかわからない。氏は仕事にかこつけて、
彼女を避けた。するとジャンジャン電話がか
かって来る。「ね、五分でいいから会ってち
ようだい」と言われた時、麻生氏は、これがつ
い二月ばかり前までの彼女の言葉かと、電話
器の前でわれ知らずポタポタと涙を落した。
今や彼女に他の男を愛させるより仕方ない。
氏はコキユを志願した。麻生氏は、いつか彼
女が麻生氏の家へ来た時に居合せ、すっかり
彼女に惚れてしまった従兄がいる事を思い出
し、改めて引合せる事にした。ある日の夕方

三人は一緒に銀座でお茶をのみ、麻生氏は上
機嫌の従兄と、浮かぬ顔の彼女を残して帰っ
た。その晩、氏はベッドに反転し乍ら、久し
ぶりに嫉妬の楽しさを満喫した。然し、この
計画は美事画餅に帰した。数日後、従兄から
麻生氏の許へ絶望的な電話がかかって来た。
その後もう一度デイトしたところ、ひどいヒ
ジテツを喰ったと言うのである。麻生氏の受
話機の向うで、泣かんばかりの従兄の声をき
き乍ら、硫酸でもぶっかけてやりたい程の嫉
妬をその従兄に感じたのであつた。

教訓 三角関係ニ於テ、三人トモ失恋
スル事がアリ得ル。

女ガ美シクアルタメニハ、男ヲ愛シテハナ
ラヌ。男ニ崇拜サセナクテハナラヌ。女ガ男
ヲ愛スルノハ、げびた事デアル。

◎新版マゾフォト◎ 分譲

第一組 凌辱篇 略号(ま1)

大中判印画紙焼付五枚一組七百円

第二組 屈伏篇 略号(ま2)

大中判印画紙焼付五枚一組七百円

第一組、第二組共、いずれも特に春日ル
ミ女史を煩し、マゾモデルには愛読者某氏
を配して特写しました本格的なマゾフォト
です。

体験記

バー「ナナ」の人々

(第四回)

南 時 夫

四、マダムの話(つづき)

トイレの中で吊り下げられていたミスズの無惨な姿を目撃してから、私はミスズの体内にマゾの血が流れていることを知りました。もっともその一回だけでは、これだけの想像をするのも難しいことですけれども、その後、王己もミスズも、私に知られたと思ったからでしょう。私に遠慮することなくその様な行動をする様になって、段々と分かってまいりました。ただミスズは不思議な娘でして、男の様な素振りも、言葉も、荒々しい態度も一向に変らないし、縛られた場合も同じでした。

なんと申しましようかしら、生れつきのマゾではなく何かの事情によって縛られ責められなければ満足出来ない娘の様でございます。詳しいことは二人からお聞き下さいませ。ただそんな風なので、縄を掴んで取組み合いをしている二人が、うっかりすると力に勝るミスズが王己を押えつけてしまうこともあって変な具合になることもございます。王己がミスズを縛るときはミスズにウイスキーを飲ませて或る程度身体を自由をきかなくさせてから、素速く縄を掛けてしまうことも分りましたが、その様にしない限り、素直に最初から手を後ろに廻すことはしないミスズなので、

これを本当のマゾと呼んでよいのか分りません。私のつたないお話の最後として、この二人の逆になった場合を一言お話し致しておきましょう。

ばたんばたんという音に、又二人でやっているなと思いつつも、私がトイレに起きて階下に行き二人の部屋の前を通ると、中からミスズの声で、

「ママー、一寸来てよ、今日は王己をやっつけちゃうんだー」

という声がします。私が部屋を覗くと、なんと、あの太い股でミスズが王己を押えつけて上に乗り掛っています。ミスズは相変らず

あられもないブラジャーとパンティだけの姿。組敷かかっている王己は、お店に出ている時の純白のナイロンブラウス、水玉模様の可愛いフレンチスカート、ナイロンストッキング、緑石イヤリングにネックレスの姿そのまゝ。王己はミズズを縛り上げてからゆっくり着換えをしようと考えたのでしよう。それがどう云うはずみか逆にミズズに押えられてしまっているのです。ナイロンストッキングに包まれた両足をばたばたさせながら何か云っています。私も何か狐につままれた様な気がしてそこに立っておりまして。

「早くその縄を取って！ 今日少しミズズ、ご気嫌が悪いんだから。王己の奴く、ちやうんだ。暴れたって駄目さ」

私が黙って立っていると、ミズズは押えつけた王己を引きずりながら縄を掴むと、今度は王己の身体をうつ伏にしてその可憐な両腕を背後にねじ上げました。ミズズの劔幕に私もただ見ているだけでございます。後手に縛られ引き起された王己は、その縄を胸に廻されると何重も縛られ、大きく肩で息をしています。王己の縛られた姿は、私やミズズの場合と違って全く絵の様な美しさでした。なんってお話すると私までサジストと思われそうですけれど、何かその時そんな風に感じたことも確かでございます。

高手小手に縛しめられ最早抵抗することも

出来ず、今まで全て逆の立場に立たされた王己は、下を向いたまま黙って座っているばかりでした。私はふと可愛想になり、

「ミズズちゃん、いい加減に解いてあげなさいよ」

と云いました。でもミズズは

「ママったら、いつもこの王己にいじめられてるんだろ。今日は二人でゆっくり仕返ししてやらなくっちゃー」

と云うと乱暴に縄尻を取ると、王己を引き上げ無理矢理に立たせました。王己はよろよろと立ち上りかけますが、私達を縛っている時の元氣はどこへやら、恥しそうに首をたれたまま又坐ろうとします。

「さあー立つんだよ。お店を一廻りしてくるんだから。歩かないとお尻をたたくからね」

ミズズはそう云うと、無言で厭がる王己を物差で追い立てる様にして歩かせ初めました。時々立止ろうとする王己の後ろから、びしり、びしりと本気で叩くのです。ミズズの男の様な力で叩かれ王己はその痛みに顔をしかめて歩き出しました。縄尻を掴まれているので逃げるわけにはゆかず、面白がって縄尻を引張り、王己がよろめくところを物差で叩くのですからたまりせん。とうとう王己は「痛い痛い、ゆるして頂戴」と泣声を上げました。マゾもサジも紙一重のことで、ましてミズズの場合は本来的な受身のマゾでなく、ど

ちらからと云えばそのタイプからはサジステックなる面もあるあとなので、王己の泣声を背にするや、一層血の気も嵩まってきたのでしよう。あつと云う間もなく、自分のぬぎ捨てたストッキングを王己の口に噛ませ、唇が裂けるかの様にひどく縛りました。猿ぐつわを嵌められた王己は、叩たかれる度に悲痛な呻声を上げて引張られてゆきます。私は何かもつと見ていたい様な気持と、王己が可愛想でならない思いとでまだ黙っておりまして。

「うーうーうー」

「どう、自分が括られてみてやっとなんた。いつも人をいじめてばかりいるからこんなことになるのよ。何んとか云ったらどう？」

「うーうーうー うーうー」

こうなるとミズズの一人舞台でした。王己は引廻しの哀れな罪人の様に、美しい顔をゆがめ、着かざった服装のままブラジャー、パンティだけのミズズに追い立てられる様にして、二階のボックスの方まで歩かせられてゆきました。令嬢風の王己が荒々しく括り上げられた後手を見せながら、階段を一步步とよろめく足取りで登ってゆく有様は、時刻が時刻なので物語的な哀れさでございました。こう云ったシーンが何か映画の一場面を思い起させます。誘拐されて来たヒロインと犯人の情婦。二人の演技(?)は、それぞれ適役

であり、真に迫っていました。映画ではこう云う場合、間もなく、勇敢なるヒーローが現れ、王己を自由にするのでしよう。けれども今はその期待は全くありません。私は適当に二人で遊ばせておけば、間もなく止めるだろうと思ひながらトイレに入りました。間もなく二人は二階から下りてまいりました。相変わらず物差で王己のお尻をびしびしと叩きながらミスズは

「ママ、裏の物置に行つて、在るだけの縄を持ってきて！ 王己をぎゅうぎゅうの目に会わせるんだから。さ、早く！ 持ってこないとママも縛っちゃうから」

と、早く早くと言います。それを聞くと、王己は不自由な上半身を藻掻きながら猿轡の中で呻きました。多分、もうやめて頂戴！とでも叫んだのでしよう。逃げようと縄を引張りますが、ミスズに縄尻を掴まれているのでどうすることも出来ません。私も自分が縛られているより余計に何か可愛想になつて、ミスズの言葉にも、直ぐには応じませんでした。でもミスズの気が済めば早く止めるだろうと考え、物置に行つて麻縄や荒縄の細いのから太いのまで持つて来てやりました。私のことを王己はさぞ恨んでいるだろう。私はそう思ひましたがこうなつては仕方がなく、猿ぐつわで口のきけない王己を、ミスズの言うままにお店の中央にある柱に縛りつけること

を手伝いました。後手に縛つてあるので簡単です。柱を背にまず荒縄で胸を柱ごと何重にも力一杯縛りつけました。荷造りする時の荒縄なのでたまりません。余程痛かつたのでしよう。今迄とは違つた悲痛な呻き声を上げながら顔をしかめ、今にも泣出しそうな眼をして、王己は私達二人を見えています。今まで自由だった両足も、股、膝、足首と麻縄で丹念に縛り合わされ、それもそのままコンクリートの柱に巻きつけられました。その時、気が付いたのですが座敷から下におりるとき、ミスズは王己に御丁寧にもハイヒールをはかせたらしく爪先の開いた王己によく似合うハイヒールも左右びたりと揃つたまま縛られました。最後に太いロープで首まで柱に括りつけられると、もう王己はコンクリートの柱を背負つた一本の棒の様になつて身動き一つ出来なくなつてしまいました。華やかな洋装のまま爪先から首まで嚴重に縛りつけられてしまつたのでございます。身体と柱との間に挟まれた後手はさぞ痛いことでしょう。私の経験からしても、もう痺れてしまつてゐるかも知れません。荒縄で強く縛られている胸は、着ているものがナイロンブラウスなのでその圧迫は余計に強く、息遣いの荒々しさが縄による肌の喰ひ込み具合によつてよく分ります。縛られて自由を失うと云つても、柱に縛りつけられた時程、束縛の完全なものはありません。

ん。私も、背に抱く様にして柱の後ろで両手を縛られたことがございましたけれど、手首だけの縛りでも既に身体の大部分の自由が失われてしまうものです。それが眼前の王己の様に、この急所々々に縄を掛けられていれば、どんな事があつても絶対と云つてよい程、自力で解くことは不可能ですし、藻掻くことすら出来ません。

「さあ、出来た！ これで日頃のうっぶんが晴れそうね。ねえ、王己ちゃん、どう？ 縛られ具合は？ あんた、縛られたスタイル、仲々素敵じゃない？ 一寸猿轡が貧弱ね。縄が殺風景だから、少し派手なのと——」

ミスズはこう云ひながら座敷の方に何か取りに行きました。

ミスズが一寸座敷に行つたその間、私は王己の前に立つていました。私の気持も複雑でした。早く自由にしたいと思ふ気持と、こんな事もたまにしかないのだから、王己のこの様な姿をゆっくり見ていたいと云う気持。この様なことを知らない以前の私だったら、どんなことがあつても直ぐ王己の縄を解いたでしょう。王己によつて縄の味を知らされ（と云つても何もその味の悪い悪いは別でございませう）た今は、王己を解放することの決心もつきかねました。一寸の間、私一人になつたのを見た王己は、首から下は動かさないで顔を僅かに振りながら、私に必死に何

か言おうとしています。
「縄……を……といて！ 胸……胸……が苦しい。
た……すけ……てー」

口を割って歯に噛ませた猿ぐつわなので少しゆるんだのでしよう。王己の不明瞭な言葉が聞えて来ました。眼を見ると涙がたまって



います。いつも自分が縛り手になって私達を苦しめていることから、余程のことでないとした様な言葉を云うはずがありません。我慢出来なかったのでしょうか。舌によって突張っている中に、少しずつ緩んで来た猿ぐつわは次第に王己の声をはつきりさせてまいりました。

「早く！ ミスズちゃんの来ない中に胸の縄だけでも解いて！ お願い！ もうゆるして！……」

私も、黙っていられなくなりました。王己の胸を極度に圧迫している荒縄の結び目に手を掛けて解こうとした時です。

「ママ！ まだ早いわよ。そんなことしたらママも同罪よ。もう少しやるんだから」

手に真紅のデシンのマフラーを持ったミスズでした。

「でも、もう止めましょう。王己ちゃんも痛がっているし、苦しうだから、早く解いてあげたら？」

私は、こう云って荒縄の結び目をさがしました。すると

「駄目々々、そんな事すると、ママも縛っちゃうから！ いいわねー」

私はミスズに左手を掴まれ捻じ上げられました。あわてて振りほどこうとした右手も背後に廻され手首を合わされました。

「私まで縛るの？ 又今度縛られてあげるか

ら、今晚はゆるして下さいな」

私は半ばおどけた様に言いました。でも、ミスズは私の手をそのまま掴んで、落ちていた麻縄を取上げると

「ママは特別に痛くない様にしておけるからおとなしく縛られな。その方が王己も喜ぶんだから」

と云うなり、とうとう私まで縛りました。

私は、後手に手首だけ縛られると、もう王己に手出し出来なくなり仕方なくそこにあった椅子に腰掛けていました。

「あら、この人、泣いたの？ 人をさんざんいじめておきながら弱虫！ まだまだ駄目よ、猿ぐつわがゆるんじやったのね。さあ嵌め直し……」

王己は、ミスズが現れてからは押黙っていました。矢張り「ゆるして」と、まともに言うのが辛かったのでしょう。ミスズのされるままに口を開け、ハンケチを押込まれると、前と同様に歯の間にストッキングを噛まされ、今度はその上から、僅かに鼻にかかる位にデシンのマフラーで覆われ髪の毛の後ろで縛られました。真紅の布を口にとった王己の顔はアラビアンナイトのお姫様の様でした。無残に口を割られたままの猿ぐつわよりも口と鼻又は口だけでも一枚の布で覆った方が美しく（？）見えます。ミスズの様に厚化粧の顔ではなくとも、整った可愛い顔立ちの王己なの

で一層その事が云えます。黒いひとみが強調

されて、私は自分が後手に縛られていることも忘れて、王己の顔に頼りたいた程でした。王己としてみればそれどころではありません折角緩めた猿轡を再び嵌められ、今度は鼻にまで掛っているのですぞ息苦しいことでしょう。でも王己はもう呻くこともなく首を垂れたまま死んだ様になっていました。

「あたし、ウイスキーが飲みたくなっちゃった。ママ、いいわね？ この分、私が払うから少し酔っぱらわしてね」

カウンタからウイスキーの瓶を取り出すとグラスに注ぎ、王己の前のテーブルに腰を掛けミスズは飲み始めました。ミスズの酒量はそう強い程でもなく、又、二・三杯で参るわけでもなし、こう云う女給商売としては普通でした。同じテーブルにいながら私は後手になっていたので、どうすることも出来ません。

「ママも付合わない？ 王己は口に蓋をしちやったから駄目ね……」

私は首を横に振りました。

「じゃ、一人で御馳走になるわ。ママも動けなくしとかなきや、又王己に同情するから油断出来ない……」

ミスズは独り言の様にこう云いながら、私の両足首を縛ろうとします。

「そんな事しなくとも大丈夫よ。手が動かな

いんだもの」

私がこう言うのを構わず、とうとう足首を揃えて縛られてしまいました。両手首を後ろに、両足首を揃えて縛られたまま私は座っていました。手首と足首だけの縛りなので私自身としては別に苦痛ではなく、ただ足を縛られてしまったので動けなくなっただけでした。その時ふと王己の眼を見て感じました。

明らかに王己の眼は興奮しているのです。自分だけが痛々しく柱に縛り付けられたときは苦しみそのものの眼でしたけれど、眼の前に縛られて座っている私を見た時、サジの血が湧いて来たのでしょうか。ミスズが「ママも縛られると王己が喜ぶから」と云った言葉も適中した様でした。下を向いていた王己も顔を上げ、猿轡の上からのぞいている黒い瞳でじっと私を見えています。王己にしてみれば、私のこの簡単な縛りは物足りないことだったと思います。

「あ——酔った、酔った。とても気持ちいいな。ねえ——王己サン……いい気持ちだわ、捕われの美女……か、ねえ——何んとか言ったらどお」

この異様な場面と、ウイスキーとにすっかり酔ったミスズは、グラスを片手にふらふらと立上り、王己が縛りつけられている柱の前に行くところから始めました。度を過ぎると絡むくせのあるミスズです。私は心配にな

りました。

「ミスズちゃん、余り飲まない方がいいわ。明日のこともあるし。一寸この縄を解いて頂戴」

私の言葉に、今度は私の方に向き直り

「ママ！ 飲んじや何故悪い？ 今日のお勘定は私がつんだから黙って！ うるさいこと言々とママも猿轡嵌めちゃうから……」

……寝るときには寝るからさ。……」

と絡んで来ます。手足を縛られている私は無力でした。ミスズは可成り酔ってしまった様で吐く息も荒々しく、ブラジャーとパンティだけの裸体も桜色に染っていました。よたよたとした足取りで王己の前に立ち、縄の余りで目茶々に無抵抗の王己を打ち始めました。酔った勢でびしりびしりと打つ様は何かに憑れた様でした。太いロープ状の縄で力一杯打つのでたまりません。初めは呻き声も立てずにミスズの狂った様な乱打に身を曝していた王己も、やがて真紅の猿轡の下から呻き声をあげ始めました。ミスズの振う縄尻の乱打から身を避けようとするのですが、ぎりぎりと縛られ柱を背負った身体ではどうすることも出来ず、王己の意志に反して僅かに顔を左右に振るだけでした。荒縄で縛られた肉体の縄と縄との間にぶつくりと盛り上った部分に、びしりびしりと縄の鞭が当たります。その度に苦痛に顔をしかめ、乱打が激しくなるに

つれて動かない全身を波を打たせ、無理にのけ反らして括りつけられた縄を引張ります。それにつれて更に縄は肌に喰い込み、苦痛を増す。私は眼を覆いたくなりました。二人の間に割って入るうにも足首を縛られた身では歩くことも出来ません。

「う——う——うううう」

断続して聞えてくる王己の呻き声、それはもう呻き声というものよりも唸り声でした。

顔を上向きにのけ反らすので、猿轡の布が余計に頬に喰い込みます。ミスズも疲れたのかやがて手を止めました。王己は、ぐったり柱に繋がれた縄に身をあづけ、前のめりになっておりました。

「ああー眠くなっちゃった。ママ、私寝るから後は宜しく頼むわ」

ミスズは、ふらふらと私達の側を離れ、座敷の方に行きかけました。私は驚きました。このままミスズに行かれたらどうなるのだらう。

「ちよつとミスズちゃん。このままじや困るわよ。私の手をほどこいて！ 後はいいからこの縄だけ解いていって——」

私はミスズに背を見せ、縛られた手首を突き出して必死にこう言いました。なんとしたもこの際早く解いて貰わないと困ります。手をばたばたさせてミスズを引止めようとした。がミスズは、ただ「眠い々々」と言い

ながら、とうとう部屋に入ってしまった。あのお酒の量で寝込んだら余程のことでもなければ起きないでしょう。或は翌日の昼過ぎ迄も寝ているかも知れません。私はあわてました。後を追おうとしても歩けません。左程の緊縛でもないけれど、自分で素早くほどくことはもとより出来ない相談でした。このまま翌日まで放っておかれたら、そして誰かに見付かったら……。王己は死んだ様に前のめりになって顔もあげません。深夜、周囲は寝静つて物音一つしない時刻、バーの中に二人の女が縛られている。何かスリラー劇の一駒の様でございます。強盗に襲われた姉妹。そんな新聞記事が思い浮びました。でもいくら強盗でも、今の王己の様なひどい縛り様はしないでしよう。ミスズを起すことが不可能だとすると比較的緊縛の少い私が自力で縄を解くより他に手がありません。私も王己の様な目に逢っていたら、どんなことになっていたかと思うと、今でも怖しくなります。

私は手首を動かしてみましたが。麻縄が両手首に巻ついて案外嚴重に縛ってある様子。指を使って結目をさがしてみましたが、交叉した手首の上部にでもあるのか指には触れませんでした。突張ったり、こすり合せてもみましたが一向ゆるみそうにもありません。私は溜息をつき、本当にこれは大変なことになったと思いました。冗談から駒が出たと申します。何

んとかしなければなら
ないと思うと、余計焦
ってきます。でも二の腕
も縛られていないし、高
手小手に後手が吊り上げ
られていないので、痺れ
ることがないのが救いで
した。そうする中に王己
も顔を上げ私の方を見ま
した。ミスズが居ないの
を知ると、何か言いたげ
にします。

「王己ちゃん、一寸待
っててね。今ほどいてあ
げるから、ミスズったら本
当に困った子ね。でも王己
が私達に余りいたずらする
からこんなことになるのよ。
ウフフフ……」

私はこの場の空気を柔げ様
と、努めて笑いました。王己
は私一人になって気が楽にな
ったのか、相変らず顔をしか
めながらも泣き笑いました。
そして、王己も私達の立場を
意識したのでしよう。自分で
解く積りなのか急に藻掻き
初めました。でも王己の場合
は殆ん



ど動けません。高手小手に縛
られた身体を更に要所々々を柱
に縛りつけられてあるので、
超人的な努力をしても無駄な
ことが分ります。

「うううう、う——うう」
何を言っているのか分りませ
ん。王己も猿ぐつわだけでもと
うとうと顔を振るのですが、

どこかにこすりつけてはずすということも出来ない
ので、これも無駄でした。私
の手首も相変らず自由にな
りません。刻々と時間は経
ってゆきます。手首はあきら
めて足首だけでもと思い、腰
掛から立上りました。不自
由な身を折ってうずくまり
後手の指で足首の縄をさ
わってみました。ところが、
結び目は前にあります。私
は身をよじって、やっとの
思いで指を結び目に掛け
解こうとしました。手の長い
身体が柔軟な人ならいいの
ですが、私は小肥りの女で
す。後ろに縛られた手首を
前に廻すことはとても大変
です。私はあきらめ今度は
足首の痛むのを我慢して、
巻かれた縄を結目が後ろに
来る様に廻すことに努めま
した。きっちり縛っている
ので、これもむづかしいこ
とでしたが、足首の横まで
やっとう廻したのでそこに
指をかけ、とうとう足を
自由にしました。身体全体
に汗

をかきましたけれど、どうにか歩く自由を待たのでほっとしました。さあ、これからが大変です。ミスズを起そうか、それとももう一度手首をなんとかしようかと考えましたが、ミスズを起そうとしても無駄な様な気がしましたので、差当り王己の猿轡だけでも解いてあげようと思い、私の方をじっと見ている王己のところに近づきました。

「今、口の布をはずしてあげるから、出来るだけ顔を下にして頂戴」

私は王己に背を向け、後手を伸して王己の顔に指をかけようと思いますが、背が殆んど違わない二人なので、どうも私の指は王己の顔まで届きません。王己も極力背を低くしている様ですが、やっと私の指が王己の胸のあたりを触れるだけです。でも今はもう足が自由なので、私は色々な角度から手を伸し、とうとう王己の顔の下半分を覆ったマフラーをずり下しました。かなり強く縛ってあったのでそれも大変でしたが、爪先立った私は、猿轡の布と歯の間に噛まされた靴下を、首の方へ引きずり下すことに成功しました。

「ママ、すみません。私、本当に苦しかったの。ミスズちゃん、寝ちゃったの？ あんなに私をぶつといて、ひどい人ね。今度、うんとやっつけちゃうから……」

口紅が横にずれ、強く噛まされたため縞模様の入った頬を見せて、王己はそう云いました。

た。

「手が痺れちゃったし、身体を一寸でも動かすと痛い。ママ、早く何とかしてよ。……」

「私だって、こうして縛られているのよ。仲々解けないの……どうしたらいいかしら。」

「仕方がないから、このままで貴女の縄を解くわね。胸から上は駄目かも知れないけど……」

私は後手のままコンクリートの柱のもとにうずくまり、まず王己の足を縛ってある縄を解き、膝、太股の縄を解きました。後手のままの仕事なので大変な努力です。でも幾分慣れて、横眼で見ながら出来る様になりました。荒縄等の結び目を解くので爪がとても痛みました。腿を柱に縛りつけてある縄もやっと解いてほっとしましたが、首縄まで手が届きません。

「困ったわね。首を縛ってある縄は解けないわよ」

「いやねえ——縛らなくともいいのに……。首が縛られているんじや歩けないわ。何とかして……」

「じや——顎に掛けて少し下にずらしてみても頂戴。そうそう」

王己が首の縄を顎に掛け下に引ずり下ろしました。さすがに首を柱に繋いだ縄は、そう

強く縛っては無く少しづつすり下がり、私の後手に触れる程になったので私は又、指を使って解きました。これで王己は柱からやっと解放されたのです。上半身高手小手に縛められていることは変りなくとも、柱から解放されたことで王己も安心したでしょう。私もほっとしました。二人とも手は縛られていてもこれなら座敷に上って横になることも出来ます。

「ねえ、王己ちゃん、どうするの。このままお部屋で寝る？ それとも何か解きたい考えある？」

王己は、きびしく緊縛されたままの姿でよろめく足取りで椅子に腰掛けぐったりしています。縛られた二人が、なんとかして縛めを解こうと相談をしている。なんとサジスチックな場面でしょうか。

「こんな格好では眠れないわ。ママは慣れているでしょうけど……」

「何言ってるのよ——」

私は王己に縛られたまま疲れて眠ってしまったことを思い出しました。その正己が、夜の女主人が、今夜は私以上の無残な姿で椅子にもたれているのです。

「私のこの縛られ方を見てよ。ママは手首だけじゃない。私の方はもう全然痺れちゃって力が入らないから駄目。——そうね、じや、ママ、テーブルの上に後ろの手を乗せて、私

が口で解いてみるわ」

王己の言うなりに、私は卓の上に背中の手首を乗せました。王己の汗ばんだ顔が私の手に触れるのを感じると、やがて王己の唾液が手首に流れて来ました。必死に歯で私の縄目を引張っている様子。ときどき顔を離して

「案外固く縛ってあるのね」

と云っては又、鼻と口をよせて縄を引張ります。これは随分時間が掛りました。

「やっと一重になったから、手首を動かしてみて」

私は手首を猛烈にこすり合せてみました。初めは相変らずの緊縛でしたが、やがて少しずつ緩み、とうとう解けて二人とも大きく溜息をつきました。

「有難う。あなたのも解いてあげるわ。さあ、後ろを向きなさい。その前に、私をもうあまりいじめないって約束しなさい。そうじやないと解かないから」

私は全く自由になった安心感から冗談を言いました。王己は身を振って、いやいやをし「早くほめてえ」

と甘えた声でいいました。

私のつたないお話もこれで終らせて頂きとうございます。少し興に乗り過ぎてしまった様ですけども、お許し下さいませ。ただ私がこの様な恥しいお話をしようと思った動機

は、一つだけ心に掛ることがあったからでございます。王己の様な性格、ミスズの様な特異な性情。これもそれぞれ持ち合わせたものとして、他人に害を与えなければ、そして一種の愛情の表現として見るならば、私自身何

等その様な傾向がないものとしても、別にとや角言う必要はないと思います。でも、王己が、私やミスズという相手を持たなかったら一体どうなるだろうと考えると何か恐ろしくなってくるのです。その特異性がおさまって

「ヌード春泥尼」から

佐 渡

完

モデル問題で世論を沸かし、又日活の映画化に当り尼僧団体から強硬な抗議が出たご存じ、みみずく和尚、今東光氏の評判小説「春泥尼抄」のバーレスク版が、六月の大阪OSミュージック（七月も続演）で、東京日劇M・Hのインテリヌード小川久美に対抗すべく募集された光真知子、東三加子の両フレッシュヌードを加えて公演されました。

麗笑コントを巧みに配して進行するこのショウは、多少悪趣味の点がありましたがともかくエロディックな男優陣の台詞に裸のダンサーまで笑い出し、同時に客席も爆笑、微笑のうちに全二十三景のフィナーレとなります。大阪附近のKKファンでご覧になった方も、多いと思いますが、このシ

ョウ最大の見せ場第九景「破戒」はアブマニアの血を十分に躍らせて呉れました。

× × ×

真ッ暗な舞台に「ピシッ」「ピシッ」と肌を噴む鞭の音が、「ヒエーッ」という肺腑を抉る様な悲鳴と交錯するうちに幕が揚ります。黒いバックに一条のライトが当る処舞台下手に肌襦袢一枚の尼が後手に縛られ、天井から下った太いロープに繋がれています。傍には鞭を手にした尼が憎々しげに縛った尼を打ち続けます。不自由な体を前に後にくねらせて悶える破戒の尼。

つい先程まで哄笑の渦巻いていた客席は一転してシーンと静まり返り吐く息さえ聞える様です。聴てロープから外され、なおも鞭に追われ、舞台を右に左に逃げ惑い遂

くるのならば、よいのですけれど、逆にますます嵩じて来た場合、王己は他にも対象を求めるのだろうか。このまま進んでも次第に新しい刺激を求め、私やミスズを縛り上げて人前に曝す様なことをしないと限らない。何かの拍子に三人の遊びが他人に知られることになりはしないだろうか。そう云うとき、王己は犯罪者として罰せられないのだろうか。私が南さんに冒頭に御質問したのはこのことなのでございます。深夜、開け放した窓際で縛った私をわざと人眼につく様な所に縛りつけたりしたことのある王己なので、もしお巡りさんにでも発見されたら一体どうなるのでございましょう。私が、自分から進んで縛って貰ってと弁解しても、これで王己は許されるのでしょうか。私は王己が可愛うございませう。ミスズとて、そんなにあばずれではございません。皆それぞれ一生懸命働いて呉れている娘です。だからこれからは三人ともこの様な遊びは止めないでしょう。でも、私の心の底に何か不安があるのです。分って頂けましたでしょうか。

(以上がマダムのお話である。女性同志のこの種のプレイが予想以上に激しいものであることを私は知った。私はマダムに余り心配しない様にと云って別れた。例え私達、客の帰った後、三人の間でどんなことが起つていようと、今、働いているマダムや王己の澄んだ眼を見ている限り、私は彼女等は或る範囲以上は理性の力で大丈夫押えてゆけると感じたからである。私達自身がそうであるように)

には横ザマに倒れた尼を抱き起し、今度は諸肌脱ぎにさせると、このオッパイ故に選ばれたのでしよう(光真知子) 巨大な乳房が苛酷なリンチに激しく波打ちます。乱れる裾からは白い太腿が覗き縛られた両手首の為下に落ちない衣裳が妙になまめかしく青い坊主頭と共に異様なエロティシズムを漂わせます。鞭打つ尼(北条ますみ)は、冷笑を浮かべながら喘ぐ後手の尼を見降すと鞭を捨て、両肩を掴んで舞台中央に撚じ向けて、あれを見よ、とばかり指さします。瞬時、舞台の黒幕が音もなく左右に割れると「アッ」という声が席から洩れます。そこにはガラス張りの水槽の中に裸の尼(原李子)が同じく後手に括られて漬けられていました。ホースから流れる水は刻々増え水責めの尼の顔を没するのにも寸刻でしょう。水を含んだ縄が後手を締めつけるのでしょうか、恐怖と冷さに顔を歪ませてこの苦しみから逃れんと必死に足掻く哀れな白裸身。苦痛、絶望、哀願……断末魔の犠牲は何か叫んだ様でした。或は呼吸が苦しくなったのでしようか。

で見守るうち二人の尼はなおも鞭に泣き、なおも魔性の水にのたうつ……再びこだまする悲痛な叫び声と共に静かにライトが消えます。

この間約十分、緊縛マニアにとって、歓喜と興奮のバントマイムでありました。

私はもう一度見たくなりました。十日後、十分間の為大枚を奮発して指定席に陣取りました。始まるにつれ前回と演出が少し変わっている事に気付きました。この分ならあのシーンも変えているのではないかと微かな期待を抱きました。鞭打つ尼、打たれる尼の演技は同じでしたが、乳の上を三巻き縛られた水責めの尼が現れるに及んで、期待は見事実つたのです。その上今夜は、悶えながら徐々に裸身を回転させ、側面、背面をも見せて呉れました。横向きのポーズではくびれた両肩が痛々しく、後手の縄を胸の縄に連結し、背中では大きな結び目を見せた後向きの姿は私の最も好きなポーズでした。

入場料は無駄でなかったと思うと、足ども軽くネオンの明滅する鋪道を、暑さも忘れて家路へ向いました。



愛^マ好^ニ家^アの記^ノ録^ト

— コプロのメニュー —

とやま・かづひこ

黒田史朗兄へ—沼正三氏へ答えた—というより教示を乞うた拙文に対し、八月号で友情溢れるお呼びかけに接し、ここでもう一度、かづひこの考えを聞いて頂く必要を感じました。

君はMかSか？と問われるならば、かづひこはちやうちよなく「ぼくはMです」と即座に答えます。

但しです。MのなかにもSの心理が生き、Sのなかに逆にMのめばえが住んでいたとしても、これは誤りでないとおもうのです。

前文中「そのものを自分の体内に入れようとする意欲」という一節の意味は、相手の女性の中から出たモノ、それは、相手のか

らだそのものに等しきもの、それを口から喰べてしまう、というように考えて頂きたいのです。これは大げさに云えば喰人思想に通ずるのではないかしら。

もっとも、「肉便器としてのヤブー」は、主人からの賜り物を押し頂くのに左様な不埒な考えはもたなかったでしょう。このばあいの作者の心理は、正しくMと思います。

フィクションの一節を引例してお答えに代えるのは、ヒキョーかもしれませんが、ヤブーを読むたびに、かづひこは、その背後にかくされた作者の、おそろしいまでの執念をいつも感じていました。

じつは、このお答えを書く前に、同好の先

輩二氏の教示を乞いました。その二氏は、本誌ではお馴染みの方ですが。

沼氏の説も、黒田氏の説も、正しいと思うその反面、かづひこの、コプロラゲニストS説も、一考の余地はある。

要するに、現在までの段階では、M・Sいづれとも断定しかねると、又軽々しく断定しないで、他の研究家の意見も聞く方がいいのではないか。

というのです。誤解をさけるために、今少しつけ加えますと、かづひこは、むしろ沼氏の御説に頭を下げる立場です。

それなのに、こうして、まだ異説をと

るのは、現在のところ、そのスリルを味わいたい。そこに遊びを感じたい、そういう目で見ています。

先輩K氏は、苦痛と屈辱は違ふと云われます。このばあい苦痛とは、文字通り体を痛められ、そこに快楽を感じるもの——この好みはかづひにはありませんが——反対に、ストウラーにされた場合、そこに身を灼くよるこびを存分に感ずるのです。においも不潔感も、とくに固形物のばあい、かづひはもちません。だからこそFではあるまいかと、いまだに考えつづけています。

貴兄のお書きになったものを求めて、バツクナンバーを、炎天下古本屋をテクテク探し歩くかづひは、なんで意地の悪いことを云い張ったりするでしょうか。あきらかに、仲間一人であることをここに卒直に書きとめておきます。

但し、クドイようですが、友情と、物の見方は、必ずしも一致しないことを、申し添えておきたいのです。

(55) ある手記

『週刊新潮』六月三十日号三十四頁。

テズカミデ、クソ小便ヲバケツノ中ニ全部アケサセ、表ニ出サセル。運ガワルイト、クソヲスクツテイル時、上カラポタポタ落チテクル……ダンダン日が経ッテクルト、

ソレハ運デハナク、ワザトシテイルコトダトワカッタ。便器ノ中ニツッコンデイル顔ニワザト命中スルヨウニボタリト落シテクル……。

米軍ノ女将校がワザト顔ニ命中サセルヨウニ上カラクソヲタレタトキニハ、モウ死ンダ方ガマシダト、ホントウニ思ッタ。

× × ×

右は、敗戦直後、比島のチャンギー収容所に入れられた、一受刑者の手記。

徹底的な報復に怒り狂った外人兵が、抵抗力を失った収容者をやつつける。

右の文章に出てくるように、便つぼの清掃も、器具の使用をいっさい許さず、直接、手づかみでさせる。

しかも清掃中の受刑者の頭の上から、女の将校が直接に便を平気でたらすという。

おそらく、便のみか、尿もしたことであろう、書いた人自身、あまりのひどさに、ペンを曲げているらしいが、数多くの例の中には『人間ビスポット』の実例もある。

しかし、かづひこだったら、頭の上から落されたり、口をあけて奉仕させられることを死に代えての喜びとするのである。

人間として失格した者が、最大の奉仕をして勝者を満足させるのであれば、何物もまたぬ身の悲しさ、われとわが口なり、舌なりをポットやペーパーの代りに捧げるのは、自然

のなりゆきというものではなからうか。

外人の便の臭いや味は、ひとしお強烈だという。日本女性の、そのものの臭いや味には慣れているかづひこにも、果して外人のものに、どの程度たえられるかは自信はないが。ともあれ、沼先輩も以前ノートに書き留めておられたが、外人のとくに女性は、排泄物による虐待がおすきらしい。

(56) 便秘

六月十七日の毎夕新聞に『オナゴの便秘とお化粧』というコラムが出ています。例によって内容の一節を紹介すると

溜まりにたまった美女がかけつけ、ドシンボタン、ジャーとケゴンの滝ならぬバク音を響かせます……サロン春のアネゴにお徳さんなる美女がいます(十年程前、クラブテイトのナンバークラス)このひと、便秘の常習者、三日でも四日でも溜めていて平気というツワモノ。それがひとたびセキを切ると、一日に数回ハイセツの変り種。

という内容。

美女と便秘。

ふつうの人だったらこの二者を結びつけると必ずユーモアを感じるものであろうが、かづひこは違ふのだ。

美女でも便をする。

美女でも便秘する。

しかも、ひとたびセキを切れば、一日数回通じがあるという。その『便を出す』ことに對して深刻な感じを受けるのだ。

幸いにして、『セキを切った日』に、この美女が、かづひこにつき合ってくれたと仮定しよう。

お互に身近なものでありながら、そのクセ仲々手に入れにくい『想うひと』の出した食欲のはてのものを、常人の数倍、一日に数回プレゼントしてくれたら、そのたのしみたるや大へんなもの。

三日、四日と溜ったはてとあれば、その量も、においも、味も、それに比例して深刻なものである。

口に溢れるそのものを、しこたまもらえるその幸福感。ここにも、ロマンチック・マゾヒズムがある。

一片の記事にも、かづひこは想像のたのしみと、生きる喜びを感じ、ロマンを胸一ぱに感じるのだ。

(57) むさぼりくらう

『文芸春秋』六月号三〇一頁。

ある美しい女性が自殺した。その女性を悼む文中の一節。

かつて、表現の方法に窮したある渴仰者は彼女が吐いた反吐をむさぼり喰うという事件もあった……

と書いてある。

美しさをたたえ、恋慕うのあまり、彼女のもどしたものを喜びくらうということは、なさそうであり得ることだ。

谷崎潤一郎の小説にも、美しい女性を青年たちが噂さし合い、中の一人に

あの女のくそなら、舐めてもいいがな……と云わしている。

かくいう、かづひこも、ひそかに、観光バスの中で吐いた美しい女性の反吐を、醜悪な

思いに眉を寄せながら、文字通りむさぼりくらったことがあり、この記録にも、くわしく述べたことがあったが、その『渴仰者』が、

むさぼりくらっているシーンを想像すると、共感に胸をしめられる思いがするのである。

(58) 尿で殺したトカゲの眼

同じく文春、三〇八頁の、あるクスリの広告文の、二号活字のミダシに曰く、

処女の尿で殺したトカゲの眼。

それは古代、ローマ時代の若返りの妙薬であつたとか、効きめのほどは、もとより、

つまびらかでない。処女の尿で殺した『トカゲの眼』ほどでないにしても、云々。

文章の意味が、一寸わからないが、ローマ時代に、処女の尿を若返りの妙薬として、特に重く見たらしいことが、文献にのこってい

るという。排泄物が、医薬に使われた例は、中国あたりににも多数あつて、一々紹介しきれないほどだ。

(59) 男は奴隸!

妃は……中略……あらゆる奴隸的奉仕を王に要求した。……夜ごと、まづ耳の孔を吸引させた。王は熱心に吸い続ける……『それから鼻の孔を』『この程度にて可なりや?』『駄目よ。もっと舌のさきを耳の中に入り込ませるのよ』『両耳の垢と、鼻ツツと、鼻汁とで、王の胃袋は充満し、オクビが頻りなのだが、妃はいささかも容赦しない。』『こんどは腋の下。毛で鼻をついても、決してクシヤミはゆるしませんよ。いいですね!』

それから二つの大いなる雪の山頂の火の蕾それからオヘソ。それから白牡丹の双丘。王はついに呻吟してノタマワク。

『最愛なるものよ! ああ、もう余は、耐応の限界にあるぞよ!』

『駄目ッ。足のうらを舐めて』
ここにおいて、王はゲロを吐き、ああ神よと悲鳴しながら昏倒した。

……………

『愛する妃よ! お前なしには余は一瞬といえども生きていられぬ』
『じゃあ、お死になつたらいいわ』

『そう言わずに、どんなことでもするから
どうか元通りになってくれ』

『どんなことでも』

『神かけて』

『では、あなたの口に手綱をおくわえなさい。馬のように四ツン這いにおなりなさい。その背にわたくしをお乗せなさい。それからこの部屋を、グルグル・グルグル・グルグル・グルお廻りなさい。そしてヒヒインヒヒインと嘶きながら、どう、お出来になつて?』

この妃の命令を、

『いとやすきことにこそ』

と筆者、岩崎栄氏は、喜んで妃の奴隷となる王のことをくわしく描いている。

右の話は雑誌『笑の泉』六月号から。

(60) はばかり

その『笑の泉』の同じく六月号一四四頁には、つぎのような話も出ている。

ある新派の名優が楽屋で、

『おい、はばかり』

男衆を呼ぶ。

『へい』

と答えた男衆が、小さな茶瓶を得て二枚折の屏風の中へ入ってゆく。

先生はおもむろに屏風の中に立って、その茶瓶の蓋をとってその中へ、シヤア……と用

を足す。

という一節があった。

これは男優が主人公なので、いささか感傷が殺がれるが、新派には、むろん女優さんもある。

楽屋のことは、いっさい男衆が用を承るの
で、男優を見習った、女優さんの中で、Sの
気持のあるひとは、やはり、タタミの上で、
便器を使うのかしら。生理の始末は? 女優さ
んだって、大の方の用もあるう。その時も、
タタミの上でするのかしら……などと、アレ
コレ、かづひこ好みの想像を逞しくするのも
わるくない。

(61) 踏まれるよろこび

六月十五日(日)東京の日比谷公園にて。
月に一回、かづひこは同好の友、H、Mの両
君と、時間場所を定めて落合、午後のひと
ときを楽しく暮らすのが、この春以来つづい
ている。

W・Cに行ったHが、十分ほど姿を消した
と思ったら、ハンカチで右の手を大切そうに
包み、興奮した表情で、しかもニコニコしな
がらベンチに帰って来た。

『どうしたの? その手』

かづひこ、とMはびっくりしてHに声をか
けた。Hは、それには答えず、

『ヤッタ! ヤッタ!』

とまだ大切そうに右手を捧げている。

よく聞きただすと次のように答えた。

W・Cの南側に、テニスコートがあり、折
柄日曜の午後のひととき、アメリカ婦人の一
グループが、キヤッキヤツとさわぎながらテ
ニスに興じていた――。

テニスコートと、道路は人の背くらいの高
さの石垣にさえぎられ、その石垣の上は、小
幅の通路になっていた。

用をすませたHは、何げなく石垣を見上げ
ると、おかれて来たらしいグループの一女性
が、あわててその通路をかけて来て、コート
へ下りようとする。Hはそのとき、ハッと思わ
ず通路に右手をさしのべたのだそうである。

無意識に出したHの手を、その婦人はイヤ
というほど踏んだ。

それは、アツという間の出来事。婦人は、
ジロリとHを見下しながら、何事もなかった
かの様子で、ツンと高い鼻を横に向け、スカ
ートをひるがえして、サッサとむこうへ行っ
たという。

Hの手の甲は、細いカカトの先で踏みつけ
られ、血がにじみ、皮がむけ、色まで変って
いかにも痛々しい。

『ああ、いい気持だ!』

Hはコーコツと、自分の傷だらけの手をひ
っくり返し、ひっくり返し見つめている。

身を灼く痛さと喜び、おぼえのある読者な

ら共感されるであろう。

名も知らず、素性も知らぬ、吾々の崇敬する美しい白人女性が、思い切り全体重をかけて踏んで下さった。

三人三様、夫々自分の手を踏まれた心地でしばらく呆然としたことだった。

.....

『おかしな奴！ 私のクツの下へ手を入れようとするじやない！ かまわないから、私そのジャップの手を思い切り踏んでやった』

『そお、どんなだった』

『まるで、カーペット踏むみたい。ぐにやりとして……気味がわるい……でも……いい気持だった！』

『そのジャップ、きつとアブなのよ』

『あたしも踏んづけてやろうかしら』

『踏みつけるくらいじゃ手ぬるいわ。そんな失礼なヤツ、私だったら、イスの代りに腰かけてやる！』

『あのね、あたしんとこのボーイのタロウね、面白いのよ』

『面白いって？』

『ううん、私の命令なら何でもハイハイって聞くよ。私ね、トイレのお供させるのよ！』

『まあ、お供させて、どんな用させるの……？』

『きまつてるじやない。ペーパー使って、手が汚れるのイヤだから、タロウにさせるのよ』

『それも面白いけど……ホラ、このあいだ本国へ帰ったLさんね、あのひとつたら、私にこっそり話したことあるんだけど、あすこに居たボーイはね、はじめにピストルでおどしておいたら、何でも言うことをきいたんですって……それでね、Lさんの奥さん、トイレまでゆく面倒なときは、ルームで、そのボーイに、トイレの代りをさせたんですって、どんなヒドいことでも、ハイハイって聞いてかわいいって、よく云っていたわ』

『ハハハ……』

『あたしも、ハウスボーイ一びきほしくなっただわ』

.....

下手くそな会話だが、これはHの傷をみながら、かづひこが空想したその外国婦人たちの雑談架空録音。

以前から、沼氏も指摘しておられるようにあけっぱなしの、きよう慢な外国女性が、密室でボーイを使うとき、人間性を全然認めなかったであろうことは容易に考えられる。

ハズミとは云え。人の手を踏みつけておいて冷然と、ふりむきもせず歩いてゆくなんて日本女性にやれる芸当ではあるまい。

とはいえ、この日、Hは最高の果報者。血を流し、ヒフをむかれたHを、かづひこたちは祝ってあげたことであつた。

(62) 清き流れ

ここで夏向きの話題ひとつ。

少々お古いが、昭和三十一年七月二十七日の内外タイムス。峰岸義一氏の粹人醉筆『夏なお寒かった話』よりスクラップ。

×

戦後すぐのことであるが、私は奇人であり中国通の故中野江漢氏の納涼流水の宴に参じたことがある。

僅か六、七人の小宴であつたが、そこに集まった者はみなヒトカドの猛者ばかりで、酒に弱い私などは末輩の口である。

やがて、そこへ年十七・八の素晴らしい麗人が現れた。中野氏はそこで

『さて今夜の宴は、それなる美人が主役です。皆さんを涼しくしてくれるプリマドンナ沙智子さんです。ところで如何なものでしよう。この美人となら地獄の底までも苦勞を共にしようと、本当に誓える人がこの中にございますか？』

と意味ありげに聞くのである。

納涼会というからには、ビールの満を引いて、怪談でもする位が山とタカをくくっていただけに、その女に仕掛けがあるとは誰も思っていないから、皆OKだが、涼くさせるとは熱くなったところをドカンの意味か？

そこでまた中野氏は語を継ぎ、

『この美人に、たとえどんな無礼なことをされても怒らないことを皆さんは誓えますか?』

と、もう一度念を押すのだ。

私にとって、最も好きになれる女性だったので、ままよ、玩具にされようと、何んとでもと——

『酒の余りやれない僕でも、今夜は知性をはずして飲みますよ。この美人のお酌なら……』

と、多少お世辞のつもりでぶつたところ、その心掛けやよしとばかり、第一番に、茶室風の座敷に、よろしくしつらえたかけひ(青竹を二つ割りにしたトイ)の最先端に座らせられた。

彼女はあでやかにほほえんで、次の間の屏風のかげに下った。

流水の宴が始まり、私が真先にかけひのビールを頂戴したのだが、一寸味が変だが、『生ビールに限る』とみな有り難く乾杯したのである。

あとで『私の彼氏!』と彼女に飛びつかれた時は酔眼もうろうとしていたが、

『私のオシッコとビールの混合カクテルおいしかった?』ときかされて、私は一しゆん寒くなった。

が、それが縁になったことも事実である。

これが私の経験した最も涼しい思い出。

という次第。

風流にかけひを伝わらせるのは面白い趣好で、これも又一種のロマンティックフェチズムかもしれない。

由来、ビールと液体愛好の関係は仲々深い

もので、その色なり泡立ちのさまが似通っているためもある。

かけひに向って放流する美人。知らずに、それを吞まされる青年。このへんの舞台装置は仲々面白く、丸二年経た今日まで、かづひこの頭に往来するテーマなので、年月の古さをいとわず、ここに御紹介した。(つづく)

◆代理部分譲品総目録◆

お申込次第急送

女体緊縛フオトの部として新版十七組、最新版『縛り』写真五組、新人モデル新作姿態六組、女体「責」写真集二十組、花坂嬢優美姿態緊縛集四組、女体緊縛フオト、オンパレードR組百花撰百組、等、マゾヒズム資料の部として二種、女体切腹フオトの部として六組、女体流腸写真の部として

二組、女体輝美写真二組外、分譲品を満載してあります。八円の切手封入の上お申込下さい。急送申し上げます。

大阪市阿倍野局私書函第十四号

天星社代理部

マゾ画の決定版! 分譲打切り近し!

責められる男性 十態 「マゾヒズム画廊」 分譲

滝れい子画 大中判印画紙焼付 十枚一組 千二百円 略号(ろう)

一、屋根裏の妖女 二、黒帯と雪の足 三、御寮さんと丁稚 四、女学生と中学教師 五、輝かつぎの受難 六、二号さんと重役 七、従姉と中学生 八、愉しい苦行 九、衣桁の蔭に舞う鞭 十、土牢の女王とスパイ

◎絶対他では求め得られないマゾ画集。分譲中止にならないうちに是非一組お求め下さい。詳細解説は本誌33年2月号一六二頁、一六三頁御参照願います。

◎映画通信◎



今月の——
——縛られた女優達

大河原珠樹

八月号にて楓月太郎大兄に、まずはもって過分なおほめをいただいて光栄に存じます。ただただ紹介する作品の数少きこと、時期の遅れ勝ちなることを恥じながら、いわば自慰的に毎号を汚している次第です。今月も三十本近くの映画を観賞する機会に恵まれながら僅かに、この程度の御紹介に終ったことを深くおわび致し、厚顔にもまたまた筆をとりま

した次第。
なお最近号に映画監督の女優緊縛に対する優劣論的なことをうけたまわりますので、小生としまして統計的に、女優を縛ることの巧く、機会の多い監督さんとして十余名ばかりを推薦いたしますので、今後の観賞の御参考迄に……。

山田達雄(新東宝) 毛利正樹(新東宝) 福

田晴一(松竹) 加戸敏(大映) 森一生(大映) 加戸野五郎(新東宝) 佐々木康(東映) 井沢雅彦(東映) 三隅研次(大映) 松田定次(東映) 渡辺邦男(フリー) 加藤泰(東映) などの作品なら五%以上縛りがみられましょう。

▽少年三国志・第一部(東映作品)

花園ひろみ

毛利曾左衛門に亡ぼされた尼子晴久の遺児照姫が弟孫四郎と共に捕われ、安芸の国へ送られる。馬上の照姫はぎつちりと本縄型式の後手に縛られてあわれ。やがて照姫と孫四郎は刑場へ送られて打首にされようとする。胸を二重に巻いて後手縛り、刑吏が刀をふりかぶると眼をつむって観念する姿がいかにも美しかった。ただ残念だったのは当時時代ならば戦に敗れた城主の息女処刑は極刑でハリツケにされるはず、聞くところでは撮影の都合上変更になったのだそうである。しかしこの新人は作品は僅か三本目だが演技もしっかりしており、細い切長の目と瓜ざね顔の時代劇向きのマスクで悲劇のヒロインに適した今後のホープだろう。

▽少年三国志・第一部(東映作品)

無名女優大勢

照姫達と一緒に家臣の妻や娘も約三十人ばかり数珠つなぎに縛られて曳かれて来る。一

連の縄で次から次へとグルグル巻きに縛っているが手首の方はどうも手抜きがしてあったように思われた。ために馬上の照姫の本縄だけが特に印象的だった。また刑場で照姫達と共に救われる女の中に子供連れの二人の女が後手に縛られている1カットのあったことを加えておこう。

▽サタン城の魔王 (新東宝作品)

北沢典子

度々彼女の縛りシーンはあるが胸を五、六巻グルグルと巻いた後手縛り、おそらく彼女の縛り映画中で最も出来映えが悪い。

▽サタン城の魔王 (新東宝作品)

山下明子

悪首領の情婦だがラスト近く、松平長七郎に捕えられ領主のところへつれられる。巫女姿で後手縛りのグルグル巻きをロングでぼんやりと3カットばかりみせて来れる。特にという程のものでなし。

▽サタン城の魔王 (新東宝作品)

浜野桂子、鳥羽恵美子

これも紹介済み、冒頭シーンの礫にされていた二女囚。短いカットだったが縛り方が本格的で強い印象を残した。東映のように馬鹿デカイ材の礫柱でなく規格通りの四寸材を使っているのが緊縛度を高めている。あれで二

の腕と足首、腰縄がつけばハリツケは満点。他に名前がわからないが遠景で後手に縛られ役人にコッかれながら連行される娘、女房があった。

▽奴の拳銃は地獄だぜ (東映作品)

中原ひとみ

キヤバレー「オリオン」の用心棒達に殺害された坪内警部の妹サト子「オリオン」に復讐のためスパイに入るが、正体がばれて私刑にあう。椅子にグルグル巻きに縛られ用心棒の兄貴株りやんこの政吉の拳銃の威嚇射撃に失心してしまう。型だけは後手縛りのように両手を後へ廻していたが実際には縛ってなく、ワンピースの柔かにふくらんだ胸を巻いた四巻の縄も緊縛感に乏しかった。

▽浮世風呂の死美人 (新東宝作品)

日比野恵子

一年前行方知れずとなった歌舞伎女形の菊三郎の似顔絵を捜し求める上総屋清兵衛の手先となって働いている女スリ。洗い髪のお絹が仕事に下ジを踏んで、目明し鬼瓦の宗兵衛に捕えられ、番所で折檻をうける。荒ムシロの上に座らせられ胸をグルグルと三、四巻した細縄は可細い日比野恵子の体に食い込むほど締っていたが肝心の後手首は帯の下でみられず、細縄は背中中で合わされ帯につないで

いた。この姿で先のササクレになった青竹で三四回背中を打たれるが白状せず遂に失心して俯向せにしゃがんでしまう。

▽怪猫呪いの壁 (大映作品)

浦路洋子

恋人の妹の謎の失踪を探索のため前田藩へ腰元として入った楓が正体露見して捕われしごきで後手に縛られる。胸を柔く二巻程度でとりあげるところもない、結局、恋人と共に立樹につながれ青竹で折檻の末に、アワヤ斬られようとする時、怪猫に救われる。

△怪猫呪いの壁 (大映作品)

近藤美恵子

藩主の寵愛を受けながら恋人のある身故にそれをこぼんで来た腰元志乃が、同藩のお家横領をたくらむ一味のために無実の罪をきせられ不義という名のもとに惨殺された後に、ハリツケにされて壁に塗り込められる。広幅の板に胸、腹、太ももの三カ所を二巻づづグルグルと縛られ、両腕は横木に手首を雁字搦目に縛られた志乃の死体が先代奥方の魂廟の壁に入れられ釘付けにされようとした時に怪猫の鳴き声と共に首がガタリと動いてうらめし気な顔が写る。美しい近藤美恵子だけに一層凄惨。また同じポーズがラストに近く事件説明の段階で藩主の前でにわかに壁が崩れ死体を発見するシーンでもあらわれる。近藤の表情、縛り方などもこの場面がよくわかる。

まずはマニヤ向きのシーンである。

▽白蛇小町 (大映作品) 春風すみれ

縛りというほどでもないが一例として。呪われの家へ嫁入りした、その花嫁が婚礼の夜に締殺され首吊りのあわれな姿をみせる……ほんの1カットだけのことである。

なお予告までに

▽消えた小判屋敷 (大映作品) で毛利郁

子が年増な艶めかしい姿で後手吊りに立樹に縛られるシーンと

▽裸体の聖女 (日活作品) でグラママーの筑

波久子が新人の南風夕子とシユミーズ姿で後手の背中合せに縛られるシーンがあることをお知らせしておこう。

今月もわれわれを気おちさせた作品として (縛りのない映画)

▽少年三国志・第二部 (東映作品)

▽浪人八景 (東映作品)

▽伊那の勘太郎 (東映作品)

▽風来坊一番勝負 (大映作品)

△勇み肌千両男 (松竹作品)

▽忍術御前試合 (東映作品)

但し植木千恵が縛られるが子供のためにはぶく

▽花笠若衆 (東映作品)

▽唄祭り三人旅 (東映作品)

▽鷲城の花嫁 (東映作品)

(観ていない映画)

▽天保水滸伝 (松竹作品)

▽榎山節考 (松竹作品)

▽太鼓たたいて笛吹いて (東宝作品) などをあげておこう。

☆残虐なる女性達☆

森 本 愛 造

支那海の海沿いに住む支那人や、西欧の植民者の婦人達が、好んで公開死刑を観覧したり、その実況について興味深く観察し、報告するということは存外に知られていない。

ミルボウ^①はそうした婦人達の系列を、心

理学的に興味深い方法で類別し、その著作『刑の庭』に敍べている。ミルボウは決して抽象的にのみでなく、実際のな方法で述べていることは、才智に富んだその著作に序文によっても明らかである。そうして我々は、支那

沿岸の港街に、可成りの長期間を予定して訪れる旅行者の多くが、公開死刑に立合い度いと云う潜在的な慾望を満たすことを予定に組んでいる、と断言してもよいのではないかと思われる。

アビシニア^② (エチオピアのこと) に於ける裁判については、漸く最近に至って、ヘルラ・ホルツ^③が、ヴォーヒエ誌上^④に彼女の訪れた時の、幾つかの興味ある記事を發表している。彼女は、エチオピアに於ける種々の死刑の方法と、鞭打刑の執行を豊富な図譜、写真を添付して述べているのである。写真の中の一葉は、死刑囚の射殺される瞬間を撮影したものであり、他の一葉はその直後の観衆と囚人の死体とを示している。

〔記者註〕ヴォーヒエ誌は週刊誌であるが、一時期には月刊、旬刊となつたこともある、ドイツの有力な雑誌であつた。戦後、その復刊に接したことがないので、現況に就いては全く判らない。戦前の同誌上には、フランスのリリュストラシオン誌^⑤と同様に、極東関係の記事、写真が豊富であつた。美術上の記事も、可成り多く掲載されていた様に思われる。戦前、戦中の同誌はよく神田辺りの古書店に展示されているが、総体的に、本誌向きの記事は多くない。絵入りロンドン新報^⑥と同様にどちらかというと、いやに生真面目な出版物である。〕

又、先頃鎮圧されたメキシコ革命の中で、特に主謀者、アルフレド・ルエダ・キハノ^⑦將軍の射殺を以て終つた反乱については、キハノ將軍の死刑に多くの婦人が立合うべく、監獄の内庭に押し寄せた、という記録が注目される。

最後に独乙婦人がすべての機会を逸する事なく、熱心に死刑執行を観賞するという事実の、一つの雄弁な例として、マリア・ヤニチエック^⑧の著「新らしきエヴァ」^⑨の一節に述べられている、手斧による斬首刑の部分引用しよう。この一節は私の仮説を確実に立証してくれるものである。

獄舎の前庭に何か黒い布で覆われた物が置

いてある。制帽の男達が忙しげに左右に走りまわっている。やがて鐘の音が、そこにいるすべての人の耳に呻く様になりわたる。一つの扉が開かれて、シルクハットをかぶつた人達が狭い庭に這入ってくる。彼等は新聞記者で、メモと鉛筆を構えている。すると犯人が牧師に付き添われて現れた。この二人につづいて、尖つた兜の看守と、黒っぽい着衣の執行人が現れる。突然、場内のどこからともなく聞えてくる、すすり泣きの声、すでに死人の様に色青ざめた犯人は、地に身をなげて居合はす人々に同情を乞うのであつた。これはむしろ、いまわしい光景であつた。ひきつた彼の顔は涙にまみれている。執行人の助手達が彼を遅い両腕にかかえて、覆いを取り去つた処刑台の方へひきずって行く。彼は嫌がつて抵抗する。牧師が彼を励ましている声が場内に聞える。

「お前は何故にその様に怖れるのか、神の平和が目前に迫っているではないか。お前は今や、恩寵と赦免の前にいるのだ。」

居合はす人々の中から苦笑が洩れる。救さされている人間が、何故に斬首されるか不思議だからである。人々にとって、この光景はこの囚人が犯したより、もっと恐ろしい殺人が行われつつあるとしか考えられない。

刑吏と、法の代理人は刑の執行が遅れるの

で不気嫌である。遂に囚人は、四人の逞しい男達の手で、処刑台の上に連れて行かれ、首筋をさしのべさせられる。彼の頭は不必要に烈しく台上に押しつけられる。斧が音をたてて落ち……（以下略）……

これ程に詳細な叙述は、ただその対象に対する相応しい興味なくしては不可能である。ということは争い難い。婦人の血に対する慾望は、批判的な人士である、と自認している人々が考えているよりも遙かに多く、遙かに強いのである。

以上で第六章終り、次回より第五章の未済分を續けて訳出する。 訳者

＜註＞

1. Mirbeau.
2. Abessinia.=Ethiopia.
3. Hella Holtz.
4. Die Woche.
5. L'illustration. 現在はフエミナ誌 (Femina) と合併してFemina-illustration.
6. Illustrated London News.
7. Generale Alfredo Rueda Quijano.
8. Maria Janitschek.
9. Neue Eva.

藤兵衛の居間を出たお繁は、京子を階下へ連れて行った。藤兵衛の後妻のお千賀の部屋は、丁度その建物の階下になっていた。お繁は京子をお千賀の控えの間へ連れて行

くと、其処で京子の長襦袢を脱がせ、荒い紺の半纏のように仕立てた着物を着せた。袖は元録で肩ゆきも短かく、裾が膝の上までしかないので軽快ではあったが、衽おくみのない前は衿えり



才一部完結篇

三 條 卓 史 作 並 絵

「何というの？」
涼しい、すき徹るような声である。
「京子と申します。よろしくお願いします」
京子は小さい声で云って頭を下げた。

が合わず胸元がはだけて、二つの乳房が覗いていた。お繁は「これがお前さんの普段着だよ働き易くて良いだろう。さア、奥様の処へ行こう」と云って濡れ縁へ出て障子越しに腰を屈めて「奥様、繁でございます」と声を掛けた。
「ああ、何か用かえ？」
「はい、今度奥様の身の廻りをお世話する者を召連れしました」
「そうかえ、おはいり」
「はい」
お繁は静かに障子を開いて京子を促した。
凝った造りの十畳の日本間にお千賀は薄い夏蒲団を掛けて横になっていた。すっきり結い上げた丸鬘と瓜実顔の整った顔付は、浮世絵から抜け出たようでとても美しく、芸妓をしていた女らしい艶かしさが漂っていた。

お千賀はお繁に向つて

「久女はどうしたの？」

と昨日まで彼女の世話をしていた女の事を訊ねた。

「一昨夜から身体の工合が悪いと申しますので、あちらに寝^{やす}ませております。昨日、村の米庵先生に診て貰いましたが、肝臓が悪いので暫く養生をしなければいけないと申しますので、一兩日の中に国許へ帰すようにと旦那様のお云いつけでございました」

「そう、それは不可ないねえ。じゃア、京さんは次の間へ退つて繁に仕事の事をよくお聞き」

そう云つて、お千賀は京子を見てチラリと微笑んだ。お繁や、前に居た女を久女と呼び捨てにしているお千賀が「京さん」と愛称を付けて呼んだのが京子には何だか嬉しく、お千賀が自分に対して好感を持っていて呉れる様に思われた。

お繁は京子を控えの間へ連れて帰ると、一通りお千賀の世話の説明をして聞かせた。お千賀の居間から鉤の手に曲つた処に専用の浴室と洗面所、便所があるから、用を達する時には付添つて世話をする事、食事は居間でなさるから給仕をする事、特に夕食は大抵の場合、旦那様が来られて一緒になさるから、二人の邪魔にならない様に気を付けること。それから控えの間の戸棚を開けて日本酒、洋酒、

チーズ、罐に入つたつまみ物等一々説明して、指図通りに運ぶこと等話した。そして最後に「夕食が済んだらお暇が出るからお前の室に引退るんだが、その時には必ずわたしの部屋に来て——奥様のお勤めは終わりました——と報告するんだよ」

と附加えた。そして

「いいかい。よく勤めるんだよ」と念を押して、その部屋を出て行った。

京子は、お繁に云われた通りに釜屋へ行つて風呂へ吸上ポンプで水を入れ、焚口に火を点じた。何度も湯加減を見た後、棚上の香水を取つて、ゆらゆらと湯気の漂っている湯の上へ滴々と落すと、何とも云えない香気が鼻孔を衝いて、思わず陶然となるようであつた。

彼女は、起居振舞のたびに下腹に吊り下げられた丸い球の中でチリン、リンと鳴る鈴の音が気にかかつて仕方がなかった。支度が整うと、京子は伴纏の上から左手でその球を押えながら、お千賀の居間の敷居際にひざまずいた。

「あの、奥様。お風呂の用意が出来ましたが」

「そう、じゃ部屋へ入つてお出で」

「はい」

お千賀は蒲団の上へ半身を起して坐っていた。大きく藤の花を染め抜いた藍の浴衣が、日本髪にとてもよく似合つて、女でさえ惚れ

くする様な姿である。

「京さん、あなた折角旦那様に付けて戴いたものだろ。そんなにしないで鳴るに委せておきなさいよ」

京子が左手を前に、もじもじしている京子を見て、おかしそうに笑つた。そして

「一寸手を貸して」

と云つて上体を前へよじらせた。京子はお千賀の腰を見てハッと驚いた。派手な浴衣を締める腰に、帯のかわりに金色の八厘程の幅広のベルトが巻かれて、お千賀の袖口から伸びた、すんなりした手首が、そのベルトの両横に同じ金色の薄い金属で腕輪のようにキツチリ繋ぎ止められていた。

「あらッ、奥様」

京子が思わずお千賀の傍へ寄ると

「気が付いたかい？ これは旦那様の趣味だよ。お前に鈴のついた帯を締めさせていると同じなの。お前さんが不貞な女だという意味でしているのじゃないんだから。旦那様は色々な方法でわたしやお前達の肌を緊縛なさる。柔かい艶のある女の肌を、緩くきつく緊めて痛めて、お悦びなさる、そんなお人だよ。」京子はお千賀の言葉を聞きながら、山の彦造を思い出していた。色んな方法で彦造に責められた苦しい、がその中に何か知らもう一度と希う心の捨て切れない愛着の残る思い出——男とは皆こんな心を持っているのだろう

か？——

と一人で考えて見た。しかし京子は、亡くなった夫の信一郎には全然そうした性質が見られなかった事を考えて判断に迷って居た。

「ちよっと胸を持ち上げて」

「はい」

お千賀の言葉に、京子は慌てて彼女の後に廻り、両手で支えてお千賀を立たせ、脱衣所へ半ば抱えるようにして従っていった。

「このチャックを引いて」

お千賀の浴衣は、ベルトで両手を横に縛ったまま脱げるようにベルトの上と下の境、脇身頃から袖下へフアスナーが着いていて、それを引くと腰から上は羽衣のように、下は腰巻を外すようにバラリと二枚になって肌を離れた。

両手を腰に繋がれた日本髪の女が、緑色のタイルの底まで見える湯槽にひっそりと浸っている。その手で肌を覆うすべもない。お千賀の身辺に湯の波が立つ度に、京子は思わず眼を伏せた。

「お流ししましょう」

湯槽の縁へ膝をついて扶け出した京子は、スポンジの尻当ての上へお千賀を坐らせ、その膝の上に一枚のタオルを置いた。

「京さん、あたしを恥かしがらせない心遣いだね。素直だよお前さんは。」

京子は黙って石鹸を取ると別のタオルへ塗

って、お千賀の肌理の細かい肌を丁寧に擦った。京子の締めている帯の鈴がチリリン、チリンと鳴る。

「京さん、ちよっとその鈴を見せてごらん」

「あら、奥様」

京子はパツと顔を赤くしたが、お千賀の言葉には何でも喜んで従う気になっていた。

「もっと、わたしの方へ近寄るようにしないと手が届かないよ」

「は、はい」

京子は、お千賀の側身に体を出来るだけ寄せた。お千賀の髪の毛のT字油の匂いが、京子の神経を快よく揺さぶった。

お千賀は、手に触れた鈴の玉を変った方法で弄んだ。それはただ単にチリリンと鳴る役目だけでなく、一種の責に似た働きをする役目を持っていた。

「ああッ、奥様ッ、やめて……」

京子は呻くように小さな声でそう洩らすと必死でお千賀に哀願の目を向けた、彼女の乱れた額の生え際から汗が流れてたらりと頬に伝わった。

「あたしもこの鈴を着けて、旦那様にこうして虐められた事があるのよ。一寸予備知識を与えてあげるの」

そして、なおも鈴の玉を手にながら

「もっとこちらへお寄り。」

お千賀はそう云うと、上体をぐっと京子の

方へ捻じ曲げた。

「ああ、奥様、ゆるして……」

京子は口の中でそう叫ぶと、お千賀に縋りの手から逃れようとした。

「……………」

お千賀は京子の苦しむ様子にも無言だったうっすらと口を開いて眼を瞑っていた。香水の匂いを漂わせた湯気は浴室の隅から隅まで充滿していった。

その夜の八時過ぎ——。

お千賀の部屋の用事を済ませ、控えの間で藤兵衛とお千賀の残りの飯を食べ終った京子がお繁に報告しようと台所の処まで来ると、丁度其処にお繁が四人の村の女房達と一緒に居る姿が見えたので、彼女はやや離れた処から

「あの、今日はお暇を戴きました」

と声を掛けた。

お繁は満江と云う四十二、三の年増の女の髪を掴んで引据えていたが、京子の姿を見ると

「何だい、その挨拶の仕方は。それで奥様の部屋のお勤めが落度なく出来ると思っっているのかい。少し作法を教えてやるから、お前もこっちへお入り」

と眼を吊り上げて怒鳴った。そして今度は他の女の方を向いて

「ほんに、どいつもこいつも録な女はいやア
しない」
と嘲るように云いながら、満江を三人の女
の方へ突き転がした。そして

「みんなで、満江の着物を剥ぐんだ」
と云い付けた。
品子とき代と云う三十余りの二人の女は
互に顔を見合せながら満江の着物——と云っ



ても京子が着ているような短い伴纏だが——
を肩から脱がせた。

この邸の規則で、この家に村から交代で炊
事と洗濯、掃除に呼び付けられてお勤めをさ
せられる女達は、夏分はすべて素肌の上に伴
纏一枚と定められているので、満江はそれを
剥がれるとパンツ一枚になってしまった。

「美紗子、お前そこの押入れから荷造り紐を
四、五本持って来い」

美紗子と呼ばれた二十二三の若い女は、お
繁の声におびえたように慌てて押入れから紐
を取り出すと、それをお繁に捧げて彼女の足
許に平伏した。

「美紗子もよくお聞き。満江は今日の炊事で
まずい味噌汁の味付けをした。旦那様は東京
風の赤出し好みだ。それを勝手に加減して田
舎臭い汁にした罰を皆に見せてやる。お前達
もお勤めをしくじらないように、よく見て
置くがいい」

美紗子が品子とき代の坐っている囲炉裏
の傍へ引退ると、お繁は裸身を屈めてうつむ
いている満江の傍につかつかと歩みよって

「立て、満江」

と命令口調で云った。

「これからは気を付けますから、どうか、ゆ
るして」

満江は両手を擦り合せて下から哀願したが
お繁はフフン、とせせら笑って

「これからわたしが良いと云うまで、無駄な口を利いちやいけない。さア、まっすぐに立って、両手を後ろに廻せ——早くしないか」お繁は、羞恥と怖ろしさに逡巡している満江の尻を足で蹴った。

彼女が、なよなよと立つと、お繁は満江の手首を後手に縛り、戸棚の横に掛けてある長柄の箒を持って来て、満江の首に紐を掛け、その竹の柄を満江の足の間に通して、柄の中段を首から下げた紐で繋ぎ止めた。

「さあ満江は箒の馬に乗った。これからそろそろ遠乗にお出掛けだよ。さア、歩け、あるけ」

満江は自分の腹の前へ飛び出ている箒の柄の先の動きの羞かしさに、お繁に追い立てられて台所を廻りながら、ともすれば俯向き勝ちになった。

「その年になっても、ちったア恥かしいのかい。味噌汁一つまともに出来ない癖に——。さア、もつと胸を張って、天井を見て歩け、——はい、どう、はい、どう——」

お繁は摺古木を持って、箒の柄の先をトンと叩いた。

「ああッ」

と激しいショックに驚いた満江が、思わず下を見ようとすると、お繁は素早くその木で満江の顎を支えた。

「おっとツと、そのまま上を向いて、いくら

馬に乗っているんだからツて、そんなに足を開くもんじやアない。膝を挟めて、それ、歩いた、歩いた」

満江は額から汗を流しながらよろよろと歩いた。こんな無惨な恰好でとても普通に歩けるものではない。

「ああッ、ゆるしてッ」

と、がっくりと板の間に膝を折った満江に「もうへたばったのかい？ いい年をして、年甲斐もないねえ、それじゃ、その儘暫らく休憩とするか」

そう云うと別の紐で満江の両足首と後手に縛った手を繋いで、彼女がその場を動けない様にした。

「そうやって膝を突いて長箒に跨っている処を、お前の亭主に見せてやりたいよ。いいかい、わたしやこれからこの女に作法を付けて来るから、わたしが帰るまで満江の紐を緩めたり、変な真似をすると承知しないよ。若しも満江の姿勢が変わっていたら、みんな満江と同じ目に合うすよ。皆んな判ったかい？」

お繁はそう云うと、後ろに小さくなっている京子の手を取って

「さア、お前の部屋へ帰るんだ」

と廊下に引き出した。

うす暗い夜の廊下を、ひたひた微かな足音を立てて二人の女の影が続いた。やがて京子の部屋へ入ったお繁は

「さあ、そこでもう一度さっきの挨拶をしてみなよ」

と云って京子の肩を突きとばした。京子はどすんと部屋の真中に尻餅をついたが、急いで正坐すると、両手を畳に突き、頭をその手に擦りつけて

「お勤めを終らせて戴きました」と云った。

「そうだ、それでいいんだよ。先刻は何だい。中腰で口を利いたりして。これからは、いつもそう云う風に丁寧にするんだよ」

「はい、これから気を付けますから、今日の落度はお許し下さい」

京子はそう云って、そっとお繁の顔を覗いた。

「許せないよ」

「ええ？」

「落度は落度としてその償いをさせるよ。それがわたしの主義だから」

「ああ……」

「さあ、お前はそこの壁へ逆立ちをするんだ」

「ゆるして……」

「早くしないか。此処へ両手をついて、サッと足を蹴って、腰を伸すんだ。さアやれ」

京子は仕方なく、云われるように畳を蹴った。初めの二、三回は踵が壁に届かぬうちに体が舞い戻った。

「もっと思ひ切り弾みをつけて、そらッ」と持つて居る摺古木が京子の尻でビシッと鳴った。

「ひエッ」

と呻いてぐんと蹴ると、漸やく踵が壁に当たって身体が逆に壁際に突ツ立った。

「ようし、それでいい。その儘しばらくじつとしてゐるんだよ」

お繁はそう云うと、摺古木を持ち直して、はだけた伴纏の胸からはみ出している京子の乳房の真中をぎゅッと突き据えた。

「ぐエッ」

と、叫んで、思わず壁から足が離れようとするのを、お繁は左手で押し付けておいて

「今度は右だよ」

と、反対の乳房を突いた。

総身の血が頭へ逆流して来て、くらくらと眩暈をしような処へ、太い摺古木で左右の乳房を交る交る突き廻され、京子の苦しみは僅かの間にその極限に達しそうであった。

下腹にきっちり嵌められた帯の鈴の玉が彼女のみぞおちの辺りでチリリン、チリリンと鳴った。

「今度は腹だよ」

と云ってその非情な摺古木が京子の臍に突き立てられた時、彼女は遂に

「うエン」

と呻いて、ずるずると脰を曲げて壁の下に

崩おれてしまった。

乳業会社の森川と津田が、藤兵衛の応接室を出て行った後、人間椅子にビニールの眼隠しをされたまま縛り付けられていた京子は、この邸に連れて来られてからの異常な出来事を走馬燈の様に頭の中へ思い浮べていた。

その時、扉を開けて入って来たお繁は、椅子に仰向きに縛られている京子の手足の縛しめを解き、眼隠しを外した。京子は一瞬、眼が眩むようなまばゆさに慌てて二三度瞼をしばたいた。

お繁は、続いてもう一つの椅子に縛られている春江の紐を解きながら

「どうだい。町の紳士の尻に敷かれて、好い気持ちだったろう」

と皮肉な調子で笑ったが

「さあ、今日はお客様への夕食の御接待があるようだから、早く部屋へ帰って一休みして置くがいい」

と云って、二人の半纏をばいと其処へ投げ出した。そして京子に向って

「奥様も今夜は特別にお客様の接待に出られるそうだから、その方のお世話はいさなくともいいよ。随分大切なお客様らしいね」

と、半ば独言の様に云いながら、二人をそれぞれ部屋へ連れ戻した。

その夜――。

邸の離れの一室で、藤兵衛は森川と津田を相手に酒宴を催していた。

「貴方の格別な御協力で、私達もわざわざ出て来て来た甲斐がありましたよ。」

と、森川が満足気にコップのビールを飲み乾すと

「さア、あなたも空けて下さい。今、給仕を呼びますから」

と藤兵衛は津田にビールを薦めてから、床脇の呼鈴を押した。

ややあつて二人の女がビールと冷肉、アスパラガスなどの料理を載せた盆を捧げて入って来た。京子と春江である。二人共真鍮の環で乳房をきっちり締め付けた乳バンドと、京子は楯に鈴の玉、春江は羽扇に天狗面のついた帯を締めた変った扮装である。

京子も春江も、知らぬ男達の前にそうした姿を曝す恥かしさに、耳の付根まで真赤に染めて俯向いた。

「これは又、変った御趣向でございますな」と森川が頬の奥で笑いながら云うと、藤兵衛は

「その女の乳房をご覧なさい。自然のふくみを金具で締めてやると、肌にくびれが出来て、女は軽い羞恥と苦痛とで一際艶かしさを増すものですよ。ほら、その女の表情をごらんなさい。これは自分で作ろうとしても出来

ない表情です——。これ、京や。もつと顔を上げて、お客様によく見て貰うんだよ」

京子は、栓を抜いたばかりのビール瓶を両手で持ったまま、身を縮めるようにした。

——人前で恥かしい——と思うと、却って身体が沸き上るように思つて、両手が小さく震えた。

藤兵衛は、今度は若い客人の方を向いて

「どうです津田さん、この女は。年令が一寸若くて、未だ女になり切っていない様なんですが、でもこんな時分から仕込むのも又楽しみなものですよ」

と云った。津田は

「仕込むって、どんな事をですか」

と津田は藤兵衛の言葉に不審を抱いて訊ねた。

「ははは、それはね、いろいろの方法によつて女の持つ美しさや飲^{ようこ}び、悲しみ、愁いというものを、この女なりに次々と味わせ、完全なわたしの好みの女に仕立て上げてゆくことです。そして今日は羞恥性の訓練です。異性に肌を見られる事がどんなに恥かしいかと云う事をこの女に味わせ、そしてその羞恥心がこの女の肉体にどんな反応を表わすかがこちらの見処です。だがこの女、春江と云うんですがね。未だ馴れていないから一寸手を後ろに止めておきましょう。」

藤兵衛は手早く細いニッケルの手錠で彼女

の両手を後ろに繋ぐと、抱えるようにして春江の上体を仰向けに押し付けた。そして「ねえ津田さん、この娘の乳房の張りがやや小さいんでね。こうして少し訓練して呉れませんか」

と云いながら、卓上のコップを取つて残りのビールを飲み乾すと、それを逆さにして天井を向いている花の蕾のような春江の乳房の中央へぐつと押し付けてギリギリと捻じた。

「ああッ」

と春江は、思わず両足を踏ん張つてのけ反った。コップの縁で強く押えられた乳房がその中へ吸い込まれて、にわかに充血していく。硝子を透して、異様に膨脹した乳首が痛々しい。

「これやひどい」

と津田が気の毒そうに膝を打ちそうとするのを

「まあまあ見ていてご覧なさい」

と云いながら、又一つのコップを取つて残りの乳房へ押し付けた。

「どうです。こうすれば少々手で揺すつてもコップは胸から離れません」

そう云いながら藤兵衛は、苦痛に顔をゆがめている春江の脇腹をチヨイと抓った。

「あッ」

と春江は声を上げて上体を動かすと、思い切り乳房を吸い込んだ二つのコップが彼女の

胸でふらふらと揺れた。

「どうですか、もう外してやりましょうよ」

津田が見兼ねてそう云うと、

「ハハハ、じゃア外すのは貴方にお任せしましょうか」

と云つて大きく笑った。

津田は急いでそのコップを引張つたが、中が真空状態になっている為、中々胸から離れない。

「女に遠慮しないで、ぐつと力を入れて、激しく引きなさい」

と藤兵衛が津田に教えた。津田は女を座蒲団の上に転がすと、左手でその胸許をしっかりと押え、思い切つてコップを引くと——スポン——と云う音と

「ぎやッ」

と云う春江の悲鳴と共にコップは離れた。乳房全体が桜色に膨れ上つて、一きわ赤い輪が乳房の周囲に痕を残していた。続いて今一つのコップも取ると、今度は藤兵衛は二人の女をテーブルの傍へ並んで立たせた。そして「さア、今夜の余興に別室で弓を引いて見ませんか」

と二人を促した。

この座敷の隣りの部屋の襖を開けると、其処は二十畳敷ばかりの板敷きの部屋で、正面の羽目板に近く太い木の十字架が立っていてそれに丸髻姿も美しいお千賀が縛り付けられ

ている。四方の梁に取付けられた照明燈がパツと灯ると、昼よりも明るいかと思われる眩しい光りが、その十字架に集中して、お千賀は無惨な光に露出して静かに頸を傾けた。

「この馬に乗って、あの的を射て下さい。矢は各自三本。じゃア森川さんから始めますかな」

と云いながら京子を其処へ四ッ匍いにさせた。

弓は藤を巻いた重藤の弓だが、矢の先には鏃の代りに直径三厘程の平たく丸い吸盤になっているゴムが着いていた。

森川は京子の尻のあたりにどっかと腰を据えると、的に狙いを定めた。

——ビュウ——

と弦が鳴ると同時に

「ああッ」

とお千賀が呻いた。矢は臍を外れて、左乳房の下にぶら下った。

二本目は横腹を掠めて後ろの羽目板に立った。最後の矢は丁度腰の辺りへ当って、ポトリとお千賀の足許に落ちた。

「仲々むつかしいもんですね」

と云って、苦笑いをしながら津田に弓を渡した。

津田は春江に跨って弓を引いたが、手許が震えて三本共、お千賀の身体には当らなかった。

◎臨時増刊号◎ 発行予告! 十月上旬発売

長篇サジズム小説

弓沢俊二郎作 『青い癡院』

定価 二百円

表紙装釘、口絵、並に挿絵 四馬 孝

【内容小見出し】 (一) 三人の男 (二) 地の底にあるもの (三) 美貌の人 (四) 劇場にいた二人の男 (五) 忠告 (六) 美女誘拐 (七) 苦悶する美貌 (八) 屈辱の責め (九) 踊り責め (十) 探索行 (十一) 癡院の中 (十二) モデル責め (十三) 手練りの網 (十四) 救出 (十五) 勝者の心

豪華な口絵と挿絵、絢爛たる内容、表紙四馬孝氏装釘の色刷。新秋に贈るマニアへのプレゼント。

「それじゃア、わたしが引いて見ますかな」

藤兵衛はそう云いながら津田から弓を受取ると京子と春江の二人を並べてその上に跨り踵で二人の腹をぎゅッと締めつけておいて最初の矢を——ビュッ——と放った。

一瞬、お千賀が身をくねらせたが、その矢は見事に彼女の腹の真中に命中した。

「これにも多少コツがありましてね。あと二本は左右の胸乳に当てましょう」

と、那須の与市の扇の的をそのままに、きりりと弓を引き絞ると、お千賀は彼の技倆を知っているだけに、両足を爪立て、肩を揺すってその鋭い矢から逃れようと身を藻いた。

「あッ」

とお千賀が叫んだ途端、第二の矢がぐざつと彼女の左の乳房に喰い込んだが、次の瞬間にはその吸盤が吸い付いて、矢は女の乳房へぶら下った。しかし、ゴムとは云ってもその衝撃力は相当強く、ふっくらと盛り上った乳房が挟り込むように凹んでその矢を受け止めた時には、見ていた森川と津田の方が吃驚した位であった。

最後の矢も、狙いは変わらず右の乳房に射込まれた。

お千賀は続く激しい衝撃に両手を拡げて、縛られて大きく張った胸を震わせて喘いでいた。

(おわり)

本誌「緊縛絵画」論

千 草 忠 夫

先日は小生の妄評を取りあげていただき有難うございました。さて、どんな反響があるか今から楽しみです。

「SADO特集号」を入手、息もつかず読了し、さっそく筆を取った次第です。例によって絵を中心とした感想を述べて見ます。

先ず全体として十分にタンノウしたと言えましょう。アート、グラビヤ、本文の挿絵等、いつもの本誌とは数等上廻った熱がうかがえて（といっても平常の「奇ク」が悪いのではなく、罪は定価の低廉さに帰すべきでしょう）痛快でした。ただもう一つ欲をいえば、色刷の絵が一枚ほしかった。塚本氏のヌード・スケッチを省けば入れられたのじやないですか？（このヌードは何の為に編集部が取り上げたのか不可解）その他の不満は、九十頁に編集子を書いておられる点にすべて通じますから、敢えてクダクダしくは書きません。御苦心の程は十分にうかがえます。本来、サディズムは非社会的なものと考えますが、そのサディズムを標榜して、このような公刊誌を出して行く事は大変な事だと思います。あくまでも現在の線を崩さないで今後もドシドシこの種のものを出して行かれる事をお願い致します。

さて、そろそろ本論に入ります。

一、四馬孝氏の絵について。

小生、有体に云って氏のフアンなのです。以下述べる悪口は、その絵を愛するが故とあらかじめ御承知下さい。

小生が最近次第に氏の絵に不満を感じ出したのは、その脚のせいなのです。氏はアメリカのパルプ雑誌の影響かどうかは知りませんが、責められる美女の脚を引き伸ばしつつある様に見受けられます。脚の長いのは大いに結構ですが、過ぎたるはなお及ばざるが如しの古言をどうか思い浮べて下さい。あまりにも長過ぎます。スタイル面の十等身、十一等身は、コスチュームで全体のプロポーションを取るから見苦しくないので、ハダカではプロポーションの取り様がない。この極端な脚の長さは、氏の胴体に対する無関心と相まって、氏の最大の弱点を暴露している様に思えます。長い脚は豊かな胸、しまった腰、グツと張ったヒップの線と強まって始めて美しいプロポーションを得る筈です。ところが残念ながら氏は真中の胴体を抜きにして顔と脚にのみコッておられる様です。腕の細さ、手の小ささもやや過ぎる様です。現代女性の美しさは繊細さよりはむしろのびのびとした逞しさにあると思うのですが、その意味で、氏の最近の傾向には賛成出来ません。しかし、その表情の素晴しさは天下一品でしょう。それ故にこそ小生は氏の絵を愛するのです。しかしそれも最近では脚の長さにスペースを取ら

れ過ぎて、表情に細かい筆が及ばなくなった様な気がします。せめて「玩具」くらいの大きさが顔にほしいですね。小生としては復刊初期の絵「クツワの装着」とか「晦冥の悲歌」前後が最も好きです。氏が現在の様な美女に到達されたのは、それなりの理由があるでしょうが、せめて脚をもう少し短くしていただけないものでしょうか？

今度の特集号は、四馬氏の絵が豊富で、実はホクホクしているのですが、新発見は、氏のペン画の素晴らしさです。これは口絵ページのものより好ましくさえあります。気楽に筆が取れるからでしょうか。どうでしょう四馬さん、「魔教圏」の路子をそのペンで責めてはいただけないものでしょうか？（またまたおきまりの「魔教圏」か、さんさんの悪口を言うてからに、今になっておだてようたってそうはいかん。第一俺はハナにしか興味がないんだよ、とすげなく言い給うな。路子だつてステキなハナの持主ですよ）

編集部の方さん、小生の切なるこの願いはかなえられますまいか？ 切にお願い致します。とにかく、この新発見だけでも（今後これが続かなければ、この新発見も無意味なのですが）この特集号の意義は十分にあったと小生には思えるのです。

二、滝れい子氏の絵について。

滝氏の絵は四馬氏のそれと非常に対照的で

す。動的と静的、写実主義と理想主義とでも云えましょうか。滝氏の絵は常に「姿態」という事に力点が置かれているのに対し、四馬氏の場合は「姿態」よりもむしろ表情から来る「雰囲気」が主な様です。だから四馬氏の絵に現われる人物の姿態はほぼ一定してしまっているのに対し、滝氏の場合は常に変化を求めておられる。それに写実を旨としているから四馬氏のごとく脚を引き伸される様な事はない。しかし、矢張り滝氏にも固有の弱点が見受けられます。

先ず第一に、あまりにも写実に徹する為か姿態にしまりがなくなり勝ちで、ややとすると年増女に受取られる恐れがあります。それはその顔立ちの古風さ（失礼ながらハナの恰好が良くない）と相まって、現代女性を彷彿させる事を困難にしています。

小生は緊縛写真があまり好きじゃないのはそこにアリアリとうかがえる「形のくずれ」のせいなのです。絵は現実の美しい所のみを描いて欲しい。そうすれば「写実」とは離れるかも知れませんが、少なくとも、絵の窮極の目的たる「美」には奉仕し得るでしょう。

四馬氏とは逆に、脚の短かさも気になりません。四馬氏の脚が常に直正面か真横を向いているのに対し滝氏のそれは姿態の変化に応じて千変万化するので描写が困難という事もあるでしょう。実際、小生の貧しい経験からし

て見ても、モデルのない人体は非常に面きにくい。脚線は特に描きにくい。そんな所から滝氏の絵に間々見られるギョチなさが生ずるのかも知れませんが、僭越ながら滝さん、ヌード写真集を緊縛のものに限らず最大限に御活用下さい。

第二に、これ又四馬氏と対照的なのは、緊縛の度合です。四馬氏の化石するかとまで見える緊縛度に対し、滝氏のそれはややゆるい様です。時には縄が尻切れトンボになっている時すらあります。姿態の変化を求めると必然的に緊縛度が落ちるのかも知れませんが、少なくとも「この縄は絵に見えない裏にまでたしかにつながつて、体に巻きついている」という画き方をして下さい。

三、杉原虹児氏の絵について。

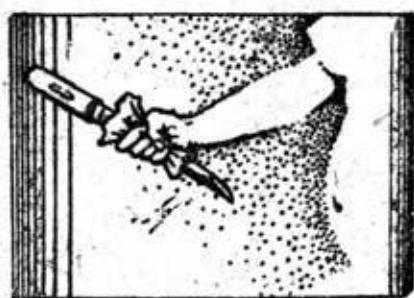
氏の絵にはあまり接していないので多くの事は云えませんが、次の二点だけは特徴として挙げられると思います。

(一) 衣服の線に変化が乏しく、力動感に欠ける。

(二) 筆致が古風で、時代ものの描写に適している。

氏の女体は小生にすればほぼ理想的です。プロポーションも良くとれていて気持が良いのですが、そのまゝとっている衣服に張りがない為に非常に損をしていると思うのです。衣装の線はむずかしいもので、小生も常に悩ま

されているのですが、衣服の線のみは絶対写真であってはいけません。その証拠に衣装をつけた緊縛写真をごらん下さい。衣装の美しさが全然あらわれずに、ただシワの乱雑さのみが支配的ではありませんか。氏の衣装に於ける欠点は、筆致の古風さにも影響されています。ここで古風さというのは、描写の不必要な程の丁寧さという程の意味です。それに描線のスピード感の不足という事もありました。氏のカット絵の方が口絵より生動感に豊むのは、そんな所にも起因しているのですよう。



切腹風土記 (五)

切腹の研究

壬 生 三 郎

私は東京の精神科の泰斗小峰博士の依頼をうけて江戸時代の情死記録を集め、表にして小峰研究所紀要の「情死の研究」に資料を提供したことがある。

それが動機になって小峰博士から切腹の研究をしてみないかとおすすめに従い切腹史

四、南村俊平氏の絵について。

最近登場された新人ですが、小生は氏の絵がまことに好きです。題材の奇抜さ、明るさ、楽しさ。これこそ本誌に新風を吹き込むものといえましょう。デッサンもたしかで群像にも乱れが見えず、一人々々描写が細かく行きとどいているのには感心させられます。登場後まだ日も浅いのでこれ以上何とも云えませんが、お願いしたい事は、少女の哀感に満ちた表情をも描いてほしいという事（絵に甘美さを加える為にです）と、この特集号に片鱗をのぞかせている、少女軍と怪獣軍との戦斗

をシリーズものにして描いてほしいという事です。いかがでしょうか？

以上、絵についてだけ感想をのべて見ました。本特集号に限定されずに一般論となってしまうましたが、かねてこの様な画家論（おそまつな内容でしたが）を書きたいと思っていたのを、ここであわせて果したわけです。写真については又筆を改めて「緊縛写真論」（羊頭狗肉の類と御承知下さい）を書くつもりでおります。

度重なる妄評ひらに御容赦下さい。

と医学的考察をテーマに約十年間研究を続け成果を原稿にまとめたが、私の方針はどこまでも事実主義、現実主義で、現実に行われた史料、記録をとることに努めたので、大日本史料、徳川実記の類は勿論、群書類聚、日本随筆大成に至るまで手のとどく限りの史料は

目を通し、東京日々新聞は苦勞して第一号から昭和十六年まで全部調べた。私が洩しているのは地方新聞と郷土史料だけである。

新聞に切腹記事が出ると、早速手当をした外科病院へかけ付けたり、警察医に連絡したりして、診療簿又は検屍記録から左の表へ記

入した。

割腹創調査表(第 例)

氏名 年令 男女 職業
時日 昭和 年月 日時
凶器の種類
服装 着衣ノママ 脱衣シテ
局所々見
部位 上下腹ニ於て臍高ヨリ セン方チ
方向
長サ
創縁 紡錘形 不整形 ソノ他
哆開程度 大小 内臓脱出有無
出血 多少
主ナル損傷組織
細菌感染 汚染物
処置
ソノ他ノ損傷
転帰 死亡日時 月 日 時 分
死因 失血 急性腹膜炎 イレウス 衰弱
見取図

この調査表、特に見取図は最も貴重な資料で、書物に書いてある資料は調べ直しも出来るが、調査表だけは一度失えばそれっきりなので、戦災で直撃弾を受けた時も火中に飛び込んで他の非常持出し書類と共に庭へほうり出して助けたが、写真、画、などの資料袋は遂に失ってしまった。

資料蒐集中、苦労したのは女性に対する切腹観のアンケートを取ることにあった。何処を

切ると思うか、衣服の上からか素肌を直接にかなどの質問をするのに気が弱くてなかなか質問ができず、婦人の助手を使つてやつと七〇名ほどから回答を集めることができた。研究している方はこの方法で戦後の切腹観の資料を集めて発表して頂きたい。

小説演劇方面もずいぶんあさつてみた。女剣劇も直接女優さんに面会を求めたり、作者にたずねたりしたが、お蔭で従来本誌が紹介されたことの無い、例えば紀海音の呉越軍談とか、映画の真葛原女腹切の写真とか、女剣劇の三種とかを集めることができた。

横浜の芸者奴が切腹したときお通夜に行つた元芸者と偶然会うことが出来て、当時の模様を確認したり、深川で妊婦がやったとき早速駆け付けて香典をやったり、世田ヶ谷で人妻が日本刀でやったとき助手の女を採訪に派遣

したり、さまざまな思い出がある。

心理考察も多少心理学や精神分析も勉強したので書いておいたが、本誌に発表されたものは資料としても考察としても非常に優れて貴重なもので、この方面に私の研究の盲点があつたことを思い知された。そして切腹というものが単なる自殺方法でなく、願望的なものがあり、将来そういう方面に展開して行くだろうとの予見がする。

従来の私の資料は書物新聞などに発表されたもの、病院警察医が取扱つたものに限られており、そこまで行かずに埋没されたもの、未だ実行せぬ個人の願望などが度外視されていたことを悔むものである。

明治初年の新聞調査表をかかげておく。この続きは拙著切腹七部集に全部発表する。

氏名	年令	職業	時(明治)	所	結果	原因	用器	部位	長サ	形状	合併其他ノ
一不詳	二五	妻	七、四、七	新潟	未遂	不通					
二不詳	二六	妻	八、五、三	牛込	死	不明					
三稲〇ぬい	二四	妻	二、六、二〇	鹿兒島	未遂	痴					
四倉〇はま	二四	妻	三、二〇、八	品川	同	ヒステリ					
五小蝶	三六	娼妓	七、八、三	吉原	重病	苦	刀	下腹	十三針	深一寸サ	咽、舌
六畠山勇子	妻	二四、五、二〇	麴町	死	時局ヲ	同	刀	上腹	四寸	一寸サ	咽
七緒〇ヤク	一七	娘	三、五、五	福岡	未遂	レイテ					咽
八三〇マサ	五五	無職	三、一、一	牛込	死	ヒステリ					咽
九山〇トキ	一九	娘	三、五、七	本所	死	家庭不和	日本刀				咽
一〇〇本タマ	二二	娼妓	三、六、二六	洲崎	同	死	ナイフ				

◎創

作◎

偽

縛

(ぎばく)

檣^{まさ}村^{むら}奏^{そう}

青

木

審画

偽

縛

—

外勤係巡查若杉正男は、ポツリポツリと雨が落ちだしたので、少しペダルを早く回しながら警邏から帰って来ると、交番の赤い電燈の下に誰か立っていて、此方を見ていた。

逆光で顔は判らないが、上背のある肩巾の広い制服姿は、野沢巡查部長に間違いない。

若杉巡查は自転車を下りると、

「異常ありません」

と云って挙手の礼をした。

何時もながら水際立った敬礼で、手袋の白さが野沢の眼にしみた。

「御苦労——」

微笑して野沢は戸を開けた。

「今夜は、お前一人だったナ」

「はア、桜井巡查はK町の派出所へ助勤でいきましたから」

野沢部長は日誌へ「巡視」と書き込んだ。

右肩のひどく上った特長のある筆跡を見ると、若杉巡查は急に激しい焦躁を覚えた。

「さてと、これから休憩だろう——」

野沢は、日誌を閉じると、一寸腕時計を覗いた。

「部長さん!……」

そう云ってしまうと、若杉は、半ば絶望的

な勇氣に全身が熱くなった。

「何だ——?」

戻ろうとしていきかけた野沢は、振り向くと一瞬厳しい表情をした。

「どうしたんだ?」

若杉巡查の顔色は真ッ青だった。

「お話ししたいことがあります」

「今か——?」

「はい。私事で恐縮ですが——」

「じゃア、ゆっくり聞こうじゃないか。明日は非番だ。俺ンちへ遊びに来い」

「でも——お願いです! おひまはとらせません。十分か二十分——」

ドサリと重い靴音をたてると、野沢野長は机の端を驚き顔にした。

「よし。云ってみろ」

「はア……」

「休憩時間だ。奥へいくか」

「はい」

殺風景な休憩室には薄暗い電燈が点り、赤茶けた畳の色が佗しい。

「布団をしいて横になれ。それから聞こう」

「でも……」

「そうしろ。勤務にさしつかえるぞ」

「はい」

若杉巡査は、云われるままに、男の脂で光った固い布団を出してしいたが、横になる気にはなれなかった。

上り框に腰をかけた野沢は、布団の上にキチンと坐っている若杉を一瞥したが、黙っていた。

四年前、二十八で巡査部長に昇任した野沢敬介は、柔道・剣道ばかりでなく、逮捕術においても、署内で彼の右に出る者なしと云われる程の猛者である。眼が鋭く、頬骨が張り、削ぎとったように引き締った頬をもつ精悍な容貌は、浅黒い皮膚とあいまって、実際の年齢より二つ三つは上に見えた。

若杉巡査のほうは、色が白いせいか、二十七とはとても見えず、知らない人は三か四くらいに思っている。といって、決して女性的

ではなく、眉が濃く、涼しい眼をしていた。中肉中背だが、制服を着た姿は仲々に凛々しく、殊に手信号の美しいフォームは定評があった。

「部長さん。私のような人間が警察官を志願したのは、間違っていたのかもしれませんが……」

膝に両手をおいたままそう云うと、若杉は野沢の視線を恐れるように俯向いた。

「何を云いだすんだ。何かあったのか？」

「いいえ……」

「何かあったんなら、正直に云ってみろ。そりや誰だって失敗はあるさ。警官をやめようと思うときだってある。俺で出来ることなら力になってやるぞ。話すつもりで引きとめたんだろ。云ってみろよ。ナ……」

そう優しく云われてみると、若杉は、嬉しさで悲しさが同時にこみ上げてきた。

云ってしまおう。この人になら何でも云える。俺はもうどうなったっていいんだ。

「部長さん。何もかもお話しします！」

「おう——」

野沢部長は、ポケットから煙草を出すとき火を点けた。

若杉正雄は、少年時代から、警察官に強い憧憬を抱いていた。高校を出ると家族の多少の反対を押し切って採用試験を受けた。

警察学校を終了し、外勤係巡査としてH警

察署に配置されると、最初は山の手のA派出所勤務を命ぜられ、三年めに現在のS町へ転勤になったのである。

彼が警察官を志した動機は、その職務に意義を感じたというよりは、警察というもののの中に身を投じ、警官に取り囲まれて生活したいという願望からだといったほうが当たっている。しかし、彼が失望する迄に、そう永くはかからなかった。部外者の位置から眺めた警察官は、その一人々々が、彼にとっては一種の偶像でさえあったのに、内部から見ると、彼は、全く只の人間になってしまっていた。かつては、銭湯で偶々巡査に出合ったりすると、その裸体が、他のどの男の軀よりも彼の関心をひいたものだが、今では、上司や同僚と一緒に入浴する機会があっても、それほど気持ちの昂揚することもない。

若杉は、次第に生活のはりを失っていったが、その反面、何時も苦しみの伴っていた欲望を脱して、何かホッとしたことも事実である。

しかし、その頃から、彼にはもともと在った自己愛的傾向が、急に深くなったようにみえた。

通勤時には、殊に若い巡査などは、私服を用いるのが常であったのに、若杉は絶対に制服で通っていた。非番や休日に出るのに、制服なので、同僚の中には何かと陰口をた



たく者もあったが、彼は一向平気だった。日勤の日には帰りにそのまま銭湯へ寄り、装具を番台へ預けて入浴した。制服を脱ぎ始めると、いくつかの眼が必ず彼に注がれる。ときによると、彼が湯舟に身を沈めるまで、執拗に見続けている男もあり、そんな男は、決して、入浴中、若杉の軀を追っていた。

若杉巡査は、警官としての己の軀を見られているという意識に、不思議な満足感を持つのである。

彼は、又、下宿の二階に必要以上に大きな鏡を置き、我身を映しては孤独をなくさめた。そして、その場合も例外ではなく、彼にとって、制服は、もはや決定的な手段となっていたのである。

野沢巡査部長の出現は、若杉巡査を二再欲望の淵へ突き落した。野沢は、若杉の描く理想像として、あまりに完璧すぎた。

若杉の眼は、むかしのようには輝きをとり戻し、勤務振りもいきいきとしてきた。職務質問も、いかにも若い警官らしく気負ったふうがみえた。

「オイ。お前、恋人でもできたんじゃないか？」とひやかす同僚もいた。

「フフ、御想像に委せるヨ」と答えながら、若杉は野沢の面影を想い描く。

「サ、警邏だ。いつて来るよ」

「オイオイ。まだ五分早いぜ。あんまりはりきるなヨ」

若杉巡査は軽やかに自転車へとび乗る。

だが、彼が秘かに酒を飲むようになったことは、誰も知らなかった。

鏡も埃をかぶったまま、彼の姿を写すことはなくなった。ウイスキーをたてつけにあり、暗闇の中に転って身悶えしながら、彼は、呻くように野沢の名を口にした。

本署での朝の点検のとき、巡視のとき、その他の機会に野沢と顔を合せるのが、若杉には何にも増して楽しみだった。

野沢が他の人間（男であると女であるとを問わず）と口をきいたりすると、それだけで若杉は激しい嫉妬を感じ、相手を憎みさえした。

「部長さん。やっぱり、私は、警察官になる資格のない人間だったんです！ 軽蔑されてもかまいません。叱られても、殴られてもかまいません。辞めると云われるなら、今すぐにも辞表を書きます！——」

若杉巡査は膝においた拳をワナワナ顫わせながら、血走った眼を上げた。

「若杉。気を鎮めろ。お前の苦しみは判る——判るが、俺は仮にも上司だ。たとえお前を救う為であっても、合意の上ではな、出来んのだ——」

野沢部長は、組んでいた腕をとくと、乱暴に靴を脱いだ。室へ上ると、無言で帽子を脱ぎ、帯革を脱ぎす。制服もズボンも忽ち脱ぎすてられ、下着を脱りさったとき、その下か

ら現れたのは、真ッ白な六尺禪である。筋肉質の見事に締った体軀に、それは鮮かに調和していた。

「若杉。俺の手に手錠をかける。捕縄で足も縛るんだ。そうして、後はお前の好きなようにしろ。俺は自由を奪われたんだ。誰も見てはおらん。いいな。俺は自由を奪われたんだぞ。それから、云っておくが、金輪際一度だけだ。後は忘れてしまえ。お前は、絶対に警官をやめちやアならんのだ。判ったな。早くしろ。時間が経つ——」

それは、むしろ唐突だった。若杉は却って呆然とし、手錠をとったものの、尚躊躇っていた。

「おい。どうした。恐いのか」

野沢は近寄ると、若杉の手から手錠をひったくり、自分でかけた。

「捕縄を出せ」

体臭が嗅ぎとれるくらい、すぐそばに野沢の逞しい胸板があった。

若杉は喘ぎながら捕縄をといいた。

長距離輸送のトラックが、入口の硝子戸を震動させて通った。

「いいか。若杉。くだいようだが、絶対に警官をやめるんじゃないぞ」

何事もなかったような顔で云い残すと、野沢部長は、自転車の錠をぬいた。

若杉巡査は、急に野沢が他人になってしまったような不安を感じながらも、強く何度も肯いた。

二

七月に入って、警察官の制服は略装に変わった。

まだ梅雨の続いている蒸し暑い夜。野沢敬介は、屋上にあるビヤ・ガーデンで生ビールを飲んでいた。ここは純喫茶で経営しているので、うるさくつきまとう女達はいない。

ドヤドヤと四、五人の男女が階段を上って来たとき、野沢は一瞬ドキリとした。その中の一人が若杉巡査に似ていたからである。違うと判ると、野沢は苦笑いして、一息にジョッキをあけた。煙草を出す。ケースは空になっていた。立ち上った彼は、真直階段のほうへいきかけたが、不意に呼びとめられたので、見ると、警邏係長の永井警部だった。

「出るのかい？」

「ええ」

「少しつきあっていけよ。まだいけるんだろ？」

「ええ、それは……」

「まア、かけないか」

「はア」

野沢は、多少固くなつて、永井と向かい合つた。

「どうしたい。イヤに深刻な顔だったぜ」

「ハハハ、お揶揄いになつちやいけません」

「やっぱり、いつまでも独身でいるのがいいか。そのせいだよ」

「そのせいって、別に何でもありやしないんですよ」

「ソラソラ、そうムキになるところからして既に怪しい。アハハハ、まアいい、飲みたまえ」

ジョッキが運ばれて来たので話は中断されたが、野沢は永井警部が苦手だった。永井は、野沢の顔さえ見れば結婚の話をもちだすのである。野沢は三十を越したといつても、一般的にはまだそう婚期が遅れているわけではない。しかし、平均して結婚の早い警察畑では、彼の独身は確かに目立ってゐた。

野沢は、己の結婚忌避が、どこからくるのか、深く考えてみようとしたことはなかった。第一、そんな自己分析は彼の性に合わなかった。結婚したくないからしない。それでたくさんだった。勿論、だから、自分を同性愛者かもしれないなどとは、思つてもみなかった。部内、外共に特別好感を抱く同性もいない。あるとき、彼は暗がりて男娼に抱きつかれたことがあった。

「こいつ。何をするかッ！」大喝すると、彼は思わず相手を殴り倒したが、不意打ちだったので、不覚にもよろけて、そのはずみに僅

かながら唇が触れた。彼は何度も唾を吐いたが、それでもたりずうがいをした。そのとき彼は、これが男娼ではなく若杉巡査だったら、口などすすぎはしないだろうと、フト思ったが、すぐに又忘れてしまった。

交番で若杉の告白を聞いたときも、特別の感情はなかった。その為若杉が警官をやめるといふのなら、一度ぐらい要求を入れてやってもいいと思つたし、男同志だといふ気易さもあつた。野沢の脳裡から、若杉が離れなくなつたのは、それから後のことである。

「結婚の話なら又今度うかがいます。今日は勘弁して下さい」

「ハハハ、先手を打たれたか——ソウソウ、五味が出所したのを知ってるか？」

「はア、知ってます」

五味とは、野沢が巡査だったとき、職務質問で捕えた強盗傷人の犯人である。彼は最近刑期を終えて出所したが、その際不穏な言辭を弄したといふことは、野沢の耳にも伝わっていた。

「じやそのとき、君に復讐するとか云つていたことも——」

「聞いています。しかし——」

「勿論單なる捨科白だよ。だが注意はしたはずがいいぜ。病的に狂暴性を持った奴だ。どうやら仲間もあるらしいし、ときによつては何をやるか判らんからな」

「はア、充分注意します」

永井警部と別れた後、暫く目的もなく夜の街を歩いてゐた野沢巡査部長は、一軒の喫茶店の前に来ると、一寸躊躇してから肩で扉を押した。そこは珈琲専門の店だが、洋酒もやっている。野沢は自分の適量を知つていて、それを越すような飲みかたは絶対にしなかつた。しかし、今夜の彼は、強い酒で脳を痺れさせるか、激しい行動に驅ごとぶつかつていくかして、すべてを忘れてしまいたかつた。彼は、暗い椅子に坐ると、ものうそうな声

で「ブランデー……」と云つた。

まもなく注文の品を持つたウェイトレスがその席へ来てみると、野沢の姿はなくなつていた。

「アラ、あの人、どうしたのかしら？」

彼女は、妙に鋭く感じた男の眼を思いだし、急に薄気味が悪くなつた。

逃げるように店を出た野沢は、ズボンのポケットに両手をつつ込んでグングン歩いた。

夏なので、その姿は異様に見えた。彼の心には苦い自嘲があつた。俺としたことが何て態度！酒で己をごまかそうとは！歩け。どこまでも歩け。クタクタになつて歩けなくなるまで歩くんぞ！そのほうがお前らしいぞ。野沢敬介。しっかりしろ！彼の胸に、感傷のようなものがチクリと刺さつた。

第六感というのかもしれない。野沢は（オヤ？）と思つたが、歩みはとめなかつた。確かに誰か俺を尾行して来る。しかも二人だ。五味のことがすぐ脳にきた。しかし、氣付かぬふりをして歩き続けた。私服だから武器はないが、素手でも三人や五人相手にする自信はある。

不意に背後から男の影が飛びかかつたが、次の瞬間その男は地面に叩きつけられ、続いて襲いかかつたもう一人の男も、鮮かに宙を飛んだ。

まったく思いがけない事態が生じたのは、そのときである。一台の大型トラックが、野沢めがけて轟走してきたのだ。轢殺の恐怖が野沢の軀を隙だらけにした。（しまった！）と思つたがもう遅い。野沢の手足には縄がかかり、荷物のようにトラックへほうり込まれた。さるぐつわの下で、野沢はギリギリと歯がみをした。

眼かくしをとられた処は、どこかの地下室のような室である。室といつても、コンクリートの壁と床だけで何も無い。或いは以前防空壕だったものかもしれない。

「おい、俺は、巡査部長の野沢敬介だ。お前達は、俺を知つていてこんなことをしたのか？」

さるぐつわを外されると、野沢はさういつて、取り巻いてゐる三人の男を順々に見た。

サン・グラスをした男が、それをとるとニタリと笑った。

「野沢さん。お久しぶりですね。あたしですよ。お前さんのおかげで永い間別荘へやらせていただいた五味でさア。フッフ、今夜はたっぷりとお礼をさせていただきますよ」

「フン。やっぱりお前か。芝居もどきの科白はよせ。一体俺をどうしようというんだ」

「一寸だめし五分だめしってね。シリシリと責めていきましようか。それとも一思いにバツサリ——ヘッヘ、まアそのへんはこちらにお任せ願いましようかね」

「俺もこうなった以上シタバタはせん。しかし、気は短いほうだ。やるんなら早くやれ！」

「ホウ。さすがは署でもきこえた豪の者だ。いい度胸だよ」

五味は憎々しげに云うと、二人の仲間を振り返った。

「おい。此奴を裸にしろ」

「でも、縄がかかったままじゃア——」

「そうだ。縄を解くのはまづい。ヨシ——」

五味は内ポケットからナイフを出した。さして大きくはないが、鋭利な刃がキラリと光る。

五味は野沢に近寄ると、着ているものを次々と器用にナイフで裂いていった。

健康なつやのある皮膚が、胸から腹、股か

ら胫と、みじめに露出した。もはや野沢の軀に着いているのは、縄に絡んだ幾条かの布切と汗ばんだ六尺褌だけである。

五味は何を思ったのか、今度はライターを出してカチッと点火した。

「兄貴。何をするんですイ。グズグズしねえでやるなら早いとこ——」

「うるせえな。今いいことを思いついたんだ。此奴仲々すごい胸毛をもってやがる。そいつをな、ホレ、こうやって——」

「ム——」

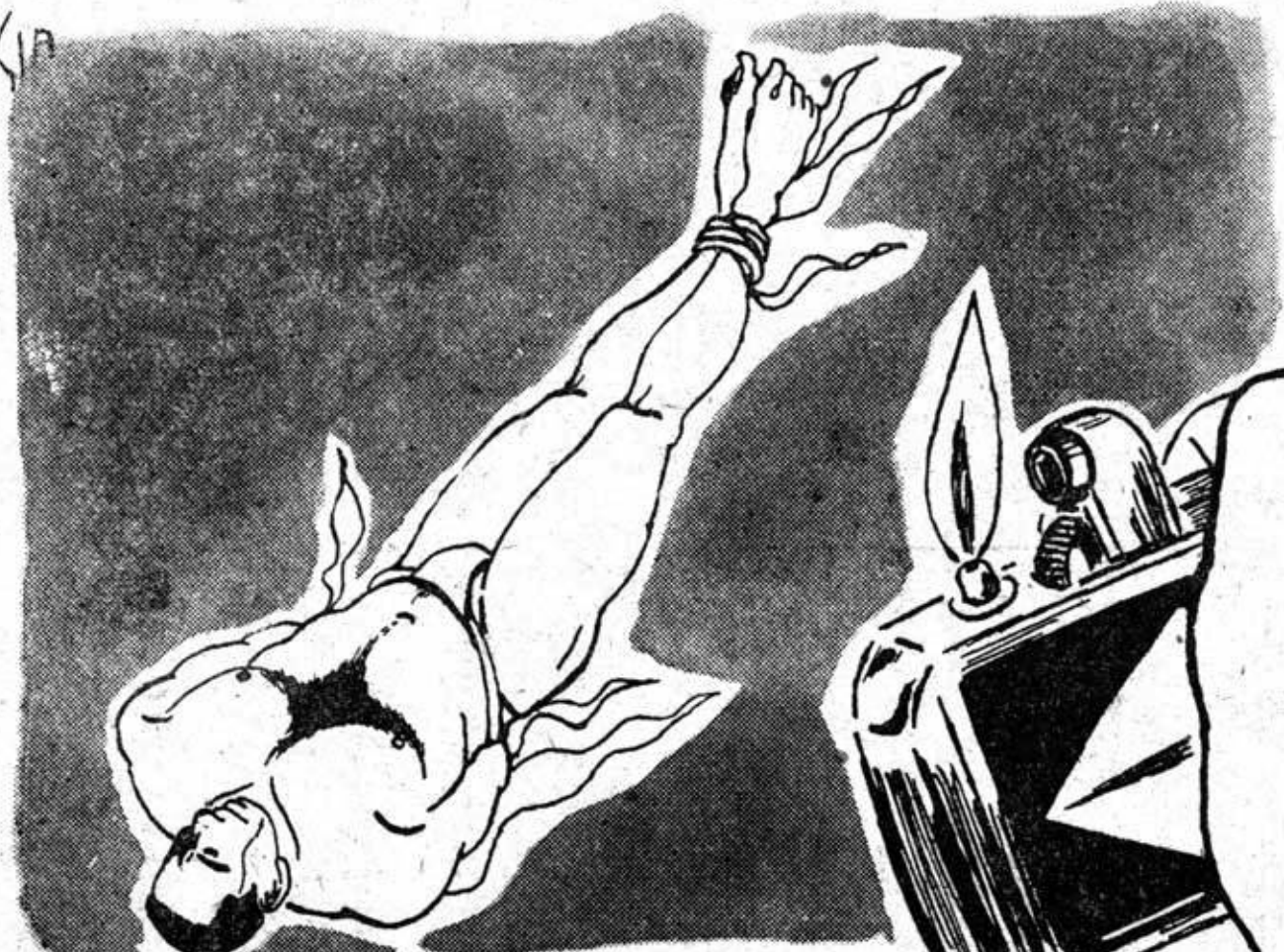
野沢は思わず呻いた。

五味の手のライターの火が、近付くか近付かぬうちに、野沢の胸毛はシリッと一砥めに焼けていた。動物質の強い臭気が立つ。

「ホホ、よく焼けるな。ついこのことに軀中の毛を焼いてやろうか——」

「兄貴。時間をかけちゃヤバイですぜ。早くやっちゃいましょう」

「うるせえな、まったく——だが、それもそうだ。ヨシ、俺はこのベルトで血を噴くまで叩きのめす。お前達は蹴るなと踏むなと勝手



にやれ」

それから後は、怒声と呻き声と鞭の音が入り乱れた。

野沢は、軀中を走る激痛や鈍痛に、筋肉を張って耐え、悲鳴一つ上げなかったが、眼底にはどうしても涙が滲んできた。しかし、どんなに気が強くても、自由を奪われた上、三人の兇漢に殴られたのでは耐えるのにも限度がある。野沢巡査部長も遂に失神してしまった。

「フフ、口程にもない奴だ。もうのびやがった……」

五味はベルトを投げだすと額を拭き、

「さア、此奴の軀を、も一度トラックに乗せるんだ」

「又ですかい。で、どうしようってんですか？」

「そうだな。どこか適当な処へ捨てていくとするか」

「オヤオヤ、御苦労なことだ——」

「ツベコベ云わずに早くしろ」

「ヘエヘエ」

グッタリとなった野沢は、二人の手で担ぎ上げられる。

しかし、野沢にとって、まだしも幸いだっただのは、不態な恰好を一般市民の眼に触れさせられずに済んだことだった。

トラックで拉致される際、ポケットから滑り落ちた警察手帳によって、管内には既に非常線が張られていたのである。

三

病院へ入った若杉巡査は、恐いものでも見るように野沢部長の顔を覗き込んだ。

「ひでえめに遭っちゃったよ。俺の不覚だった」

野沢は未だ血色がすぐれなかったが、白い齒列をみせて笑った。

「大変でしたね。痛みますか……？」

若杉は、持ってきた花を枕許の花瓶に差し込んだ。彼には珍らしく私服だった。

事件の概略を聞いたとき、若杉は激しい衝撃で脳がクラクラした。そして、それは、奇妙にも、五味に対するいいようのない嫉妬だった。野沢が、殆ど裸体に近い姿で発見されたと云われると、そのときの巡査にまで嫉妬を感じた。若杉の脳裡にすぐ浮かんできたのは、真ッ白な六尺褌である。そうすると、今度は、そんな姿をムザムザ晒した野沢にさえ、説明のつかない腹立たしさを覚えてくる。

しかし、そんなことを口に出すわけにはいかない。若杉は自然と無口になり、ジッと椅子にかけていた。

「若杉。すまんが、そのしびん、一寸とってくれんか——」

「はい……」

ベッドの下のしびんをとると、若杉は胸がドキドキした。毛布の端をつまむ手先が、顫えはしないかと気になる。

「いいよ。自分でするから——」

「大丈夫です。私だってこのくらいのことはできますよ」

「そうかい。すまん……」

格子縞の寝巻の前を開けた若杉は、

「ア、六尺を締めてはおられないんですか？」

「——」

と云ってしまい、たしなみのなさに赤くなつた。

「ん？アア、褌か。六尺では看護に不便だからって、越中にかえられちゃったんだ。こいつじやどうもたよりないが、寝ている間だけだものナ。我慢するさ」

男同志が褌のことを話したからといって、それに殊更拘るほうがおかしいとは思いつながら、若杉は、帰るまで、野沢の顔をまともには見られなかった。

若杉巡査と入れ違いに、永井警部が見舞に来了。

「とんだことだったな。しかし、大したこともなくてよかった」

「すみません。私の不注意でした……」

思慮が足りなかったと責められても仕方がない。尾行を感付いたときに何とか処置をとるべきだった。それを、あんなに深入りしたのは、そうさせた何かが、俺の中にあっただ——。

「それはそうと、若杉巡査な——」

「若杉が、どうかしましたか？……」

野沢は思わずドキリとした。

「いや、近頃又元気がないようなんでな。勤務もかんばしくない」

「そうですか……」

「何か思い当るふしでもあるかね」

「いえ、別に——しかし、若いのですから、色々と、その、感情的な起伏も多いと思います」

「うん——」

「そのうち、私から、それとなく話してみましよう」

「そうだな——」

（困ったことだ——）と野沢は思う。

俺には判っているのだ。しかし、俺は、警察官である限り、これ以上は何もできない。あの夜のことだつて、眼をつぶってしたことだ。若杉。俺は、お前に警官を辞めさせたくない。そうしたら、俺はキット淋しくなる。

野沢が臉を閉じたのを見ると、永井警部は静かに椅子を立った。

退院の日がきた。

「若杉。その扉の処で番をしていてくれ」

野沢はベッドをおりと、パツと寝巻を脱ぎすてた。

「やっと六尺褌を締められる日がきた。この越中褌とお別れだ——」

身の回りの物を入れてあるボストン、パツ

グから、真新しい晒をとり出すと、野沢は馴れた手つきで悠々と締め込んだ。

みじろぎもせず、それを瞞めている若杉の瞳は、熱く潤んでいる。

野沢が丸首シャツに腕を通すと、若杉は、ホツと溜息をついて扉の前を離れた。

「部長さん。私は、やっぱり、決心しました……！」

「え——？」

襟から首を出した野沢は、眼を丸くして部下の顔を見た。

「警官を辞めることにしました。書類も用意してあります」

「お前……！」

「すみません。部長さんのお言葉に反いて……」

「そうか……」

野沢巡査部長は、肩を落とすと眼を逸した。「悲しいことに、俺には、お前を制める資格がない……！」

「部長さん——」

「お前は立派な警察官だった——それが、俺の為に、俺はあえて云わしてもらおうよ。俺の為に——」

「もう何もおとしやらないで下さい。すべて私の不徳からきたことです。私のような者が警官をしていては、警察の威信にかかわります」

「若杉。そんなに自分を責めることはない！只、お前が不幸だったただけだ。そして、同じように不幸な人間は他にもいる……！」

泣くまいとして、若杉巡査は唇を噛んだ。

しかし、咽喉の奥がギョツと締めつけられるようになり、周章てて拳を眼に当てたが、涙はドツと溢れてきた。

若杉正雄が郷里へ発つ日は、朝から、もう秋を想わせるような雨が降っていた。

駅に見送る野沢敬介は、休日にもかかわらず制服姿だった。

「他には誰も送りに来んのか——？」

「ええ、でも、いいんです。部長さんさえ来てくだされば……」

「孤独だったんだな。お前は——」

（これからは、もっと孤独になるんです）

そう云いたかったが、若杉は、只淋しく笑って見せた。

「——それから、こいつは俺の餞別だ。金がないから、どうせロクなものじゃない」

野沢は、小脇に抱えていた紙包を差し出した。

「何ですか？これ——」

「晒だよ」

「晒……」

「お前は気の弱いところがあるからな。気持が挫けそうになったら、そいつを締めてみる。」

殉国女性に捧げる

中 康 弘 通

此のところ多忙にて失礼していました。
壬生三郎氏の深い御造詣には、小生如き筆
を執る余地ありません。千原氏の実話に
は心を搏たれました。終戦記念日を控えて
貴誌の報じた殉国女性に「腰折れ」を捧げ
ます。

二八・八 田谷敬生氏「女性切腹例」よ
り

敗戦と覚る忽ち腹割きし処女三浦と姓の
み伝う

行き行けど故郷とほし力尽き夜の曠野に
腹切りぬ女

いのちもて国護らむと切腹しぬ靖国の妻
松田なにがし

二八・八 愛川晃子氏「続者通信」より
国敗る即ち屠腹せし少女美雪の遺書をそ
の友が寄す

二九・一二 田谷敬生氏「女性切腹断想」
より

一七の少女しずかに腹を切り刃を返しけ
り未だ浅しと

三十・四 原月田鶴子氏「続者通信」よ
り

敵もはや街に追ると知りしゆえ腹かき切
りぬ女ら相寄り

三十・七 従軍婦人の死「より」

慰安婦と云えど囚虜を恥ずるゆえ屠腹し
果てぬ救われしもの

三十二・一 田谷敬生氏「女性切腹例抄
記」

あねいもと声を合せて腹切りぬ満洲の野
に陽の落つる際

母も娘も護身の刃腹に刺し潔く果てきと
史書に伝えむ

童女すら姉に倣いて十文字の立腹遂げぬ
身をし守ると

強いられて腹切る無念右手にこめ腸手繰
りけむ十八乙女

不思議にシヤンとしてくる」

「ええ——でも、私は締めかたを知らないん
です——」

「そうか。それなら、早いうちに教えておく
んだったな」

「教えて下さいますか？」

「しかし、此処じやア——」

「一列車遅らせませす。駅前の旅館か何かで——」

「それとも、制服じや御迷惑ですか」

「イヤ、それはいいが——」

「じやお願いします。ね——」

いそいそと先にたつていく若杉の後姿に、
野沢はフト危険を感じたが、かまわずについ
ていった。

発車のベルが鳴る。

野沢は、若杉の手を強く握った。

窓から身を乗り出すようにして、その手を
両手で握り返す若杉の目は、感謝の色をたた
えて潤んでいた。二人は無言でじっと互の視
線を絡ませた儘であった。

ゆっくりと列車が滑り出した。野沢の片手

が上って、励ます様に、滋しむ様に若杉の肩
を軽く叩いた。

列車は次第に速力を増し、ホームの外れに
立って警棒を高く振る野沢巡査部長の軀を、
雨がしとどに濡した。

(了)

レインコート姿の女腹切

藤 山 秀 緒

争 い

「いまとなつて、何を云つても無駄。私はあなたを殺して、潔く死ぬつもりで来たの。あなたも男なら、ここで立派に自決して、健一の霊に詫びて下さる筈よ。どうしてもいやなら——」

「そうか。そんなに証拠があるのなら仕方がない。健一を殺したのは僕だ。しかし、それは、それは君を愛すればこそだ！……俺は健一が羨しかったんだ。——君の乗馬服姿——いまもそうして、ぴったりと身につけている乗馬ズボンや長靴……。笑ってくれ、俺は、俺はその乗馬ズボンで馬のりになられ、その

乗馬靴で踏みにじられ、そして最後に君の口づけが貰いたかったのだ。その乗馬服姿の君を、健一は毎日抱きしめていたかと思えば俺は、たまらなかつたのだ。——しかし、俺は死ぬのはいやだ！君が俺のこの気持を分つてくれないければ、気の毒だが、君も殺す。君は、この俺の、こんな恥しい告白をきいてなんともないのか！君は……」

「弘さん——。もういいの。何と云われても、私にとってあなたは夫の仇です。自決しますか。私に命を下さいますか！」

「いやだッ！」
男の右手が、ふるえ、拳銃がポケットから彼女をねらっている。

「卑怯者ッ！」

すばやく手元へ飛込んだ彼女は、女だてらに男を組みしき、すばやく用意の革ベルトで手足をいましてしまった。

みゆきの復讐

彼女は馬場みゆきと云い、もとは東京の上流社会に育ち、花隈大学を出たインテリ女性である。在学中から柔道と乗馬が得意で、巴御前の名で知られ、その美しさと賢さは、学校中での敬愛のまゝであった。

その彼女が、乗馬クラブで知り合った川村健一という青年に心をひかれ、遂に越えてはならない線まで越えていたと気がついた時、

みゆきの父は激怒した。

川村の家は神戸のボスであった。

「堅気の娘のやれる処ではない！」

みゆきの父は、彼女が健一と結ばれることを拒みつづけた。みゆきは、こっそりと東京駅を発った。

こうして、馬場家の承知を得られないまま、みゆきは健一の嫁となつたのである。やぐざの世界に生きながら、心のやさしい健一に、みゆきは倅せな日々がつづいた。

その健一が或る夜、突然姿を消した！

十日間の必死の捜査もむなしく、健一の行方は全くわからない。川村の家には、健一の親友松井弘が、つめきりで世話をやいていた。げっそりやせたみゆきの肩をやさしくたたいて慰めてくれるのも松井弘だった。

こうして、松井弘が何くれとなく出入りするうち、一年の歳月が流れた。松井のみゆきへの求婚——。そして迎えた破綻がいまの有様であった。

健一を「消した」のは、意外にも親友の弘だった。そして、弘は、みゆきを奪い、自分の父の縄張りである「松井組」の中へ、川村一家を吸収してしまおうとさえ企んでいたのだ。数々の証拠もあがった。みゆきは、いきり立つ川村一家の子分たちをなだめ、必ずこの復讐は私がすると云い切つて、弘の誘いを待った。

京都郊外の乗馬クラブを出た乗用車は、国道を右へそれて、山伝いに、寂しい谷間へ迷い込んだ。

馬 乗 り

「ああッ！」

弘は、みゆきの鋭い一撃で完全に参ってしまった。みゆきは、両手を背へ廻して弘の自由を奪うや、すつくと立上った。

「お前は、いま私の乗馬靴で、踏んで貰いたいと云つたわね。踏んであげるわ！ これで何か！ これでもか！」

黒光りのした長靴、銀の拍車が夜目にもあざやかなコントラストをみせて弘の喉にくい入っている。

「ウワッ、ウウーッ……」

咳き入る弘。

「これでもかッ！」

長靴が胸から腹へと、じりじりと移動して行く。ぐいッ、ぐいッと、かかとを捻つて、みゆきは次第に息をはずませ、顔を紅潮させて力をこめる。

「ええいッ！」

みゆきは、弘の腹に両足で立上った。女とはいえ完全馬装の一人の人間が、完全に弘の腹の上に立上っているのだ。

「ああッ、げえーッ！」

弘は、はね返すように悶えた。

その時、みゆきは、すでに弘の胴を乗馬ズボンのむっちりとした太ももでしめつけていた。乗馬ズボンの膝が、夜霧の大地で泥まみれになるのもかまわず、のしかかって脇腹をしめつけた。

そして、今度は、無理に正坐させ、口へ、彼女の使い古したパンティを押込み、ゴム布で猿ぐつわをした。

みゆきは、ううつ、ううつ、と低く呻き乍ら、正坐した弘の肩にまたがり、片足ずつ、弘の脇腹へ拍車をかけた。のびあがる弘。抑えこんで拍車をかけるみゆき。……

やがて、みゆきは吾に返つたのか、ゆつくりと立上り、乗馬ズボンのベルトを締め直し上衣のポケットから健一の写真を取り出した。

「弘さん。夫との秘めた語らいを、あなたの目の前で、あなたと実行したのは、これまでお世話になったあなたへの、せめてもの心やりです。こうして健一の写真の前で、あなたを殺す！ そして私も死んで行くのです。眼をとじて下さい。私の短刀が、あなたの心臓を貫きます……」

哀願するような弘の眼ざしをよけながら、みゆきは決心したように短刀を弘の胸に突立てた。弘の苦悶。——まばたきもせずに見つめるみゆき。

夜露の丘

みゆきは、弘が、ぐったりと倒れると、そのまま草の上へ坐ってしまった。
みゆきは健一の写真に頬ずりすると、さめざめと泣いた。

「あなた！ あなたの前で、私は復讐しました。あの人を殺しました。……でも、でも私



は取りかえしのつかない過ちをおかしてしました。彼の求婚を、真にうけたばかりに……。いいえ、私は馬鹿でした。体の悩みに負けたのでした。……清算しますわ。きつと清算しておめにかけますわ！」

みゆきは、ひとりつぶやいて、乗用車の中から白布をとり出し、弘の死体にかぶせ、自分分は、厚地の、レインコートを着、血まみれ

の短刀をハンケチに包むと、小走りに山をわけ入るのであった。

迷い迷い辿りついた場処は、国道沿いの、神戸港を一目に見下す丘の上である。

男物かと思うような、がばつとした厚地のレインコート。フードをはね、ベルトをゆるめて乗馬ズボンのポケットに手をいれたみゆき。

彼女は、はじめ、警察で自刃するつもりであった。しかし、もし、その隙がなかったら死におくれてしまう。数々の証拠がありながら、なんとなく手を引いている警察。それ故にも、みゆきは警察で一切を打ちあけ、自決したいと思うのだった。

みゆきは、この丘で、先ず腹を一文字に切り、苦痛を憶えて警察へ行き、隙を見て十文字に切ってみようと決心した。

彼女は、健気にもレインコートの前を寛げ乗馬服のボタンを外し、乗馬ズボンを押下げて身支度するのだった。

短刀をとり直したみゆきは、

「うっ……」

と、のめりかけながら、短刀を左の脇腹に突立てた。顔を僅かに引きつらせたのみで、短刀の切先が深過ぎはしないかと二三度押して見るのだった。あまり深くは氣力がつかない。みゆきは、動ずる色もなく、キリキリと短刀を左へ引廻した。うっすらと血汐が

噴いたが、浅傷である。

「むう……」

充分、右脇へ引きつけて抜取った。

みゆきは、手早く用意のさらしで傷口を巻きしめた。そして、痛みを忪えながら乗馬服とレインコートの前を元の通りに直し、短刀を胸許へしのばせて、重い乗馬靴をひきづるように国道へよろめき出た。折よく来合わせたタクシ―。

車は、さりげなく病気を粧うみゆきを乗せて警察署へと走るのであった。外は雨。

自 決

「そうでしたか。よく知らせて下さった。いま現場へ急行するように指示しましたから、きつとなんらかの結論が出ると思いますが、いずれにしても、実地検証が終わるまで、あなたは参考人としてここに居て貰わねばなりませんな」

「結構ですわ。でも、私、一寸疲れました。ここで少し休ませていただかせませんかしら」
「よろしいでしょう。ゆっくりして下さい。では又……」

警部の立去った調べ室。

「私が殺した」と云えば、自決どころではなくなると思ったのか、みゆきは、殺されているのを見た、と云ったのだった。

警部が去ったのを見きわめ、彼女は、手帳

禪 雜 記

百 田 章 二

去る日、買求めた古本の頁の間に、古色蒼然たる和紙、数枚が挟み込まれてあるのを発見した。見ると細字がギッシリ書込まれている。好奇心につられて読み始めたが、忽ち熱中してしまった。以下その一部を、補正改筆して御紹介したいと思います。

ある古老の話

「あの家へ行くと、きまつて禪を見せると云いやがる。厭な野郎だよ……マツタク」
「ああ、あの親爺か、ホンニ癪だが、こちらも商売、御用聞に行かねえ訳にもいかねえし……」

「何時かも云われた通り見せたところが、いい若えもんがなんて態だ！ そんな緩るフンでいい仕事が出来る筈はねえ。もっとぎゅつと締め上げる！ って怒鳴りやがった。全く面白くねえ」

「手前もか？……俺もやられたよ、ハッハハ……」

「笑いごとじゃねえや畜生！」
大工、植木屋、魚屋、米屋、等の出入り

する若い衆の噂は、その変った親爺に集中する。町でも名の通った金物屋、丸金の主人のことである。

昔気質の頑古さはあるが、反面、非常な人情家で古事記に興味を持つ人物、それが出入の若者を擱えては、遠慮会釈もなく、禪の披露を要求する。緊禪一番と云う語を尊重し、常に清潔純白、一分の緩みなくギッチリ締め込んだ禪を理想として、それに相違のモノを見ると誰彼なしに叱りつけ強意見を始めるので、常に若者達には敬遠されている次第である。

「汚ねえのをふんわり巻きつけている様な野郎に、録な仕事の出来る道理はねえ。男の魂は禪だ。真白な禪を何時もグツと締め上げて居るぐらいの心掛けでなくっちゃ、人間出世するもんじゃねえ」

と云い乍ら着物を脱いで、自分の緊禪ぶりを手本に示すのである。

「どうだ？ こう云うふうに締めていなくっちゃいけねえぞ、分ったか！」
成程、切り立てのような純白な晒が、ピ

に走りかきで今の模様を書きしるした。そしてポケットから出した数通の遺書をも机の上に並べ、いよいよ十文字腹をなしとげようと準備にかかった。

みゆきは先ず、椅子に腰を下し、レインコートと乗馬服の前を再び寛げた。そして、口に脱脂綿をふくんで、ゴム布の猿ぐつわをし、フードをまぶかにかぶってアゴのベルトをしめた。顔は、額と両眼をのこしてあとはゴム布と、フードの中にかくれてしまった。腹のさらしを取り外すと、なまなましい痕が目にしみる。

フードと猿ぐつわに隠された顔、すべてをあらわした胸と腹、一文字の傷、乗馬ズボンの中に堅くひきしまった両股、椅子に腰かけて両足をふんばった長靴。

ああ、悲惨な十文字腹が、いましのびやかに行われようとしている。

「……むうっ」

レインコート、フードに身を固めたみゆきの上体がのび上った。魔法使のようなフードのシルエットが、長くのびて、妖しい雰囲気のみゆきの上にかぶさって行く。

やがてみゆきは、下腹をえぐり、床の上に倒れる。猿轡にへだてられたみゆきの口もとから血汐が尾をひいて床の上を這って行く。

(終)

ツシリと小気味よく腰骨に締め込まれていく。

「へえー、なーる……だから親爺さんは出世なさったんで……」

と、感心すると、

「うん？……ま、まあ……ね」

と照れかくしに哄笑する辺り、仲々に親しみが持てる。彼の禪に就いての意見は、聞き手さえあれば、時と所を選ばず滔々と披歴されるのである。

日本の原始時代からの変遷、鎌倉時代に入り、モッコ禪のようなものから変じて、白布の六尺が侍階級に用いられたし、徳川初期には、すべての階層にこれが普及した。

將軍家や大名がよく白絹の使用したと云われるが、滑り易く、薄いので、全部の上層者が好んだか、どうかは詳らかではないが、一応は首肯出来る。庶民は禪のことを六尺といったが、越中禪は三尺そこそこで、六尺ではない。町民の一部は越中を使用していた様だが、後期に至り殆どが六尺愛用になった様である。勇肌の若衆や遊び人、やくざ俠客等は十二尺程の布を締め、その余分を腹に巻いたのもあるが、普通は六尺かつきりである。前布を股へ通さず、横に拡げて前上へ挟んで置くのも多かったが、これでは締った感じが鈍い。歌舞伎芝居や、

映画に現われる尻端折りの侍などが、広々と前に出すのはこの「前上挟み」を拡大した架空のものである。

道中雲助の黒禪、漁夫の赤禪は、前者は汚れを防ぎ、後者は蟻の襲撃を避けるためのもので、夫々確かな理由がある。

誰しもそうであろうが、禪は、春と秋とがその使用感が良く、夏は汗ばみ、ムレて、冬は寒々として、上に股引でも穿くと窮屈で、締めている気がしない。晒の寿命はわり合いに短い、清潔な人は一月足らずで新しく代える。素衾をパツと脱ぐと、純白な六尺の見えるのは小気味のよいもの、締める位置は、腰骨のやや下辺りが適当で、勿論、ソの下になる。高く締めているのは何となくだらしく見える。モッコや越中は禪の内に入らない醜惡なものと云える。男は六尺禪！ その使用感こそ、体内の血を湧き立たせ、堂々と事に当り得る気概を呼び起してくれるのである。今後、何十年、何百年経ても、如何に世の移り変りがあるろうとも、日本男性から六尺禪は永遠に去ることはないであろう……。

等々々、此の親爺の、「六尺禪礼讃」は尽くるところを知らないのである。

○

○

○

○

○

◎本誌百号突破記念「懸賞募集」原稿入選作品◎

女 水 兵 哀 史

——ある女奴隷愛好者の遍歴——

市 田 健 次 郎

一、私の女奴隷の条件

真新しい紺の水兵服に水兵帽姿、雨の日にはその上に白いゴム引レインコートと、やはり白いゴムブーツで甲斐甲斐しく武装した若く美しい女水兵達にうやうやしくかしづかれ、奉仕される私。これこそ男性サディストたる私の理想の境地である。私の忠実で従順な女中、女奴隷であるこの女水兵どもは、女子海兵団で厳選され、特に女従兵用にきびしく訓練された者で、御主人の命令には命を棄てても絶対服従するように馴らされている。哀れな彼女等は、私の面前で何時間でも姿勢を崩すことを許されず、少しでも過ちがあれば水兵服、水兵帽、ゴムレインコート、ゴムブーツ姿で後手に縛り上げられ、雨の中に一日晒されねばならない。

サディストといっても、私は自分で暴力を振って女を殴ったり傷

つけたりすることを好まない。そのかわり、私のサディズムはいろいろの特別の条件を要求する。

第一に、私の興味の対象となる女は私よりも格段に「身分の卑しい」者でなければならぬ。どんなすばらしい美人でも、上流の女性（後述のように引立て役としては重要だが）私を全然ひきつけない。私と女との関係は、主人と女中（戦前の）医師と看護婦、士官と女兵卒のように身分上、隔絶した主従関係でなければならぬ。第二に、私の女奴隷はその低い身分を、その言葉遣いによって最大限に示さなければいけない。よくサディズム小説などで、男にいいめられる女が、その男と対等に友達のような口をきいているのがあるが、あれは私には全然興ざめである。私にとっては、肉体的虐待よりは、言葉による社会的、身分的な侮蔑の方がはるかに重要で

ある。言葉のやりとりのない肉体的暴行は全く私には無意味である。私や私に代る加虐者が女奴隷に対して用いる二人称代名詞は絶対に「お前」でなければならぬ。「お前、煙草をとって来い」、とか「お前、私の靴をみがいておき」という風に。そして、相手の名や姓は勿論呼びすてである。それに対し、女奴隷は、「ハイッ、かしこまりました、ございます、旦那様」「ハイッ、申しわけございません若奥様。後生でございます、お許し下さいませ」というように最大限に自己を卑下した敬語法を使わねばならない。今では、女中ですら「お前」と呼ばれなくなつて来ているが、たまにラジオドラマで「由紀、おまえお供おし」などと令嬢に命ぜられている女中の声などを聞くと私はそれだけで、刺激を感じる。このように、露骨に身分関係をあらわす会話への興味こそ、私のサディズムの核心なのである。

第三に、云うまでもなく、私の女奴隷は若くて美しくなければいけない。いくら女中が魅力的だといって、山出しのうす汚いのは困る。それから、当世はやりのドライ娘もまっぴら。私の小間使は、できれば、都会の下町の貧家に育ち、邸奉公でみがかれた、可憐でウェットで、従順で、気がきいて、しかも、自分の身分の賤しさをいつもわきまえてつつましく、卑屈な娘——一口でいえばお邸女中型の女であつてほしい。昔は、山の手の小間使や大病院の看護婦、高級ホテルのメイドなどにこの型が多かつたが、今の世の中ではこういうのはめつたにいない。

第四に、服装の点で私は特別なコンプレックスをもっている。まず、私は裸体には全くひかれない。それから、和服や日本髪にも全然興味がない。それに、私の小間使趣味からも予想されるように、貴婦人風の服装は（引立て役の場合は別として）私の最も嫌うところ。豪華な毛皮などは言語道断である。私の強くひかれるのは貧しい娘達の質素でしかも小ざつぱりとした衣服。特に私の好きなのは

制服である。看護婦、バスの女車掌、ホテルのメイド、西洋風の女中服（エプロンとボンネット）をきた小間使、ゴルフ場の女中キヤディ、などみんな魅力的だ。しかし何といつても水兵服、水兵帽の女水兵が圧巻である。先日「レーニンングレード交響楽」という映画を見たら、可愛い女水兵が出てきたが、あんなのが今の日本にもいたらと思う。女学生セーラー服姿も悪くはない。しかし、彼女らは子供っぽすぎる上に、余り明るすぎて、看護婦や女兵卒のようにきびしい規律のもとに酷使される娘達のもつ職業的な哀れさがない。それから、数年前まではやった女性のゴム引レインコート。これは私の女奴隷に欠かせない制服である。色は純白、ピンク、紺などがよい。余り高級品でなく、ブードを後に垂れたとき、ゴム裏が見えるのがよい。それと女性のゴム長靴。色は絶対純白にかぎる。そして、最近はやりの短い固いのでなく、やわらかいゴムで作った膝までの深いもので、甲のところに足首を締めるゴムのストリップのついたもの。とにかく、水兵服、水兵帽、ゴムレインコート、ゴムブーツと揃えば文句はない。私のこの好みがどうしてできたかは後で述べよう。

第五に、私は（少くとも現在の私は）自分で手ずから女奴隷を始めるよりは、女奴隷と同年配位の勝気で高慢な貴婦人型の女性に彼女をいじめさせ、自分はその貴婦人の身内の男性として鷹揚に傍観していることに最大の刺激を感じる。そのいじめ方は、前記のように肉体的虐待よりは、言葉による心理的加虐の方がずっと味がある。若夫人や令嬢に犬猫のように侮蔑され酷使される美しい女中、同年配の女医に呼びすてにされて追い使われる若い美人看護婦、士官の若夫人にこずき回されいじめられる可憐な女中用女水兵などが私の好む構図である。

私のこのような一風変わったサディズムが、どうしてできてきたかをこれから語ろう。

二、女

中

私のサディズムはまず少年時代の自分の家での女中への興味にはじまり、伯母の家や病院での看護婦を通して、戦争末期の海軍時代に士官宿舎女中への関心という形で一応完結した。まず女中からはじめよう。



四

今でこそ女中も人間なみに扱われるようになったが、終戦前の都会の上、中流家庭の女中は大抵哀れな女奴隷だった。山本有三の小説「風」には冷酷な令夫人や高慢な令嬢に犬や猫のように追い使われて、ついに死んで行く哀れな若く美しい女中の姿がよく描かれている。実際、彼女らは五円とか十円とかいう僅かな給料で、早朝から深夜までこき使われ、主人や主婦からは勿論のこと、幼い子供からさえも呼びすてで侮蔑され、また、世間からは「婢」とか「女中風情」とかいつて軽んぜられた哀れな女奴隷だった。中流の官吏の家に育った私には、権式高い母や妹に追い使われていた女中達の姿は最初は同情を、ついで次第に性的関心をよんだ。女中達は暇をとったり、父の媒酌で出入の者と結婚したりして始終かわったが、中には私の記憶に残る美しい娘も数人いた。深川の太工の娘で美代という女中がいた。今で云えば、ちよつと若尾文子に似た色白の可愛い女中で、私の十六、七のとき家に来て三、四年ほど奉公した。私服ざらいだった母は、女中達にも質素ながら洋服を買い与え、いつも小ぎれいにさせておいたが、私よりも二つほど年上だった美代は、なかなか洋服がよく似合った。母はよく美代をお供につれてデパートなどへ行つたが、あるとき私も空気銃を買ってもらうために一緒に行つた。母はあれこれと物を買って全部美代に持たせた。売子が見かねて「お急ぎでなければ配達いたしましょうか。女中さんが大変でございますわ」というと、母は平気で「いいのよ、そのために女中を連れて来てるんだから。美代ッ、お前は何て怠けものの小間使なの。お前が大儀そうにするから私が迷惑するのよ。もつとしやんとおしッ」と美代を一喝した。美代は恐縮して「ハイッ、申しわけございません、奥様」と、電気

にかけられたように姿勢を正した。私もさすがに余り可哀そうだったので「おい、少し持ってやろうか」と美代に云うと、彼女は「いえ、坊ちやま、とんでもございません。勿体のうございます」と云って、けんめいに大荷物を抱えていた。母は私に「荷物を持つのは召使の役です。あなたは黙ってらっしゃい。女中を甘やかしてはいけません」といった。私の一ツ下の妹も女中など人間と考えていなかった。彼女は絵の展覧会を見に行くのに女中を従えて行き、会場の外で「由紀、お前はここで待っておいで」と女中に命ずることなどは平気であった。それでも、昔風にきびしく訓練された従順な女中は命ぜられた通り何時間でも忠実に御主人の用のすむのを待って立っていた。

私が十八才、妹が十七才位の時だった。ある日の午後、学校から帰宅すると、妹の部屋で激しく叱責する妹の甲高い声が聞えてきた。入って見ると美代が妹に叱られて泣きながら立っている。何でも、妹の日記を見たというのである。「美代、お前は泥棒よ。ひとの日記を盗み見るなんて。しかも小間使の分際で」「申しわけございません。ついお机の上にございましたもので」「お前のような者はこらしめのためにこうしてやるっ」と、気丈な妹は立ち上って美代に二つ三つ平手打をくわせた。身をふるわせて泣き崩れる美代。私はこの可憐な女中（といっても私より二つほど年上だったが）をいじめてみたい衝動に駆られた。私は救いを求めるように私をみつめている美代の白い頬につづけざまに平手打を加え、怯えてわなないているそのしなやかな軀をいきなりねじ伏せて後手にしぼり上げてしまった。「さあ、お仕置だ。お前は今朝も僕の靴をみがくのを怠けたな。立て」と、私はわざと邪慳に彼女の衿がみをつかんで立たせ、しばられて抵抗できないこの女中の頬に、もう一度平手打を喰わせた。「お許し下さいまし。坊ちやま、痛うございます」と必死に哀願する小間使を見て、妹はたのしそうに笑いながら、「いい気味だ

わ。お前、罰として一日そうしておいで。お兄さま、もっとひっぱたいてやって下さらない。こんな不心得な女中は少し痛い目に合わせなくちや」と云って、さっさと遊びに行ってしまった。私は少し可哀そうになったので「おい、お前、今後気をつけろ」といって、縄を解いてやろうとすると、美代は涙にぬれた可愛い眼で私を見上げながら「よろしいんです。坊ちやま、お願いでございます。このままでわたくしをもっとひどく殴って下さいませ。わたくしは坊ちやまにそうされるのがとてもうれいのでございます」と云って、後手にしぼられたままその豊かな肢軀を私の足下に投げ出した。私はこの時、はじめて自分の中にあるサディズムの血をはっきり自覚した。けれども、自分で手を下してこれ以上美代をいじめることは、何となくはしたない気がしたので、そのときは「馬鹿なことを云うな。早く行って仕事をして来い」と、心なくも彼女を追い出してしまった。しかし、その日から美代の私に対する忠勤ぶりは大したものだった。大体この美代という女中の母親は、私の母の実家の小間使だったから、私のところとは二代の主従関係にあり、彼女はいわば生れながらの忠実な婢として元来私の家族にはよくなついていた。しかし、例の事件があつてからは、こちらが当惑するほど私にはよく仕えてくれた。俄雨のときなどに、カサを持って駅まで学校帰りの私を迎えに来るのはきまって美代であった。そんなとき、美代は自分は決してカサをささず、いつもゴムの雨合羽にゴム長靴という姿で、私のカサを後生大事ににぎりしめて雨にぬれて立っていた。私のかえりがいつもよりおそくても、彼女は辛抱強く待っていて、群集の中に私を認めると、うれしそうに白い歯で笑いながら、「坊ちやま、お帰りなさいませ、お疲れでございましょう。お鞆はわたくしがお持ちいたします」と、甲斐甲斐しく私に従って家にかえった。雨合羽と長靴で豊満な肉体をつつんだこの忠実で可憐な女中の姿は今でも私の心にやきついていいる。

美代にかぎらず、当時の女中達はこのような女奴隷として酷使されながらも、それを貧しい家に生れた身分の低い娘の宿命として、つつましく忍従していた。この可憐な女性群像に対する私の少年時代の淡い気持こそサディストとしての私の好みを決定したように思える。

三、看護婦

私は大東亜戦争のはじまった年に大学に入ったが、そのころ丁度父が転勤したので、伯母の家から通学した。伯父は中位の病院をもつ医者で、子供としては私と同じ年の従妹が一人いるだけの小家族だったが、私の家より広い家に住んで相当派手に暮らしていた。ここにも女中は二人いたが、どちらも美しい女ではなかった。しかし、伯父の家にいた二年余の間に私は看護婦達に興味をもつようになった。看護婦は普通むしろ男性マゾヒズムの対象となるらしいが、私の場合には、特殊な環境のせい、逆に彼女達はサディズムの対象となった。

今では、アメリカニズムの影響で、看護婦の社会的地位が非常に向上したが、終戦前までの看護婦は、「白衣の使」などといわれながらも、実際上は医師の召使いにすぎなかった。病院を兵営にたとえれば、医師が将校、婦長が下士官、看護婦が兵卒というように、露骨な身分的差別があった。当時の看護婦は、女中や女工よりは多少よいが、大体バス車掌や電話交換手程度の階級と見られ、看護婦自身も自分を卑下していた。このことは、「愛染かつら」や岸田国士の「暖流」など、戦前の看護婦を扱った作品にもよくあらわれている。

伯父の家は病院と地つづきだったので、看護婦達がお使いによく来たばかりでなく、何かとりこみがあつて人手の足りないときなど、看護婦が一人か二人女中と一緒に泊りこんで手伝いに来た。若い看

護婦達はこの勤務を「御本宅詰め」とか「官仕え」とか称して敬遠していたらしい。よく伯母が婦長に電話すると、中年の婦長が忠義顔をして、気のきいた看護婦をよこしたものだ。時には伯母が「鹿島をよこして頂戴」とか「山本は借りられないの」という風にお気に入り看護婦を指名した。封建的で人使いの荒い伯母や従妹にとつては公私の別などはなく、看護婦は行儀よく訓練された制服の女中にすぎなかった。

そのころはこの病院でも、医師が看護婦に用事を命ずるときには「おいッ、吉田ッ、注射器もって来い」という風に乱暴な言葉を使っていた。看護婦も、それを当然のことのように「ハイッ、ハイッ」と従順に使役されていた。私の遠縁の川田英子という若い女医が、卒業後、母校の病院にしばらく勤めていたので、私もときどきそこへ、レントゲンをかけになど行って馴染になった。その病院では、男の教授や中年の女教授はむろんのこと、卒業したての二十一二才位の若い女医までが、看護婦を使うのに「松村ッ」とか「石浜ッ」とか呼びすてにしていた。それに対し、看護婦たちは、いやな顔もせず、女士官に仕える忠実な兵卒よろしく「ハイッ、かしこまりましてございます」という風にまめまめしく命令に従っていた。若い女性が同性（特に同年配の）の姓を呼びすてにする習慣は昔でも病院の女医とその部下の看護婦以外にはなかったことであろう。これは、女中が令嬢から名を呼びすてにされる以上に軍隊的なきびしい身分の差別を表わす言葉遣いである。名のよびすては身分的な侮蔑だけでなく、ときには一種の親しさをふくむが、女性間での姓のよびすては全く一方的な優越感の表現であらう。

私は川田女医の同僚である数人の若い女医と親しくなり、よく一緒にコンサートに行ったり、お茶をのんだりした。彼女達はよくしやべり、好んで部下の看護婦達の品評をやった。しかし、賞めるにせよ、けなすにせよ、彼女達が絶対の身分的差別感をもって看護婦

達に接していることはあきらかだった。たとえば、こんな具合である。「ねえ、あの私のとこに長くいた市場^{いちば}っていう看護婦^{かんごふ}ね、今度お嫁に行くのよ」「あらそう、相手はどんな人」「海軍の三等兵曹ですって。同じ町の出身で、何でも市場が養成所にいたときからの恋仲らしいわ。でも永いこと向うが水兵さんで外出が不自由だったのが、最近漸く進級して横須賀と一緒に住むんですって。」「へーエ、水兵と看護婦か、可愛いじゃないの。でも市場って、とてもよく馴



II

と、彼女は不在で、岸川という看護婦が靴をみがいていた。顔見知りの岸川は、一礼して「いらっしやいませ。川田先生は只今御不在でございますが、すぐおもどりになるはずでございます。どうぞお待ち下さいませ」と椅子をすすめた。私は腰をかけながら、岸川に「君はいい靴もってるな」というと、おとなしいこの看護婦は顔を赤くして「あら、とんでもございません。これは川田先生のお靴でございます。私どもがこんな立派な靴を買ったら二カ月分のお給料がらされた使いやすい看護婦だったわね。私たちも何かお祝いでやりましょう」「そうね。でも市場の補充はどうするの。」「今度来た岸川をもらいたいな。あれはとても従順そうで気も利くらしいから、部長先生にお願いしてみらわ」「あら、ぜいたくよ。貴女のところには尾崎がいるじゃない?」「だめよ、尾崎なんてあんな看護婦。私たちの前ではハイ、ハイッって、従順そうにしてるけど、かげでは手をぬいてるのよ。看護婦根性^{かんごふこんせい}ってやつね」

後年、私が海軍にいたとき、同僚の中少尉連が部下の水兵達について話すとき、いつもきまって彼等の「兵隊根性^{へいたいこんせい}」をなげくのをきいたが、若い女医達の看護婦観も似たようなものだったらしい。当の看護婦の方はというと、彼女達は養成所時代から医者自分達とは桁違いに身分の高い人種と教えられ、「絶対順従^{ぜったいじゆんじゆん}」を強いられ、女兵卒のようにまた小間使のように仕えることに疑念を感じないようだった。私は大して用事もないのによく川田女医のところへ行った。ある日の夕方行く

とんでしまいますわ」といった。「何だ、英子さんもひどい人だな、看護婦を私用に使つて。君は看護婦なのかそれとも英子さんの小間使なのか。」「それはわたくしは看護婦でございます。でも、看護婦は先生の御命令には服従しなければなりませんでございますよう」

「英子さんも忠実な部下を持ったもんだ。それにしても、君達は可哀そうだなあ、朝から晩までこきつかわれて。それに同じ若い女同士なのに、女医さんたちから呼びすてにされ命令されるのはくやしくないのかい。」岸川はいかにも心外だという面持で「とんでもございませんわ。先生方は良い家のお嬢様でいらっしやる上に、むしろかしい学問をしておいででございます。わたくしなどは貧しい家の娘で、生れつき身分がちがうのでございます。くやしいなどと、そんな勿体ないこと考えたこともございませんわ」と云つて「一寸失礼いたします」と隣室へ行つて掃除をはじめた。やがて川田女医が帰つてきた。「まあ、よく来て下すつたわね。お待たせしてすみませんでした」といつて看護婦のいないのに気がつき「研一さん、岸川がいなかった」ときいた。「となりの部屋にいるよ」というと、彼女とは話すときは全然ちがった甲高い威圧的な大声で「岸川——ッ」と呼んだ。岸川は掃除道具を持ったままあわてて走つてきて一礼し「お帰りなさいませ、先生」と川田女医のコートを脱がせた。

川田女医は邪慳に「だめじやないの岸川、お茶も出さないで、気がきかないわね。早くもつておい」と看護婦に命じた。善良な岸川はすっかり恐縮して、「申しわけございません、お掃除をすませてからと存じます。只今すぐお持ちいたします」と云つて去り、すぐうやうやしくお茶を捧げてきた。女医は有難うともいわずに「今度から気をつけてね。岸川、もうお下がり」と命じた。岸川は「では、下がらして頂きます」といつてつつましく一礼して看護婦室に下がつて行つた。私は「英子さんもいい御身分だな、看護婦を小間使代りにして靴まで磨かせて。でも、いくら看護婦だつて呼びすては可

哀想だな。若い女同士だもの」と云つた。すると、川田女医は色をなして「冗談じやないわ、研一さん。看護婦なんか一々何々さんなんておかしくて云えるもんですか。部長先生からも看護婦は甘やかさずに呼びすてにすべきしく訓練するように云われているのよ。私だけじやなくてよ」と応酬した。しばらく雑談してから、川田女医は廊下に顔を出して大きな声で「岸川——ッ」と呼んだ。岸川はすぐ走つてきて一礼し、「お呼びでございますか、先生」といつて直立不動の姿勢で命令を待った。「あのね、岸川。私、今夜当直だからベッド作つといつて」と川田女医が命ずると、岸川は去つて、しばらくしてまた姿を現わし「申し上げます。おやすみの御用意できましたでございます」とうやうやしく復命した。彼女はさらに「あの、お風呂もよろしいそうでございます。御入浴のときにお呼び下さればわたくしがお流し申し上げます」と切口上で云つて去ろうとした。

女医はよびとめて、「ちよつと岸川、今晩少しつかれてるからまた足を揉んで頂戴」といつた。私は長居を謝して辞去したが、その晩は何となく興奮して眠れなかった。あの美しく可憐な岸川が、看護婦の制服のまま、勝気な川田女医の小間使として、女兵卒として、いや女奴隷として奉仕させられている姿を想像したからである。これに似た場面にはその後よく居合わせたが長くなるのでやめよう。

要するに、終戦前の日本の大病院の看護婦は、私の頭に画かれた女兵卒のイメージにきわめて近い階層であつた。病院の冷くきびしい階級制度にしばらく、制服に身を固めて酷使され、厳重な規律のもとに「絶対服従」を強制される彼女達は実に被虐的な美しさをもつていた。制服を着せられて酷使される若い女といえはバスの女車掌などもそうだが、彼女達は私にはそう魅力がない。というのは、彼女らとその労働の相手である運転手との間には昔の看護婦と医者との間のような身分的隷属関係がないからである。その点では、重い荷物をかつがされてゴルフアヤーのお供をし、獺犬のようにかけま

わされる制服の女キヤデイーの方が魅力的である。しかしとにかく昔の看護婦、特に若い女医や院長の令嬢などに顔で使われる若く美しい看護婦は私の大きな郷愁である。

同じく病院につとめる白衣の若い女性といっても、昔の女医と看護婦との間には、前記のように、女士官と女兵卒のような大きな身分上の差別があった。真白い看護婦服に看護婦帽、白い運動靴という清楚な姿で甲斐甲斐しく、つましく川田女医に仕えていた看護婦の岸川の可憐さは今でも忘れられない。しかし今では世の中がすっかり変わり、看護婦も自覚し向上した。今の女医は看護婦に向って「何々さん、カルテもってきて下さい」と頼むだろう。看護婦も昔のように「ハイッ」や「ございます」一点ばりの窮屈な敬語を使わないだろう。十年の間の社会の変化は驚嘆に値する。しかし、それでも、私は看護婦帽を頭にのせた若い女性に清い好意を感じることもある。

四、女 水 兵

女の軍人というと、アメリカやソ連の女将校の連想から、男性マゾヒストの崇拜的となつていふらしいが、サディストとしての私が好むのは勿論女兵卒である。日本にはこれはなく、旧陸海軍の看護婦が、特に軍医や将校患者との関係では、それに近い存在だったろう。

事実、海軍の看護婦は礼式の上からも水兵に準ずる者として扱われた。上官からは勿論呼び捨てて「お前」と呼ばれていた。軍医の中には部下の看護婦を兵卒なみに殴りつける人もいたらしい。(アメリカの看護婦が将校なのは日本人には全くおどろくべきことだった。)

吉川英治の「新平家物語」には、木曾義仲の軍中の若い「女兵」達の記述が出てくる。吉川氏自身の表現を借りると「軍婢」であり

「美しき奴隷」であるこの女兵どもは、合戦のときには犬猫のように危険な命令を受け、陣中では武將たちの婢として雑用に使役せられる。原作では、女兵の一人である美しい娘山吹が義仲の手ごめにあつてやがて棄てられ、その上、女主人である葵の嫉妬を受けて身分をかさにきた葵から女性特有の執拗さでいじめぬかれながら、卑しい女奴隷の悲しさで反抗もできず、ついにあさましい死に方をする経緯が巧みに描がられている。この原作にもとづいた衣笠監督の映画「義仲をめぐる三人の女」では、女主人と女奴隷とのこのような葛藤はほとんど描がかれておらず、物足りなかった。けれども天下一の美人山本富士子の演ずる女兵山吹の可憐さはやはりすばらしかった。女兵という賤しい身分のゆえに、美しい山吹が土下座して義仲や巴御前にかしずく姿は大した魅力だった。私はこれを見てから大の山本富士子ファンになった。

私は戦争の最後の一年余の間海軍にいた。私は幸運にも最初から学生出身の士官として教育を受け勤務についたので、多くの同年配の青年とちがい、一兵卒としての悲哀を味わわずにすんだ。陸軍とちがってイギリス流の貴族主義を輸入した海軍は、インテリには受けがよかったが、その反面、今日では想像もできないほど反民主主義的だった。私達は「下士官兵」を全く自分達とは人種のちがう者として見下すことをくりかえし教えこまれた。いやしくも士官たる者が水兵風情と一緒に興じたり、食事を共にしたりすることは厳禁された。道を歩いていて、我々に敬礼を怠る水兵をつかまえて気絶するほど殴りつけるのは我々の神聖な義務であった。教育を終えて勤務につくと、我々のような青二才の士官にも、それぞれ若い水兵が「従兵」として配給される。海軍の従兵は全くの奴隷だった。女中はあまり酷使すれば暇をとるが、従兵はどんなに酷使しても文句をいわない。云えば半殺しにされるからである。主人の気に入らぬときは容赦なく殴られる。洗濯、掃除、給仕その他一切の雑用は従兵の

役だった。私も、ときには自分の従兵に対して淡い同性サディズムを感じないわけではなかったが、いつも、従兵が女だったらどんなにすばらしいだろうかということを空想していた。ところが、短い期間ではあったが、私の夢がある程度実現される機会が到来した。

私は終戦の年のはじめにある地方の相当大きな海軍の施設に転勤した。そこは実戦部隊ではないので、我々は町の士官宿舎の別館にとまり、そこからすぐ近くの戦場へ通勤した。士官宿舎には今までの従兵の代りにいわゆるメイド達がいた。別館には独身の若い中少尉ばかりが十七、八人住んでおり、気の荒い連中が多かった。はじめは女中が四、五人しかおらずサーヴィスが悪かったが、私が行くとすぐに近所にある諸施設の「防空要員」兼用ということで増員になり、士官二人にそれぞれ一人の女中が専属することになった。しかし、私達のように実戦部隊にいて従兵を使っていた者は異口同音に、「メイドの躰けがなつとらん。従兵なみにきびしく訓練せにやならん」といきまいた。衆議一決して、我々が交代で当直士官となつてメイドを再教育し、従順で規律正しい「女従兵」に仕込んだ。結果は上々で、元来従順な土地の娘である彼女達は反抗するどころか、「女従兵」となることをむしろ光榮としていた。しかし、衣料不足時代のことで、彼女たちの服装は貧しくかつ不揃いで、訓練のために整列させてみても見苦しいばかりでなく非能率的であった。そこで茶目気の多い山崎中尉の提案で、衣糧関係当局に顔の利く杉山少尉がどこからか水兵用（おそらく少年兵用）の被服一式を調達してきて、これを女中達の制服とした。上司から文句が出るとうるさいので、「防空任務用に必要」ということを強調し、階級章と帽子の「帝国海軍」という文字をはずすという条件で、内々に承諾してもらった。これで内容・外觀共に本当の「女従兵」ができ上った。当の女中達は無邪気なもので、水兵服を着て鏡を見ては敬礼などしてはしやいでいた。「女従兵」という言葉は長すぎるから、何か良い

名称はないかということが或る日の夕食で問題になったので、私は即座に「従婢」という名を提案し、満場一致で採用された。私は、職場での仕事のほかに、別館附近をふくむ一ブロックの防空指揮官をかねていた。私の指揮下には三つの班があり、第一班が宿舎別館の従婢たち九人、第二班は勤労働員の中学上級生約十五人、第三班は、やはり勤員の女学校上級生約二十人から成り、各班にはそれぞれ班長として兵曹が配布されていた。生徒たちはみなすぐそばの事務所や作業場の要員で、いそがしかったので、自然第一班が一番責任の重いポンプ班となった。だから防空演習の時には、いつも九人の従婢が私の指揮下に入ることとなり、同宿のほかの士官達よりは彼女達と接触する機会が多かった。そのうちにいよいよ本土空襲のおそれが高まったので、私は第一班長の柴田兵曹に別館の空いている小室を与えて泊らせ、同時に従婢達の監督について私を補佐させた。

私は山崎中尉と二人で一室を占領していたが、我々付きの従婢は新井鈴子という二十二、三の、小柄だが色白で、肉付の良い美しい女中だった。履歴を調べてみると、一時東京へ出て麻布で女中奉公をしていたところ、主家が疎開したので、田舎にかえされ、徴用のがれに宿舎の女中を志願したらしかった。そのせいか、気がきいて言葉もはきはきしていたので、私は防空指揮官としてこの新井に私付きの伝令を命じた。彼女が少し大きすぎる水兵服の上に水兵のバンドを締め、白い脚絆をはいて、水兵帽をかぶり、伝令としてリスのように走り使いする姿はとても可憐だった。伝令新井は従婢としてもまた、とても模範的で清潔だった。

九人の従婢の中に、新井のほかにも、もう一人私の記憶に残る女中がいた。桑谷一枝といって、近所の漁村の娘で、子供のときから浜で働いたというだけあって、大柄で肉が締まり、色は浅黒かったが鄙にはまれな顔立ちをしていた。彼女は新井ほど気がきかなかった

が、何しろすばらしい体をしていたので、私は防空隊では彼女に小型のポンプ車をひく役を与えた。桑谷はいつも水兵服・水兵帽姿の上に水兵の着るゴムの雨着（私達士官は紺のギヤバジンの雨着）をきてバンドを締め、ゴム長靴をはいて車をひっぱっていた。桑谷は沢村中尉と岩本少尉の部屋の従婢で、私とは防空隊以外ではほとんど接触はなかったが、私の伝令兼従婢の新井とは特に仲良しだった。

防空演習は少くとも週に一度あった。新井をのぞいて八人の従婢達から成るポンプ班員はみな晴れた日でも水兵姿の上にゴムの雨着とゴム長靴で武装して活躍した。頭巾をかぶると命令がききにくいので、彼女達は頭巾をうしろに垂らし、水兵帽の紐をあごにかけて甲斐甲斐しく命令を待った。伝令の新井従婢の活躍はめざましかった。彼女だけは雨の日以外は雨着を着ずに可憐な女水兵姿でリスのように走り回り、私の隊と他の隊との連絡をとった。こんなとき、彼女は小柄な体をすばしこく動かして走ってきて私の前に立止り、水兵帽に手をあてて拳手の敬礼をし「伝令、本部より命令でございます。……終りッ」とまた敬礼し、また私の命令を受けては去って行った。私は自分の忠実な女従兵でもあるこの娘（といっても、よく考えれば私より一つ若いだけだったが）にいつの間にか、好意を寄せるようになった。しかし、士官が部下の



女、特に宿舎の女中のような身分の者に興味をもつことなどは当然厳禁されていた。海軍は士官が「レス」で遊ぶこと、つまり玄人女を買うことについては実に寛大であつたが、その反面、部下の素人娘との交際は絶対タブーだった。だから、私の新井への気持も当人へも第三者へも打明けられないものだったし、また極度のいそがしさにまぎれて、ある程度以上は深まらなかつた。ただ、部下としてまた召使としての新井の忠実さへの信頼は日に日に強くなって行った。

その年、つまり終戦の年の四月の中ごろだったか、それまで私達の施設に応援に来ていた海兵団の兵隊が本土決戦に備えてひきあげたので、またいろいろな仕事があつた。その一つは、士官舎別館のすぐうらにある三棟の倉庫の監視であつた。私は上司からの命令でこの任務をひきうけたが、とても人手がないので、日没から日の出までだけ九人の従婢を交代で番兵に立てることとし、毎晩一人三時間半ずつ三交代制とした。従婢たちにとってみれば、三日に一度三時間半も寝ずに立たされるわけで、

ひどい労働強化であるが、あのころのこととて、勿論文句など云えなかった。彼女たちの軍事教練の方は有能な柴田兵曹の手で毎日行われていたので、番兵としてもなかなか本格的だった。彼女たちは本当の水兵のように銃を持ち、剣を吊り、健気な姿で衛兵に立っていた。おかげで、一時ひどかった倉庫あらしも、ほとんどなくなってきた。しかし、一ヶ月ほどすると、第二倉庫にある士官用の高級食糧や衣料が町で闇に流れているという噂が私の耳に入った。私は早速柴田兵曹と相談して、ときどき夜中にみずから巡回したが、犯人はあがらなかった。

五月の末の或る小雨のふる夜、十二時頃、私は就寝前に一人で懐中電灯を持って、倉庫の見回りに行った。部署に立っている番兵に光を向けながら、「お前は誰かっ」というと、「ハイッ、別館従婢新井鈴子でございますッ」という声と共に、雨でピカピカ光る雨着に小柄な体をつつんだ新井がうやうやしく捧げ銃をした。視野をひろくするために、頭巾はなるべくかぶるなという命令をよく守って頭巾を後に下げているので、水兵帽がすっかりぬれていた。「異常ないか、新井」というと、彼女は「ハイッ、異常ございません」といって、また捧げ銃をした。彼女が渾身の力をこめて捧げ銃をするたびに、ゴムの雨着がサラサラ鳴った。私はこの忠実な女水兵のために何かやさしい言葉をかけてやろうと思ったが、ぐっとこらえてわざと乱暴に「よし。このごろ不用心だからよく気をつけておれ」と命じて去った。彼女はまた捧げ銃をした。別館にかえってしばらくうとうとしたが、三時半頃眼がさめて、何だか気になるので、柴田兵曹を起して二人でまた巡視に出かけた。

行ってみると第二倉庫の前で何だか人の気配がする。それに第二倉庫のすぐ前の電柱にはいつも用心のために電灯がつけてあるのだがそれも消えて、あたりは全くの闇である。柴田兵曹に手で合図しながら近づくと、突然若い女の声が出た。「早く早く、みつかった

ら大変よ。」私は「お前は誰かっ」と叫びながら、柱灯のスイッチを入れると、ゴムの雨着をきた背の高い女水兵が番兵の服装でおびえた顔付をして立っていたが、彼女はあわてて「ハイッ、別館従婢桑谷一枝でございます。」といって、本能的に捧げ銃をした。「お前はそこで何をしとるか。誰と話しをしとったか」と私が一喝すると、彼女はいきなり銃を棄てて逃げ出した。私は「待てっ」と追跡したが、足の早い娘で五十米ほど追ってようやくつかまえた。私は彼女をその場に殴り倒して馬乗りにおさえつけた。さすがに上官である私に抵抗することはしなかったが、それでもこの大柄な女水兵は必死になって、もがいてのがれようとした。私は彼女を縛ろうと思っただが手許に縄がない。仕方なく、救急用に持っていた三角巾で縛ろうとしたが、彼女はなかなか力が強くて思うようにならない。そこで、水兵帽をかぶった桑谷従婢の顔を二、三度力まかせになぐりつけ、「神妙にせんと、拳銃で打ち殺すぞ」というと、ようやくあばれなくなり、「申しわけございません。お許し下さいませ」と泣き始めた。幸いそこは別館の近くで明るかったので、私はすぐそばの電柱の支えの針金に彼女を後手のまましばりつけ、「太い奴だ。しばらくこうしとれ」と云って、第二倉庫へむかった。さすがに桑谷はうなだれて泣いていた。第二倉庫へ行くと、柴田兵曹が、「石田中尉、倉庫の戸が開いておりました。犯人は中にかくれているようでありますので、おかえりをお待ちしておりました」と云った。私は「よし、御苦労」と云って、戸を開けさせて中に明りをつけた。私は柴田に入口を見張らせ、自分で拳銃をかまえつつ、用心深く中を点検して行った。私が半分ほど中に入ったとき、突然砂糖袋のかけから人影が躍り出し、私のわきをすりぬけて逃げようとした。私がそれをさえぎったので、犯人はまた棚と棚との間の薄暗い路地のようなところへ逃げこんでしまった。しかし、こうなれば袋のネズミである。それに、よくわからないが犯人はどうも女で、しかも別

館の従婢の一人らしい。そうなら、私に危害を加えることはないはずだ。私は拳銃の安全装置をかけてサックにもどし、素手で闇の中に入ってしまった。いた！犯人は一番すみのところで砂糖袋の上に身を伏せてブルブル震えていた。私が首筋をつかまえると、手足をバタバタさせたが、「馬鹿者ッ」と大喝して一つ二つくらわせて組み伏せると、体中を痙攣させたようにヒクヒクさせて泣き伏した。私は外にいる柴田兵曹に大声で「おい、つかまえたぞ。大急ぎで細引を二本持ってきてくれ」と命じ、捕えられたウサギのようにもだえている犯人の首を猫の子のようにつかんで明るみにひきずり出したとたんに、思わず、「あッ、お前は新井じやないかッ」と叫んだ。間違いない。ついさっき甲斐甲斐しく番兵に立っていたその新井だ。「ハイ、そうでございます。別館従婢、新井鈴子でございます」と彼女が蚊のなくような声で云って「申し訳ございません」と首を垂れた。私は全く飼犬に手をかまれたような気がして、水兵服、水兵帽姿の新井をにらみつけ、「この裏切り者。お前には特別眼をかけてやったのに、こんなことをしてかしおって」と、本気で彼女の白い頬を殴りつけた。彼女はよろめいて倒れたが、私はその上に馬乗りになってさらに殴りつづけた。「後生でございます、お慈悲でございます」と哀願しながら、ヒクヒクもだえる水兵姿の彼女の肌が私の体を感じられた。そうだ、私は職務で彼女を罰しているのではなく、サディストとしてこの無抵抗な女奴隷をいじめたいのだ、と私は瞬間的に自問自答し、何となく後ろめたい気になった。そこへ柴田が細引をもってあらわれたので、私は柴田に桑谷を縛りなおしてつれてくるように云い、自分で新井を後手にきつく縛り上げ倉庫の中の棚にくくりつけた。やがて柴田兵曹がゴム雨着、ゴム長靴姿できつく縛られて泣きながら引き立てられてくる桑谷をつれてかえってきた。私は桑谷を新井と一緒に縛りつけ、柴田に倉庫内を点検させた。すると、柴田は「こんな物がありました」とい

って水兵用のゴム雨着で包んだものを探してきた。開けてみると、角砂糖、饅頭、粉ミルクなどの当時としては貴重な食糧が相当つんである。雨着の裏には「士官宿舎別館従婢新井鈴子」とはっきり書いてあった。筋書きはもうあきらかだった。桑谷と交代した新井が銃を桑谷に渡したまま倉庫に入り、桑谷が番兵の地位を利用して見張りしている間に、品物を盗んで、ぬいだ雨着にくるんで持ち出そうとしていたのである。

私達は二人の犯人を縛ったまま別館に連れかえり（もう五時近くになっていた）、従婢の一人である高橋をたたき起こして、新井と桑谷とを厳重に見張るように云いつけ、ひとまず休むことにした。寝ている山崎中尉を起きぬようにそっと床に入ったが、どうも眠れない。ゴム雨着姿でおさえつけられてもがいていた桑谷の姿、水兵服、水兵帽姿でもだえていた新井の若いしなやかな肌、その白い衿元が妖しい魔力で私の心をかき立てるのだ。私はふと少年時代に、田舎の山で兎狩をしたことを思い出した。網にかかった兎を手でつかまえたときの快感、無益とは知りながらも必死に逃げようともかく兎を、絶対の強者の優越感をもっておさえつける少年のよろこびと興奮。そうだ、哀れな桑谷と新井をなぐり倒し、押えつけて縛ったときの私の気持はまさにその境地だったのだ。無雑作に手足をしばらく、やがて料理されてしまう哀れな兎。今別室でしばらくは来るべきお仕置にわなないている哀れな女水兵達はまさに捕えられた兎なのだ。私は、帝国海軍の青年士官としての自制を忘れ、云い知れぬ快感に陶醉した。

翌朝私は上司に電話して午後から職場に行くことにし、早速柴田と二人で縛られている二人の女水兵を取調べた。柴田兵曹は散々殴りつけたが、彼女らはなかなか白状しない。私は棒を持ってきて殴ろうとする柴田を制して、拷問なしで口を割らせようとした。こう云うと、柴田の方がサディストだったように思われるかも知れない



が、そうではない。柴田は模範的な下士官だった。海軍ではこんなときに棒で殴ることなどは、兵隊の場合はむろんのこと、相手が動員された娘でもごくあたり前だったのである。私にもしサディストとしての罪の意識がなかったら、おそらく柴田を止めなかったろう。それはともかくとして、私は縛られている女水兵姿の女中達に、しずかにこう云った。「お前達のやったことは最も重い犯罪だ。お前達はもう今日かぎり父や母とも別れなければならないかも知れないんだぞ。」二人の従婢はわっと泣き出した。「だが、私はできるだけお前達が助かるようにしてやりたい。だから何でもかくさず話せ。」やがて、新井が決心したように美しい顔をあげて「申し上げます。私共の盗みました物の一部は地下室のすみの空箱の中にかくしてございます。」「そうか、お前達二人で案内しろ。」私は柴田に二人の従婢の縄尻をとらせて、実地検証をした。一人ではもてないほどの貴重食糧や、タオル、石ケンなどが出てきた。「これで全部か」「いえ、ほかに街で売った分がございます」と新井はオドオドして云った。律気者の柴田兵曹は「こいつら、おとなしそうな顔をしておって太い娘だ」と新井の顔をはりとばした。私はそれを制して、取調べをつづけた。その結果、二人の犯行が一月にわたる計画的なものだったこと、被害額が想像以上に大きいこと、犯行が衛兵という地位を利用して行われたことなど、犯人にとって不利な事実ばかりが出てきた。苛烈な戦争下のことだから、もし正規の兵隊がこんなことをしたら銃殺はのがれられないところだ。桑谷はともかく、私の眼をかけてやった忠実な伝令兼従婢の新井がこんな大それたことをやったのは全く意外だった。

私はその晩、別館の住人中先任順で私をふくめて五人の中尉に集ってもらい、最先任の小倉中尉を議長として処罰方法を相談した。沢村中尉（彼は犯人の一人桑谷従婢の主人だった）は軍法会議か警察に引渡して嚴重処分させることを主張したが、他の四人は部内で

処罰することに同意した。そして衆議の結果つぎのように処分することに決定した。まず見せしめのために極刑を宣告し、一昼夜後処刑することとし、処刑の直前に「特別の慈悲」で、処刑を延期し、その代り体刑と晒し刑の後、向う一年間禁足して特別に重い労働を命ずる、というのである。それまでの監視には私と柴田とが当ることになった。翌朝まだ暗いうちに私は柴田兵曹と七人の従婢たちに非常呼集をかけ、中庭を清掃させて、二本の杭を打たせ、従婢たちを整列させた。私は彼女達に向って、「お前達従婢の中に恥ずべき重大犯罪を犯した者が二名もおった。新井鈴子と桑谷一枝だ。この二名はむろん最も重く処罰されるが、朋輩たるお前達も当然罰せられる。柴田兵曹がかれ」と命じた。柴田は整列している水兵姿の従婢たちを片っ端から殴り倒して行った。連座者達の処罰が終ると、私は「伊藤、吉田ッ、三步前へ」と最右翼の二人の従婢を列外に出させ、「お前達二名は作業員となり柴田兵曹の指揮を受ける。他の者はそのままの姿勢でおれ」と命じた。やがて伊藤と吉田とがそれぞれ水兵姿のまま縛られた新井と桑谷の縄尻をとって現われ、私の命令で、二人を杭に縛りつけた。まだ夜が本当に明けていなかったもので、私は「お前達はしばらくそのままの姿勢でおれ」と命じ、屋内に入り、昨夜の五人の先任士官を起し、集ってもらった。私達はそれぞれ軍刀を持ち、一種軍装（つまりいわゆる海軍士官の服。そのころは大抵三種軍装というセビロのようなのを着ていた）に威儀を正し、そろって中庭へ出た。柴田が「頭右ッ」をかけて礼がおわると、小倉中尉が一枚の紙をもって進み出た。「別館従婢新井鈴子ッ。縛られた女水兵の新井はおびえた顔付で、しかし、はっきりと「ハイッ」と答えた。「同じく桑谷一枝ッ。桑谷は「ハイ」とほとんど聞えないような返事をした。「何だ大きな図体をして、桑谷、お前のその返事はっ」と柴田が桑谷の頭をはげしく殴りつけると、縛られた彼女の顔が滑稽なほど左右にゆれ、哀れな女中水兵はもう

一度「ハイッ」と答えた。小倉中尉はさらにつづけた。「右二名は衛兵の地位を利用し、長期に亘って官品を窃取してこれを売却消費し、あまっさえ逮捕に際して陛下の銃を放擲し、上官に抵抗せり。よって右新井鈴子、桑谷一枝の兩名を死刑に処す。なお、処刑は明朝午前七時斬首を以て行われる。終り。」当の犯人達は一昼夜泣きつづけてもう涙も出なかった。かえって、七人の朋輩従婢たちの方が動揺した。小倉中尉が彼女達に向い「お前達もよく氣をつけてこの二人の馬鹿者のように不名誉な死に方をせんようにしろ。本土決戦に備えて命を大切にせにやいかん」というと、七人の女中水兵どもは異口同音に「ハイッ」と答えた。小倉中尉は犯人達の方をむいて「なお、処刑に際しては、お前達の御主人がそれぞれ執刀して下さる。新井には市田中尉、桑谷には沢村中尉という具合だ。お前達従婢にとって御主人が手づから成敗して下さるのは分に過ぎた光栄だ。有難く思わにやいかんぞ」と云った。新井は「ハイッ」と答えたが、桑谷が放心状態でいるので、柴田兵曹がまた彼女を殴りつけて無理に「ハイッ」と云わせた。乱暴な沢村中尉は、おびえている桑谷や新田の前でわざと御自慢の銘刀を抜いて振り回して見せ、「どうだ。これはお前達のような女中風情を斬るには勿体ない刀なんだぞ。だが、桑谷、お前は肉がよく締ってるから試し斬り用には絶好な従婢だ。一度に斬り殺すのはつまらんから、少しづつきざんでやるぞ、あっぱは」と豪傑笑いをした。桑谷はそれまで生きた心地もなく震えていたが、白刃をつきつけられると、縛られた不自由な体をくねらせて、「いやでございます。殺されるのはいやでございます。わたくしが悪うございました。後生でございます、命だけはお助け下さいませ。お願いでございます」と哀願した。しかし、そもそも仕組まれた猿芝居なので、みんなニヤニヤして見ているばかりだった。でも、二人は、やはり重大犯罪を犯したという意識も手伝って、本当にバツサリやられると思ひ込んでいた。勿論、いくら乱

暴で非民主的な戦争末期の軍隊でも、中尉ぐらいの一存で死刑を行うようなことが許されないのはあきらかなのだが、本土決戦をひかえて殺気立っていたときのことでもあり、またそこは何といつても小学校しか出ていない純朴な田舎娘たちのことである。新井、桑谷兩人はむろん、他の七人の女中達も死刑の宣告が単なるおどかしだとは最後の瞬間まで思い及ばなかったらしい。私は水兵姿の桑谷が身も世もあらぬ様子で命乞いをする哀れなしぐさを見て、少しいたずらがすぎたと思った。しかし、五人で会議したことから、今更「これはうそだ」とも云えなかった。

二人の死刑囚は後手に縛られたまま直立不動を命ぜられ、他の従婢達は一名の武装した番兵を残してそれぞれ使役につかされた。私は柴田兵曹を呼んで、「二人とも弱ってるようだ。少し栄養をつけてやれ」と命じた。私は、さらに従婢の伊藤と吉田とに命じて武装させ、嚴重な監視の下に犯人達をひとりずつ交代で身づくろいするようにさせた。「お前達も女だ、見苦しい姿で死にたくはなからう。死化粧をして来い。新井ッ、お前から行け」といって、縄を解かせると、新井は「行って参ります」と挙手の敬礼をして銃を持った伊藤久美子に連れて行かれた。私は、新井と桑谷とが一昼夜半の精神的、肉体的拷問ですっかり参っていることに気がつき、少し心配になったので、昼食のときに、もう一度皆に集ってもらった。本人達がすっかり前非を悔いているので、懲罰の目的は大半達せられたこと、これ以上長く苦しめることは自殺その他不測の事態を招くおそれのあることなどを説明して、この程度でやめにしようかと私は云った。しかし、皆の反対は意外に強く、結局、狎れ合いの処刑の時刻を半日くり上げて、同日の午後七時にするというのがやっとだった。私は昼食後柴田によく云い含めて手荒なことをしないように命じ職場に行った。三時頃からまた小雨がふり出した。私は六時に別館に帰り、すぐ中庭に出てみた。番兵に立っていた従婢の片山

絹子が、ゴム雨着姿で捧げ銃の敬礼をした。新井と桑谷は雨着をきることも許されず、水兵姿のままぶねれで立たされていた。私は「おい、片山、従婢集合の笛を吹け」と命じた。片山は「ハイッ」といって捧げ銃をして、屋内に入り、ピーッと笛を吹いて従婢達を集めた。彼女達はみな水兵姿の上に雨着で武装して庭に整列した。私は一同に向い「事情により処刑は繰上げとなり、本日午後七時に行われることになった」と宣した。二人の犯人の顔からは見る見る血の気がひいて行つた。「伊藤ッ、お前は沢村中尉をお呼びして来い。その際軍刀を持って来い。吉田ッ、お前は私の部屋へ行つて軍刀を持って来い。野々宮ッ、お前は銃で武装して来い。残る三名はそのままだしておれ」と私は命じ、あとを柴田兵曹にまかせて小倉中尉に連絡するために室内に入った。

いよいよ処刑の時が来た。杭につながれた新井と桑谷のそばにはそれぞれ銃で武装した片山と野々宮とがつき、一種軍装に白手袋姿の沢村中尉と私はそれぞれ軍刀を捧げる伊藤と吉田とを従えて待機した。しばらくすると小倉中尉以下全士官がやはり一種軍装に盛装して小雨にぬれながら庭に出てきた。小倉中尉はおどそかに「これより別館従婢新井鈴子と同桑谷一枝の処刑を行う。お前達は自分の罪のむくいとして処刑されるのだ。上官を怨んではならんぞ。なおお前達の死体は本部の軍医官のはからいで某医大病院に研究標本用として寄贈されることになった。お前達のような不心得者も少しはお国のお役に立つようにとの特別のはからいだ。では処刑は特に従婢としての勤務成績の悪かった桑谷からはじめろ」と宣し、沢村中尉に「では」と合図した。沢村中尉は先任の小倉中尉に敬礼してから、軍刀を捧げるゴム雨着姿の伊藤を従えて、怯えきっている彼女の女中桑谷に近ずいた。桑谷は哀願するような眼付で自分の御主人を見上げていたが、彼が伊藤の手から軍刀をぬくのを見ると、急に声をふりしぼり、「いやでございます。私をあとして下さいませ。」

新井從婢から先に斬って下さいませ。わたくしは一分でも生きていたいのでございます」と泣いて嘆願した。この美しいが無知な女中が身もたえる姿は本当に哀れだった。沢村中尉はうす笑いを浮かべながら、「うるさい、神妙にしろ」と云って、軍刀をふりかぶり「エイッ」とかけ声をかけた。從婢達は思わず顔をそむけ、当の桑谷は「ギヤッ」と叫んだ。「馬鹿者ッ、今のは気合だけだ、今度は斬るぞ」といって、一度刀をサヤにもどした。その瞬間、かねての筈書きどおり、士官宿舎本館の女中が小倉中尉のところに紙片を持ってやってきた。それを読むふりをして、小倉中尉は「処刑待て」と叫んだ。彼はさらに「只今中沢大佐から命令があり、処刑は一時延期することとなった。新井、桑谷ッ、お前達は許されたのではない。ただ、近づく本土決戦のため、国家は一兵の命をも無駄にできない事情にある。お前達の命はしばらく預っておく。しかし、少しでも不心得があればいつでも延期はとり消すぞ。防衛司令部の発表によれば、今夜にも空襲のおそれがあるということだ。お前達も一度死んだつもりで御奉公せよ。分れ。」これで猿芝居の第一幕は終わった。新井は「有難う存じます」と叫んだなり、失神してしまった。彼女は都会生活をしたことがあるだけに、桑谷ほど取乱さなかった。けれども、それだけにほど処刑が恐ろしかったのだらう。それに前々日からの疲れで、桑谷ほど頑建でない彼女の体力は尽きたのだらう。水兵服姿で後手に縛られたまま、倒れた彼女は、縄が短いので宙ぶらりんになってしまった。私は番兵の片山に手伝わせて、縛をほどき、片山と吉田に新井の体を私の室まで運ばせた。その間桑谷はうれしさの余り子供のよう泣いていたらしいが、私は新井のことを心配していたので、余り気がつかなかった。私は、とっておきのウイスキーを出して、彼女にふくませ、「新井ッ、新井ッ」と大声で呼んだ。彼女はすぐ気がついて、本能的に立って敬礼しようとしたので、私が制して、「よし、気がついたか。こわかったらう。

お前も思ったより馬鹿な奴だ。もうあんなことをするな」というと彼女はとうとう泣き出した。「申しわけございません、勿体のうございます。御恩は一生忘れません。」彼女の美しい頬はいつの間にか紅潮し、涙にぬれた瞳は実に可憐であった。それ以後終戦までいろいろなことがあったが、長くなるのでこの辺で一応止めよう。

臨時増刊号「責小説特集号」大好評！

(表紙色刷、本文中質紙使用)

定価一部二百円

巻頭口絵	拷問	吸血女流画家	ある奇術師の恋	鬼兵衛刺青異譚	遊女葦水の最期	縛られた妻	巫女屋敷の責絵巻	読切傑作責小説	拷問	賭博	巫女屋敷の責絵巻	老いらくの恋異聞	復讐のドラマ	鬼兵衛刺青異譚
	滝れい子画	北原純子画	滝れい子画	滝れい子画	北原純子画	滝れい子画	滝れい子画	片矢 薫	二俣志津子	岡田 咲子	榎ノ木参一	片矢 薫	二俣志津子	
吸血女流画家	ある奇術師の恋	惨虐戦慄の徴用女工片矢	遊女葦水の最期	囚衣	奴隷妻	悪魔と口紅女	縛られた妻	廊の灯影	MとS	責苦	記録係	赤に憑かれた男		
岡田 咲子	吉丘 垣根	片矢 薫	古川 裕子	片矢 薫	桂 牧次郎	岡田 咲子	早川新二郎	片矢 薫	岡田 咲子	竹谷 十三	岡田 咲子	上村秀久雄		



浣腸と妊娠

—(続)—

羽村京子

一、妊娠のヌードと腹割きのこと

奇譚クラブ八月号を拝見しました。わたしの「浣腸と妊娠」をのせていただいて、ありがとうございます。妊婦のヌード写真の提案はいかがでしたでしょうか。読者の皆さまのご賛成がえられましたでしょうか。孕んだ女をヌードにして写真をとるなんて、グロテスクで悪趣味だなんてお叱りを受けるはしまいかと心配しております。その外八月号では壬生三郎さんの「切腹風土記」のうち、ことに三の帝王切開の部分面白く思いました。豊富な資料の紹介と引用で久しぶりでたんのうさせていただきました。海野さんの「妖艶木乃伊地獄」の女の生胆をとるという着想も面白いものでした。ずい分充実した読みもののなるようになった奇譚クラブに、あいかわらずつたない告白ものでは、おはずかしいくらいです。このつきにはきつと、すごいサド・マゾヒズム小説でもかいて、皆さまにお目みえしたいものです。魔教圈のようなすごい空想小説をね。今日は何かはじめようかしらうそう、辻村さんも「話の屑籠」にち

よつかいていらっしやる安達ヶ原の鬼婆のことからかいて行きましょう。

二、安達ヶ原の鬼婆と妊娠の逆さ吊り

昭和二十八年の十月号の奇譚クラブに折りこまれていた、月岡芳年の極彩色の絵、「安達ヶ原の鬼婆」をおぼえていらっしやる方も多いでしょう。骨と皮ばかりになった鬼婆が庖丁をといでいる頭の上に、臨月くらいの妊婦が梁から逆さ吊りになっています。女はあかいゆもじ一枚にまではぎとられ、両足首を一しよにしばられて、その綱で梁からつり下げられています。両手はうしろ手にいましめられています。とくに注目をひくのは、腹が異常な大きさにまんまるくえがかれていることです。いくら孕んでいるとはいっても、あんな大きなお腹になるのだろうか、と思います。

おなじような疑問は伊藤晴雨先生もいだかれたとみえて、いつか他の雑誌に、臨月の妊婦だった自分の奥さんを天井から逆さに吊つてみて、写真をとらせたことをかいていられました。が、(奇ク三十三年四月号「シナリオとその周囲」に紹介されています)たしかに熟した柿のようにぼってりふくらんだお腹は異様な感じがします。あるいはその妊婦は、羊水過多症にでもかかっていたのでしよう

か。羊水過多症ならあれくらいのお腹はちつとも不自然ではありません。こころみにわたしの計算した数字をご紹介します。

正常の妊婦の子宮が、胎児三キログラム（比重を一として三リットル、羊水一・五—二リットル、ほかに子宮の肉壁の膨大する分と胎盤をふくめて、全部で約六リットルの容積があるもの）とします。かりに、（実際はそうではありませんが）子宮が完全な球であるとすれば、その直径は約二十三センチです。羊水過多症のばあいは羊水が五—二〇リットルになるといいますから、正常な羊水の分量を二リットルとして計算すると、子宮全体の容積は、羊水五リットルとして九リットル、十リットルとして十四リットル、二十リットルとして二十四リットルになります。それぞれ直径を求めると、約二十六センチ、三十センチ、三十五センチとなります。羊水が二十リットルにもなる重症のばあいはのぞいても十リットルでも三十センチです。羊水が多くなればなるほど、子宮は完全な球に近づくと考えられますから、直径三十センチのビーチボールを買ってきて、お腹のまえにあててみるとよく分ります。ずい分大きいのおどろかれるでしょう。まして三十五センチといえば、こんな大きなものがお腹のなかに入るかどうか危ぶまれるくらい大ききになります。

つぎに、計算のついでですから、これだけの大きさの球（子宮）がお腹のなかに入ったときのことを考えてみましょう。日本の女性の妊娠末期の最大腹囲の平均が八十五センチであることは八月号にかきました。周囲八十五センチの球というものを考えてみると、直径約二十七センチ、容積が約十リットルです。これにまえの要領で羊水のふえる分をみて行きますと、羊水五リットルで直径二九—三〇センチ、十リットルで三十二センチ、二十リットルで三七—八センチとなります。腹囲は五リットルで九二—三センチ、十リットルで一〇〇つまり一メートル、二十リットルで一八センチとなります。

以上はごく大ざっぱの計算ですから、実際と合わないかもしれませんが、大たいの見当はつくことと思います。ですから熟柿のような大きなお腹も、あながち絵空事とばかりいえないと思います。芳年は偶然そういう大きなおなかを見たことがあるのかもしれない。そんな水ばかりでぼつてりとお腹がふくらんだら孕んだ当人はそれこそ大へん苦しいことだろうと思います。わたしは産婦人科のある専門書で羊水過多症にかかった臨月の妊婦の写真を見たことがあります。が、それこそ、まんまるくフットボールのよう、ものすごく大きなお腹なのでびっくりしてしまいました。

妊婦を逆吊りにすると、なかみの重みで大きくなったお腹が胸の方にさがってきます。妊婦の逆さ吊りは、わたしたちも一度写真にとっておきたいと思っていました。去年の春、ちようどわたしが臨月の妊婦だったときに、一度やってみたことがあります。わたしのうちは天井板の一部がはずせるようになっていたので、梁から直接に滑車とロープを上げ、主人がわたしを逆さ吊りにして写真をとったのです。しかし伊藤晴雨先生のように何人も助手をつかってやるのではなく、主人とわたしと二人きりですから、わたしの手は自由にしておいて万一の危険にそなえ、布をあてて（ロープにまきつけて）なるべく痛くないように足首をしぼり、伊藤先生がなさったように台をおいてその上に寝て、ある程度つり上げから台をとりおけるようにしました。吊り上げたままにしておく時間はせいぜい五分くらい、すぐにおろせるようにしてシャッターを切ったのですが、逆さ吊りになったわたしのからだはゆれ動くのがとまらないのに、戸外の明るいところでないためあまりはいしヤッターが切れないので、なかなかうまく行かないものです。おまけに主人があわててしまつて、カメラにけつまづきそうになるほど努力したわりにいいのがとれませんでした。それにふつうの家の中ではどうしても背景に変なものが入ってしまったのでがっかりです。も

ちろん、臨月の身重の大きな腹の状態で、逆さ吊りにされる身の苦痛も相当なもので、駄目だったから何度もやり直しのできるものでもなく、今でも残念に思っています。普通の妊婦のヌードだったなら何でもないことですけれども。

三、ヌード芸術論 と妊婦のヌード

写真

わたしは八月号で妊婦のヌード写真の提案をしました。そのときかきわすれたいくつかのことをかいてみたいと思います。

ヌードが芸術であるという考え方があります。わたしはもちろんこの意見を反ばくしようなどという大それた考えをもっているわけではありません。いうまでもないことですが、女性のヌード写真（そこにくつつているのはほとんど例外なく女性の裸体です）のなかには、いくつものすぐれた、格調の高い作品があることも事実です。わたしはこのことを否定しよ



うとは思いません。そのまえに、なぜ女性の裸体が芸術の対象となるのかということを考えてみましょう。

現代の社会は、だれが何といったって男性支配の社会です。男性のための享樂物がいたるところにそろっています。男性の欲望は、いってみれば、野ばなしにされ、女性の欲望はいつもおさえつけられています。それどころではなく、女性には男性の欲望への媚態が要求されるのです。男性が、よくいわれるように狂暴な狼だとしたら、女性は飼いなされた牝犬でなければならぬのです。残念なことです。ですが、女性にも、そういうふうに対応して行こうとする傾向があると思います。ですから、女性の裸体だけが芸術の対象になるのだと思います。

裸体をみせることは、現代の社会では一般にはタブー（禁忌）になっています。裸体をみせることは、いってみれば、動物としての自己を示すことです。これはマゾヒスト好みの言い方ですが、自分を相手より何か低いものとして提示することにほかなりません。日本のように

男性の裸体にたいしては寛大でありながら、女性の裸体をみる機会が日常生活ではすくないようなときは、ことにそうです。

それにもかかわらず、あえて女性の裸体を公衆のまえに提示するのは、それに芸術としての特別の価値が認められるからなのでしよう。その特別の価値がどういふ価値であるかということはわたしは論じる資格がなさそうです。けれども、すぐれたヌード写真をみれば、そこに表現されているフォルムの美しさや明暗（かげと光）の美しさについてはわたしにだって分りますし、おそらくだれをでも感動させる性質をもっているでしょう。それだからヌード写真が芸術だといわれるのです。

ヌード写真にはこのほかに、女性のしなやかなからだの躍動する美しさ、女性のやわらかい肌のかもし出す、ぬめぬめした官能的な雰囲気といったようなものがあります。けれどもこの最後の雰囲気などというのは、女自身ではしよせん、男でなくては感じ切れないものかもしれません。「よくぞ男に生まれける」いったところででしょうか。ヌード芸術論というとむずかしそうですけれど、つきつめてみると、こういったところになるのだと思います。

ところが、逆に考えれば、芸術のもつこういったきびしさ、容赦のなさが、最大のサド

・マゾヒズムではないでしようか。女のはだが芸術のモチーフとして、芸術家の非情な鑑賞の対象になるということ、そのことが一つのサド・マゾヒズムではないでしようか。人格をもった人間、その人間である女性のうまれたままの動物としてのすがたが、いわば人間という動物の牝としてのそのまのすがたが、鑑賞の対象になるのですから。

写真にはかぎりませんが、ヌード・モデルがカメラのまえに立ったときにどういふ気持がするものか想像してみましよう。カメラのまえに裸のすがたを投げだして、尖鋭なレンズによってギリギリの点まで描写された裸の女体——女体というのは人間という名の動物の牝のからだです——として、男性たちによって鑑賞されなければならぬ彼女の、ひりひりとやけつくような肌の痛みが、ヌード写真をみて感じられないでしようか。その証拠に、ヌード・モデルはけっして、笑顔をこちらにむけて、見る人に笑いかけてはいません。彼女は顔をかくすか、あるいはこわばったような固い表情をしています。彼女が人びとにみせて鑑賞してもらうのは、チャーミングな女性としての彼女のすがたではなくて、彼女の女体そのもの、そのむっちりとした肉のついた、ことにその乳房やお尻やお腹に、人間の牝としての彼女の悲しい特ちょうをかくすすべもない、むき出しにされた彼女の肉体で

あるからです。そこには芸術としてのきびしさの名にかくれて、むき出しにされた牝の、加虐と被虐とのきびしさがあります。いってみれば、芸術のもつサド・マゾヒズムがあるのです。

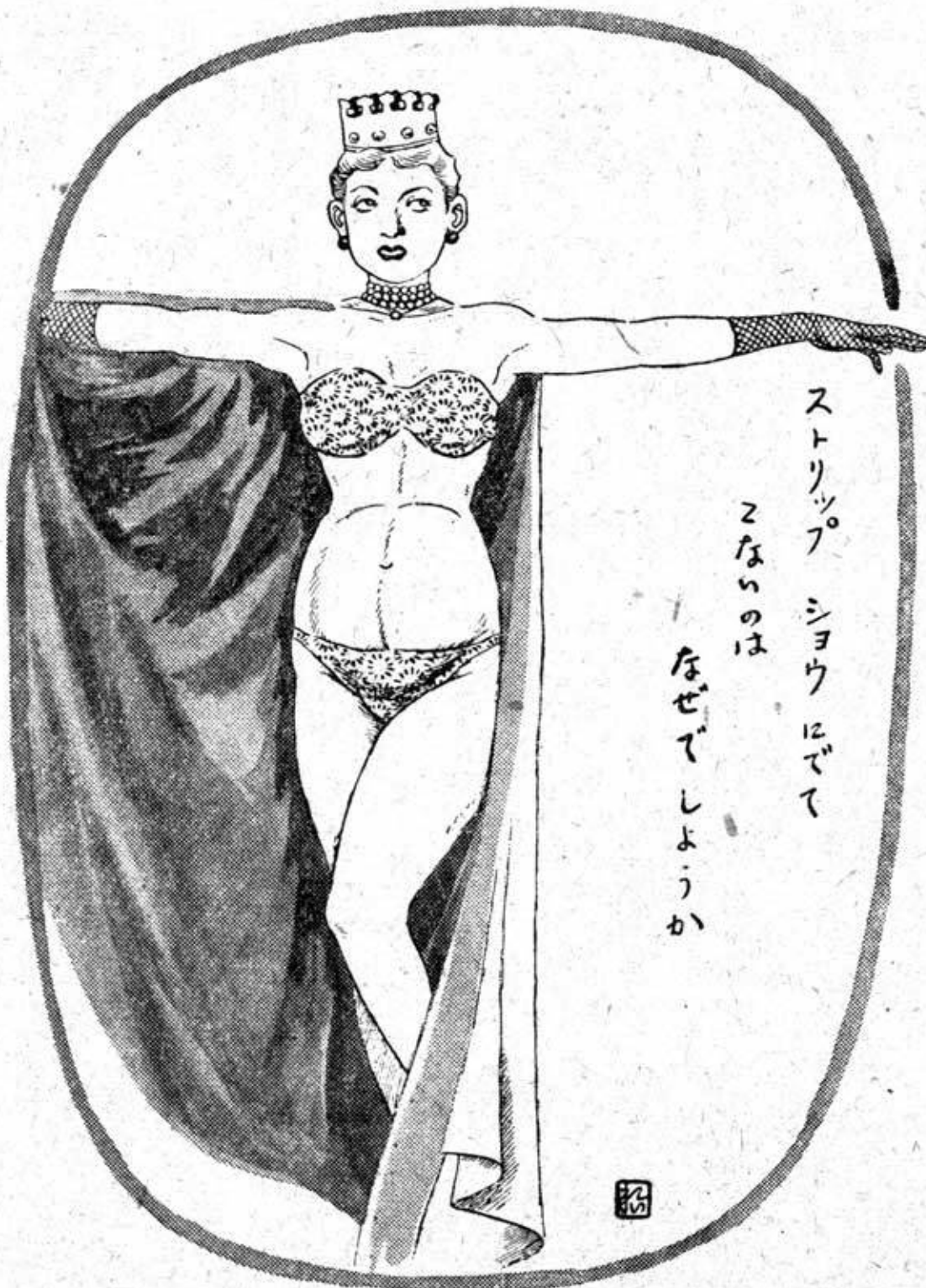
それだけではありません。実際には、ヌードが芸術であるといっても、エロティシズムを売りものにしたいいかげんなヌードが氾濫していますし、見る方がわでも、そこにうつされた女のはだかを芸術のモチーフとしてみるよりも、それ自身好色な興味の対象として、つまりはだかの女そのものを、鑑賞するというばあいが多いからです。芸術としての高さの分らない人、分っても猟奇的な興味の方がはるかに強い人が大多数をしめているのですから、チャタレイ裁判の裁判官でなくとも、ヌードは芸術だなどとうそぶいてばかりはいられないでしよう。もちろん、だからといって、ヌードが芸術になりえないということになりませんけれども。こういう点からみると、また八月号でのべたような理由からも、妊婦のヌード写真が成立しないわけはなさそうに思えるのです。まんまるく大きくふくれ上って、パンパンに張りつめたお腹に、なぜオブジェとしての写慾がもり上ってこないのか、疑問に思っているのです。妊婦が大きなお腹をできるだけ目だたないようにしようとする努力は、「みにくい」からだの

かつこうがはずかしいということでしょうが男たちは、オッパイやヒップにたいすると同様、そういう彼女たちに一種特別な好奇心をもっていることも事実です。すくなくともそれは、ある厳しゆくな事実の結果ですが、結実がそういう事実の結果であるなら、孕んだ女の大きなお腹は熟した果実そのものです。そういうものとして興味をよばないはずはないと思うのです。人生はすべて厳しゆくな事実の結果だともいえるでしょう。人生にたいする興味が芸術を成立させているのだとしたら、造型ということとはべつに、妊婦のヌード写真が芸術のモチーフになると思います。もう一つ、ストリップ・ショウに妊婦がでてこないのはなぜでしょうか。ストリップの庶民的な、したがって適度にエロチックな雰囲気は、ヌード写真のきびしさとはちがいます。ストリップは観客に笑いかけ、観客にからかいかけます。エロティシズム、あるいはエロチックなくすぐりが、はばかれることなしにそこでは追求されています。なれ合いになった気やすさがそこにはあります。おかねのためにはだかになるということが美事にわりきられて安手の演劇として興行されています。ストリップ・ショウのステージになぜ妊婦があらわれないのでしょうか。子をはらんでぶっくりふくれ上ったお腹では、はげしい踊りはとても無理でしょう。ス

トリップ・ショウを、一つのストーリーをもった軽演劇に仕立てあげるならば、あたらしい興味あるテーマを開拓することだって出来そうではありませんか。ポンポンと腹をたたいて、大きな腹をぶるんぶるんとゆさぶりがら、「わたしのこのお腹、赤ちやんが入ってるのよ。あーあ、女はこれだから……」

というようなセリフだって、結構うけると思ふのですけれど。だれか思いきってやらないかな。

四、空気流腸をされて死んだ女
妊娠のことばかりかいてしまいました。最後に一つ空気流腸のことをかきましよう。



浣腸フオト の 二 種

◎浣腸連続フオト◎

(9×13cm) 印画紙焼付

十二枚一組

略号(ちよ) 九〇〇円

浣腸マニア待望の浣腸場面連続写真、ガラス製三〇CC浣腸器エネマシリンジ、イルリガートル、いちじく浣腸などを駆使して女体浣腸の雰囲気をついに十二分に醸し出しました。発売以来、好評

女体浣腸風景十二態

(9×13センチ) 印画紙焼付

十二枚一組 九〇〇円

略号(ちよ) 大塚啓子嬢

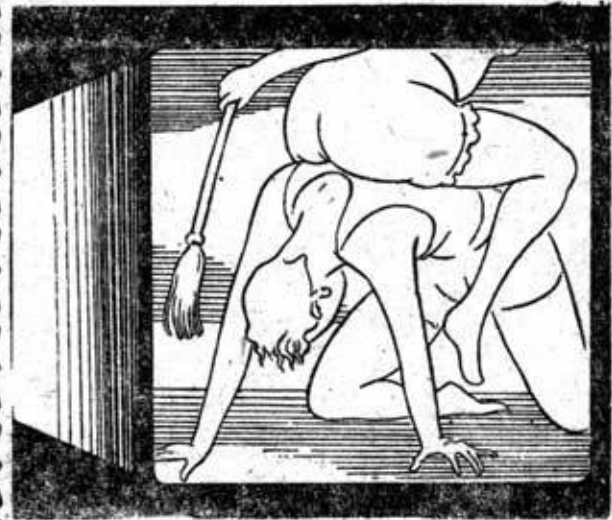
さきに発表した浣腸連続フオト(ちよ)の好評に刺戟され更に変わった趣向をとり入れ、新しいモデル嬢によって新作を試みました。

日本軍国主義はなやかなりしころ、というわたしなどまだ子供だったころですが、皇軍が中国の各地で、いうこともはばかられるような残虐なことをしたことはよく知られています。その一つ、藤原審爾さんの「みんなが知っている」のなかに出てくる例に、かわったのがあります。

わたしの空気浣腸の実験が子どもが、よくやる自転車の空気入れでかえるの尻から究気を入れ、お腹をパチンとはじけさせてあそぶあそびからヒントをえたものであることは、八月号にも書きました。日本の兵士たちはそれとおなじことを中国の婦人にたいしてしたのです。それがのっているのはごく二三行、つまり、「おそらく自転車の空気入れか何かで空気を送入されたのであろう。まるまるとふくれ上って死んでいるのに『蛙腹也』と墨で書いてあった」というのですが、こういうことはあるいは各地でもあったことかもしれない。心理学者にとって小児の残虐性はよ

く知られています。戦場のすさんだ空気でも小児にかえった日本の兵士が、おそらくこんなことをしたものでしょう。だれでも思いつきそうなひどい残虐行為ではありませんか。けれども、そのことだけで死んでいた、というのはどうでしょうか。よほどひどく空気を送りこんで、腸の管が破れたのかもしれない。空気がぬけてしまわないで、ふくれ上ったままで死んでいた、というところからみますと、あるいはそうかもしれない。かいてあったという「蛙腹也」という文句からみて、子どものときのおそびを、蛙にしたように、若い女のからだにしてみたのにちがいはりません。もし本当だとしたら、何という人命軽視の、むごいしわざでしょう。人間を蛙とおなじにあつかっているのですから。若い中国の婦人が、あらあらしい日本兵数名にとりかこまれている様子を想像してごらん下さい。二人が自転車の空気入れをもっている。日本兵は無気味な笑いをうかべながら、美し

い獲物をどう料理しようかと話し合っている。かわいそうな若い女は、みるみるお腹をふくらまされて行く。自転車のタイヤに空気を入れるときのように、ジュッジュッとポンプを押して、ムクムクとお腹をふくらまされて行く。ポコッ、ポコッと腹のなかではじけるような音がして、腹のかたちが変わったのは腸管がそれ以上ふくらむことに耐え切れなくなつて、破裂した音にちがいません。面白いように空気が入る。どの顔もこのサディステックな遊びにどす黒く興奮しています。ぐつとのけぞってふくらんでいる女は、まるで蛙をつくりだ。お腹がパンとやぶけてしまわないのが物足りないけれども、人間は蛙じやないから、そう簡単にはいかないだろう。このままで道ばたにすてておけ。面白いみせものになるだろう。そして一人のオッチョコチヨイの男が墨で字をかけたものでしょう。戦争はおそろしい残虐さを生みだします。わたしたちの平和な生活がこのようなかたちでくずされていくことには、わたしはとてものがまんできないでしょう。しかし、戦争はサド・マゾヒズムの何という宝庫でしょう。わたしは矛盾した気もちに苦しめられます。中国の各地で、良民をとらえて妊婦の腹をさくなどということも平気で行われたにちがいません。何という恐ろしいこと、そして同時に何というすばらしい人間の悪魔性でしょう。



マゾヒズム百景

馬場好男

第八景 護身術

最近若い女性間にとみに盛んになって来たのが護身術。売春禁止のあたりだかどうか知らないが痴漢、暴漢が増えて夜など女性の一人歩きは危険とされて来たので当然かもしれない。よく新聞等のマンガに男の手をねじりあげたり金色夜叉よろしくハイヒールの女性が男を蹴つとぼしているのを見かける。みんな護身術に関してである。女性の柔道も盛んになって弱いとされた女性が力でも男と伍してゆく様になると我々の時代が愈々やって来る様だ。護身が文字通り自分の身を護る事から始まってそれがいつ攻勢に転じられるかとなるといささか興味がある。その護身術とは

一寸ピントが外れるかも知れないが、昔の？（戦後の事だが十年ひとむかしと云うから矢張り昔かと思う）事を思出したので書いてみる。昭和二十二年頃の春の事である。私がまだK市に在住していた頃の事で焼けビルがみにくい姿を街の到る処にさらしていたが、腹の減った日本人にはそんな街の美観の事はてんで問題にしていなかった。当時、私の父が南国の気候、風土等に目をつけて和傘産業株式会社なるものを設立し、多少だがヒットした頃だったので失職していた私が別に父の仕事を手伝うでもなく道楽息子の名の通り親のスネを噛って居られたのは有難いと云えば全く有難い事だった。その父の会社の女工にS子と云う二十二、三才位だったと思うが、な

かなかの美人で身体も八頭身なみの女性だった。朝鮮からの引揚げ者で家族は母と妹との三人暮して縁故関係の家に間借りしていた。今の世ならさしづめ美人コンクールや何やらに出ても恥づかしくない程の容姿なのだが中央からずっと離れた街とはいえ田舎みたいな地方だから、地味な服装で化粧するでもなくただ働き者で美人だ、位の評判でいたそのS子の事が、或る日新聞に割と大きく出たのである。見出しは「娘さん、気転で痴漢を組伏せる」と云うもので、其の日、彼女は日曜日だったので買出しに出かけ、夜遅くなって取締りの眼を逃れて、僅かの米を持って帰って来た。K駅を降りて自分の家に着くまでには当時の事だから街には外灯も完備されず、家

も余り建っていないくて淋しい焼け跡を通らなければならなかった。時間も十時を過ぎると進駐軍の命令で夜歩きも出来なかった頃で、ちやうどその時間になったかならないかの時だったので、急ぎ足でS子は焼け跡の暗がりを通った。その内背中にリュックをかつぎモンペ姿の彼女を「待てッ」と呼びとめ「声を出したら命はないぞッ」と低い声で近よって来たのは、僅かな街の灯に照らし出された兵隊服の男だった。屈強そうだがやせて眼のギョロギョロした男はS子の腕を掴むと矢庭に焼け跡の壁の蔭に連れ込んで「リュックを置け」と命じた。S子は恐怖で気も失いそうだったが、許しを乞うたり僅かな財布を出したりして泣き言をふるえ乍らならべているうち男の本音が彼女の肉体だけを欲しているのと悟ると多少気持が落ち着いて来た。彼女は両手を後にねじあげられて石のゴロゴロした地上に俯伏せに倒された。此の男は私を縛るつもりだ。縛られたら最後だ！S子はそう考える。「ね、許して下さい、貴方の欲しいものは何でもあげます。手を離して下さい。決して逃げません。私、自分で此のモンペも着物も脱ぎますから、ね、お願い、裸にだってなれますから手を離して」と一生けんめいもがき乍ら、憐れな声を出し続けた。すると男にしても、温和しくされるとその方が、と云うので「じや早くモンペを脱げ」とS子の手を離

した。S子はうずくまったままモンペの紐を解き、ズックの靴を脱いでモンペをとった。そして、「リュックの中に大きな風呂敷が入ってますからそれを敷いて」とふるえ声を出し乍らリュックをあけた。その時には既に彼女の心に最後の抵抗の決心がついていた。彼女はリュックの中に唐辛子の粉が入っているのを取り出そうとしていたのだ。朝鮮に生れ朝鮮に育った彼女はキミチと云う朝鮮漬が好きだった。ニンニクを入れると年頃の女性嫌われるから彼女は彼女なりの只、辛い漬物を作るつもりで、やっと米をかうついでに粉の唐辛子をわけてもらったのだ。本当の朝鮮漬は粉唐辛子では駄目なのだが、时期的にもその頃は粉しかなかったし、又彼女の肉体を、いや命さえも守る事が出来たのは唐辛子が粉であつたからとも云えるのだ。ふるえる手さぐりで、彼女は新聞紙の包みを破り粉唐辛子を右手に握った。男は彼女の肩に手をかけ、上からのしかかつて抱きつこうとした時、彼女は、えいッ！と右手の粉を男の眼に投げつける様にして、掌で相手の顔になすりつけた。「あッ、何をしやがるッ」と男が叫んだ時は遅かった。「ううッ」男は顔を抑えてその場にうづくまった。唐辛子が眼に入っ

て灼けつく様な痛みへのけぞつたのだ。それに吸い込んだ鼻や口にも唐辛子が入って、断末魔の叫びとは此の事だ。S子は咄嗟にリュックを持って逃げようとしたが、男の片手が彼女の足を掴んだ。彼女はリュックを男の頭に叩きつけ、片方の足で男の顔を蹴りつけた。ひるむすきに逃げようとして又足を掴まれた。声を出そうとしても咽喉につかえて声が出ない。彼女は男の背に馬のりに跨って両手をねじりあげた。何処にそんな力があつたのか夢中だった。ぎゅうぎゅう男の手をねじりあげ乍ら、足に触ったモンペの紐で男の両手をグルグル縛りつけた。男がギヤァーと低くうめき声をあげた。彼女が夢中に手をねじりあげていて男の手の骨を折ってしまったのだ。その時には何も判らなかった。「助けてえ」やっと叫び声をあげて男の背から立上ろうとしたが腰がぬけて立てなかった。「助けてえ」男の背に馬のりに跨ったまま、S子は何度も叫び声をあげた。彼女は、巡回中のM・Pのジープに助けられ、男は警察につき出され病院に廻った。その男の余罪も出て、他に数人の女性が彼の毒手にかかっている事も判った。S子は暫くは女工や男工仲間のホープになった。それがよきにつけ悪きにつけ彼女にまつわりついて、いつか会社を辞めてしまった。その後、北九州の方に移りダンサーになったと聞いたが、被害はなくても、何かその事に目に見えないもので、あやつられてしまったのだらうか。それとも美人の彼女の道は、食うためにうそ

云う道を選ばせたのだろうか、どうかは知らない。

第九景 或るイメージから

今年の去る六月七日、産経時事新聞主催のミス・ユニバース、及びミス・ワールドの代表として日本一の美女が選出された。東京の此の大会に集った、全国から選ばれた美女は各都道府県から五十人近く、それこそ一堂に集った此の美女群は、体格もよく、はちきれそうな若々しい肉体の持主ばかりで、我々マゾならぬ男性でも息がつまりそうになる圧巻である。此の美女達の手で鞭打たれるのだったら、マゾヒストは死さえも恐い事はないと思う。すんなりとのびた美しい脚、その何十本と云う白い脚の林をくぐりくぐり足の甲に、その裏に、腿に、ふくらはぎに接吻して廻れたらどんなに楽しい事だろう。赤、青、黄の水着姿の彼女達五十人の中に取り囲まれて蹴りつけられたり、馬乗りにされたり、一人一人から鞭で打たれたり、果は此の美女群の行進の真中に、後手に縛られて縄尻をとられ、男一人がひかれてゆく光景等を空想すると全くたまらなくなる。

私はまだまだイメージを描く。美女達の取巻く祭だんの上に、私は仰向けに寝かされている。そこへ第一位から三位までの美女が現われ私の身体を顔を踏みつける。水着の半裸

の姿が私の身体の上で踊りはねる。顔の上と胸の上に美女は馬乗りに跨って私を苛めつける。

私は此の美女達の写真や新聞記事を見て、こんな事を考える。それは此の彼女達の宿舎のホテルの事である。上品な美しい女性ばかりのホテル、此の彼女達の食事の余りを、一口でいいから食べてみたい。ムツと女性の香りがみなぎる部屋の中に入ってみみたい。それにもっと残念なのは、トイレである。此の美女達のトイレが自分の自由になったらどんなに楽しい事だろう。私の心の悪魔は、いろんな事を想像する。真白な美しいタイル、そこには処女の如き新雪の様にみじんの汚れもない。美しい花が花瓶にさしてあって豊に香り明るいガラス窓から、高層の美しいビルと青空が見えるトイレ。そのトイレの下に、誰も知らない私だけの入れる場所がある。私の口をあけた顔がそこにある。

私は美女のそれを食べ物としていつまでも生き続けてゆく事が出来る。却って私の肉体は元気になり、若々しくなり、張切ってくる。

豪華なホテルの一室、三十畳敷位もあらうかと思われる洋間で、肌ざわりのいい水色の絨毯がひかれています。くすんだ色を見せる渋い調度品、ひざまずく私の前に、第一位の女性が見えわたる。矢張り水着姿のままである。それもビキニスタイルの真白な肌に真赤な水

着。「馬におなり」私は四ッ這って馬になる。彼女は長い髪をサラサラと肩にふりかけたのを首を一寸ふって、仰向いてから私の背に跨る。のびた美しい脚のスネが私の肩の両側から手許にのびる。私は、ぐつとのしかかった彼女の重みをこらえて、部屋の中を這い廻るガラスのドア越しにテラスが見え緑の芝生がそれに続いている。五回、十回、彼女はまた此の遊びをやめない。私は肩や手や膝が痛くて苦しい、ハアハアと全身に汗をかき息を切らして尚も這い廻る。「うッうッ、もう、もう駄目です。お許しを……」私は彼女を背にしたまま腹ばって潰れる。彼女は跨ったまま動かない。絨毯に片頬をつけ両手は身体と直角に真すぐにのびして私はのびきっている。彼女の両膝は私の腕をふみしいたままだ。「お立ち、早く立ってまだまだ廻るのだよ、お前は馬だよ、私の馬だよ」背中の中の彼女は強い声で私に命令する。だが私の気力は全力を出しきってもう動けない。「動けないのね。いいわ、動ける様にしておける」彼女はスックと私の背から立上ると皮の鞭を持って来た。「あッ、起きます。馬になります」と四ッ這いになったがもう遅い。ピシッ！と彼女のふりおろした鞭は、私の背に痛い込んだ。「うッ」私は痛いッ！と心に叫んでうづくまった。ピシッピシッと鞭は続けて降りおろされた。ジーンと痛みが熱さに変わって私の身

体中をかけ廻った。「許して下さい。許して下さい」私はあえぎあえぎ彼女の顔をみる。美しい顔が怒りとも柔和ともつかない。すみきった眼、結んだ唇、美しい！私は許して下さい、と許しを乞うたくせに今度は「もっともっと打って下さい」と自分の身体を彼女の足許に伏せてしまう。「仰向けにおなり」私は仰向けになる。彼女は私の顔の上に馬のりに跨がる。両足首に私の顔を挟んで上から見下している美しい瞳。やがて私は眼も鼻も彼女にふみしかれて呼吸も出来ない。眼の前が真くらで頭がおしつけられて痛い。ハアと息を吐こうとしても、それすら出来ない。「此のまま死ぬかもしれない」私は呼吸が出来ずそう考える。「本望だ、此のまま死ぬたら本望だ」私はそう考えて手足をばたつかせていた。

第十景 女性天下時代

昭和三十三年六月十日附第六九四号の先見経済（清話会発行）に「商売は女性ねらいの時代」と題して益田金六氏が書いた一文は一寸面白い。それにはこう書いてある。

大の男としてあまり嬉しくない話だが、現代は人類が、かつての男性支配の時代から将来の女性支配の時代へ移ってゆく過渡期なのだそうである。男性が現在まで文明を開いて来たのは物質面が中心だった。人類の歴史から云うと、文明らしいものは四、五千年の歩

みをとって来たが、その間は物質面だけが開化し発達してきて、精神面はほとんど大昔のままにとどまっている。これは男性と云うものが精神面の開化発達には適していなかった事を証明するものだ。と一部の学者は云うのである。何千年の歴史があるのでは「そんな事はない」と開き直るのも一寸躊躇されるだろう。その物質文明は一応行く処まで行き着いた。人類全部の破滅を招来する兵器が出来て、もう戦争さえやれなくなった位だから、終点を迎えたといわれるのも一理ある。それでも尚、世界には戦雲がただよい、平和の保証は与えられていないので、精神面の開化が低度だとされても、これまた耳が痛い。

地球上には男と女としかいず、男の手では物質文明が行く処まで行かされて居り、精神面での男の能力は疑われ、しかも尚、精神面のもものが熾烈に要求されているとなると、これは女性の手による外なく、歴史的に云っても男が作りあげた物質文明を基盤として、女性がその上に精神文明を打ち立てる事が必然になる。こう一部の学者は説明する。支配者は常に時の文明を握っているものだから、精神文明時代になると女性が男性を支配するに違いない。既に各方面にその徴候が現われている。男は女に追い込まれている。これは文明国共通の傾向だ。こうも説かれるのである。学者は出生児の男女別数さえ女が勝っている

と指摘するのだから、やり切れなくなる。又若い男女の趣味傾向で見ても、チャカチャカした時代の流行好みは男子であり、古典的な重厚高雅なものが、女性に好まれているのだそうだし、富の所有率、支配率も家庭の中では大きく男子から女性へ移っている。これも学者のいう処では、家庭の生活までが男子の欲求に女性が応じるという形はもう古くなり、女性が欲しない時は男性はこらえる。と云う傾向になっていくという。とにかく単なる反動ではなくて本質的に女性優位が確立されつつあるらしい。精神文明と云うのは、よい意味でもあるし、悪い意味でもある。非常にすぐれた理想像の女性も出てくるかわりに、中には男を散々困らせる智慧を備え、術をふるうのもある。悪い面からの支配も近頃かなり出て来ている様だ、そう云う事実は案外身近にある事かも知れぬ。いわゆる文化生活なるものも、よく考えてみると男子の例ではあまり出ていず、器具、食品、様式等々すべて女性のために作られ、広められている。家庭電気用品だけを見ても、男子のためにはひげそり道具ができたくらいに過ぎぬ。小説本とか雑誌とかも女性が買わなくては、一流の売行にはならないし、ラジオ、テレビの番組もそう、教育すらもP・T・Aの出席者が大部分は母であるように、女性の発言が高まって

いる。

さて、時代がそのように動いて行くとする
と、それが永続的傾向であるとする、事業
や商売の上にも、これは重大な関係を持つ。

もう、男性だけを相手にする商売よりは女
性だけとか、女性を中心として男子がお相伴
にあずかるものとか、女性的好みの男子用品
とか、とにかく、女っ気というものが事業の

盛栄、商売の繁昌につながる新しい急所、と
いうことになる。男専門の商売や事業は大
きく見て先細りになってくる。たとえば、い
ろ街が消失したこと、焼酎ホールがすたつて
しまったこと、等はよい例だ。女のさいふを
追い回すのは男子の本懐ではなからうが、
商売のためならそれも亦可ではないか。
以上である。女性天下時代がまさしく訪れ

て来た様で何となく楽しいものを感じる。
まだ読んでないが婦人公論の付録には「男
性飼育法」と云うのが出ている。かつての奇
クに「女天下時代特集号」と云う号があっ
て、我々マゾ愛好者を狂喜させたが、其の文
字通りの世相が早く訪れて来ん事を切に祈る
ものである。

「告白」

血潮の疼き

—幼き頃の思い出より—

菅 良 太

子供の頃、父に連れられて浅草の花屋敷へ
行った事があった。丁度その年は、例の尼港
の残虐事件のあった時で、尼港事件の写真を
展覧してあるのを見た。若い日本兵が裸のま
ま櫓の後に括りつけられて雪の上を引ずられ
た死体だの、急所を抉られ傷口がパツクリ開

いている兵士の死体等の写真が子供心に怖し
さと不思議な興味とをこもこも感じた。「お
父さん怖いか早く行こうよ」と言いながらも
私はそれらの写真に幾度も振り返った。場内
の一隅に、パノラマで人形を使った場面が幾
シーンがあり、白雪の皚々たる上にシヤッ

一枚の将兵が縛られて転がされており、その傍
にニーナという、バルチザンの女首領が派手
な毛皮に身を包んで、笑ってそれを見下して
いる。赤髯のロシア兵が二、三人で、その将
兵を銃剣で刺そうとしている人形があった。
見ている人々は「ひどい露助だ」とつぶやい
ていたが、私は国民としての怒りよりも、何
か心に滲透するような快よい美を感じた。他に
石田領事の家族を殺して自害する場面もあっ
たが、私はこの頃から、こうした惨虐なもの
に、不思議に心をときめかすようになった。

私の住んでいる家の近くに植留という植木
屋があった。中年の骨格の逞しい男だった。奇
妙な事に、この男は顔から手足まで一面に精
密な刺青をしているので、遠くからみると青
黒い羅漢さんのようであった。よく私の家に
出入していたが子供の私はその植留が怖くて
たまらず、いつも奥に逃げこんだものだった。

私はある時、この植留が三時のお茶をのみながら、父や母たちにその刺青の話をして、いのをきいた事があった。

留さんは、二十幾歳の頃、当時下士官として台湾の生藩征伐に赴いたそうだ。若い元気のいい下士官として、生藩兵を相手に思う存分に活躍したが、血気にはやって奥地に入り込みすぎて、遂に同行の二名の兵隊とともに捕虜となった。

残酷な野蕃人の事として、三人は蕃社に連れて行かれていろいろ苛酷な取調べをうけた。殊に、指揮者である留さんに対する調べは厳重で、吊上げての鞭打は勿論の事、惨酷な火責水責等を受けたが、日本の軍人精神に鍛え上げられていた彼は歯を食いしばって、これらの責苦に耐えたそうである。揚句の果に三名とも、蕃社の人々の面前で刺青の刑を受けることになった。刺青の刑というのは、蕃人が半ば報復手段として、捕虜を苦しめるためのもので、若しこの苦しみに生き抜き、耐え得たならば、殺さずに蕃地の奴隷として、存命させておくことになっていたらしい。

三人の日本兵捕虜は蕃社の広場に引出されて、大の字の磔柱に縛りつけられ、初めの三日間は上半身を、後の二日間は下半身を、数名の蕃人によって代る代るに刺青を施される事になった。三人の兵士は渾一本の姿で、大

の字磔に架けられて、このむごい責苦を受けた。針を肌を受ける度に、ひいひいと泣声を上げる上等兵に

「貴様も日本軍人ならじっと我慢をしる！」と叱咤しながら、留さんはこの生地獄の苦痛に耐えた。

二日目にぐったりしてしまつた他の二人に比較して、どこまでも強情に耐えている留さんに対して、蕃人たちは一そう憎悪をこめて針を打込んだ。蕃人の刺青は日本人のそれよりも、はるかに細密で、図柄も細かく朱彫りも多いので、その苦痛は生易しいものではなかった。蕃人の男は勿論、女や子供達までが面白がつて、呻声を立てる度にはやし立てた。

二日目に一人の上等兵が悶死し、その翌日の刺青で、もう一人の上等兵は息が絶えた。留さんは幾度か気絶したが、すぐ元気になるので蕃人の憎悪を更に強めた。下半身の刺青を施される時は四、五人から同時に針を受けた。下半身に於ける刺青は更に刻明で、剛気無比な留さんも、食いしばった歯からしばしば呻き声を立て、もう駄目だ、と幾度か思い念仏を称えたそうである。足の裏まで刺青を施して五日間の責苦が了ると、全身を朱と墨を塗られた儘で晒され、更に仕上と称して、手取り足取り熱湯の中に浸されて洗われた。さすがの留さんも熱を出して、約一カ月苦し

んだが、奇蹟的に生命は助かった。

それから奴隷のように石臼曳などの苦役を強制されている処を日本軍進駐によって救われたそうである。

「二人の上等兵と一しよに死んで了えば、こんな恥晒しの姿を内地に晒らさないでもよかったのですが……」と淋しそうに笑っていた。

その頃四十近かったが、どこか男らしく引緊つた顔立ちの留さんが、五日間の責苦を耐え忍んだ、と云う刺青の刑の情景を想像して、私は子供心に非常な刺戟を受けたことを覚えていた。酒を飲むと、留さんは裸一本になり大あぐらをかいて、この時の自慢話をしたそうであるが、父が

「よくもあんなに細かく刺青が出来たものだ」

という程に微細を極めたものであった。死んだら皮を剥いで大学の研究室へ寄付したい、と常々言っていた留さんは、関東大震災の時本所で焼死してしまつたそうである。

(了)

○ ○ ○ ○ ○

魔^マ教^{キョウ}団^{ダン}N ナンバー
O エイト
8

(その八)

土 路 草 一

(一) ユーマ人の不遜

出発を数時間後に控えて、準備に忙殺されていた黒山谷子が、急いで来るように呼ばれて、理事室の扉を開けた。

グリーンの子エアで、顔見知りのユーマ人ライトルが難しい顔をして葉巻をくゆらせ、勝谷が何か叱られたらしく、畏って膝を揃えていた。

「黒山君！こんな不注意なことをしては困るではないか！」

のつけから怒鳴りつけられて、谷子は不審な表情で、天山理事の太い指先を追っていった。

「あらっ！」

机上に視線が届くと、思わず置かれてあった手札型の写真を取上げた。

何とそれは……自分とタツーマの二人が顔の皺迄くつきりとクローズアップされているではないか……。

「覚えがあるかね？」

「……」

谷子は返事が出来なかった。何処で撮られたのか、思い当らなかったからだ。

「解らんかね。もっとも、撮った相手は内調随一の手腕家だからね。君の記憶に残るような撮影方法はしないだろうからな」

揶揄に刺戟されて、黒塔会ピカ一の魔女はじっと印画紙に眼を凝らす。

二人の顔だけ残して、大部分トリミングし

てあった写真なので判断に手間取ったが、少し写っている自分の服装とテーブルなどの型から、はっと気付いた。あっ！これは新宿のアラジンだ。

とすると、あのときの……。谷子の記憶の糸は解ぐれてゆく。

あっ！ そうだ。あの男だ。映画館迄、追って来た男……。

「思い出したらしいな。うまい具合に、我が情報員が入手してくれたからいいようなものの、もし知らずにいたら君と勝谷君の足取りが掴まれる処だったよ。今宵は顔を見られぬよう、気をつけて発ち給え」

天山理事は苦虫を噛み潰したような顔付でいった。いわれてみれば、谷子も返す言葉も

なかった。

「これを撮った男は誰ですか？」

傍から勝谷が、いまいましように問う。

「名古浦健平。仲々のやり手だぞ」

理事は敵を知る口吻だった。

「消したらいいじゃありませんの」

谷子は唇を歪めて、憎悪を言葉にする。

「そう安易に事は運べんよ。今、奴を殺せば、奴の疑いの正当性を裏付けることになるのだ。

この疑いを外らすことが先決さ。多分、麻薬に眼をつけているのだから、先ずこれを他へなすりつけることを考えなけりやならん。君は今宵、日本を離れるからいいが、問顔はタツマなのさ。あれは案外、芯のない男だからな。この辺で御用済にしたらと思っているのだ。それで消す方法だが……」

利用出来る間は甘言好餌で釣って、巧みに相手の能力を尽させる。併し、一度、価値がなくなると弊履の如く捨てて顧みない。まして、タツマは黒塔会の秘密組織を知っているのである。なんじよう、ぬくぬくと生を食らせておくべきか？ 冷酷を以て鳴る魔教徒である。闇に屠り去って、己が温存を計るのが彼等の常套手段なのである。

思案の腕を組んだ理事に、ユーマ人が長椅子から提案した。

「貴方ガタノ得意ナ催眠術ヲ使エバイイシヤアリマセンカ？ 呪殺ト云ウノデスカ、直接ニ

手ヲ下サナイ、ヤリ方がイイデス。コノ前ノ千代小路ノヨウナ殺シ方ハ困リマス」

ライトルは片言のアクセントで云った。

千代小路の殺し？ とすると、ライトルも一枚加わっていたのだろうか？

ユーマ人、ライトル。とだけでは読者には判らないだろう。

千代小路伊奈子と日比谷公園でレポした外人。比奈地家に寄食していたイーベラを訪ねていたユーマ人といえ、皆様は思い起して下さるに違いない。

「ツイデニ麻薬モ、タツマノ仕業ニシタライイデシヨウ」

「と云いますと、麻薬売買が曝れて、外交官の責任上、自殺すると謂う筋書ですか」

「ソウデス」

事もなげに云い捨てて、ライトルは金指輪の嵌った指で、灰血を引寄せる。

「ソレデ天山サン。千代小路ノ例ノ手紙ハ見ツカリマシタカ？」

「と思い出したように云う。」

「いや、まだ解りません」

「警視庁の自宅搜索で解からなかったのだから普通の隠し場所ではありませんわ」

谷子が、白人の傲慢さに反撥して口を添える。いくらユーマ人であるとは云っても、黒

塔会を代表している理事に向って、笠にかかったものの云い方をし、とやかく指図するよ

うな言を吐れることは心外であつたからだ。

「デモ、手ニ入レナイト、貴方達ガ困ルノデハアリマセンカ」

ライトルは差出口を押えるように、上眼使いで、冷ややかに谷子を眺めた。

「秘書の高塚を買収して捜させたのですが、発見出来ないのです」

理事が、いらいらと手紙の例の写真をいじりながら云った。

「伊奈子ガアノ屋敷ヲ売リタガツテイマス。一層ノコト、買ツテシマイナサイ、ソシテ天井裏カラ縁ソ下マデ徹底的ニ調べ上ゲルノデス」

「成程、調度一切、居抜きと云う条件ですな」

「ソウデス。ソウスレバ伊奈子がアパートニ移リマス。拐ツテモ、ソレ程世間ハ騒ガナイデシヨウ。ソシテ、ソノ躰ヲ責メレバ少シハ足シニナルコトヲ喋ベルデシヨウ」

てきばきと上司者のように傲慢なライトルの態度だった。が……それには理由があつた。元公爵、千代小路綾雄氏の殺害顛末がそれである。

此処でストーリーの展開上、千代小路氏殺害の経過を記して置こう。

(二) 惨殺の真相

千代小路綾雄氏は何故、惨殺されたか？

それは、彼が現地政府と日伊油田開発株式

会社設立に関する契約調印の為、イラクを訪れた時に起因する。

千代小路氏一行が、イラク第一の油田、キルクークを見学し、更に自動車を連ねて、北部山中、即ち今度の探鉱地区を視察に向った当日、砂漠の崩れた砂壁の陰に意識を失って

斃れている一人の男を拾った。

案内人は珍しくもなげに通過しようとしたのだが、千代小路氏は停車を命じ、わざわざ路上に出て車に収容させた。

設営地に着けば医者がある筈だから、助かるものならば……と日本的な義侠を出したの



だ。そして、それが黒塔会と連がりを持つ緒となり、強いては、彼の命を失う因ともなったのだが……。

彼はキャンブ地に着くと、主任技師から詳細な経過報告を聴いた。

油田は確かに有望であり、量的にも相当のパーレル数が見込まれ、事業家として激しい意欲が湧いた。

ただ、説明の中に気に掛ることがあった。

住民の挙動である。当時、不穏な動きと云ったものは無かったが、住民達は技術者一行に対して、係わりのない無関心を装いながら排他的であり、極度に冷淡であったことだ。そして山中深く立入ることを、魔神が棲むと称して顔色をなくし忌避したのである。

千代小路氏も案内されて、山中の一部を散策してみた。だが、其処は散策と云うには余りにも繁茂した密林であった。

蔓や羊歯類が蜘蛛の巣のように樹木に絡み気味悪い野鳥の鳴声が、荒い羽音と共に飛び交い、じめじめと腐れ葉の積った湿地が、奥深い暗黒に閉ざれ人の通行を阻んでいた。

戻りの道すがら振返えれば、群雲湧きたつ地平線の彼方、牙のような山塊が連立する視界悉くが暗緑の怒濤となつて、うねっていた。

千代小路氏は、その奥に妖しい物の怪、即ち住民が恐れている妖魔の棲息を実感として

感じとった。併し、千代小路氏は文明社会の人間である。まさか、本物の妖魔を想像したのではなく、ヒマラヤなどに棲むと伝えられている雪男の類を連想したに過ぎなかったのだが……。

処が設営地に帰って、途中拾った行き倒れの男が死亡したことを知らされ、着衣の中から黒ずんだ手摺きの封書が現われるに及んで千代小路氏の獣人連想は忽ち打破られてしまったのだ。

その封書を開くと、象形文字のような奇体な記号が書かれてあった。

通訳にはそれが解けず、住民に見せると、ぎくりと頬を固め、一様に顔を見合せて唇を結んだ。何か知っているらしいので、なだめたり、すかしたりしたが、一向に埒があかなかった。

だが、案内人の一人がそれを見て、慄然と恐怖に口をわななかせて叫んだのだ。

「これは悪魔の文字です！」

悪魔の文字？悪魔が文字を書く？

千代小路氏は急に興味を持った。

この密林の奥に棲む者は何か？この通信は何と読むのか？

バクダットに帰着すると千代小路氏は早速その道の専門家を訪れた。

そして、得た回答はこうだった。

北方の住民クルート族に恐れられている種

族に、イーダビーと称する民族がいる。密林の奥深く棲息すると云われているが、イスラム圏の異端者である為、己れからイーダビーと名乗るものではなく、実際の数は不明である。その性質は精悍にして冷酷であり、行為は残虐にして惨憺である。

彼等はイスラム教徒から忌み嫌われる悪魔を奉じ、七つの教国を持っている。その教国の所在は判らないし、本山、教主の詳細も知られていない。

只、最近非常に強大になり、住民にも信徒となるものが殖えているらしいことは巷間に噂されているけれど、何等、不穩の行動を採っていない今日、宗教だけの問題では取締る口実にはならないので放置してあるのだと。

だが、譬え、人家を襲うような暴虐があったとしても、密林に囲まれている彼等を捕捉するには、今のイラクの貧しい警察や軍隊では到底、困難な業であるとも専門家は云い添えた。

そして、この文字は、彼等が連絡用に使う文字であり、文書の大体の意は、

「我が神域を護る為に全力を尽せ。探鉱隊の行動を阻止せよ！御本尊様は遠からず、日本を我が僕となすことを啓示された」

と云う一種の檄文であった。

千代小路氏は、その時は未開種族のたわ言だぐらいに考えて重要視せず、探鉱技術者連

には、簡単に、気をつけるようにと申送って帰国したのである。

処が、日が経つにつれて、現地から種々雑多な障害が報告されてくる。日本国内では、奇病始め兇悪な犯罪が跋扈し、逼迫した不安が漂う。小耳に挿んだ情報では、中東人の暗躍らしい話である。

千代小路氏が、よもやと思っていた或日、勝谷が訪れたのだ。

日イ油田から手を引け！と……。

千代小路氏は言下に断った。すると、一週間程して又訪れ、今度は資本の三分の一を出資するから経営に加えろというのだ。千代小路氏は迷った。

丁度その際、日本側の出資に、ちよつとした蹉跌があり、資金の心配をしていた処なのだ。

勿論、彼等の肚は怪しいものだ。そんな甘い手の裏に、何か隠されていることぐらいは想像される。

だが、千代小路氏はその上を行ってみようと考えたのである。

彼等と協力態勢を採れば、現地の障害は取除けられ、先ず仕事を軌道に乗せることが出来る。出資の代償としては彼等に利益配分すればよいのだから、事業家にとって乗って悪い話である。

彼等の目的は何であるか、それをはっきり

見定めて置けば、危険は察知出来、打つ手はある筈だ。千代小路氏はぬらりくらりと引伸し戦術に出たのである。

処が、彼等と幾度も接衝している内に、その組織が臍げながら判ってきた。

彼等の口端に出てくる脅しや、誇張や、自慢の話から、日本に対して行いつつある謀略の輪郭が浮び出て来たのである。

「御本尊様は遠からず日本を我が僕となすことを啓示された！」と書いた悪魔の手紙を、こっそり開いて、千代小路氏は愕然としたのである。

千代小路氏は、元公爵としての地位からして、人一倍愛國の至情が強かった。と共に、公爵に似つかわしくない事業家として成功した豪宕不羈な性格の影には、冒険心と云おうか、賭博度胸と云おうか、危い淵を渡りながら、一か八かの事業的な賭けを企むことが多かった。日イ合弁の此度の仕事だって、石油が出なければ、一切が零になる仕事だ。

千代小路氏は黒塔会との交渉も、この賭けをしようと試みたのだ。彼等の意図を探り出し、ぎゅうと首の根っこを押えてやろうと考えたのだ。その為には、表面だけでも彼等の味方とならねばならない。

千代小路氏は、彼等の条件を呑んで、仮名の株主を作り、資本参加させると共に、黒バツチを受取り黒塔会の準会員となったのだ。

彼等はユーマ人ライトルを役員として送りこんで来た。

だが、このライトルは仲々の曲者で、彼等と皮膚の違うことを種に、千代小路氏にいろいろ甘言を云ったのだ。

イーダビー人は単純な頭脳の未開人だ。併し、私はユーマ人だ。彼等に利用されるようなポーズをとっているが、金儲けは抜かりなくやっている人間だ。一緒に彼等を踊らせてやりましょう……等と……。

千代小路氏も始めは警戒していたが、だんだんと、ライトルの言葉巧みな話に耳を傾けるようになった。

そして、これは彼等の本国送達の報告書写しですよ。これさえ掴んでおけば彼等を操つるのは訳ないですよ」と、タイプしたレポートを見せられた時、千代小路氏の肚は決った。ライトルを己が陣営に引込もうと計り、うっかり例の行き倒れから回収した手紙のこ

とを、それも己が手にあると口を交わらせた。これが千代小路氏の殺された真因である。ユーマ人の知らせで、黒塔会員が千代小路氏の身辺に徘徊を始めた。が、下手に隙を見せるような千代小路氏ではなかった。

業を煮やした勝谷が、ライトルに相談なく千代小路邸を訪れ、不信をなじり、手紙の所在を糺した。元公爵は言を左右にして応じなかった。

勝谷は行掛り上、罵倒した。それが元公爵の古武士的な性格にぶつかって、云ってはならない黒塔会の謀略の一端を、激しく口に載せて非難したのである。

そして、それが千代小路氏の多彩な生涯の幕を閉ざすことになって了ったのである。

愛娘をライトルと逢わせ、手紙を売ること種に金を受取らせ、あわよくば報告書を手に入れようと計りながら、果せずして葬られて了ったのである。

(三) 呪殺の儀式

壁も黒、床も黒、祭壇も魔神も暗黒に彩色された呪詛の部屋で、黒い長袍の媼が、一心不乱に祈りをあげている。

燈明のない秘密呪法の間を照らすものは、黒いしめ縄の下で濛々と黒煙をあげている護摩壇である。

何を燃しているのか？息の詰まりそうな臭気が部屋一杯に立籠めている。

一段と高い壇上に坐す瘦せこびて干物のような老婆は、狂気のように軀を震わし呪文を誦している。

中世紀の怪奇譚に出てくる魔法使のような蓬髪、皺だらけの額、突き出た鉤鼻、底光りする鋭い眼。その肩から、腕から、めらめらと只ならぬ妖気が立上る。

無気味な、ぞっとする、緊めつけられるよ

ツーマなる男を御許に御引寄せ下され！ 永年仕えております婆が衷心よりのお願いで御座ります。今宵月の出ぬ前に、必ず必ずお召し下され！我が護りの天使様よ！」

妖婆は、その軀の精気をぶつぶつと口の中に含んで呻き喋った。地殻に吸いとられるような陰に籠った声で……。

じやらっ！じやらっ！珠数が大きく打振られる。終ると骨ばかりの指が、がっしと合掌する。

「呪いの経文が、高く低く、唇を割る。肩が震え、胸が震える。瞑目が、かっ！と開かれ、瞳かれた眼が、きらきらと岩をも貫かんばかりの鋭光を宿す。大きく息を吸いこんで、ざっくり香を掴み、はっしと護摩へ投げこむ。ばらばらと火の粉を散らして、祈禱の火は燃え熾かった。

云いようのない魔気が充満する。

「タツーマよ！呪われろ！」

妖婆が喚いて、腰を立て、神がかりになったように、がくがくと全身に痙攣を流したとみる間に、いきなり御幣を取って、さっ！と打振った。

と同時に、従僧の黒鞭が、まるでスイッチを入れた機械のように、黒人形に向って作動した。

びくっ！

黒い皮は、人形共々、白く豊かな美加子の

乳房を襲う。

「あっ！」

美畜は若肉を張り、動悸を亢進させる。

「牝！お前の脳髓にタツーマの姿を写すのじや！お前の眼の玉に、お前の飼主の顔を映すのじや！」

美加子の眼前には真紅の炎が焰々と燃えて

いる。じりじりと睫毛も焦げんばかりの熱さが顔を照りつける。

顔の苦しさ、そして無理にのぞけた姿勢の苦しさ。その上に降った鞭の痛苦。

美加子は精美な軀を揉んで悶えた。

「眼を睜け。炎を凝視めるのじや！ほら、見えるじやろうが、お前を飼育してくれた主人の顔が……」

老婆の声が、頭芯の灯りを消した。ぽかりと網膜にタツーマの顔が浮ぶ。

「その眉じや！その鼻じや！その口じや！それが、お前の恐れ畏んで仕えた主人の顔じや！」

くつきりと刻まれた書記官の顔が、大写しに拡がって、炎が瞳から去った。

熱さは失くなったが、降り落ちる鞭の痛みが、一際強くなって、全身を攪乱した。

びくっ！ びくっ！

「ああっ！ ああっ！」

鋭敏な感どころを打たれる烈痛は、血液を

激流にして、脳底を渦巻かせる。

「よい、牝！、その苦しみをタツーマに伝えるのじや。そらっ！」

びくっ！ びくっ！

胸へ、腹部へ、腿へ、交叉して巻きついてくる。

「ほら、タツーマが苦しんどる！ お前の主人がのたうち出したわ！ 呻きくさるわ！」

御幣が、くるくると廻って、突き上げられる。すると黒衣僧の鉄棒が、家畜の背下に差込まれて、ポンプを遭ぐように動いた。

美加子の肩の附根が、ぐいっぐいっ！と張り上ってくる。

それは起重機のような器具で、一漕ぎ毎に美加子の後手の腕が背から離れて、上へ上へと押し上げられるのだ。

仰向いて、首を留められている乙女は、前こごみ（この場合は上こごみと云おうか）になって、痛みを軽減することは出来ない。

ぐいっぐいっ！と持ち上げられた弱やかな腕は、やがて肩と水平な線になる。

「あうっ！ううっ！」

肩関節がぎぎと軋って、令嬢は臓底からの呻きを上げた。

く、くる……！ばらばらに分解して、了いような骨の痛みで、乙女の明哲な頭脳は煮湯のように沸騰する。

「畜生よ。苦しめ！ 苦しむのじや！お前

の主人にその苦しみを伝えるのじゃ！」

一度、この魔界を出れば、歴とした良家の娘であり、トップ・レベルの女性として社会を闊歩出来るのに……。美貌の令嬢美加子は畜類として、四足獣並に秘呪の祭祀の儀に供され、血ぬられることこそされないが、それに勝る苦悶を受け、主人を呪い殺す代用物とされる。主人……と云っても、彼女を今日の運命に堕した張本人であり、嫌い抜いた男なのだ。好き好んでそう呼称するのではないその男に、飼われていたとされるが為に、麗しい裸像を、荒々と煽って呻き苦しまねばならない。何たる宿業であろうか？

肉の一部は完全に動きを止められ、骨の一部は関節の極限迄動かされる。眩しい肌に眩しい銀針が刺さり、ふわりと柔かい絹繊維が覆っていた秘肌を、鞣しただけの皮繊維が強引に纏いつく。鋭い早さで、肉音を高々と響かせながら……。

美加子は悲叫する。苦を呪法の誘いに乗せて昂らせ、素晴らしい肉肌の怒張を展示してゆく。

「お前の主人は死なねばならぬ。お前は死に等しい苦しみをせねばならぬ。家畜！ もっとと苦しめ！ もっと呻け！ はゝゝゝ」

妖婆の哄笑が高々と響く。

美加子はその声を耳にして、妖しい感情が身内を走った。

受けている苦しみは業苦であった。脳底を揺さぶり、骨が砕けて了いそうな烈しい痛苦であった。だが得体の知れぬ動悸が胸裡に展がる。タツーマンに対する憎しみが凝って、老婆の言で引出され、それを霽らせたような気分になったのだろうか？

違う、確かにタツーマンに対する恨みはあった。自分をこんな境遇に堕した男と云う恨みは消えてはいなかったが、報復の手段として相手を殺すとか、鞭で苦しめるとかする残酷な復讐心の持主ではない美加子である。

とすれば、鞭打たれる喜びなのだろうか？ 否、それも違う。悦虐を思うだけの日は経ていないし、又喜びを感じるような余裕のある責められ方ではなかった筈だ。

とすると、この奇妙な血脈の昂ぶりは何なのであろうか。

美加子の、かつて理性的で聡明な頭脳は、苦痛と畏怖で押潰され、水や食物や眠りの制限で揉みくちやにされて、単純で本能的なものしか欲求しない。家畜の脳髓に変革されつつあったのだ。管理者の意に迎合しよう、そうしなければ苦痛を受けると、条件反射的な働きが強くなったともいえるのだ。

云い換えれば、この場合、容易に老婆の暗示にかかり、何の躊躇もなく女導師の業籠中のものになり切ったのだ。

だから、妖婆の喜悦を心に映して、奇妙な

感情を胸に宿したのであろう。

盛り上った肩に、黒鞭が炸裂する。

「あうッ！」

乙女は悶える。だが、僅かでも突張る筋肉が出来ると、その一筋々々が、振じり上げられた不自然な筋の組成に作用して、厳しく痛覚を燃えたたせた。

びしっ！ びしっ！

美加子は今にも折れんばかりの骨痛に、柔肌を濡鼠にして耐えた。

従僧の一人が更に烈苦を与えんが為に黒人形の下、喘ぎに波打っている白腹の上に艾を盛上げる。

そして細い鉄棒を魔火に翳して焼き、赤熱を待って、やおら点火する。

ゆるい一条の煙りが黒人形を伝い、やがて人形を包んで漂い始める。

「あっ！ あっ！ ああっ！」

美加子は凝脂の載った腹肌を膨ませ、凹ませ、跳いた。だが、徐々に火が激しく煽り立てる。ぎりぎりとう歯を血泡が吐き出る程、噛みしめて乙女は必死に耐苦の呼吸を詰めた。

「あわあっ！」

獣に等しい熱叫が響く。美加子は死線の最後で思考の総てを消し跳きに跳き悶えに悶えていた。従僧が、逆向きになっている柔かい腮に足を載せて、力一杯踏みつける。

声を出そうとする唇が、がたとと塞って、「あむ！」

と乙女は悲鳴を噛んだ。白い顎肉が土足の下でびくびくと震える。

黒水晶のような瞳から、滾々と涙が知らぬ間に艶やかな黒髪を伝って流れ落ちていた。

そして、耳の機能が呪詛の言葉を遮断し、オフィス・マンを感嘆させた肢体は、ぐったりと筋力を失って行った。

(四) 故国の最後の日

比奈地路子は、リープメーターのジャンプ検査機から脱されて、ばたきと朽木のように床に倒れ伏した。

朦朧と眼先が霞み、困憊の極に達して、這うことは愚か、寝返える力すらなかった。

食物も水も、眠りも許されず、十数時間跳び続けた躰は、幾度か失心し、幾度か覚醒した。跳躍の最後は跳躍でなく、よろよろとふらついていたに過ぎなかったのだが、執行者は、それでも断続して電流を流した。

扱い慣れた執行者には路子の体力は解かっていた。だから、電流の間隔を延ばしたり縮めたり、水をぶつかけたり、その消耗を測りながら、巧みに極限まで絞り上げたのだ。

稀代の美女は、固い岩の床にぐんなりと伸び崩れ、繊細な脇腹を激しく起伏させていた。

節々の感覚の一切失せた美女は、引摺りこまれるように気遠くなつて行く、脳の動きに抵抗出来なかった。

「起きるのよ！」

聴えてはいても、重く垂れ下った臉を開くことも億劫な家畜の上に、怒声が飛んだ。

「だらしない牝め！も一度、電氣を通してやろうか！」

路子ははっと恐怖に胸が縮む。余力を絞り出して、僅かに足指を床にこらせる。後手では前で支えて起きることは出来ないのだ。いきなり髪を掴んで、ずるっと引き起される。

やっと坐れて、伏眼になった頬に、握り拳が、ががつと美皮を潰し、骨折れんばかりにぶち当たった。親兄弟にも、一度だって手をあげられたことの無い美貌の頬だ。他人には撫で触れることも幻夢だった、ふくよかな頬だ。それが歳下の、それも己れを瞞して連れこんだ魔性の女に、訳もなく叩かれる。

「あっ！」

髪を離されていたら、又倒れて了ったろう美女は怯えて、やっと臉を開く。

ぼんやりと谷子らしい姿が映った。が、その姿は三重四重になって焦点が揺れていた。

理事に写真の失敗を指摘されて、胸に噴満を満していた魔女は

「ふん、そのさまはなあに？ 先が思いやら

れるよ。家畜と云うものは、主人の命令だつたら息絶えるまで動作するものなんだよ。怠け畜生め！」

谷子の言葉が耳に入っているのだから、路子は痴呆のように、ぼんやりと髪を握られて仰向いていた。

屈辱である。だが、気品の高さを示そうにも、令嬢にとっては生れついて以来始めて使った果した精根であった。

「おかんむりだね」

勝谷とライトルが扉から表われた。

「註文品ダカラ加減シテ下サイヨ」

谷子の気配に、ちよつと嗜めて、新畜の美しい肉体に近づく。しげしげと見廻してから喘えいでいる優美な双房を足蹴って、

「良イ品デス。氣ヲツケテ運ンデ下サイ」

と事務的な注意をする。谷子はいまいましたるに頷いた。

白人には、日本の美女の麗しさが解らないのだろうか？愛らしく、嫵やかに曝している素性のよい美肌が解らないのだろうか？簡単な観察で興味もなさそうである。

確かに人間としての路子には、白人の関心はなかった。だが、畜類として扱えるこの美貌には、彼の興味は勃然として湧くのだ。

好みの家畜カラーに仕立てたいという希みは、イーベラが比奈地邸に訪れた時から持ち続けていたのである。只、彼は今、仕事の中な



のである。先ずイーダビー人を押さえ、彼等の上手^{ウラテ}を行かなければならないとする意識が彼に無関心のポーズを採らせたに過ぎない。

路子は曇った瞳を宙に留めている。前に立つ白人が、自宅で幾度か逢ったユーマ人であると気付かないのだ。無理に瞼を開いているだけで、瞳孔は茫と灰色の幕が垂れ籠めている。

一分でも、いや三十秒でもいい、臥したい、眠りたい。あの心やさしい乙女、あの知的でノーブルな令嬢が思うのである。それも、白磁の肌を剥き出した儘で、冷いコンクリートに犬猫のように横たわりたいと……。

才智の閃きを蔵する何不自由なく育った天来の美女が……である。

「入れものだぜ」

勝谷は、皮製の大型トランクを開いて置いた。

「じゃ、寝かせてやろうか」
路子は豊麗な臀部を突き飛

ばされ、布張りの谷底へ転がされ、折り曲げられた。

注射針が刺さるまでもなく、生肌の輸送品は昏々と意識を夢に乘せてゆく。

栄養剤が注射され、睡眠剤が唇を割って、咽喉を嚥下する。

紙のバッキンが、呼吸する荷物の空転を押えて、詰めこまれる。

外界と隔絶する蓋が、乙女の住んでいた世界と隔絶する蓋が、ぱちんと締った。

あゝ、比奈地路子よ！

お前はもう、日本とお別れなのだ。再び、生れ、育ち、愛した麗しのこの国土を踏むことがあるであろうか？

あゝ、比奈地路子よ！

お前はもう、人間とはお別れなのだ。再び自由に動き、語り、振舞えるこの人間社会へ復帰する日が来るであろうか？

あゝ、比奈地路子よ！

お前はもう、明るい性格とも、楽しい暮らしともお別れなのだ。再び、気だてのやさしい性質を、華やかな希望ある生活を取戻せるであろうか？

それは運命の神のみが知っている。

あゝ、こよなく愛され、こよなく親まれた類なき美の令嬢、比奈地路子よ！

己が運命^{サダメ}を敷け、愁えよ。そして、その湖水のような瞳から、ほろほろと涙を霽すの

だ。それが別離なのだ。それが、別れの悲哀と云うものなのだ。

だが、世紀の美貌は、品位ある肉体を貨品として畳まれ、泥のように夢冥の巷を彷徨していた。

(五) タツーマの死

滑走路の果に、沈みかけた太陽へ向けて、巨大な新型ジェット旅客機は、機首をぐるりと廻した。

耳を聳する噴射音が響き渡り、砂塵が尾翼から巻き上って、スマートな機体は、静かに動き始めた。

打振られる小旗やハンカチの波、どよめく悲喜こももな別れの叫び。

盛んな見送人の中を、EGB交響楽団を乗せた旅客機は、走るように走る。

「さようなら！ 日本の皆様」機内の小窓から手を振っている楽団員の顔が、名残り惜しそくに通り過ぎた。

次第に速度を増したジェットは、西陽をきらりと反射させて、矢のように滑走路を突走る。ふわり、車輪が地を離れた。

さらば、日本よ！ 銀色の空の王者は、キーンと金属音の尾を引きながら、沈む太陽を追掛けて飛び去って行った。

その時、入口に車を捨てた健平は、転ぶように人波に向って駆けていたのだ。

遅かった！ 遙か雲の中へ遠ざかった機影を認めると、健平は無念そうに唇を噛んだ。

路子の弟、比奈地正哉と逢い、姉の失踪直前に繁く訪れた魔女、黒山谷子の存在を知り臭いと第六感を蠢めかせて問い訊いていたのだ。

そして又、ライトルの居所を訊き、早速、その貿易事務所に乗込んで行った。だが、ユーマ人は不在で、何げなく秘書の卓上メモ・カレンダーに眼を留めて、はっとしたのだ。

『EGB交響楽団出発』と走り書で書いてある。ライトルが単なるバイヤーだったら、音楽好きな外人とだけで見逃して了ったかもしれない。併し、彼は重要な疑惑の人物である。そして、T国は麻薬に深い関連を持つ。

健平は直感的に、この飛行機には何かある？と感じとった。交響楽団の出発を知らぬではなかったが、さほど重要視せず、単に部下の一人にタツーマを見張らせていたに過ぎなかった健平は、周章て、車を拾い飛行場に向けて、一散に飛ばして来たのである。

だが、一瞬の差で飛行機は飛び立って了った。

見送人は、三三、五五、ロビーに戻ってくる。

健平は残念そうに舌打しながら、それでも、T国書記官の姿を探し求めた。

それは容易に、政府高官と談笑している一

団の中に発見出来た。

だが、なんと憔悴に変わった面貌であつたとか。

げっそりと頬が窪み、蒼白に脂汗を滲ませ、歩み迄も、よろついて頼りない。

病氣だな？ 健平はそう思って、ユーマ人は？と見廻したが面識のない上に、白人の数が多かったので、ちよつと判別がつかなかった。もつとも、当のユーマ人は、谷子と路子を詰めたトランクの塔乗を見届けると、直ぐ立去っていたのだが……。

突然、外交団の群れにざわめきが起こった。

見ると——タツーマが地上にのぞけて、腕れ、ワイシャツもネクタイも振切り取って咽喉から胸肌を、猛った獣のように咆哮しながら掻きムシっている。荒い呼吸で、突き出た咽喉仏の上に、爪が刺さり、幾条かの血潮が肌を真赤に染め流している。

健平は逸早く近寄って行った。

「わうあ！わおう！」

まるで、傷ついた獅子のように髪を振り乱し、白く瞳孔を逆剥き、ごろごろと土の上を悶転して苦しんでいる。

T国人達は周章て、抱き上げようとするが、物凄い力で跳ねとばされ、暴れられて、おろおろと手取り足取りを繰返している。

これは只事ではない。健平は咄嗟に割って入り、

「普通じや駄目です、少し手荒らだが……」
とうむを云わさず、狂人の腕を逆にとつてぐっと締めあげる。

「わあっ！」

背を膝で押しつけられて、ぎゅっとひき蛙のように潰れた。狂人は、残った手と、靴を脱ぎとばした足先で、ガリガリと土を掻いて悶えた。

氣を利かして差し出した警官の、手錠をとつて、がちやりと嵌める。

うう、うう！ とサイレンを鳴らして救急車が走って来た。どうやら押えつけて、運びこもうと気張つて抱え上げた健平の足許に、タツーマのポケットからぼろっと白いものが落ちた。健平は素早く眼を注ぐ。

遺書。封筒の表には、それだけしか記してない。

健平は、ぎよっと書記官の顔を凝視める。

血走った眼は完全に狂人の光りを湛え全身に流れる痙攣は、狂った暴血の収斂であろう。内調室員は納得出来なかった。

これが自殺？これが覚悟の死の態か？

「ぎやおおっ！」

不意にタツーマは絶叫した。

そして、拳をぎりぎり握りしめ、ぶつぶつと低く舌が動き、眼球がぐるんと返った。と見る間に急速な終焉が来た。

唇を噛んだ齒に、ぎくつと力が入り、瞬間

皮肉が破れて、どくつと鮮血が口に噴いた。がくり、顔が横倒れるとタツーマは息張っていた力を抜き、だらだらと土へ血潮を流しながら悶絶した。

T国大使館一等書記官タツーマは数奇な運命に弄ばれて、此処に儚くなく生の灯びを消したのである。

併し健平は聴いた。タツーマの死際の言葉を……。

「みか！ 美加子！」

と断末魔の息の下から叫んだ書記官の言葉を……。

人の、死に際しての言は正しいと云う、然らば、彼が告した此の言葉を、吾人は何と聴くであろうか？

死生をかけた愛情の表現とするだろうか？

それとも、悪業だったと懺悔した言葉なのだろうか？

だが、名古屋健平は知ったのだ、

城美加子と丁国人タツーマの間には、深い繋がりがあったことを……。

(未完)

後言。

第一部とも云える、この小説の前座を締めくくる為、今回は責の描写を割愛して、筋の解明に重きを置きました。

未だ、幾多の？を残してはありますが、

比の辺で、路子を追って、舞台を魔教国へ移し調教責の宴を開きみたいと思います。果して。盛宴？と云えるものが、又、前座を終つて、口はばったく真打？と云えるものが描けますか、どうか？

とても自信はありませんが、精一杯書いて参り度存じております故、読者の皆様方の御叱正を心からお願いする次第です。

尚、C・C様始め、美加子を愛して下さる方々に申訳ないのですが、いずれ登場させますけれど少しの間、路子にスポットを当てて参り度存じております故、御許しの上、美加子同様、愛しんで下さるようお願い申し上げます。(筆者)

〔告知板〕

本月号では原稿締切後、牧高志氏の「緊縛映画スナップシリーズ」及び沼正三氏の「沼正三だより」の二篇を組み入れましたので、読者通信欄を大幅に削減し編集後記を省略いたしました故御諒承願います。尚、沼氏提供の写真「バレー」の「舞台写真」は、口絵として掲載してほしいという指定でありましたが、原稿が到着しました時は、すでに口絵の製版が完了しておりましたので、やむなく本文中に使用しましたことも、ここにお断りしておきます。

文部大臣の専属室

(マリアンヌの手記その八)

原作 セシル・サン・フォーレ

翻訳 鴉 嘔 吐 夫

一

文部大臣のサン・ピエールの、苛責ない責苦に、流石にモウ馴れて来た体のマリアンヌも、すっかり参ってしまった。

勿論マダムは、彼女一人が大臣の私宅へ伺えば、充分な商売になるのであるから、決して無理は言わない。

次の呼び出しがかかってくるまで、勤務も鍛練も休ませてくれ、充分な休養を取らせてくれた。

彼女はこの商売に入ってから始めての、幾日かののんびりした日を送ったが、二、三日もす

るともう、体の方々から、責苦を求める切実な感情が湧き起って、耐えられなくなってきた。アルコールやニコチンの中毒のように、彼女の体には、被虐の願望が病みつきのようになってしまっていたらしい。

「撲って、きつく叩いて」

と一人、ベッドの布団を抱え乍ら、転々として、眠れぬ夜を送った。

三日目にはどうしても耐えられなくなって赤いペチコートをまとう寄宿生の女達に交って、調教を受けたいと申し込んだ。

最初、マダムは、どうしても、それを許さなかった。

「貴方は大事な体なんですから、そのためには、自分の楽しみも犠牲にしないではいけませんよ」

「でも、でも」

彼女は身もだえして訴えた。

「私、物足りないんです。毎日、体に何の痛みを加えられないで、暮すことを我慢できないんです」

「そんなにお言いなら、軽いトレーニングをして上げましょう。もし大臣のお邸へ行って、急にひどい目に逢って泣きべそをかかないようにね」

マダムはやっと承知した。

そして中央の部屋へ彼女を連れて行った。何もかも脱つて、真白く程よく膨らんだ曲線の体の彼女は、マダムの命令でその場へ手をついて、犬の様に這った。

「じや覚悟は良いね」

大きな曲り柄のついている鉄の電極棒が、彼女の右足にピタリとはめられた。

そして、地面を這ってる彼女の剥き出しの臀部に、マダムは激しく、細いしなやかな金属で出来ている鞭を振った。

ピシリと、臀部に、鞭が振られる時、同時に瞬間、高い電流が右足に流れる。そして下腹部から両股一体に、一種名状すべからざる激しい刺激が走った。

「ウウツ」

と思わず呻いた。パチリと火花が散るような感覚であった。

数度続けられると、神経がしびれたようにきかなくなってきた、いつのまにか、生温い水が足を伝わって流れ落ちていいるのも、彼女は気がつかず、体をゆすって、必死にその衝撃を耐えていたのであった。

二

昼間一休みもしないうちに、至急の電話がマダムの館にかかって来た。

やはり、文部大臣、サン・ピエルからの呼び出しであった。

マダムは早速マリアンヌに仕度をさせ、車に乗って大臣の邸へ参上した。

玄関を入ると、背の低い髯だらけの大臣が、待ちかねたように、出迎えて、マリアンヌをいとしそうに抱きすくめると

「おう、良く来た、良く来た。今日からわたしは一週間ばかり、議会の方が休みになったので、お前にも泊って貰うことにした。マダム、わしが預かるが良いじやろう」

「それはどうぞ御自由に」

「じや、一週間目の夕方又引取りに来てくれ」
 そういわれて、マダムは、玄関から、多額な小切手を貰って引上げてしまった。

残された、マリアンヌは流石に心細くなっている

「まあ、良い。これから、一週間、わしがたっぷり可愛がってやるからな」

と頬ずりせんばかりにして近づいてきた大臣は、彼女を引きつけるようにして、隣の部屋へ入ることになった。

やがて、そこへやって来た、黒人の大男の手によって、彼女の体から忽ち一切のものが脱がされると、代りに透明な、特殊ビニール製の、体なりに作られてある不思議な着物を着せられた。

それを一枚体にまともしても、もとと何の代りもない裸体に見えるのである。ただ呼吸の関係上、首から上は元のままであった。

その上に改めて、彼女は、パンティをはき、ブラジエールをつけ、スリッパ・コルセットと服装をととのえた。

何故か、体が自分のものでないような不思議な感覚であった。

そこへ、滑車に乗せられたタイル張りの浴槽がやはり黒人によって運ばれてきた。

そして彼女が見ている前で、その中に液体が満たされてた。

「よし、それでは試してみよう」

そういうと、大臣は、黒人に一匹の猫を持って来させ、猫の手肢を固く縛ると、浴槽の中に入れた。

すると世にも恐ろしい事が起った。

ニユーツと白い煙りを出して、猫の体は、外側から、溶けて行くのであった。毛がなくなり、皮膚が溶け、肉がただれてやがて無くなり、遂には骨まで溶けて、液体になってしまった。

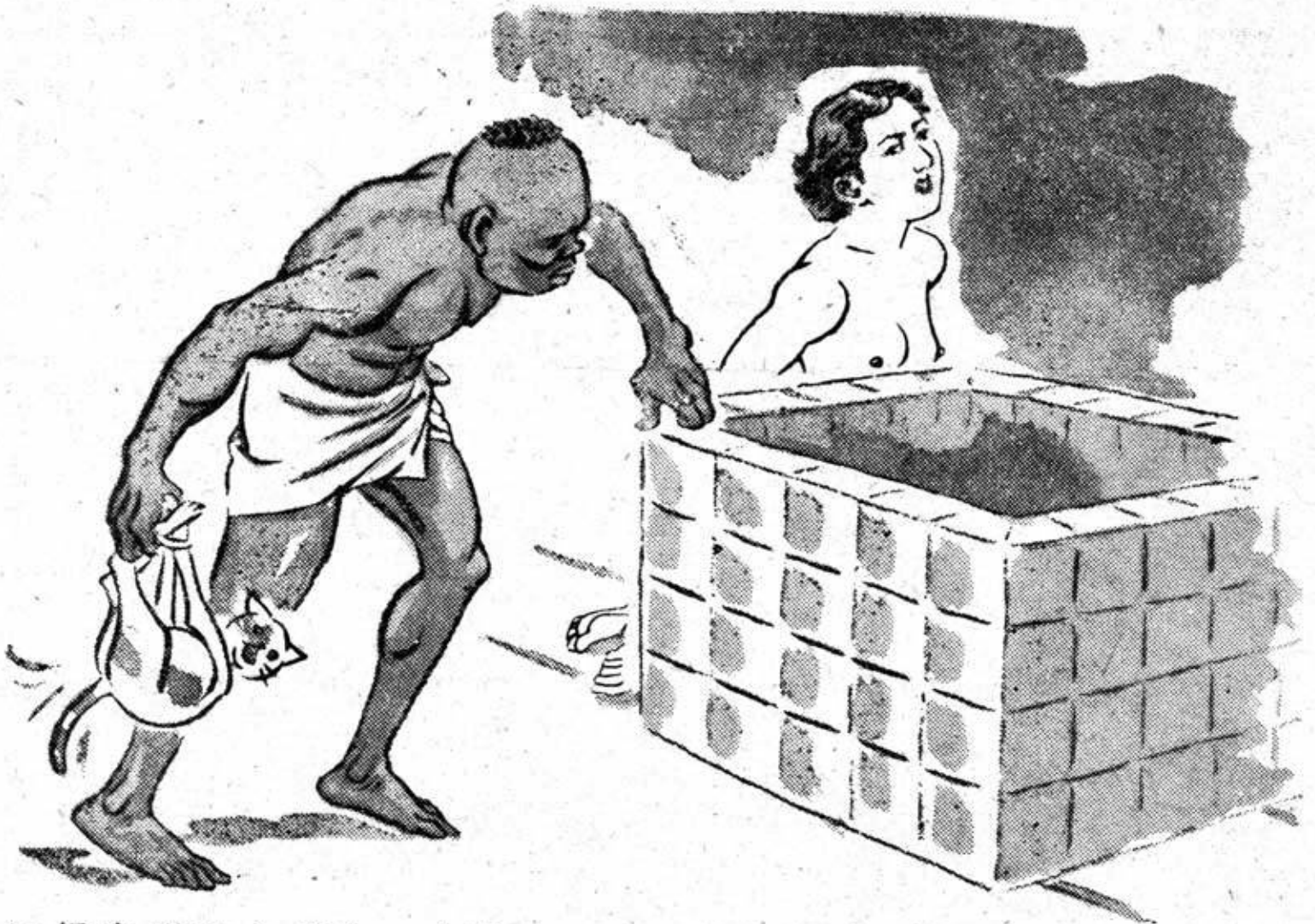
「ヒエーツ！」

あまりの怖しさに彼女は、ゾーツと肝が縮み上るようであった。

「これは硫酸と硝酸の特殊合成の新強力溶解剤だ。人間の体でも五分で跡形もなく溶けてしまう。良いか、マリアンヌ、君にこの中へ入って貰うのだ」

「いやです。お許し下さい」

マリアンヌは慌てて逃げようとした。しか



し、忽ち黒人に捕えられてしまい、手足をガッチリと掴まえられた。

大臣はニッコリ笑った。

「お前が暴れさえしなければ危険はない。その透明な衣がお前を守ってくれる。なまじ暴れると、大事な顔に怪我をする。どうせ入らなくてはならぬのだから、おとなしくいう事を聞いた方がよい」

「お許し下さい、大臣様」

彼女は必死に懇願した。

しかし彼女の体は、黒人の手により、しっかり縄でくくられると、足の方から徐々に、浴槽の中へつけられた。

胸の上までドップリとつかると、シューツと、衣服が溶けて行った。パンティも、ブラジエールも、皆、煙となって消え、中には透明の布一重にくるまれた、白い体が、鉄をも溶かす溶解液の中で震えおののいている。

「あーッ、助けて」

彼女は今にも殺されそうに怖い悲鳴を上げたが、しかし、どうにもなるものではなかった。

溶解液は、ビニール一重の布を境に、ゆたゆたとゆれている。彼女の恐怖は絶頂に達したが、しかし、身動きできなかった。

体中がやがて熱くなった。今にも、ビニールを透して、液が体に迫ってくるようであった。

「怖い！ 助けて！」

泣き喚く顔を、大臣は、いかにも楽しそうに眺めていた。

やがて、熱さが痛みに代って来た時、浴槽の中の液は無くなり、代りに、冷い水が何度も入れ交えられて、ビニール布を洗った。

彼女はやっと、体から透明布を外されて外に出た。

彼女は、床にひれ伏し

「神様！」

と思わず、恐怖の境から逃れ得たことを感謝したのであった。

三

一息する暇もなく、黒人の召使いが、彼女の体をベッドに寝かせると、胸の部分と、腰の部分と、二十糎位の幅で一廻り、ぐるっと何か薬を塗り出した。

そして彼女を、又別の一室へ連れて行つた。部屋の廻りが、厚いカーテンに閉され、床も厚いじゆうたんが敷かれてあつて、その部屋の中ではどんなに乱暴に歩いてても足音はたたなかった。

やがて、大臣が入ってくると、手に長い革鞭を持った。

「良いか、お前は逃げるだけ逃げるのだ。忘れていると、わしがこの鞭で、ひどい目に合せるぞ」

そして、大臣は部屋のスイッチを切つた。とたんに、部屋は全くの暗闇になつてしまつた。

マリアンヌの眼にはもう、大臣の姿も何も見えなかった。

ただ、大臣の眼だけには、マリアンヌの乳房の廻りと、腰の廻りだけが、二十糎位の光りの輪の帯になつて、まざまざと見えるのであつた。

体に塗られたのは、発光塗料であつた。

その光りの帯に向つて、激く鞭がとんだ。

ピシッ！とそれは、皮と肉に喰ひこんだ。

マリアンヌはびっくりして逃げようとしたが、廻りがまるつきりの闇で、いきなり、どしんと壁にぶつかつて、床に倒れた。

「これ、休むとひどいぞ」

その体に向つて、闇のどこから出るか解らない鞭が迫つた。

マリアンヌは、こけつまろびつ、逃げ歩いた。

が、まるでまっくらで見当がつかない。何度か四囲の壁にぶつかり、したたか床の上に倒れた。

幸い、廻りの垂らしてある布が厚いので怪我はなかつたが、何よりも怖しいのが、大臣がどこにいるのか、まるで解らないことだつた。

いつ、どこから、身に沁む程の痛い鞭が降ってくるか解らない。

彼女はまるで狂気のように逃げ廻つた。

しかし大臣の方は、悠々としていた。

狙いの目標は、いつも闇の中に、くつきりと、二筋の線を明示している。それに向つて時々力一杯鞭を振えば良いのだ。

特殊椅子へ縛りつけるよりも、尚、無抵抗で、しかも充分に動き廻る女性の体を、思いのままに楽しむことが出来るのであつた。

彼女は壁際によりかかつて、手を合わせて頼んだ。

「許して下さい。お願いです。このままでは怖しくて、気が狂いそうです」

しかし、大臣の鞭は、そんなことは聞かなかった。

光りの輪と、輪の間の黒い部分に向つて、革鞭は力一杯振り下された。

「ヒエーッ！」

彼女は、思わず身をのけぞらせた。鞭は、腹部に捲きつき、内臓も凍らせる程の痛みを与えたらしい。

「お許しを！ お許しを！」

彼女はガクツと膝をついて崩折れた。二つの輪が接近したのは、彼女が海老のように体を曲げて苦しんでいるせいしかつた。

その背中に再び激しい鞭がとんだ。

「忘れてはいけない。一生懸命逃げるんだ。逃げれば逃げる程、おまえは苦しみから救われる」

彼女は、再び、立上り夢中になつて、闇の中を逃げ始めた。

その彼女のあらゆる肢体に向つて、鞭は四方から、間断なく責めたてるのであつた。

四

夜になつて、やつとその激しい遊戯から解放された彼女は、食事のため一室につれ出された。

まだ、着衣することを許されず、鋭い鞭の痕が方々に赤くついていていた。

彼女は正面にある金属製の椅子に乘せられた。それは、掛ける部分が半円形をなして、臀部の部分がすっぽり納まるようになっており、中央に穴があけられ、そこから、細い管が出ていた。

椅子の下に、大臣は、むしろ這いこむよう

にしてしやがんだ。

そして、下から、黒人達に命令した。

「さあ、どんどんお勧めするのだ」

黒人達は、葡萄酒や、果汁など、さまざまの飲物を彼女の前に持って来て、口を無理にあけると流しこんだ。

やがて、金属の椅子が俄かに冷えてきた。

特別な冷却装置があるらしく、肌に痛い程ぐんぐん冷たくなって来た。

当然なこととして、彼女の腸内は張ってきて、やがて尿意が烈しく襲って来た。

「わしはな、何でも一度、人間の体を通ったものでなくては氣に入らんのだ」

大臣は椅子の下で舌なめずりしていった。

やがて彼女は耐えきれなくなった。

大臣は、椅子の下で細い管を口に啣えて待っていて、量を栓で調節しながら、そこから出て来る酒をさもうまそうに飲み出した。

幾ら恥しがっても無駄であった。

黒人達はひっきりなしに、酒を口に注ぎこむ。

腹はガバガバにはってくる。ほのかな酔いが体中に廻って理性を失ってくる。椅子の冷たさは、腹に突き抜ける程痛い。

彼女の体は、美酒を作り出すための、一つの機械の部分のようになにか働かないのであった。

——未完——

現代マゾヒズム芸術時評

原

忠

正

復刊第七十三項

出版物『尋問』

アンリ・アレック著

本書は可成り以前に出版された。併し本欄が詳しく之を紹介しなかったのは、本書の加

虐者が男性であるが為にであった。現在もそうであるが、筆者は、男対男、男の加虐に対する女性の被虐、女対女、等の場合を正しい意味でのマゾヒズムと呼ぶべきではないと考えて居るからである。因みに男対男の場合は加虐者が、同性愛傾向の中の女性側である場

合で、被虐者が加虐者を女性視する場合にのみマゾヒスティックな心理が発見され得るのみであり、男性の加虐は対手が女性である場合サド・マゾヒズム（ここでは一般淫虐症の意味での）に属するにすぎず、女性対女性の加虐は、加虐側の女性を分離して見た場合

観象者にとってのみマゾヒスティックな満足があるにすぎないのである。此等はすべて淫虐愛好者の分類に入り、被虐性愛好者ではあっても、マゾヒストやマゾヒズムを含有するものではないからである。

併し、今回、筆者は特に白人崇拜病者（この症状は、正しくマゾヒズムの二次的な要件とさえ見做される心理を示しているからに他ならない。）の為に本書を紹介する。ドゴール首相の再任によって歐洲に新しい政治上の時期を生みだすに至る直接的な原因となったアルチエリアの現地に於ける、狂熱的な有色人種蔑視と前時代的な弾圧の中にあつて、世界で最も進歩的であるとされているフランス人が發揮した、拷問への烈しい愛好は、政治的顧慮を全く別としても十分に注意を喚起するに足る事実であろう。

ソ連のG・P・U、ナチス時代の独逸のGESTAPOを西欧的教養を身につけたすべての人々は曾って「野蛮な」という言葉を以て説明した。併し、私達は本書によって、「野蛮でない」民族によって示された軌を一にする虐待の事実を知るのである。エッフェル塔によって象徴されるフランスはフランスの只一面にすぎないのであるか。フランスが血を以て購い、ユウゴオをして更に完璧たらしめようと努力させた、自由、平等、

博愛のトリコロオルは仮面でしかなかったのであろうか。

私達はすでに数多くの事例によって、加虐の本能が常に何人にも存在することを知っている。フランスの誇る教養は決して本書によって傷つけられるものではないのである。本稿を書く日に筆者は、「週刊新潮」に紅林警部——これが実名か仮名かは判らない——という警察官が鬼刑事と恐れられ、拷問による自白を得ることを得意にしていたこと。最近重大な三つの刑事事件が、裁判所によって、その点を指摘されて、検察側の敗訴に終わったことを報じている。

然し筆者は敢えて此の件を本欄に詳述しない。其は、本事件が同性間で発生したが故にでなく、加虐者がその榮譽、立身、或は安易に判断した正義感によって行動した結果であるからに他ならない。此等の動機が、現代社会で可成り有力な、且多く見出されることではあり乍ら、マゾヒズムともサディズムとも何の関係もないからである。アウシュヴィツクの幼児殺害と同じく、性愛よりも遙かに下等な末梢神経の満足を求めた取るに足らない事件であるからである。

アンリ・アレグの著書に於ける白人対白人の間の宿命的な事件は、示唆するところ、甚だ大きく且、由来するところ甚だ深い。

復刊第七十四項

『モスクワ国立ポリシヨイ

サーカス』

このサーカスについては旧号に述べた。私の期待に反して、猛獣使いは一人も来日しなかった。DOMPTUSE（女猛獣使い）への期待は大きかっただけ、失望も大きい。が、私達は、このサーカスの持つ甚だしく娯乐的な豪華さを認めないわけにはいかない。タマラ・ブスライエーヴア他のドムプテューズの出演する場合でのモスクワ国立サーカス劇場の雰囲気を想像することは、今回の公演によって十分である。衣裳、大小道具等は完璧といつて過言ではないであろう。技術的な素晴らしさについては、各誌に好評である。私達はせめて、夢の足がかりを観ることの出来ることを喜ばしく思うのである。

復刊第七十五項

仏映画『怪盗ルパン』

これは又、なんととなつかしい大泥棒の名前であろう。私達の幼年時代に、ルパンとチャップリンは最も高名な西洋人であった。探偵小説はルパンの書いたこの「ルパン」によって完全に代表されていた。血の嫌いな、上品な天才的な怪盗は子供達に豊かな夢と、秘やかな怖れを抱かせるのに充分であった。

ここに提供された新しい映画は、期待に背くものではない。勿論映画として最上の出来とはいえないとしても、出来映えを云々せねばならぬ程劣悪ではない。

この後半、独帝カイゼルの女諜報部長が詐られたとルパンを追って馬で追跡する部分がある。この部分は本欄で特に紹介するに足る優秀な部分である。筆者はこの数カットの為に特に本項を設けた。

復刊第七十六項

新東宝映画『女軍医と偽狂人』

主演ヘレン・ヒギンス、細川俊夫

本欄では曾って「女の防波堤」という邦画を紹介した。筆者は其の時に、邦画が漸く本欄に紹介するに足る作品を作り出したことを特に註記した筈である。

ここに挙げた新東宝の新作は、其の意味では或は同一の範疇に入らないかも知れない。これは、ロシア女性と邦人俘虜との間の物語であり、演ずる女優は決して髪を赤く染めた日本女優でなく、真正正銘の白系ロシアの女性であるからである。

ヘレン・ヒギンスの名はむしろファッション・モデルとして高名である。伊東絹子より多くの男性ファンを持つ筈の彼女は、有夫であるが故に男性ファンを持たなかった。私達は彼女の姿を漸くモード雑誌や婦人雑誌の中にのみ発見して来たのである。併し、この映画は多くの男性ファンを作る

であろう。映画はすべての女優を現世的のものでなくするからである。

映画は、所謂ラーゲル物である。出版物に実に数知れず発表された実録、小説のラーゲル物は、今日までに、只の一つも映画化されなかった。ロケーションや配役の難かしさから実現しなかったのではあるが、あたら時機も失した観もないではない。

本欄が屢々触れて来た「女性軍人」がマゾヒスティックな対象として、可成り効果のあるものであることは、更に言を俟たないところであるが、有色人の俘虜対白人種の女士官、という典型的な配置が、私達に底知れぬ夢を想わせることは必定である。此の映画が所謂アクション・ドラマというよりはむしろメロドラマであるが故に、場面的には私達を充足させないかも知れない。しかし、この基本的な設定の語る処は、甚だ深長である。

当代随一のファッション・モデルに軍服を配した着想だけでも、この作品は本欄に紹介される価値があるのである。

此の作品は、今、撮影中である。恐らく本稿が諸君の眼に触れる頃には、映画館に上映されるのではなからうか。新東宝は、川島芳子を再現し、ここに再び新しいアイドルを贈るかに思われる。

復刊第七十七項

出版物「シンガ」

マーチン・ジョンソン著

(三笠書房発刊)

ジョンソン夫妻は一九三〇年代以来、各未開地の探険者として有名である。夫妻の撮影した猛獣映画は数多く、それらは今日に至るまで、各地で上映されて居り、ジャングル物と云われるターザン映画等に挿入されている。ジャングルの実与は、夫妻の撮影したものから借用したものが多し。ジョンソン氏は勿論多くの著作を残して居り、今回も同一の出版社から「ウガンダ」という著作が訳出、出版された。

未開地に於ける白人女性、という主題が屢々マゾヒスティックな絵画の主題ともなり、未開地の住民を代表すると考えられている有色人種と、白人女性との関係が、マゾヒズムに於ける一つの領域を占めていることは衆知の事実である。

この勇敢な女性が、未開地で振舞った行為について、一つ一つサド・マゾヒズムと関連があるとは考えられない。然しここに示された彼女の、未開地の動物、住民に対する「愛情」や「執着」が、白人同志のそれと同一のものではない、点を読者は早くも察知することが出来る。実に本項が、この著作を採り上げて紹介するのは、此の点に就いてである。私は、他にも二、三の女性探険者による探険を知っている。しかし、本書の如くに著名な作者の著作を知らない。又、我国に於て訳出された同種のものでは、本書が最初のものではないかと思われる。

緊縛映画 スナツプシリーズ

紅楓の巻

—撮並構成—
牧 高志

—開幕の御挨拶—

それは黙って逢って、そっとそのまま別れた恋人に似てまたは思い余って香高き花束を抱え人知れずスクリーン向けて投げた愛のキッスのように、そこはかとなく溢れ出する感傷は云わずもがな、ここにこれから号を追ひ繰り展げんとするスクリーンの芸術は、否登場の名花の数々は輝らめく王座のスターならずとも無残なるかなカメラアイに捕えられた哀憐の女性ばかり——云うなれば、スナツプキャッチャー（盗影者）は莫大な努力と、熱意とそして資金を投じて観客の群集の中に、われとわが身を投じ、或る時は延べ数時間の忍耐と艱苦を強いられ、或る時は深夜に及ぶ現像ミステークの繰返えしを常とした、にも拘らず何んと見すばらしい三文絵画であろうか。されば、この道は、この芸術は遙るかに遠く、且困難なものであることを自ら悟ると共に、満天下の諸兄これを諒とせられれば幸いであるばかりでなく盗影の嚆矢を放った小生に続いて陸続と新鋭

の士の現われることを切に念じて止まない。

私は愛機が捕えた影像にこよなく限りない愛着を覚える。スクリーン狭ましとばかり逃れようとした乙女に姫に女に心からなる憐憫の情を捧げ、そして永遠に私の秘箱に眠るであらう処の影ある姿に対し、そっと熱き接吻を与えるものである。

「死ななけや馬鹿が直らない」心の宝物がまたまた誌上の一隅に呱呱の声を挙げたことを併記して、スクリーンの緊縛女優の御披露、お好み誌上映画再上映開幕のブザーに斯くは代える次第……。

—花言葉十月紅楓の巻

「第一回作品」

……と云うような訳で絢爛紅葉のかみなづきを飾る、軽快な祭囃子に操られての結束信二原作、雑誌『小説と読物』三十二年二月号所載、東映作品『花まつり男道中』、名花長谷川裕見子に右太さんのからむのスナツプ序幕篇、先ずはレギュラーの御登場によって議事進行と参りましょう……。

花山みどり 先生、しばらく……。

牧高志 いや、御元気で何より、ますます美しいな。



佐藤妙子 今日は何んですか趣った変向があるって……一緒に伺いしたんですのよ。
牧 馬鹿な道楽をベテラン水島君から教つてその御披露と云つちや大げさだけど、つまりその早く云ってこんなもの……。
花山 アラ、よく撮れてるじやありません

か、いつ何処で……先生もお人の悪い。
牧 まあまあ落ちついて、筋は兎も角まるで産れ初めの赤ん坊を湯浴みさせるように、シャッターチャンス教授した水島師匠御大に深甚なる敬意を表して、おこがましくも作品第一号を開陳することに致すかな。

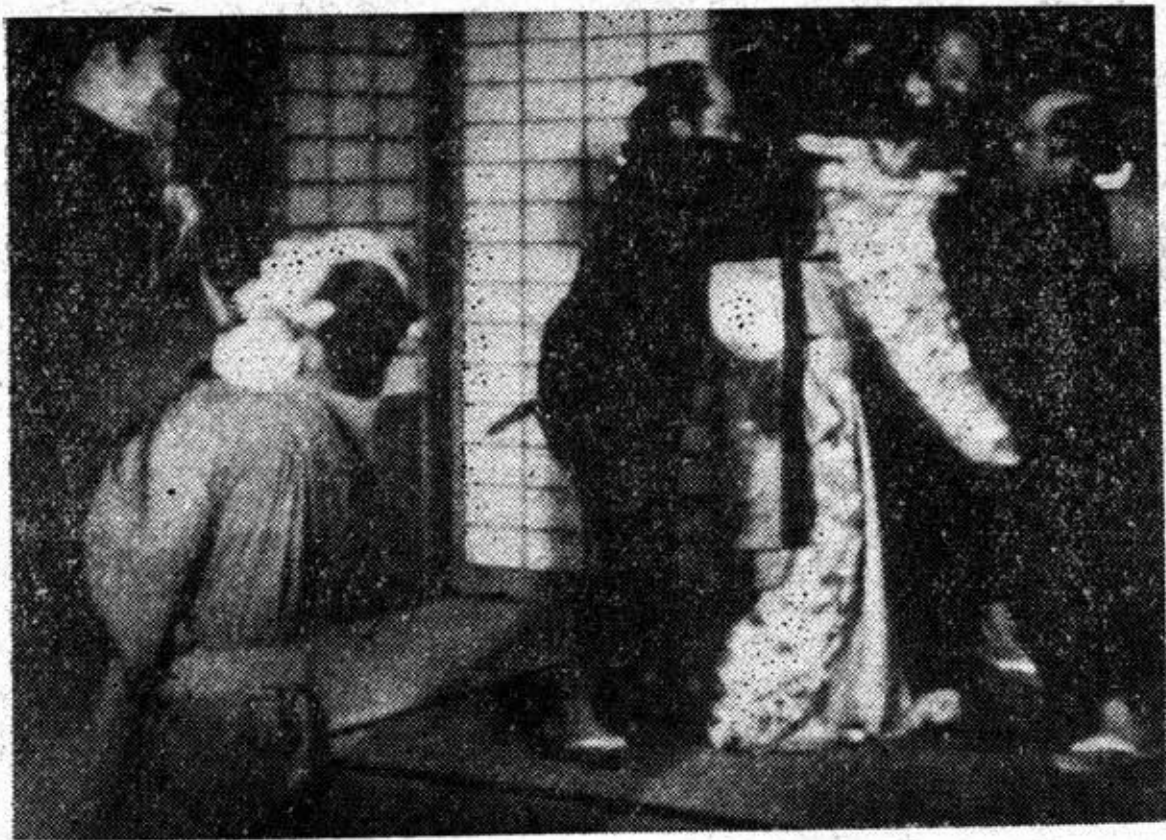
佐藤 昨年の春でしたでしょう、この映画の封切は……。

ホラ、みどりさんと買い物をした帰えりに見たチャンバラ物ですよ。確かひどく歌舞伎がかった口調で右太衛門が眼をむく……それに万才師なんか出て笑わせた黒白映画。

牧 つらつら思うにですよ、日本映画って奴は、特にこうした留物は、大抵山をラストシーンに持って来て盛つちまう常套手段しかないんだ。底の浅い日本経済とそっくりなんだが娯楽映画なら何んべん繰返ししても面白いから不思議な代物しろものと云えば云えるかも知れん……。で、今晚はですよ、一つ佐藤さんが仰言る変った趣向にはならんかも知れないが、スナツプシリーズ開幕篇として本職のスタジオカメラマンが撮った映画を御丁寧にも盗撮した罰ばらとして僕が天下に恥をさらす、良きに



つけ悪きにつけて、女性側の心理をよくわきまえて文句の一つも出ようと云うあなたがたの助勢を待って、独りよがり演って見たいって云う訳なんです。だから、トラップのストップじやないが途中でふらついたら遠慮なくストップをかけて水を飲まして下さいよ。



……処で、嫌や応なしにトップタイトルに緊縛映画と銘打った以上本当は出て来る、この場合慣例上女性ばかりとなるんだが、その女性達がどれもこれも緊縛されないと真の意味の緊縛映画とは申されない。ヒロインお一人を縛って演技をさせ、堪能させて貰ってへハ

イ、これが緊縛映画で御座いって云うのは一寸臍の穴が小さいんじゃないのかな。

花山 だって皆んなくられて猿轡をかまされたら抱きついて恋も語られないでしょう……。長谷川裕見子さんのおつるさん一人です。よろしいんじゃないですか。

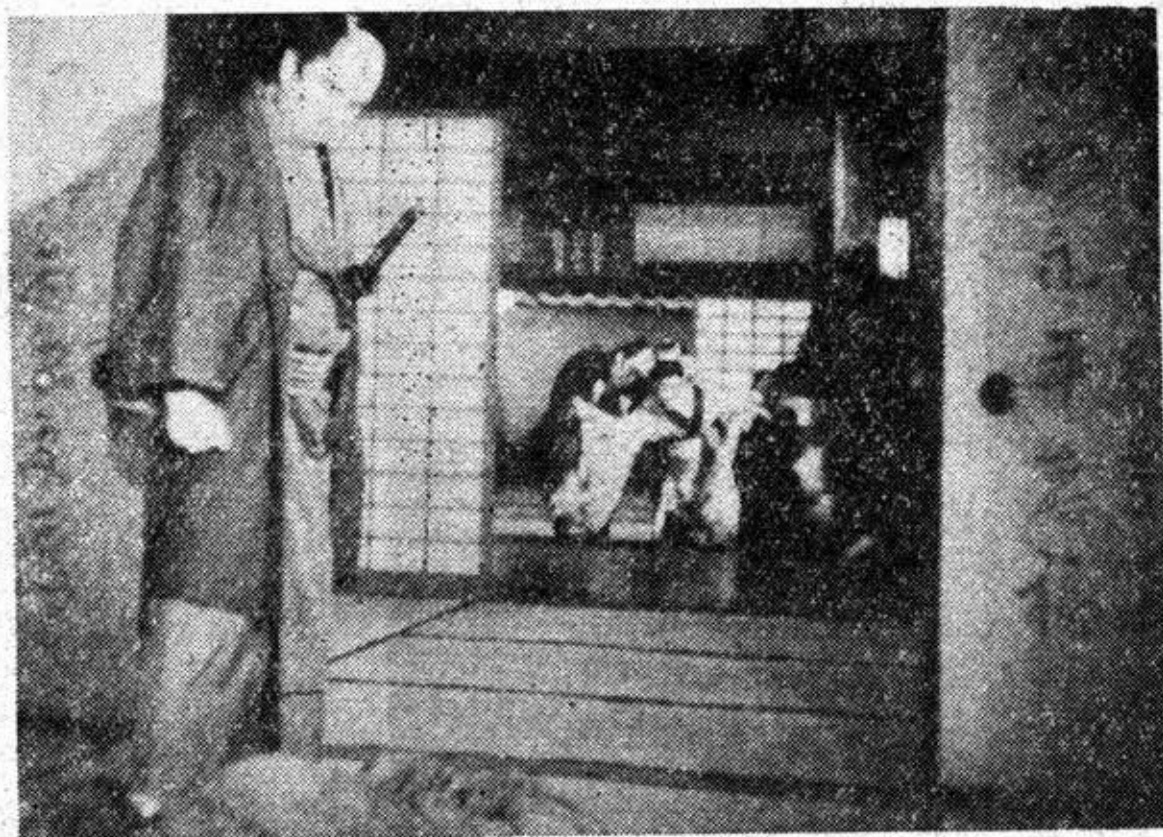
牧 よく覚えてますね、もっとも

この映画には三本松吉兵衛の娘おもと云う愛くるしい娘さんが活躍するんだが、この先生がきっちり緊縛されると東映らしい作品になる処を惜しいことをしなすった……。

佐藤 やくざ同志の縄張り競いに

氏子総代の愛娘おつるさんだけが後手にされるナンテ、やっぱり底が浅いんでしようか知ら。そう云えば男の方同志の話のやり取りも無意味なシーンばかりのように感じたんですけれど……。一寸そのプログラムを拝見、年に一度の武州赤尾八幡の花笠祭りにこの宿場の観音一家と川向うの三本松一家が八幡境内を互いに手に入れようとする、云わばやくざ同志の殴り込み争いに参詣の村の衆がまるで無関心に歩いているファーストシーンも妙なお話。

さりとて仲裁役の林蔵（市川右太



衛扮）さんにばったり逢ったおつるさんが最後に人身御供にされるんでしたら途中今少し描写を巧妙にして観客に印象づけるのが親切な脚本ではないのか知ら……。全巻を通じて後手にされないおもんさんに見事喰われた裕見子さんが一寸可哀いそう。



牧 今更ここで製作者に忠告を出した処であとの祭りでもならないが、要するに演出を担当した監督のセンスが足りなかったのかな。

花山 先生だったらどうなさいます？
牧 さあ、どうするかな……、どの道、林

蔵の恋人としておもんをあれだけ活躍させたのなら、悪企の張本人観音鉄五郎と不動の仙吉をそそのかせて、まずおもんを拐しひつくくって人質にした方が、さつきも云った通り東映らしい作品になりそうなんだが……。残念乍ら、このおもん先生が緊縛されないと来ているから、こちらも御愛嬌に一、二枚撮っただけでお茶を濁してハイ、さようならとなっちやった、これもこの映画製作者のミステークの一つじゃないのかな。もっとも、長谷川裕見子嬢は東映切っ手の緊縛スターなんだから、これで我慢しろって云う謎かも知れない。

死んだ子に晴衣裳を着せて、にこっと微笑って御覧と云うのと同じで、おあとおつるさんに集中攻撃をすることにしませうや。

で——颯爽と竹藪の移動剣劇シーンとなって、おもんの父親吉兵衛が赤尾の林蔵に殺ろされたと濡衣を着せて鉄五郎が赤い舌を出す、出したのは舌ばかりではない。邪魔者の林蔵に因果を含めて長の草鞋を履かせ村から追い出すのも観音一家の仕業と……、映画は原作通り誠に忠実だ、この辺は田舎廻りの旅役



者もよく演る筋書で、眼をつぶって声だけ聴いておれば沢山なシーンの連続で至極お定り物。少々飽きますなア、話のストップをそろそろかけて下さいよ。

花山 ええ……と、すると、先生、その鉄五郎親分が三本松の吉兵衛もいなくなった、

正直者の林蔵も長の草鞋で旅鴉、やれやれと云う処で代官所役人土田源之丞を料亭で買収するあたりからおつるさんの人身御供となるんじやありませんの？

そのあとに川沿いの宵の土手で吉兵衛殺ろしの下手人を識っている不動の仙吉が、鉄五



郎の用人棒、人斬り陣九郎（恐ろしい名前ですこと……フフフ）の凶刃に殞れる

佐藤 一寸その雑誌（小説と読物）を皆さんの前で抄読してみましようか。

いつもの古典物と違って……棒読みで失礼、よくお聴き遊ばせ、ホホホ……。

「『つきましては土田様——』」

鉄五郎は急に声をひそめると、

『庄屋榊兼の惣兵衛の娘おつるの儀でございますが。あれも今年二十の娘ざかり、赤尾小町などと評判のきりよう好しでございますが、お代官梶川玄蕃さまへ贈り物には、この上もない生人形かと存じますが——』
『何？庄屋の娘つるを、おぬしの手で献上できると申すのか？』

『そこはそれ、魚心あれば水心とか申すもので、今年の秋祭りに、無事に八幡の縄張りがこつちの手に転がり込んだあかつきは鉄五郎腕にかけても約束を違えることはありませんぬ』
『ふむ、おぬしにそれほどの才覚があるうなれば梶川様の後楯、十手捕縄の儀もまず心配はなからう』

『何分、土田様のよろしきお取りなしの程を願ひとうございます』そこで鉄五郎



は、馬鹿丁寧なほどに両手をついて頭を下げると『おい、女共、今夜は底抜け騒ぎに飲みあかすぞ。早く酒を持って来い』手を鳴らして奥へ怒鳴った……。

と云うんですわ、何処の世界へ行っても権力の前に女性が酒の肴にされてる見たいで嫌



やなお話。

牧 処がこんな会話(セリフ)がスクリーンから洩れると嫌やでもお眼(め)が覚めてくる。それ、そろそろ始つたと……現にペテラン師匠水島君に云わせると正にシャッターチャンス至れりとはばかりカメラが躍り出す由。僕見たいな駆出

しの未熟者はスクリーンが気に懸(か)つてセツトレバーを忘れちやう。阿部秀氏によれば、それから一分以内に緊縛シーンが現われると責められちやニツチもサツチも行かなくなつちやつて、あとで現像してみると映画館の天井が写つたりして散々な目に逢うんだからこれまた嫌やなお話ではありませんか。

佐藤 今だと思ひ出すんですけど、不動の仙吉が殺るされますね、それからあとが一分どころかお待ち兼ねシーンがなかなか出なくて、おもんの旅廻り、よくしたもので帰郷途中の林蔵さんとバツたり逢つてのラブシーン、喧嘩をほぐす合の手に万才師を取り入れてのお笑い一席、とどのつまり人斬陣九郎を立茶屋で見事殞(しな)おして

へ村は、赤尾の村は変つたなア! と故郷の空を偲んで韋駄天走り!

少々事柄が前後しますけど、こんな場面が長々と映写されたあと――。

花山 町中で薄汚いお婆さんが駕籠を停めて蹴飛ばされる処が出て来るでしょう、あれから急に眼まぐるしくなるのね、パアッパアッパアとシーンが飛んじやつて……。

牧 本当に一分間に何十駒も飛ぶ映写機相手に、こちらの註文通の場面だけをキャッチ

しようというんだから骨ですよ……全く。まあこのスナツプも、御覧の通り、ゆれの激しいのもありますが、これはこちらの不手際ばかりでもないんですが、まあ兎に角、想像以上に楽じゃあないことを御賢察の上、大目に見て戴きます様に……意欲だけを買って貰いたいもんです。次々と勉強しますから、では又、次週封切を御楽しみに……。

次号予告

次号、十一月号にはスナツプシリーズ第二篇として、

松竹作品『清水の佐太郎』
伊吹友木子の被縛艶姿を公開致します
何卒御期待下さい。



沼 正 三 だ よ り

(九月 号 読 後)

(一) (乗杉喜代子様に) 早速一文をお恵み下さって感激しています。二俣志津子嬢の沼評に応えた「再度の鞭を期待しつつ」(復刊第一号)でも書いたことですが、公刊の誌上で女性に鞭打たれるのは、公衆の面前でのそれと同じ得難い刺戟をマゾヒストに与えます。殊に今度はウマとして扱われたのですから、刺戟も一入で馬となり犬となる自分の文章からはどうしても得られない喜びを味いました。

読みながら三者関係の心理に酔いましたので、手帖の所説(第九十七項、九十九項)の例証として、少し書かせて下さい。貴女は御自身の代りに若い女性を私の女主人として差し向けられました。ウマの身として私にはその処置への不服はいえませんが。彼女を乗手として受け入れる外ありません、これ即ち第三者関係です。その彼女は芸者の娘として若旦那からお小遣を貰うことに平気な心理でいな

がら、一方では書生に下穿まで洗わせる傲慢さを持っています。男性一般でなく、富豪と召使と二階級の男性があつて、前者には彼女は玩具であり、後者には暴君です。況や書生以下の畜生であるウマにとっては芸者も令嬢もない。彼女は乗り手であり支配者であるのみです。ウマは彼女と若旦那との関係をそのまま受け入れるしかない、これは三者関係です。三者関係からマゾ心理を味う者にとって女主人はサディストである必要はない、というのが私の持論ですが、それをウマの身として思い知らされたわけでした(いつでしたか、読者通信で、貴女の亡大典氏への態度を問題にした人がありましたが、心ないことだと思ひます) 厚く御礼申します。

ウマの分際でこちたい議論、申し訳ありません。それにしても、使用後の股当てを「お前のまぐさ桶の中に入れておいてもよいと思

うけどね」は、殺し文句でした……

(二) (麻生保氏に) 既に乗杉様の一文を得た以上お答は無用かも知れませんが、私のマゾヒズムの性格を明らかにする為に一言。私も馬装を尊重する気持は同様に強いのです。裸馬のことをという注文は私の好みというより、彼女の文の「その味は格別」を尊重したのです。乗手の快感を一切無視する、というあなたの意見には賛成できません。乗手の快感に奉仕すべきウマに同一化しようとするマゾヒストの心理としては、不自然です。私はイギリス風の乗馬服装をした女性が一番好きで、カウガール服装はそれほどなく、腰巻をして乗るなんてのは正直ゾツとします。裸も戴けません。然しそれは私の好みに過ぎませんから、ウマの心理を味う時には、乗手のあらゆる気まぐれをそのまま受け入れるしかない絶対服従の立場を優先させ、そこに強い昂奮を感じます。今回の乗杉様の文ではこの令嬢は海水着で裸馬に乗ることもあるらしい。私は自分の好みに反するという僭越な理由で、これを拒否しようとは思わないのです。いかがですか。

(三) (とやま・かづひこ氏に) 今月号の貴文に対しては、サディズム、マゾヒズムは総体的に見るべきもので、一局面を見るべきでない、とする先月号黒田氏の「いざない」の文が既に答えている様に思います。然し、尚

私の言葉で補充させて貰いましょう。

あなたは金の力を借りる点を重視して精神的サディズムといわれる。金の力で動く女性
は娼婦と呼ばしましょう、娼婦は男の情欲――



ライフ誌所載、バレエ「檻」の舞台写真
(沼 正三提供)

その情欲にはサドもマゾもあるでしょう――
満足の手段です。必ずしもサディズムと結び
付きません。唯の娼婦でなく、良家の女性を
金の力で娼婦化する過程をサド的と呼ばれる

つもりかも知れません。それが自己目的にな
れば確かにそういえるでしょうが、問題はあ
なたがそういう人なのかどうかです。あなた
が金の力で女性を動かした経験のあることは
否定しようと思いません。然し、それは娼婦
化の過程を味うよりも娼婦(のもの)を味う
為だったでしょう。もし、サドの素質がある
のなら、あなたの文章にはもっとその過程の
場面が入る筈です。ところが実際にはあなた
はそんな過程なしに、それと知らぬ女の落し
物、残し物に充分刺戟されているではありま
せんか。過程があなたにとって本質的でない
ということ、その過程を通ることがあっても、
それが目的になったのではない、という
ことです。つまりマゾヒストが娼婦を女主
人の代用品としている場合と本質は同じで
す。娼婦を相手にする場合女がいよいよで、
金の力に屈服感を覚えるか否かは直接の問題
にならないのです。サドもマゾも、広義には
自慰の手段なので、問題は男の心理です。男
が女の屈服それ自体に関心する場合と、金に
動かされて女の演ずる所に女主人を幻想する
場合と、外観は同じでも、本質は相反しま
す。あなたはその前者の場合もあり得る。と
いうことをいわれるのですが、あなたの一連
の文章は、あなた自身が後者のタイプである
ことを雄弁に物語っています。どうですか？
あなたは、もし驕慢な貴婦人が便器として使

つてくれれば一番嬉しいのでしよう？然しそれができないから、美人の出た後の便所に入るのだし、より端的に金の力を借りるのではありませんか？次善的な代用物とは認めませんか？あなたの自己省察の結果をお聞かせ願いたいと思います。今月の副題に「あるマゾヒストのノート」と書かれたあなたに、今更論争を売るのはありません。お求めに応じて所見を開陳したのみです。

四(土路草一氏に) 今月号は特に面白く読みました。第一はイーペラ嬢の登場。白人女性の前に黒奴少年の這っている挿絵に先ず驚かされ(但し嬢が六頭身に描けているのは残念)本文を読んでユーマ女性を出して欲しいとのいつぞやの願いが実現の緒についたのを知り、喜びました。彼女は間借中に正哉に目をつけたらうから、いずれこの黒奴少年の代りを正哉がするのだらうなど想像し、タツマ対美加子の場面をイーペラ対正哉に置き換えたら！と胸を躍らせています。男の責めは苦手といつかおっしゃいましたが、逞ましい謀報員と違って美貌の貴公子ならあなたも責め易いではありませんか？第二は、朱唇による洗濯。これ又ヤブーでの腹案を奪われた点は残念でしたが、比較的コプロ傾向の少ないあなたの作中に、このような場面が出たことを喜んだのは、私一人ではなかったでしょう。第三は、谷子の「じつとさせ」といってもつ

まんないもの」という言葉。私は、使用者側に些少でも心的エネルギーを消費させることのない完璧な人間家畜、人間道具の在り方を理想としていますから、今迄のあなたの作品では、調教のための努力が多過ぎ、家畜使用が実は責めのための行動になっていて(前作の人間馬やボートなど)純粹に遊戯的でないのが缺點といえれば缺點だろうと(勿論好みによることですが)私なりに考えていました。その点、この谷子の言葉は、家畜使用の遊戯化(前作のイヤリング取りの場面がそうでした)から更に一歩進めて、気まぐれに従属させたという点で、私には理想的でした。殊にこの言葉が女性の口から吐かれていた点が戦慄的です。イーペラ嬢と共に里山谷子嬢の活躍を期待します。

五(四馬孝氏と編集者に) 美人調教馬、素晴らしいのですが、マゾヒストの立場としては、素直に賞めるより、これを男性に置き換えて描いて(そして美女の馭者も示して)下さい、とお願いしたいのです。毎月とか、巻頭第一頁とか無茶なことをいうのではありません。五枚に一枚位はマゾヒスト用の絵を描いて下さいといっても、読者比率から、決して無理な注文ではないと思うのですが。私だけでなく、相当数のマゾ読者の声と思って聞いて下さい。美男調教馬車図は是非実現させて欲しいものです。

六(「檻」の写真について) 今月号にはニューヨーク・シテイ・パレエ団の「檻」の評判が各所(四三頁、一〇五頁、一二〇頁)に出ていて、マゾヒストに与えた感銘の程が窺われます。この記事を古いライフ誌で見たことを思い出して捜しましたら、一九五二年五月一二日号にノラ・ケイによる初演当時の「檻」のトップ・シーンの写真がありました。から、紹介します(写真参照)。原文解説次の如し。「ジエローム・ロピンスによるフロイト風パレエ「檻」では、雄蜘蛛が雌蜘蛛の集団に迷い込む。その一匹を恋の相手に選ぶが、報いには恋人(ノラ、ケイ、中央)も一緒に死んでいく殺入儀式で、四股を一本宛引き抜かれるのだ。女の世界における男についてのこの物凄い註釈を作る為に、ダンサー達は集って異様な絡み合った形になる。このパレエは血腥いが短く、十五分で終る。

◎写真特写引受◎

特別に変わった着衣、ポーズ、アイデア、或は趣向によって写真の特写を御希望の方は本誌写真部に於て御引受けいたします。詳細な希望事項を御連絡下されば、費用その他について御返事いたします。御照会には必ず返信料の御同封を願います。

△写真部▽

読者通信



○ 休日を利用して場末の映画館へ飛び込みました。上映映画は「柳生武芸帳」と「のんき夫婦」どうせ大した期待も寄せていませんでした。この二本の映画に偶然にも渾一本の男が大写しになったのでたまりません。「柳生武芸帳」は風呂屋の場面、鶴田浩二を初め大部屋の連中が赤禪、白禪あざき色と六尺禪をきりりとしめて右往左往、天然色で肌の色と禪の色彩が僕を恍惚とさせました。「のんき夫婦」は漁師町の料亭で田舎芸者と漁師の若者数名が裸でランチや騒ぎ……。これは僕の最も理想的な締め方、筋骨たくましい若者が赤禪（天然色ではないが）を前だれの巾も狭くツリ上るようにかたく締めて踊りまくる姿が相当長い間、しかも画面一杯にうつされていました。渾美愛好の皆様には是非おすすしたい作品です。久

し振りの休日、良い目の保養をしました。（静岡 北沢孝次）

○ 八月号について。牧高志氏の「腰元女の吊責」が興味深かった。会話の妙、和装に対する深い造詣、洗練されたセンスと上品なユーモア。本誌の名物と称すべきでしょう。前号に続いて壬生三郎氏の「切腹風土記」広く文献を漁った貴重な資料。カットの女体自刃図は一本の無駄な線もない簡潔な筆致ながらよく緊迫した雰囲気表現した逸品。縁集部へのアドバイスのつもりで書いた「女体自刃特集号に関するアイデア」が麗々しく記事として取り上げられたのは恐縮しました。前に一度似た企画が予約申込が少かった為お流れになったことがあるようですが、読者通信にもちよいちよい希望がよせられていて下すから何かの形で具体化を考えて下さい。（神奈川 南方純）

○ 緊縛女性の一人として提案致します。最近の実写の緊縛を拝見致します。黒いナイロン・ストッキングとか、ホルセット及び薄い色付きの下着（パンティ、シミーズ）等が活用されていないので大変残念に思っております。私は特別かも知れませんが、女性の下着の色、形に大変魅かれるものを感じます。それです。黒いスリッパ等から覗いている真白な乳房に縄が掛っている様な写真でも出ないかと思っております。その点、外国の責め写真では下着類が活用されている様です。最近、全く見かけませんが、洋式の責め写真を載せることは出来ませんでしょうか。それから見られなくなったのは、股間縛りだと思えます。旧号では時々傑作があります。入手難で仲々手に入られませんが、パントリーを着用しているのでも宜しいです。是非、御一考下さい。最近、この欄に投稿する方は関西方面の人が多く、関東の方々は余り活潑でないのは、どういう訳かと考えております。私は女性崇拜者（フェミニスト）ですから、女の方を痛い目とか苦しい目に会わせるのは嫌いです。ですから、軽

く縛りながらもサディズムの初歩的満足感を楽しみ、又、縛られる女性の方でも潜在的意識のあるマゾ的幸福を味わえるプレイをしたいと思っております。誰か私と共に楽しんでみたいと思う女性の方は居られませんか。若い学生の方でも、中年の方でも結構です。お待ちしております。（東京 加藤生）

○ 八月号は羽村京子さん久々の登場で懐しく思いました。お説には全く同感です。妊婦責めの作品及び写真の登場を願って止みません。初めて妊娠したみずみずしい若妻が、それも臨月近い羞恥の肉体を罵り辱しめられる光景は、悦虐の極致だと思えます。特に責め手も同じ年令の若い嗜虐的な女性が適当だと思います。益田房子嬢の口絵写真、一目見た瞬間、思わず胸のときめきを感じました。あゝ、このような容姿のモデルを如何に久しく待ち焦れていた事でしようかと解説にもありました通り、すらりと伸びた四肢、それに気品に充ちた美貌、奇巧が十年余の歳月を費して初めて得た珠玉のモデルと存じ、絶讃を惜しみません。すこし乳房の膨みが物足りませんが、し

かし完全無欠というのは理想でしょう。(東京 堀橋正人)

初めてお便りいたします。八月号の「婦人補導院の保護具」及び「サタン城の魔王の縛り雑感」の佐渡です。二十八才、独身で駆け出しのジャーナリストですが、同病？(失礼)の諸兄姉と親しくご交際願ひ、サド、マゾについて見聞を広めたいと存じておりますので宜敷くご指導戴きます様お願い申し上げます。八月号の花房孝子さん、是非お会いしてS子さん共々お望み通り慮めて差上げたいと思っております。京都の菅雅子さん大阪の久保利子さん、お便りをお待ちしております。ペンネームの通り私はサド漢ですが、血を見る様な行為は好みません、実際に婦人を縛った事もあり、又緊縛の苦痛を体験する為、自己流の自縛法で時折実験する事もあります。次にサド特集号の感想を。発表以来発売を鶴首していた期待を見事成就させて呉れました。力作の洪水で特に巻頭写真は素晴らしいの一語に尽きます。将にホームランです。小生は後手縛りの手首の見える作品が最も好きですが、荒縄と柔肌、田中芳子嬢の後手の見える

二葉、囚衣の左ページ上の三葉、白蝶の舞踊の左ページ左側の二葉は、特に私の胸を轟かせました。残念な事は蠟滴の三カ所縛りの背面を見せて欲しかったのと、野外マードです。貴重なグラビア五ページを、誠に勿体ない事です。このスペースに緊縛フオートが埋っていたなれば、この特集号は満塁ホームランであつたらうと思うのは、私一人でしょうか

(大阪 佐渡完)

○ 待望のサド特集号は凄いの一語に尽きましよう。巻頭を飾る四馬画伯始め、けんらんたる口絵の魅力は百パーセントです。緊縛写真も堂々たるもの。特に興趣を覚えるのは「拷問」「囚衣」「懸崖」「白蝶の舞踊」等、一連の大塚啓子嬢モデルの作品です。同嬢の表情の豊かさは将来が楽しみです。読物では「別れる女」「蒼白き抵抗」「地蜘蛛」等の鼻責め描写のある作品が多く取上げられたことは嬉しい限りです。或るスクリーン「の鼻孔描写もしかりです。しかし、それ等のものにもまして痛く私を喜ばせ字頂点にさせてくれたのは、東風二助氏の「玩具」です。鼻責めも、これほど徹底す

ればこの上の満足感はありません。……二つの鼻の穴からキラキラする鼻汁が出た……。男は指先にまつわつた白いネバネバした鼻汁をそのままにして……の辺は、すつかり私を興奮させてしまい、奇クの醍醐味、ここにありと許り本当に貴誌の存在に感謝致しました。東風氏よ、又次回にもこうした鼻責めシーンを展開して下さい。九月号の「いぶし責め」にはかたずを呑んだ。古今東西、美女が鼻汁を垂している面は、恐らくこれを以て最初とするであろう。四馬氏よ、思い切つてよく画いて下さつた。飽かず眺めています。鼻マニア最終の望みでした。

(江藤恵夢)

○ 女斗美フアンのために二、三枚の写真を同封します。「これあ、何が女斗美か」と申されるなかれレッキとした四頭身(?)の美少女の相撲です。実は市販のビーノル人形、四肢のつけ根と首しか廻らぬシロモノですが、たとえ乳房らしいものはないとも、黒い褌をキリリと締めさせて、ハリボテの土俵に上げると、いかにも色っぽくて中々捨て難いものであります。人形のこととてポーズも自由にな

らず、仕切りは御辞儀の様になり右四ツも左四ツも腕が短すぎて中々うまく組めませんが、写真のような極手は如何でしょう。こんなものはつまらぬという人は不粋、これは「魔除け」にもなり一種のマスコットにもなつて、如何にもイキな趣味である処の女斗美フアンの一寸した遊びには、もつてこの物であります。ちなみに美少女共は身長十センチ、もつと大きいのを使用と面白いですが高価で馬鹿馬鹿しい。この位なら、行司の娘も入れて三人で三百円です。から、直径三十センチ位の土俵に屋根をかけ、紫の絹で垂幕をしぼつて、一寸艶しい気分も出せます。娘相撲というには少し子供っぽすぎて困るが、娘には違いない。ユイモラスな遊びで中々、色っぽい処もある。娘力士を御紹介しました。(京都 K・N生)

○

八月号にて千葉県、室壮介様。大阪、男子刺青様の御意見拝見し私と全く意を同じにするものと思ひ、心強く思いました。本当に二

十一四十才位のたくましい男が禪一つにされ、屈辱を受け責められる様を考えただけでも興奮が止みません。今後ともよろしくお願い致します。禪祭りの記事、兵隊、男囚等の禪一つにされて屈辱を受ける記事等、御存知でしたら御知らせ下さい。(名古屋 S生)

○ 花房孝子様。八月号所載の貴女様の「鼻責めについて」の記事を拝見し、貴女こそ私の理想の人(一方的な云い方で甚だ申し訳ないのですが)ではないかと心躍り思わず筆をとりました。私は男性でありマゾ傾向の者ですが、どういうものか子供の頃から美しい女性の手で思う存分、自分の鼻を苛められてみたいという欲望を持っているものです。しかし貴女様は男性の私の鼻をもS子さんの鼻の様に情熱をもつて責めて下さるのでしょうか。貴女の記事の中で「S子さんの鼻の孔に小指を突込む。耳鼻科の器械でS子さんの鼻の孔を思い切り抜ける。ゆっくり鼻の孔の奥を覗き、それから綿棒で隅々まで掃除する」等の文句がたまらない程、私の心を刺戟しました。私が、こうなったのは或は小学校の女先生の影響かとも思いま

すが、私の入った小学校では女の先生は生徒を立たせたり折檻する時、必ず鼻を摘まんだり引張ったりするのでした。そうして思い切り鼻をねじり上げて突き離れた上で、始めてビンタをくれるのです。男の先生はこれに対して耳を引張るのです。私等、音楽の時間にうまく歌えないというので随分鼻を摘まれて黒板の前に引っぱたかれ、ビシビシ煩ったを打たれたものです。しかし最も私を刺激するものは耳鼻科の鼻鏡(鼻の孔を抜ける器械)です。殊にその鼻孔を女医さんや看護婦さんが手に持って私の前に立った時は、まるで死刑台にたたされた様な感じがします。美しい看護婦さんからこうして何度も鼻の孔を押し抜けられ眺められたことがあります。しかし飽くまでそれは治療ですから、どうしても満足ゆくところまではまいりません。中には「上を向いて」と云う代りに、黙って私の鼻をギュッと摘んでグイッと邪慳に顔を仰向けてくれる看護婦さんがありますが、こんな時は全く嬉しくなります。しかし、こんなことは滅多にないことです。若し貴女様から心ゆくまで責めて頂けたらと恥しさを省みず筆をとり

心に浮ぶまま記してみました。思う存分、貴女様の御手で苛めて頂き、貴女様の御み足の下に屈服したいと思つて居ります。御返事を頂けましたら幸いこれに過ぐるものはありません。(新潟 田代龍)

○ 私は本年二十八才の会社員、男を対象としたサジストです。貴誌の最近の記事を見ますと、男性マゾ記事が少く淋しく思つています。どうか、もつと男性マゾの記事をのせて下さるようお願いします。私は今まで若い健康な青年と友達になり、責めのプレイを楽しんでまいりましたが、その青年が九州へ行つてしまいましたので、今では友もなく毎日淋しくしています。新潟の山本様、他、男性マゾの方お手紙下さい(神奈川 伊藤)

○ 千葉室様、東京山本様の御共鳴を得て感謝。六月号は買い損つて私自身の記事を見ていないのです。が原文のままでしたか知ら。山本様へ。お百に就いて研究資料集めもした積りですが、有り来たりの講談本や大衆読物雑誌に時々作者毎に新解釈したものがあり、新しいところでは平林たい子作連載の小説新潮がありますが、これは

新解釈を又新解釈したと云つた感があり、私には向かないです。お百が小娘の頃、桑名屋徳兵衛と密通して徳兵衛を煽動し、其の妻女を寒中、物置の天井から裸にして釣るし、責め抜いたお百のことだし、男を責める事も日常茶飯事で私自身が其の男になつて責められたい空想が絶えず消えません。お百が後年、秋田の佐竹の殿様の愛妾になるまで、数々の悪事の中に人を殺さない、血を見ない、凄艶残酷な男責めも多々あつた筈、高橋お伝や他の毒婦よりお百へ関心を持った訳は茲にあり、男の六尺一本での責め方をよく知つていゝお百へ私は憧れるのです。千葉室様へ。有難く思います。数年前からの妄想? で、今仮りに数万の遊金があれば当時の造作を拵え、人を雇つて扮装をさせ私はカリアルなプレイも出来ましうが、夢のような望みですから、それに代るべき雰囲気求めて限りない妄想を逞しくしている訳です(お百に) 人気がない所で責められるくらいなら可能かも知れませんが房州の裸祭や其のスナップ写真は是非公開して下さい。(Y生)